松本
第20回 *Matsumoto Seicho*
清張

研究奨励事業
研 究 報 告

松本清張の韓国における翻訳現況と特徴

研究代表者 金 宰 奭
共同研究者 李 貞 淑
共同研究者 金 東 鉉
研究協力者 南 富 鎭

北九州市立
松本清張記念館

目　次

第１章 松本清張作品の翻訳文学研究 1

第１節　研究目的 1

第２節　先行研究と時代区分 3

第２章　松本清張文学の翻訳現況 6

第１節　著作権法未導入期（1960～1986 年） 7

第２節　著作権法導入期（1987 年～1994 年） 35

第３節　著作権法定着期（1995 年～現在） 49

第３章　松本清張文学の翻訳にみられる特徴 67

第１節　推理小説に集中する翻訳 67

第２節　松本清張『大男』の翻訳刊行 70

第３節　社会派推理小説と韓国語翻案 88

第４章　松本清張作品の韓国語訳にみられる特徴 105

第１節　「或る「小倉日記」伝」の翻訳 105

第２節　『点と線』の翻訳 114

第５章　結論 130

第６章 付録　松本清張作品の翻訳目録 137

図目次

図 1 『点と線』（1961）……12
図 2 『点と線』（1974）……12
図 3 各翻訳本の36頁を比較（左から辛相澈訳、鄭鍾國訳、片忠植訳）……15
図 4 『点과 線』(1967)……16
図 5 『点과 線』(1977)……17
図 6 題目を変更して刊行された作品(原作は『点と線』)……27
図 7 『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』と『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』の目次……28
図 8 金旭翻案『처녀地 살인計(処女地殺人計)』、金輝文翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』、 金聖鍾翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の目次……31
図 9 金聖鍾翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』と金輝文翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の表紙……32
図 10 金聖鍾翻案 『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の奥付と 金輝文翻案 『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の奥付……32
図 11 『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』 Copyright……35
図 12 『눈의 壁（眼の壁）』(1985) の目次と『특종을 노리는 사회부 기자 （特種を狙う社会部記者）』(1988)の目次……37
図 13 『함정(陥穽)』(1985)の目次と『필사의 게임（必死のゲーム）』(1994)の目次……40
図 14 『안개속 최후 証人(霧の中の最後の証人）』(1984) の表紙と目次……42
図 15 『아내의 추적（妻の追跡）』(1987)の表紙と目次……42
図 16 『아무도 대권을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』 表紙……45
図 17 1987年13代大統領選挙の候補者たち （左から金大中、盧泰愚、金泳三） 46
図 18 『松本清張의 徳川家康』の表紙と目次……47
図 19 『松本清張の의徳川家康』 登場人物紹介……48
図 20 『松本清張의 徳川家康』に挿入された後藤長男の漫画……48
図 21 『小説日本芸談』（新潮社、1958)……57
図 22 『예술가로 산다는 것 （芸術家として生きること）』(2016)……57
図 23 『点과 線』(2012)の挿絵……60
図 24 『검은 화집(黒い画集)』 Copyright……65
図 25 『점과 선(点と線)』のCopyright……65
図 26 『제로의 焦点』 Copyright……65
図 27 『大男』広告、『東亜日報』1977.3.22.……77
図 28 姜英吉訳の『점과 선（点と線）』の奥付、翻訳者名が姜英吉(文澔)となっている……78
図 29 『大男』第2巻と第6巻の中表紙……82

図 30 『大男』第1巻の一番目の話「끈（紐）」と二番目の話「喪失」の挿絵...83
図 31 『大男』第1巻の三番目の話「人間密林」(箱根心中)と四番目の話「小官僚의 抹殺」(ある小官僚の抹殺)の挿絵...83
図 32 『大男』第10巻の中表紙...84
図 33 『大男』第10巻の挿絵...86
図 34 『大男』第10巻の巻末話 「바보우화(阿呆な寓話)」と挿絵...87
図 35 ソウル, 水原, 大田の位置...94
図 36 嶺南地域の位置...99
図 37 韓国の鉄道路線...103
図 38 原作の時刻表...119
図 39 辛相澈訳本の時刻表...119
図 40 キム・ジョンス（김종수)の翻訳...125
図 41 金京南翻訳本の挿絵...126
図 42 金京南翻訳本の時刻表...126

表目次

表 1 著作権法未導入期に刊行された短編推理小説.....7
表 2 著作権法未導入期に刊行された長編推理小説.....8
表 3 著作権法未導入期に刊行された中編推理小説.....9
表 4 著作権法未導入期に刊行された短編小説.....9
表 5 著作権法未導入期に刊行された長編小説.....9
表 6 著作権法未導入期に刊行された『点と線』の目録.....10
表 7 李文賢訳の『点と線』刊行目録.....12
表 8 辛相澈訳の『点と線』刊行目録.....13
表 9 辛相澈、鄭鍾國、片忠植による『点と線』訳の相違.....14
表 10 姜龍俊訳の『点と線』刊行目録.....17
表 11 姜龍俊、尹稲原、文澔による翻訳本の比較.....17
表 12 文澔訳『点과 線』で削除された内容.....18
表 13 著作権未導入期に刊行された作品題目(出版社別).....20
表 14 『高校生 살인사건（高校生殺人事件）』、『고교생들의 추적（高校生たちの追跡）』、 『제3의 캠퍼스（第３のキャンパス）』、『1・2・3의 살인（1・2・3の殺人）』の目次.....28
表 15 『사기단 25時（詐欺団25時）』と『目撃者』の目次.....30
表 16 著作権法導入期に刊行された作品目録(出版社別).....36
表 17 『点と線』の原作、李英朝訳本、ゾ・ジンス（조진수）訳本の目次.....38
表 18 『땅의 손가락（地の指）』과 『유혹의 덫（誘惑の罠）』 の目次.....41
表 19 著作権法定着期に翻訳された作品目録(出版社別).....49
表 20 『日本の黒い霧』と『일본의 검은 안개(日本の黒い霧)』の目次.....59
表 21 著作権法定着期における著作権契約の現状(出版社別).....63
表 22 著作権法定着期に翻訳刊行された『点と線』.....65
表 23 『大男』の作品収録目録.....71
表 24 『眼の壁』と『大男』第6巻の目次比較.....79
表 25 『大男』に収録された作品の分類.....80
表 26 『ゼロの焦点』と『大男』第10巻の目次.....85
表 27 『黒い樹海』と『처녀地 살인計（処女地殺人計）』の比較.....89
表 28 『黒い樹海』と『第五의 그림자（第五の影）』の比較.....92
表 29 『黒い樹海』と『第五의 그림자（第五の影）』の移動時間と経路の比較.....95
表 30 『ゼロの焦点』と『아내의 추적（妻の追跡）』の比較.....98
表 31 『眼の壁』と『目撃者』の比較.....101
表 32 李元壽訳「或る「小倉日記」伝」の特徴.....105
表 33 徐炳珇訳の特徴.....109

表 34 イ・ギュウォン訳の特徴.....112
表 35 辛相澈訳『点と線』の目次と特徴.....114
表 36 キム・ジョンス（김종수)訳の目次と特徴.....120
表 37 金京南訳の目次と特徴.....125

第１章 松本清張作品の翻訳文学研究

第１節　研究目的
1.1. 松本清張文学の韓国語翻訳状況
1.2. 韓国語翻訳集刊行の特徴
1.3. 翻訳の特徴
第２節　先行研究と時代区分
2.1. 先行研究の考察
2.2. 著作権と時代区分

第１節　研究目的

松本清張は日本を代表する推理作家である。清張の多岐に渡る膨大な著作のなか、推理小説はもっとも人気が高い。興味をそそる事件が緻密に展開され、日本社会における権力や権威に対する鋭い批判を特徴としている。したがって、松本清張の推理小説は純文学が主導する文壇よりは一般大衆によって広く慕われ、日本社会で高い評価を得てきた。こうした傾向と評価は韓国においても同様にみられる。

1960年の「或る「小倉日記」伝」の翻訳を皮切りに、清張文学は韓国において持続的に翻訳紹介され、現在においてもなお続いている。しかし、清張文学の受容の全体像を正確に把握することは難しい。翻訳現況に対する研究が十分になされてこなかったからである。もちろん翻訳現況や受容研究が全くなかった訳ではないが、調査は不十分で、膨大な翻訳作品が調査から漏れており、さらに書誌的な誤謬も多い。これは従前の調査の不備によるものである。翻訳の実物を確認せず、簡易データベースによる抽出方法に頼ったからである。そのため、精密な実物の確認調査が切実に要求されてきた。

本研究はこうした現状と必要性から韓国における松本清張文学の翻訳状況を実物確認によって正確に調査することを最大の目的とした。それを土台にし、清張文学の韓国語翻訳における特徴を韓国の社会的な情勢と関連させて分析し、また韓国における著作権法の整備の歴史とも関連させて考察した。こうした総体的な研究を通して清張文学が韓国でどのように受容され、消耗され、要求され、変容されたかを明らかにする。こうした作業は当然の帰結として、一つの鏡としての韓国文学や韓国文化史の特徴を映すものでもある。鏡に映るその歪みの具合によって韓国文学と韓国社会の姿が浮き彫りにされ、それは同時に日本文学と清張文学の特徴をも浮き彫りにするであろう。これが本論の最終目的とするところである。

1.1. 松本清張文学の韓国語翻訳状況

清張は韓国で最も人気のある日本作家の一人である。清張の作品は1960年の「或る「小倉日記」伝」の韓国語訳を皮切りに2018年に至るまで、再刊を含めると延べ250冊以上の翻訳本が刊行された。本研究で初めて明らかになった実態である。しかし、松本清張文学の韓国語翻訳の実態はいくつかの先行研究があることも事実である。

例えば、もっとも直近の先行研究になる南富鎭・鄭恵英「松本清張の朝鮮と韓国における受容」[1]では清張の韓国語翻訳作品の計85冊の目録が提示されている。この研究は1960年から2009年までの翻訳本を目録として整理したものであるが、遺漏が多く、2009年以降の翻訳状況は含まれていない。また短編集の場合は標題だけの記録に止まり、実際にどのような短編が翻訳収録されたかを知ることはできない。さらに清張の韓国語翻訳においては原題を任意で変えたものが多くあり、清張原作の韓国語翻訳とされるものが清張のどの作品に該当するのかを推測することも出来ない状態である。データベースによる検索調査がもたらした限界である。

本研究は先行研究のこうした不備を補うため、翻訳本を直接目で確認し、内容を確認し、原本を確定し、目録を作成した。要するに、1960年代から2018年までに翻訳された松本清張のすべての翻訳テキストを入手し、確認した。さらに翻訳本の表紙や奥付を目録に添付し、その正確性を図った。こうした目録作業によって初めて松本清張文学の韓国語翻訳の全容がほぼ明らかになったと言える。この作業と並行し、韓国語翻訳過程でみられる特徴や影響関係などにも注目した。これらの基礎作業の整理は今後の韓国国内における松本清張研究の活性化を図る土台となるであろう。松本清張文学のアーカイブス化を図る松本清張記念館にも有益な資料となるであろう。

1.2. 韓国語翻訳集刊行の特徴

松本清張文学が韓国語に訳される過程でみられる様々な特徴に注目し、その背景と意図、または文化的受容の実態を明らかにするのは重要である。翻訳集刊行の書誌的な特徴を指摘する。

清張文学の書誌的な大きな特徴は、長編小説と短編小説を一つのテーマとして組み直した全集形態として刊行されていることである。たとえば、『人間小説・大男』（全10巻、三韓出版社、1976）、『大勝負』（第9〜11巻、青潮社、1981）などがそのよい例である。全集や選集の形態をしているが、松本清張の名前を冠にする形態でもなく、代表作品を標題にする形態でもない。『大男』や『大勝負』といった抽象的かつ漠然として題名をつけたことは、日本文学の観点からすればやや奇異にも映る。松本清張文学を翻訳者や出版社が任意で分類し、選別し、独自の題目をつけて全集体として編んでいる。一見異様に映る「大男」や「大勝負」という題名はともかく、このような全集形態の翻訳刊行は、当時において松本清張文学を受容する固定読者層が韓国で相当な規模で存在していたことを示す。

もう一つの特徴は松本清張の翻案小説が刊行されていたことである。金旭『처녀地 살인計（処女地殺人計）』、金聖鍾『미인計의 함정（美人計の陥穽）』、『第五의 그림자（第5の影）』、『目撃者』、そして金輝文『안개 속 최후 証人（霧の中の最後の証人）』と『사기단 25時（詐欺団25時）』は松本清張の作品を翻案したものである。これらの原作が何であり、原作がどのように改変されたのか、またこうした翻案作品が持つ意義についても検討する。

1.3. 翻訳の特徴

松本清張の原作と多様な翻訳本を比較し、清張文学が韓国語翻訳される過程で見られる変化の

[1] 南富鎭・鄭恵英「松本清張の朝鮮と韓国における受容」『松本清張研究』第12号、2011年

特徴を明らかにする。清張文学の翻訳は一部有名作の重複的な再刊行が多い。一つの有名な作品が同じ時期に複数の翻訳家によって翻訳刊行されているケースもある。こうした競争的な出版の過程で、原作とは全く異なる題目を付けたケースも生まれてくる。また翻訳の方法においても多様な傾向が見られている。

こうした傾向を、「或る「小倉日記」伝」と『点と線』を対象にし、どのような翻訳的な特徴が見られるかを考察する。「或る「小倉日記」伝」は1960年に初めて翻訳されて以来、現在に至るまで何度も翻訳されている。『点と線』は清張作品のなかで最も多く翻訳されたもので、1961年に初めて翻訳されて以来、延べ13人の翻訳家が翻訳しており、再刊を含めると計25回も刊行されている。この特徴的な二作を比較し、翻訳時期や翻訳家個人によって清張文学がどのように翻訳され、読者にどのように受容されたかを明らかにし、清張文学の韓国語翻訳における特徴と変遷を考察する。これによって清張文学の受容の傾向と読者層の拡大の過程が分かるであろう。こうした考察は日本で研究される清張文学の解釈とはおのずと違う結果をもたらすと思われ、清張研究の新たな可能性を示すものとなるであろう。

第２節　先行研究と時代区分

2.1. 先行研究の考察

膨大に翻訳に比べ、韓国での松本清張文学に対する研究はそれほど多くない。意外と少ない。しかも殆どの研究は清張作品の解釈に重きをおくもので、その研究対象は清張の代表作『点と線』、「或る「小倉日記」伝」、『砂の器』、『ゼロの焦点』などに集中し、基本的には作品論である。それに清張の推理小説論が加わる。

松本清張に関する研究論文は1985年の『松本清張の推理小説研究[2]』から始まっているが、30年が経過した2018年の現在に至るまでの研究成果は修士学位論文5編を含めても計12編程度である。このうち2編は修士学位論文を要約して学術誌に掲載したもので、正確には脚注の10編である[3]。きわめて貧弱である。一方でその研究内容は、題目からも推測されるように、犯罪の動機を

---

[2] イ・ソンギ（이성기）『松本清張의 推理小説　研究』中央大学校修士学位論文、1985

[3] その全10本を以下に紹介する。
韓基逎松本清張 推理小説의 特徴」『日本研究』7号、1992
イ・ヨンジュ（이연주）『松本清張의『点と線』의 考察』慶熙大学校修士学位論文、1997
李慈仁『松本清張에 관한 考察:「或る『小倉日記』傳」을 중심으로』慶熙大学校修士学位論文、2003
趙正民「占領記憶の連続と断絶（점령기억의 연속과 단절）：松本清張 『ゼロの焦点』의 경우」『東北亜文化研究』23号、2010
李桐『松本清張の社会性考察：小説『砂の器』を中心に（마쓰모토 세이초의 사회성 고찰：소설『모래그릇』을 중심으로）』釜山外国語大学校修士学位論文、2012
イ・ヨンハ（이영화）『松本清張『点と線』の考察：「操作」と「隠蔽」の象徴性を中心に（松本清張의 『점과 선』고찰:'조작'과'은폐'의 상징성을 중심으로』嶺南大学校教育大学院修士学位論文、2013
南相旭「戦後日本文学の「朝鮮戦争」：朝鮮戦争と戦後日本のナショナルアイデンティティ（전후 일본문학 속의 "한국전쟁"：한국전쟁과 전후 일본의 내셔널 아이덴티티）」『比較韓国学』23巻1号、2015
權希珠・キム・ケジャ（김계자）「二人の女性の悲劇：日本社会派推理小説『火車』（두 여자의 비극—일본의 사회파 추리소설 『火車』）」『日本研究』30号、2018

重視する松本清張の推理小説の特徴が指摘され、個別作品論の場合には推理小説の技法や作品の解釈的意味が探られている。やや断定的に言えば、日本の研究成果や一般言説の紹介に近いものである。しかも研究対象が一部の作品に偏っており、松本清張文学の特徴と意味を日本の研究と弁別されるレベルで深く探るまでには至っていない。1960年代から清張文学が翻訳紹介され、現在まで250冊ほどが翻訳刊行されている現状から照らし合わせると研究論文の貧弱さはある種の驚きである。まだ始まったばかりとも言える。

他方、清張文学の翻訳現況に対する研究も始まったばかりである。松本清張の翻訳現況を最初に調査したのは金秉喆である。金は1945年以降から1985年までの韓国翻訳文学の現況を調査しているが、金の調査によると[4]、松本清張の翻訳は1960年代に6編、1970年代に22編、1980年代（～1985）に14編が翻訳刊行されたという。それに続き、尹相仁ほか3人による『日本文学翻訳60年（일본문학 번역 60년）[5]』は金秉喆の調査を基礎にし、1945～2005年までの日本文学の翻訳様相を網羅的に再調査したものである。尹らの作業によると、清張文学の翻訳は1960年代に8編、1970年代に20編、1980年代に29編、1990年代に10編、2000年代（～2005）に3編で、延べ70編が翻訳されたとする。尹らの作業は日本文学全体を対象にしたもので松本清張を個別的に対象にしたものではない。そのため、清張翻訳作品の分析までには至っていない。調査にも遺漏が多くある。

松本清張の韓国語翻訳を個別的に研究したのは南富鎭と鄭恵英である。南・鄭によると2009年までに延べ85編が翻訳されたという[6]。しかし、従来のこうした調査は根本的な限界があることは既に指摘した。翻訳テキストの考察が行われていないのである。

テキスト研究とも関連するが、韓国で松本清張文学の研究土台を作り、将来的に拡張していくためには研究のテキストを整理する必要がある。韓国内において清張研究の貧弱さをもたらす主要な原因の一つが翻訳テキストでもある。韓国語翻訳が研究テキストとして使用されていないのである。韓国で発表された少ない研究論文においてもテキストは日本語原典が使用される。韓国語翻訳本をテキストとして使用したのは、イ・ヨンハによる修士論文がほぼ唯一である[7]。イ・ヨンハは、金京南訳の『점과 선（点と線）』(モビーディック、2012)をテキストとして利用している。韓国語訳を研究テキストとして使用しないのは入り乱れている翻訳本の中でどれが研究テキストとして相応しいかという共通認識がないからである。 またこれは本質的な問題であるが、松本清張研究があくまでも日本文学研究者による日本文学として位置付けられてきたこととも深く関係している。たとえば、日本や韓国におけるトルストイやシェイクスピア研究は必ずしもロシア語や英語専門者によるものだけではない。日本語や韓国語による研究が可能なのはそれぞ

朴晟希「現存より強い不在：松本清張「或る「小倉日記」伝」を中心に（現存보다 강한 不在―松本清張의「어느 고쿠라 일기전」을 중심으로）」『日本近代学研究』 59号、2018
韓基連「松本清張研究：韓国と関連のある作品を中心に」『日本文化學報』 79号、2018

[4] 金秉喆『韓国現代翻訳文学史研究（한국현대번역문학사연구）』（上・下）乙酉文化社、1998
金秉喆『世界文学翻訳目録総覧（세계문학번역목록총람）：1895～1987(増補改訂版)』国学資料院、2002.

[5] 尹相仁ほか3人『日本文学翻訳60年：現況と分析（일본문학 번역 60년：현황과 분석）1945-2005』召命出版、2008

[6] 南富鎭『翻訳の文学―東アジアにおける文化の領域』世界思想社、2011

[7] イ・ヨンハ（이영화）『松本清張『点と線』の考察：「操作」と「隠蔽」の象徴性を中心に（松本清張의 『점과 선』 고찰：'조작'과'은폐'의 상징성을 중심으로』嶺南大学校教育大学院修士学位論文、2013

れに翻訳テキストが確立されているからである。清張文学の無造作な翻訳は、日本語が読めない文学研究者による松本清張研究を困難にしている。しかし、松本清張の推理小説が韓国で膨大に翻訳され、韓国読者に広く受容され、韓国推理小説の展開にも甚だしい影響を及ぼしている。重要な研究対象であることは言うまでもない。

2.2. 著作権法と時代区分

韓国における外国人著作物を保護するための「著作権法」の適用を基準にし、清張文学の翻訳現況を分析することは有効である。韓国が世界著作権協会に加入したのは1986年で、それ以前においては外国文学の著作権は一切保護されなかった。したがってそれ以前に翻訳された著作物は基本的には無断翻訳である。著作権が保護されないため、話題の有名作は様々な出版社によって競争的に刊行される。そうした特徴は清張文学の韓国語訳に色濃く現れる現象である。

韓国が世界著作権条約（UCC）に加入した1987年以降、国内の「著作権法」が全面改訂され、外国著作物に対する保護が義務付けられる。しかし、1987年以前に刊行された著作物は保護の対象外だったので、無断翻訳された著作は依然として流通される。こうした時期がしばらく続く。そうした風潮が一掃されたのは、1995年、韓国が「知的所有権の貿易関連の側面に関する協定(Trade Related Intellectual Properties: TRIPS)」に加入してからである。この通称TRIPSに加入してから外国書籍の権利はようやく保護される。

清張文学の韓国語訳は韓国でのこうした著作権法の動きと深く関係している。著作権法が施行される以前、新旧制度が存続していた過度期、厳格な著作権法が適用される時期によって翻訳対象、出版社、翻訳家の様子が一変していく。以下、論文で清張文学の翻訳を論じる際には、著作権法未導入期、著作権法導入期、著作権法定着期に分けて説明する。なお、本論においては松本清張文学を長編小説、長編推理小説、中編小説、中編推理小説、短編小説、短編推理小説などと分類しているが、これは郷原宏『松本清張事典決定版』（角川学芸出版、2005）の分類基準に依拠するものである。

第2章　松本清張文学の翻訳現況

第1節　著作権法未導入期（1960～1986年）
1.1. 人気作品の再刊行
1.2. 原作の題名の変更
第２節　著作権法導入期（1987年～1994年）
2.1. 翻訳作品の題目修正
2.2. 時代状況を反映した翻訳
第3節　著作権法定着期（1995年～現在）
3.1. 初訳作品の紹介
3.2. 翻訳權契約による出版

松本清張文学の翻訳現況を考察する時には従来によく見られるような10年単位の区切りではなく、韓国における翻訳法の整備過程を基準にして分類したほうが分かりやすい。翻訳は著作権の推移と緊密に連動しているからである。

第1章でも述べたが、1987年までに韓国では著作権法が有名無実のものでほとんど機能しない状態であった。世界著作権協会にも入っていなかった。そのため、外国の著作物が著作権法の制約を受けることなく自由に翻訳されてきた。著作権料を支払う必要がなかったので、安価で翻訳刊行が可能であり、海外の新しい理論や文化を迅速に移入することも可能であった。しかし、一方では海外の有名作だけが競争的に重複出版され、出版市場に混乱をもたらす原因となっていた。また国際的には海賊出版物を容認する国家として認定され、国家の信頼度を損ない、それがまた対外貿易摩擦を起こしてもいた。以前の1957年に制定された著作権法は有名無実なもので、アメリカなどの諸国からの著作権保護の厳しい要求にさらされる。1987年に新しい著作権法を制定し、世界著作権協会にも加入したのはこうした国内外の理由からであった。これによって内外の著作権は保護されることになる。

1987年、韓国が「万国著作権条約」に加入することによって、以前の「著作権法」（大韓民国、第3916号）は全面改定（第1次改訂）される。この改定によって、松本清張の韓国語訳『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』（犯罪の回送）のように、日本の出版社と独占翻訳権を結んだ翻訳本が刊行され始める。しかし、当時の著作権法は「万国著作権条約」のいわゆる「相互主義原則」から「万国著作権条約」が発効する1987年9月30日以前に刊行された外国人著作物は保護対象にしなかった（「著作権法」第3条）。そのため、著作権は施行されたが、著作権の制約を受けないまま、依然として旧来の翻訳本は出版され続け、流通する。特に資本状況が脆弱な出版業界においてこの法律が厳格に守られることはあまりなった。いわゆるザル法である。

著作物に対する著作権法が厳格に適用されるのは1995年以降になる。1995年、WTO体制がスタートし、韓国はWTOの会員国として「知的所有権の貿易関連の側面に関する協定(Trade Related Intellectual Properties、いわゆるTRIPS)」に参画する。この協定は条約発効以前に公表された外国著作物においても遡及的に保護されるという「文学的及び美術的著作物の保護に関するベルヌ条約（通称ベルヌ条約）」を義務化している。これによって1995年に著作権法は再度全面的に改定される（大韓民国、第5015号、第8次改定）。その結果、公式的な版権契約を結んだ図書だけが翻訳刊行されることになる。しかし、1995年の「著作権法」（大韓民国、第5015号）

は当時の出版業界の事情を考慮し、「1995年1月1日以前に作成された物」に限って著作権法の適用に一部猶予条項（附則）を設け、1995年1月1日以前に刊行された翻訳図書に限っては再印刷（いわゆる増刷り）を許容した。こうした猶予措置によってほぼ2000年代の初めまでは公式的な版権契約がないまま、1994年以前に翻訳された書籍を利用して再刊行されるケースもあった。松本清張文学が公式的な版権契約によって翻訳されたのは、韓国で日本ミステリーのブームが巻き起こった2000年代の後半からである。

以上のような著作権法の推移から松本文学の翻訳現況を考察した場合、概ね三つの時期に分けて考えることができる。第1期は1960から1986年までの著作権法未導入期で、第2期は1987年から1994年までの著作権導入時期である。そして第3期は1995年から2018年の現在に至る著作権法定着期である。以下、三期に分けて翻訳現況を紹介する。

第１節　著作権法未導入期（1960～1986年）

清張文学の翻訳は1960年から始まる。そして1986年までに40編の短編推理小説、9編の中編推理小説、15編の長編推理小説が翻訳されている。推理小説以外にも9編の短編小説、2編の長編小説も翻訳紹介されている。著作権法が施行される前に翻訳された作品は計75編で、人気を博した作品は何度も刊行されている。表1～5は、個別作品の初刊本を表にしたものである。

表 1 著作権法未導入期に刊行された短編推理小説

No	原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
1	一年半待て	一年半 기다려 주세요 （一年半待ってください）	表文台	希望出版社	1966
2	危険な斜面	殺意의 斷層	李英朝	豊林出版社	1974
3	薄化粧の男	完全犯罪	李英朝	豊林出版社	1974
4	証言	証言	李英朝	豊林出版社	1974
5	確証	確証	李英朝	豊林出版社	1974
6	捜査圏外の条件	捜査圏外의 条件	李英朝	豊林出版社	1974
7	偶数	偶然	李英朝	豊林出版社	1974
8	喪失	喪失	文澔	三韓文化社	1976
9	ある小官僚の抹殺	小官僚의 抹殺	文澔	三韓文化社	1976
10	二階	二層의 天国	文澔	三韓文化社	1976
11	形	定石法	文澔	三韓文化社	1976
12	誤差	誤差	文澔	三韓文化社	1976
13	拐帯行	逃避行	文澔	三韓文化社	1976
14	たづたづし	愛憎의 迷路	文澔	三韓文化社	1976
15	鴉	까마귀（カラス）	文澔	三韓文化社	1976
16	濁った陽	灰色太陽	文澔	三韓文化社	1976
17	天城越え	時効	文澔	三韓文化社	1976
18	カルネアデスの舟板	카르네아데스의 舟板 （カルネアデスの舟板）	文澔	三韓文化社	1976
19	鬼畜	怪畜	文澔	三韓文化社	1976
20	凶器	凶器	文澔	三韓文化社	1976
21	寒流	寒流	文澔	三韓文化社	1976

22	額と歯	토막（切片）	文澔	三韓文化社	1976
23	支払い過ぎた縁談	二重幸運	文澔	三韓文化社	1976
24	陸行水行	陸路水路	文澔	三韓文化社	1976
25	紙の牙	종이덫（紙の罠）	文澔	三韓文化社	1976
26	寝敷き	주름잡기（しわ直し）	文澔	三韓文化社	1976
27	駅路	蒸発	文澔	三韓文化社	1976
28	小さな旅館	投資殺人	文澔	三韓文化社	1976
29	種族同盟	種族同盟	文澔	三韓文化社	1976
30	肉鍋を食う女	人肉譚	文澔	三韓文化社	1976
31	白い闇	白闇	文澔	三韓文化社	1976
32	共犯者	共犯者	文澔	三韓文化社	1976
33	地方紙を買う女	地方紙를 사는 女子 （地方紙を買う女）	文澔	三韓文化社	1976
34	声	목소리（声）	文澔	三韓文化社	1976
35	顔	얼굴（顔）	文澔	三韓文化社	1976
36	白い闇	안개 속의 흰 얼굴 （霧の中の白い顔）	李英朝	豊林出版社	1979
37	部分	部分	李英朝	豊林出版社	1979
38	理由	理由	李英朝	豊林出版社	1979
39	反射	反射	河有祥	ハングル (한그루)	1984
40	張込み	잠복근무（潜伏勤務）	李英朝	豊林出版社	1986

表 2 著作権法未導入期に刊行された長編推理小説

No	原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
1	点と線	点과 線	李文賢	眞文出版社	1961
2	地の骨	暗黑大學(上・下)	洪性裕	新丘文化社	1968
3	ゼロの焦点	제로의 焦点（ゼロの焦点）	李圭植	豊林出版社	1961
4	黒い樹海	共犯者	李英朝	豊林出版社	1974
5	眼の壁	눈의 壁（眼の壁）	李敏載	豊林出版社	1975
6	連環	大男第9巻	文澔	三韓文化社	1976
7	事故	事故	文澔	三韓文化社	1976
8	高校殺人事件	高校生살인사건 （高校生殺人事件）	李圭植	智炤林文庫社	1976
9	砂の器	모래그릇（砂の器）	康炳希	河西出版社	1978
10	黒革の手帖	어느 女行員의 手帖 （ある女行員の手帖）	李文熙	太極出版社	1981
11	十万分の一の偶然	10萬分의 1의 우연 （十万分の一の偶然）	李英朝	豊林出版社	1981
12	蒼い描点	X점의 사람들 （X点の人々）	金旭	金文堂出版社	1984
13	聞かなかった場所	처녀地 살인計 （処女地殺人計）	金輝文 (翻案)	出版社文教	1984
14	熱い絹	나비城（蝶の城）	鄭性鎬	成正出版社	1985
15	影の地帯	함정（陥穽）	李英朝	豊林出版社	1985

表 3 著作権法未導入期に刊行された中編推理小説

No	原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
1	紐	끈（紐）	文潞	三韓文化社	1976
2	坂道の家	언덕길의 집（坂道の家）	文潞	三韓文化社	1976
3	遭難	遭難	文潞	三韓文化社	1976
4	草	麻薬病棟	文潞	三韓文化社	1976
5	熱い空気	뜨거운 空気（熱い空気）	文潞	三韓文化社	1976
6	断線	断線	文潞	三韓文化社	1976
7	闇に駆ける猟銃	어둠을 달리는 猟銃 （闇に駆ける猟銃）	文潞	三韓文化社	1976
8	二人の真犯人	두 사람의 真犯 （二人の真犯）	文潞	三韓文化社	1976
9	ベイルート情報	베이루트 情報 （ベイルート情報）	文潞	三韓文化社	1976

表 4 著作権法未導入期に刊行された短編小説

No	原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
1	或る「小倉日記」伝	어느 고쿠라 日記伝 （或るコクラ日記伝）	李元壽	新丘文化社	1960
2	箱根心中	人間密林	文潞	三韓文化社	1976
3	背広服の変死者	生의 迷路	文潞	三韓文化社	1976
4	途上	使徒行伝	文潞	三韓文化社	1976
5	影	숨쉬는 그림자 （息づく影）	文潞	三韓文化社	1976
6	発作	発作	文潞	三韓文化社	1976
7	空白の意匠	空白의 意匠	文潞	三韓文化社	1976
8	晩景	晩景	文潞	三韓文化社	1976
9	老春	老衰期	文潞	三韓文化社	1976

表 5 著作権法未導入期に刊行された長編小説

No	原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
1	波の塔	波濤의 塔(上・下)	玄雲	弘益文化社	1966
2	混声の森	大勝負第8巻 知性遊戯 大勝負第9巻 夜行勝祭	洪性裕	青潮社	1981

短編推理小説は短編集『殺意의 断層（殺意の断層）』（李英朝訳、1974）と『안개 속의 흰 얼굴（霧の中の白い顔）』（李英朝編訳、風林出版社、1979）、『패륜의 핏자국（悖倫の血痕）』（河有祥訳、ハングル、1984）に翻訳紹介された。ほかに松本清張全集の形態になっている『大男』（1～10巻、文潞訳、三韓文化社、1976）によっても大いに紹介された。

長編推理小説は15編が翻訳刊行されたが、人気作は何度も重複刊行された。重複刊行の際には以前の題目を変え、以前の作品とはあたかも別の作品であるかのように意図されたものもある。

1.1. 人気作品の重複刊行と『点と線』

松本清張の作品のなか、最初に翻訳されたのは「或る「小倉日記」伝」（『世界受賞小説選集1』新丘文化社、1960）である。「日本芥川賞小説集」という副題で芥川賞受賞作家の作品10編を掲載したものである。松本清張文学が韓国で紹介された最初のものであるが、この時、清張は推理作家というより日本の権威ある文学賞を受賞した本格文学作家（いわゆる純文学）として初めて紹介される。作品集には「芥川賞とはなにか」という文章が載せられ、作家と作品への権威が図られている。『世界受賞小説選集』の翻訳は、車範奭，鄭漢模、呉尚源，李元壽など、当時の韓国文壇を代表する作家らによるものであった。以降においても松本清張を紹介する際には必ず芥川賞の受賞経歴が必ず紹介されるが、その起源はこの翻訳集に始まると思われる。

1961年には松本清張の代表作とも言える長編推理小説『点과 線』（李文賢訳、眞文出版社、1961）、『제로의 焦点（ゼロの焦点）』（李圭植訳、自由舎、1961』が翻訳される。『点과 線』の翻訳者である李文賢は、『点と線』が日本で権威のある芥川賞を受賞した松本清張の代表作であり、日本の『旅』に連載された後、単行本として刊行されるやいなや50万部が売れた一大ベストセラーであると紹介している。そして作品は「模範的なアリバイ崩しの本格物、息づく暇さえ与えない貴重な秀作」で、従来の荒唐無稽な探偵小説から脱し、題材を生活周辺から選び、探偵小説的な要素に文学的な香りを加味した作品であるとも説明している。推理小説の歴史を変えるほどの秀作であるという称賛も加えている。そして『点と線』は推理小説の面白みだけではなく、作品性も優れていると強調している。こうして刊行された『点과 線』の翻訳本は韓国で一大人気を博した。1961年に翻訳刊行されて以来、計18回も再刊行されている。松本清張の作品で再刊行されたものは多いが、『点と線』は松本清張の作品の中で最も多く再刊行されたもので、最高の人気作品であった。

表 6 著作権法未導入期に刊行された『点と線』の目録

No	韓国語題名	叢書名	訳者	出版社	年度	備考
1	点과 線	-	李文賢	眞文出版社	1961	
2	点과 線	-	李文賢	弘益出版社	1963	『点と線』(眞文出版社、1961)と同一（11～13章なし）
3	点과 線	-	尹稻原	第一文化社	1967	
4	点과 線	-	李文賢	弘益出版社	1974	『点と線』(眞文出版社、1961)と同一
5	点과 線	世界推理文学全集 3	姜龍俊	河西出版社	1974	
6	點과 線	人間小説『大男』 5巻	文澔	三韓文化社	1976	
7	點과 線	智炤林推理文庫 10	辛相澈	智炤林文庫社	1976	
8	点과 線	河西推理選書 20	姜龍俊	河西出版社	1977	『点と線』(河西出版社、1974)の再版
9	동경의 특파원	-	李文賢	新丘文化社	1977	『点と線』(眞文出版社、1961)と同一

10	點과 線	人間小説 『大男』 5巻	文澔	良友堂	1978	『大男』(1976)の再版
11	点과 線	世界推理文学全集6	姜龍俊	河西出版社	1978	『世界推理文学全集』 (1974)の重刷本
12	點과 線	人間小説 『大男 5: 劣悪』	文澔	良友堂	1982	『大男』(1976)の再版
13	點과 線	人間小説 『大男 5: 劣悪』	文澔	良友堂	1983	『大男』(1976)の再版
14	호스티스의 정사	-	辛相澈	眞話堂	1984	辛相澈訳の『点と線』 (1976)と同一
15	點과 線	推理文庫シリーズ	鄭鍾國	三文堂	1985	辛相澈訳の『点と線』 (1976)と同一
16	호스테스 사냥꾼	-	片忠植	イマヌエル (임마누엘)	1985	辛相澈訳の『点と線』 (1976)と同一
17	붉은 장미의 정사현장	-	片忠植	イマヌエル (임마누엘)	1986	『ホステスの狩人』 (1985) 再版
18	点과 線	豊林名作推理小説 シリーズ	李英朝	豊林出版社	1986	-

『点と線』は計18回も翻訳刊行されたが、それに8名の翻訳者が関わっている。李文賢(4回刊行)、尹稲原（1回刊行）、姜龍俊(3回刊行)、文澔(4回刊行)、辛相澈(2回刊行)、 鄭鍾国（1回刊行）、片忠植(2回刊行)、李英朝(2回刊行)である。そのなかには松本清張の原作からではなく、以前に翻訳刊行された翻訳本を修正して刊行したケースもある。

出版社別でみると、眞文出版社、弘益出版社(2回刊行)、良友堂、第一出版社、河西出版社(3回刊行)、新丘出版社、三韓文化社、智炤林文庫社、大眞出版社、豊林出版社(2回刊行)、新話堂、三文堂、イマヌエル（2回刊行)など、延べ13の出版社によって『点と線』が刊行された。

出版年度別にみると、1960年代に3回、1970年代に8回、1986年までが７回である。1970年代は毎年欠かさず翻訳刊行されている。なかには題目が変更され、『동경의 특파원（東京の特派員）』、『호스티스의 정사（ホステスの情事）』、『호스테스 사냥꾼（ホステスの狩人）』、『붉은 장미의 정사현장（赤い薔薇の情死現場）』等々の題目でも刊行された。翻訳の初期には『点과 線』という題目を使用しているが、それ以降何度も再刊行される過程で題目の変更が行われる。題目変更において目立つ特徴は殺害される女性の職業がホステスである点を強調していることである。読者の煽情的な興味をそそる意図であったと推測される。

『点と線』は数回にわたって翻訳され、多数の翻訳家によって翻訳されてはいるが、じつはその多くは以前の翻訳内容をそのまま使っている。字句や文章の一部を修正したり、翻訳本の題目を変えたりして刊行されている。李文賢、辛相澈、姜龍俊、李英朝などの翻訳本はこうした著作権法導入期以前の翻訳的特徴をよく現わしている。

（1）李文賢の翻訳本

『点と線』は1961年に李文賢によって初めて翻訳刊行されている。訳書には翻訳者である李文賢についての紹介がなされておらず、李の来歴を知ることはできない。しかし、李文賢による翻

訳書籍は多数確認される。1961年眞文出版社から刊行された丹羽文雄『貞操票』（眞文出版社、1961）とレアジュ・ポアルニー『O嬢の情話』（新文苑社、1961）、仁木悦子『고양이는 알고 있다（猫は知っている）』（弘益出版社、1974年）、木々高太郎『追跡者』（弘益出版社、1974）、丹羽文雄『秘密의 門』（弘益出版社、1974）などの翻訳書がある。

李文賢訳の『点と線』は1977年までに4回再刊される。李訳の特徴は基本的に逐語的な直訳である。李訳は初刊以降も出版社を変えながら計3回刊行されているが、翻訳内容における修正は殆ど見られず、初刊本の翻訳をそのまま再利用している。しかし、出版社が変わることによって表紙を変えられ、本文の版組みの一部変更が見られる。例えば、1963年に弘益出版社から刊行された『点과 線』は、以前の初刊本にあった11章から13章までの内容が削除され、1977年の新丘出版社から刊行された翻訳本は題目が『동경의 특파원（東京の特派員）』に変更され、初刊本の「目次」と「あとがき」が削除されている程度の修正である。再度、必要性に応じて翻訳し直したものではない。

表 7 李文賢訳の『点と線』刊行目録

NO	翻訳題名	訳者	出版社	年度	備考
1	点과 線	李文賢	眞文出版社	1961	本文、11～280頁、縦書き
2	点과 線	李文賢	弘益出版社	1963	表7の1から11～13章及び訳者の後書きが削除される（本文は11～184頁）
3	点과 線	李文賢	弘益出版社	1974	表７の1に同じ。表紙だけを変更
4	동경의 특파원（東京の特派員）	李文賢	新丘文化社	1977	表7-1に同じ。目次と後書きを削除され、題目が変更される。

李文賢が1961年に翻訳した『点과 線（点と線）』（図１）は、日本のカッパ・ノベルス版『点と線』（1960）と表紙が同じである。表紙をそのまま利用したと思われる。目次と本文は原文を忠実に移したもので、日本語の逐語訳になっている。原作の九州地方の方言は韓国の忠清道方言に置き換えられている。他方、李文賢の1963年の翻訳本（表７の２）の場合は、11～13章が削除され、「北海道の目撃者」で終わっている。そのため、三原紀一らが安田辰郎のアリバイ崩しに成功せず、事件の真相に迫ることができないまま「現実の壁に完全に敗北する姿」で終わる。事件が本質的に解決されていないため、読者が推理小説に期待する知的遊戯とそれがもたらす満足感を覚えることも出来なかったと思われる。

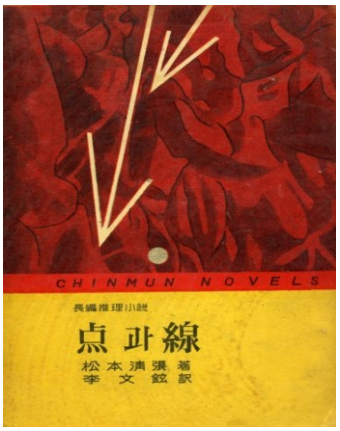


図 2 『点と線』(1961)

図 1『点と線』 (1974)

1961年李文賢訳の『点과 線』は眞文出版社から刊行され、1963年に同様の内容が弘益出版社から再刊行されているが、こうした現象は1957年制定された「著作権法」（大韓民国、第432号）によるものであった。当時の「著作権法」は外国人の著作権は特別に保護せず、「韓国内において最初にその著作物を刊行した者」、すなわち翻訳刊行者の著作権に限り保護した。そして図書が絶版されない限りに翻訳刊行者に出版権を基本的に3年間保護した（著作権法、第48条）。これと同時に翻訳刊行者に「別途出版権（著作権法、第54条）」を保証した。別途出版権とは出版権とは別途で、著作権者（翻訳者）が全集を編んだり、編集物の一部を分離して別途で出版できるとする権利である。こうした当時の状況を勘案すると、1963年の翻訳本は弘益出版社側が翻訳者の別途出版権に根拠して編集物の一部を分離して刊行したものと推測できる。作品の11～13章が削除されたのもこうした法的状況から説明できる。1974年の翻訳本（図２）はその表紙を日本の1973年カッパ・ノベルス版『点と線』に変更しているが、これも「別途出版権」を巧みに利用した結果であると推測される。

一方で、1977年には出版社が変更され、新丘出版社からも刊行されている。翻訳書の内容は同じであるが、題目だけを『동경의 특파원（東京の特派員)』に変えている。「東京の特派員」という題目は『点と線』の第4章である「東京から来た人」から借用した可能性が推測される。他方、「동경의 특파원（東京の特派員)」という題は、1968年に封切りした韓国のスパイ映画『동경특파원（東京特派員)』と題目が類似している。題目を『点と線』から『동경의 특파원（東京の特派員)』に変更したのは、当時の話題映画と類似した題目を付けることで読者の興味をそそるのが一つの目的だったのかもしれない。

（２）辛相澈の翻訳本

辛相澈の翻訳本『点과 線』が刊行されたのは1976年である。翻訳者である辛相澈の経歴を知ることはできない。辛相澈が翻訳に手掛けたものとして確認できるのは、『点과 線』（智炤林文庫社、1976）と『点と線』を改題した『호스티스의 정사（ホステスの情死）』（眞話堂、1984）である。

辛相澈訳の特徴は原文に忠実しながら、適切な意訳を加えていることである。既存の縦書きを横書きに変更したことも大きな特徴である。人名や地名の翻訳においても日本語の読み方を取り入れ、原作が日本語であることが分かるようにしている。辛相澈訳のもう一つの目立つ特徴は、題目を変更し、翻訳者の名前を変更し、何度も再刊行していることである。場合によっては内容の一部を修正して再刊行したものもある。

表 8 辛相澈訳の『点と線』刊行目録

NO	翻訳題名	訳者	出版社	年度	備考
1	點과 線 (点と線)	辛相澈	智炤林文庫	1976	本文5～229頁、横書き
2	호스티스의 정사 (ホステスの情死)	辛相澈	眞話堂	1984	1 に同じ、本文5～229頁、 題目変更
3	點과 線 (点と線)	鄭鍾國	三文堂	1985	1に同じ、本文5～229頁

4	해변의 정사 (海辺の情死)	鄭鍾國	恩光社	1987	1から段落の一部を削除、 本文11～227頁
5	호스테스 사냥꾼 (ホステスの狩人)	片忠植	イマヌエル (임마누엘)	1985	1から目次と最初のページだけを 修正、本文5～229頁
6	붉은 장미의 정사현장 (赤い薔薇の 情死現場)	片忠植	イマヌエル (임마누엘)	1985	5に同じ、本文5～229頁

辛相澈は1976年『点과 線』を智炤林文庫社から翻訳刊行し、1984年には 『호스티스의 정사（ホステスの情死）』と改題して眞話堂から刊行している。しかし、ほぼ同一の題目が辛相澈の名前ではなく、鄭鍾國 という名前で二度にわたって刊行されている。1985年三文堂出版社から刊行された『点과 線』、1987年恩光社から刊行された『해변의 정사（海辺の情死）』は鄭鍾國訳 となっているが実質は辛相澈訳を再版したものである。『해변의 정사（海辺の情死）』は『点과 線』の一部段落を削除しているが、それ以外の内容な同じである。そして1985年片忠植訳としてイマヌエル出版社から刊行された『호스테스 사냥꾼（ホステスの狩人）』と『붉은 장미의 정사현장（赤い薔薇の情死現場）』も辛相澈訳の目次と冒頭だけを修正したまま再刊したものである。以下、辛相澈、鄭鍾國、片忠植の翻訳『点と線』の相違を検討する。

表 9 辛相澈、鄭鍾國、片忠植による『点と線』訳の相違

（線が引かれた部分は相違点であり、鉤括弧は日本語直訳である）

辛相澈の翻訳本目次	鄭鍾國の翻訳本目次	片忠植の翻訳本目次
목격자 「目撃者」	목격자 「目撃者」	目격자 「目撃者」
정사체(情死體)	정사체(情死體)	정상체(情死體)
가시이驛과 西鐵(가시이) 驛 「香椎駅と西鉄(香椎)駅」	가시이驛과 西鐵(가시이) 驛 「香椎駅と西鉄(香椎)駅」	가시이驛과 西鐵(가시이) 驛 「香椎駅と西鉄(香椎)駅」
東京에서 온 사람 「東京から来た人」	東京에서 온 사람 「東京から来た人」	동경에서 온 사람 「東京から来た人」
제1의 의문 「第１の疑問」	제1의 의문 「第１の疑問」	제1의 의문 「第１の疑問」
4분간의 假設 「４分間の仮説」	4분간의 假設 「４分間の仮説」	4분간의 假設 「４分間の仮説」
우연 작위(作爲)의 문제 「偶然作為の問題」	우연 작위(作爲)의 문제 「偶然作為の問題」	우연 작위(作爲)의 문제 「偶然作為の問題」
홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) 「北海道と北九州」	홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) 「北海道と北九州」	홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) 「北海道と北九州」
숫자가 있는 풍경 「数字のある風景」	숫자가 있는 풍경 「数字のある風景」	숫자가 있는 풍경 「数字のある風景」
홋까이도오의 목격자 「北海道の目撃者」	홋까이도오의 목격자 「北海道の目撃者」	홋까이도오의 목격자 「北海道の目撃者」
무너지지 않는 장벽 「崩れぬ障壁」	무너지지 않는 장벽 「崩れぬ障壁」	무너지지 않는 장벽 「崩れぬ障壁」
도리가이 쥬우따로오의 편지 「鳥飼重太郎の手紙」	도리가이 쥬우따로오의 편지 「鳥飼重太郎の手紙」	도리가이 쥬우따로오의 편지 「鳥飼重太郎の手紙」
미하라 기이찌의 보고	미하라 기이찌의 보고	미하라 기이찌의 보고

「三原紀一の報告」	「三原紀一の報告」	「三原紀一の報告」

辛相澈訳、鄭鍾國訳、片忠植訳の目次の表記は同じである[8]。辛相澈は原文の漢字表記をハングル表記に変えているが、この点は鄭鍾國訳、片忠植訳においても同様である。鄭鍾國訳は辛相澈訳を８ページ程度削除し、片忠植訳は最終のページだけを修正している。表紙はいずれもホステスを模した人物を配置している。題目も原題の『点と線』とは全く無関係に、『호스티스의 정사(ホステスの情死)』、『해변의 정사(海辺の情死)』、『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』、『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』のように、「ホステス」と「情死」を強調した刺激的な題目に変更している。

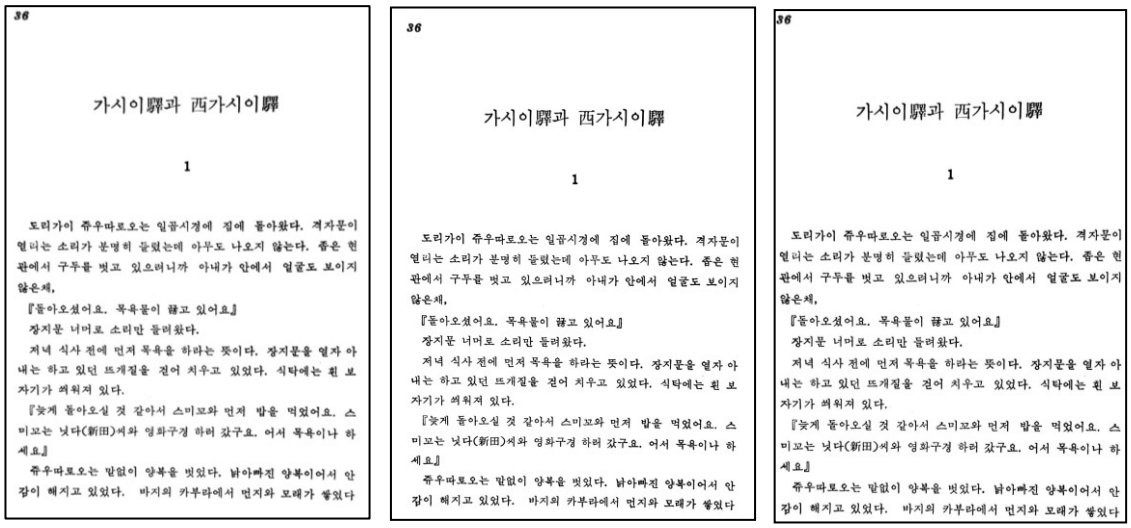


図 3 各翻訳本の36頁を比較（左から辛相澈訳、鄭鍾國訳、片忠植訳）

これと関連し、片忠植訳にはいくつかの奇異な変更が見られる。まず、目次のデザイン（配列）を少し変えている。目次内容は辛訳をそのまま踏襲しているが、その過程で誤字・脱字を発生させている。第１章が「목격자（目撃者）」から「目격자（目撃者）」、第２章の題目が「정사체(情死體)」から誤字の「정상체(情死體)」に変更されている。いわゆる改悪である。「가시이驛과 西鐵(가시이)驛」（香椎駅と西鉄香椎駅）の表記も三冊において全く同じであるが、なぜか本文においては、図３のように「가시이驛과 西가시이驛」（香椎駅と西香椎駅）と変更されている。「西鉄」の「鉄」を省略したのである。このため、香椎駅の西に西香椎駅が位置しているように誤解される。他の修正箇所は第１章の冒頭の最初の段落であるが、そこには原作にはない文章が挿入されている。片忠植の翻訳本は「多くの人でにぎわい、いつも煌々たるネオンが明滅する東京の市街地に或る料亭が佇んでいた」という文章で始まる。鳥飼重太郎で始まる作品冒頭の一段落を削除し、原作には存在しない内容を挿入したのである。これも明らかな改悪である。

こうした改悪の部分的修正は出版社側が既に翻訳された作品を再利用する過程で、当時の著作

8 片忠植訳は「목격자」を「目격자」に、「정사체(情死體)」を「정상체(情死體)」と誤記した程度の違いしか存在しない。

権法（大韓民国、第432号）を意識した結果とも言える。当時の著作権法は翻訳者を著作権者として認めて翻訳權を保護したので、すでに翻訳された内容の一部を修正し、訳者の名前を変更し、あたかも別人による新しい翻訳物のように装って著作権法の回避を企んだように思われる。辛相澈、鄭鍾國、片忠植の翻訳本はそうした時代をよく映すもので、またそうした時代によって生まれた奇異な翻訳本である。したがって、辛相澈訳(智炤林文庫、1976)、鄭鍾國訳(三文堂、1985)、片忠植訳(イマヌエル、1985)は翻訳者や出版年度、出版社がすべて違うにもかかわらず、内容だけではなく版型までも同じである。図３で確認できるように、訳本や文字体と文字サイズ、単語、文章、段落構成が同じである。同一の版型を使っている。 版型の使いまわしが行われた可能性が濃厚である。その結果、図３のように、「가시이驛과 西가시이驛」（香椎駅と西香椎駅）という小題の一致だけではなく、該当章のページ数も同じく36頁から始まっているのである。

（3）尹稲原の翻訳本

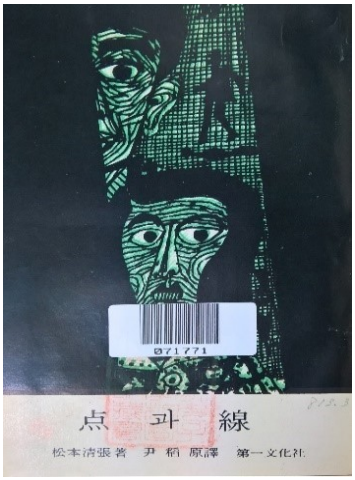


図 4 『点과 線』(1967)

尹稲原による翻訳は1967年に刊行された『点と線』一冊が全てである。尹稲原の経歴は明らかでない。尹が翻訳した作品も『点と線』がほぼ唯一のものである。非常に個性的で迫力のある表紙は日本の『点と線』の表紙とは無縁のように思われ（図4）、裏表紙には「金宗學装幀」と書かれている。

尹稲原の訳は李文賢訳とは違い、原文の日本文や日本語漢字語をそのまま直訳する方法でなされている。たとえば、原文の注記である「本文中の列車、航空機の時間は、事件発生の昭和三十二年のダイヤによる」も同じく、「본문 중의 열차, 항공기의 시간은, 사건 발생의 쇼와(昭和) 三十二년의 다이에 의함」と直訳している。「ショウワ」とハングル発音と昭和による年号表記、ダイヤグラム（다이어그램、diagram)の日本語訳語としてダイヤ（다이）の使用などは行き過ぎた直訳のような印象さえある。尹稲原のこうした機械的な直訳は韓国の読者にはむしろ混乱を与える可能性がある。韓国の若い読者は、以前の世代とは違い、こうした日本式表記に馴染んでいないからである。

（4）姜龍俊の翻訳

姜龍俊訳の『点과 線』が河西出版社から刊行されたのは1974年である。巻末には翻訳者である姜龍俊の経歴が詳細に紹介されている。韓国の総合雑誌『思想界』に短編小説「鉄条網」を発表して文壇にデビューし、韓国日報社主催の第5回創作文学賞を受賞し、長編小説『夜への長い旅路』と短編集『狂人日記』をはじめ、80余篇の中短編を発表している作家である。『点と線』『ゼロの焦点』のほか、モーリス・ルブラン『怪盗紳士ルパン』（河西出版社、1975）を翻訳している。

姜龍俊訳『点과 線』は河西出版社が1974年に企画刊行した『世界推理文学全集』の一部として初めて刊行され、計3回ほど再刊行されている。姜龍俊の翻訳本はのちに文潞によって中編小

説に置き換えられ、全集『大男』において三度も刊行されている。これを整理すると次のようになる。

表 10 姜龍俊訳の『点と線』刊行目録

NO	翻訳題名	訳者	出版社	年度	備考
1	点과 線	姜龍俊	河西出版社	1974	本文、309～476頁、縦書き
2	点과 線	姜龍俊	河西出版社	1977	1に同じ。本文11～177頁
3	点과 線	姜龍俊	河西出版社	1978	1に同じ。本文、11～177頁
4	點과 線	文澔	三韓文化社	1976	『大男』5巻収録、 本文7～153頁、縦書き
5	點과 線	文澔	良友堂	1978	4に同じ
6	點과 線	文澔	良友堂	1982	4に同じ

姜龍俊の翻訳本は尹稲原の翻訳本同様、作品末に「本文中の列車、航空機の時間は、事件発生の昭和三十二年のダイヤによる」という注記が翻訳されている。このことから尹稲原と翻訳本と同じ版本を翻訳したものと思われる。また姜の訳文には一部において日本語をそのまま移した箇所も見られるが、生硬な日本語を適切に修正しているので翻訳臭の文章が少ない。それに加え、日本語の九州訛りを韓国風にうまく置き換えている。それが1977年版の翻訳本になると、その表紙(図5)のデザインはカッパ・ノベルス版『点と線』(1973)の表紙デザインをそのまま使っている。

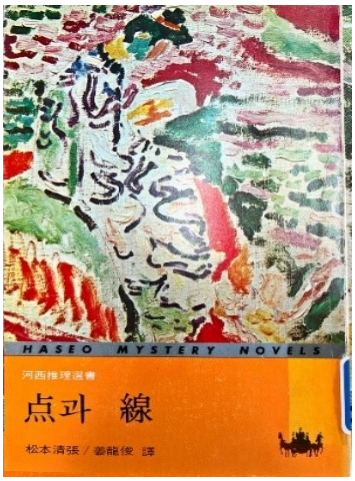


図 5 『点과 線』(1977)

一方で『大男』に収録された文澔の翻訳本は、姜龍俊の翻訳本に依拠しながら尹稲原の翻訳本を参照し、全体を中編小説の分量で組み直した性質のものである。しかし、姜龍俊の翻訳本との差別化を図るためなのか、一部の表現を変えたり、時には尹稲原の翻訳文を活用したりしている。その結果、韓国語話者には不自然な文章が多い。さらに尹稲原の翻訳本に見られる誤訳をそのまま再生産している箇所も多々見られる。原文の九州の方言はすべて標準語に直されている。その一部を紹介する。

表 11 姜龍俊、尹稲原、文澔による翻訳本の比較

(線が引かれた部分は表現の一部を変えたものであり、日本語訳は直訳)

NO	姜龍俊の翻訳本	尹稲原の翻訳本	文澔の翻訳本
1	이 역을 내려서 산 쪽으로 가면, 2차 대전 전의 격식에 따른 신사의 하나인 가시이노미야(香椎宮)가 있고, (하략) (この駅を降りて山のほうへ行けば第２次大戦前の格式に則った神社の一つである香椎宮があり、下略)	이 역을 내려서 산 쪽으로 올라가면 간뻬이다이샤 가시이궁(官幣大社香椎宮), (하략) (この駅を降りて山のほうに登れば官幣大社香椎宮があり、下略)	이 역에서 내려 산 쪽으로 가면, 2차 대전 전의 격식에 따른 신사의 하나인 가시이노미야(香椎宮)가 있고, (하략) (この駅を降りて山のほうへ行けば第２次大戦前の格式に則った神社の一つである香椎宮があり、下略)

2	그런데, 그 오또끼가 동행한 사나이와 함께 뜻 밖의 장소에서 시체가 되어 발견되었다. （しかしながら、そのお時が同行した男と一緒に意外な場所で死体になって発見された。）	그러나, 그 오도끼는, 동행한 사나이와 함께, 뜻하지도 않은 곳에서, 사체(死體)로 발견되었던 것이다. （しかし、そのお時が同行した男と一緒に意外な場所で死体となって発見されたのである。）	그런데 그 오도끼는 정작 동행한 젊은 남자와 함께 뜻하지도 않은 장소에서 시체로 발견되고 있었다. （しかしながら、そのお時が同行した男と一緒に意外な場所で死体として発見されていた。）
3	세이깡(青函) 연락선 （せいかん連絡船）	아오바꼬(青函) 연락선 （あおばこ連絡船）	아오바꼬(青函) 연락선 （あおばこ連絡船） 세이깡(青函) 연락선 （せいかん連絡船）

表11の１の訳で分かるように、姜龍俊訳と文澔訳にはお互いに一致する箇所が多い。両者は原文の「官幣大社」を「2차 대전 전의 격식에 따른 신사의 하나인」（第二次大戦前の格式に従った神社）と訳しているが、これは著作権法未導入期における18編の韓国語訳『点と線』のなかでも姜龍俊訳と文澔訳に限って見られる特徴である。官幣大社がなにかを知らない韓国語読者のために配慮して翻訳した結果であろう。

このように、文澔訳は姜龍俊訳に依拠しているが、表11の２で見るように文訳との差別化を図るために微細な字句の修正を行っている。韓国語「시체가 되어 발견되었다」（死体になって発見された）を「시체로 발견되고 있었다」（死体として発見されていた）のように表現の一部を変えている。このような現象は同じ時期に翻訳された多くの『点と線』のなか、文澔訳に見られる主要な特徴である。というのは、文澔訳には姜龍俊の翻訳本からではなく、尹稲原訳の一部を借りてきて切り貼りをしたような痕跡があるからである。表11の３がそうした例である。たとえば、「青函連絡船」の翻訳の際、姜龍俊の翻訳本は「세이깡 연락선（セイカン連絡船）」と正確な音読みで訳しているが、文澔訳の場合はいくつかの所では「아오바꼬(青函) 연락선（アオバコ連絡船）」と誤訳している。これは尹稲原の翻訳を参照した結果のように思われる。尹は一概に「アオバコ連絡船」と訳している。同じ時期の『点の線』の韓国訳のなか、「青函連絡船」を「アオバコ連絡船」と誤訳したのは尹稲原訳と文澔訳にしか見られない現象である。文澔訳は尹稲原訳の誤訳まで綺麗に踏襲している。このことから文澔訳は姜龍俊訳に依拠しながらも部分的に尹稲原訳を参考とし、既存の翻訳との差別化を意図したもののように思われる。

文澔訳『点과 線』は他の翻訳本とは違い、目次を省略している。その結果、長編小説ではなく中編小説のようになっている。全体の分量も大幅に減らされ、『大男』5巻に収録されいる文澔訳『点과 線（点と線）』は7～153頁を占め、全体の分量は146頁である。李文賢訳が269頁、辛相澈訳が224頁、姜龍俊訳が167頁であることと比べても多くの部分が省略されたことが分かる。こうした大幅な削減によって原作の『点と線』は果たして成り立つのか、どのように変化するのか、またいったいなにを意図したのかは大きな疑問である。文澔訳『点과 線』で削除された部分を整理して示せば次のようになる。

表 12 文澔訳『点과 線』で削除された内容

目次	削除部分
目撃者	(一部の文章とセリフが削除)
情死體	博多一体の海岸についての描写。 刑事が事件現場の証拠品から被害者の死因を確認する場面 刑事が事件現場一帯の旅館に聞き込みをする部分

香椎駅と西鉄香椎駅	鳥飼重太郎の家族に関する叙述 鳥飼重太郎が家族と話している中で事件に疑問を抱く部分
東京から来た人	聞き込みを終えて鳥飼重太郎が考えを整理する部分
第一の疑問	警視庁捜査2課に関する叙述 事件当日の足取りを図表で整理した三原紀一の手帖の内容
四分間の仮説	三原紀一が警視庁に戻って結果を報告し、捜査の方向を議論する部分 三原紀一が考えを整理して安田辰郎を訪ねていく部分
偶然と作為の問題	三原紀一らが今まで集めた資料を整理する部分
北海道と九州	翌日にまた事件について議論し始める部分 鎌倉にいる安田辰郎の妻亮子が実際に療養しているか疑問を抱く場面
数字のある風景	安田亮子が療養する場所を訪ねていく場面 安田亮子のエッセイ「数字のある風景」についての内容
北海道の目撃者	(一部の文章とセリフが削除される)
崩れぬ障壁	三原紀一らが石田芳男、お時らの身辺調査をした結果について議論する部分 三原紀一が昼食を食べながら集めた情報を整理し、仮説を検討する場面 三原紀一が日本航空社と通話する場面 三原紀一が安田辰郎のトリックについて主任と話し合う場面
鳥飼重太郎の手紙	鳥飼重太郎の手紙を引用した部分
三原紀一の報告	(一部の文章をセリフが削除される)

上記の表12で見るように、文潞訳は原典における推理の核心的な部分においても躊躇なく削除している。推理的な叙事は大きく毀損される。こうなると『点と線』のあらすじと作品の雰囲気を伝えるに止まっているような印象である。他に訳注もすべて削除されている。なぜ文潞はここまで異様な努力をしたのだろうか。削除はたんに削るのではなく、全体の流れが決定的に損なわれないようにある程度の工夫が必要である。要するに削除するよりは全体を直訳したほうが手っ取り早く翻訳としては楽である。削除は余計な努力でもあるが、その原因はおそらく『大男』という奇異な翻訳集の形態と性質によるものであろう。まずはページ数の問題がある。『大男』は一巻あたり440から480頁で構成されているが、『点と線』が収録された『大男』第5巻には『点과 線』意外に、「寒流」、「捜査圏」(捜査圏外の条件)、「숨쉬는 그림자(息づく影)」(影)、「토막(切片)」(額と歯)、「얼굴(顔)」(顔)が訳載せられ、ページ数は469になっている。一冊に多くの作品を訳載する過程において、一冊のページ数を考えて内容の一部を削除し、修正したと思われる。その結果、作品が持つ当初の推理的な要素は大幅に弱められたと言える。主人公が推理を通して事件を解決する一連の推理過程が省略され、事件の最終結末だけが提示され、推理小説の緊張感ははなはだ損なわれているのである。もうひとつの重要な理由は『大男』は全10巻を清張文学の一つの固まり(大男というやや不思議なイメージ)として認識したからであろう。章題を削除したのもそうした理由であろう。つまり、『点と線』を個別的な長編小説ではなく、「大男」の性質を表す壮大な物語の一部分に組み込む過程で削除が行われた可能性がある。今日における翻訳の倫理感覚には合わないが、清張文学のすべてを網羅して一つの大きな「大物語」に組み立てる異常な情熱と不思議な感覚は単純な評価を躊躇させる。

上述の『点と線』とほぼ類似した経緯は『ゼロの焦点』にも見られる。『ゼロの焦点』は1986年まで計8回翻訳刊行された。1961年、李圭稙によって自由舎から初めて翻訳刊行され、1974には李英朝によって豊林出版社からも刊行される。1977年と1978年には姜龍俊訳が河西出版社から刊行され、文潞訳の『大男』(全10巻) にも翻訳掲載されている。1985年には鄭鍾國訳が三文堂から刊行されている。一方で、『ゼロの焦点』の人物名や地名などを韓国に変え、内容の一部

を修正した翻案小説『안개 속 최후 증인（霧の中の最後の証人）』(金旭翻案、文教、1984)も刊行されている。『点と線』同様、翻訳過程において訳者による削除、修正、変更が多く行われている。

1.2. 原作の題名の変更

原作を翻訳出版する場合は原作の題目を忠実に、あるいは概ね推定できるように翻訳するのが一般的な作法である。しかし、松本清張の韓国訳の場合は題目が大幅に変更されて刊行されるケースが多く見られる。1960年代から1986年までに刊行された清張の翻訳本においておおよそ半分に近い訳書が原題とは全く違う題目に訳されている。題目変更の具多的な状況を示す。

表 13 著作権未導入期に刊行された作品題目(出版社別)

（訳題目名に※で印したものは原作の題目と一致しないものである）

原題名	翻訳題名	出版年度	翻訳者	出版社
或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記傳 (或るコクラ日記伝)	1960	李元壽	新丘文化社
或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記傳 (或るコクラ日記伝)	1963	李元壽	
地の骨	※벌레먹은 象牙塔 (蝕んだ象牙塔)	1970	洪性裕	
地の骨	※暗黒大學（上・下）	1971	洪性裕	
或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記傳 (或るコクラ日記伝)	1972	李元壽	
地の骨	※벌레먹은 象牙塔 (蝕んだ象牙塔)	1974	洪性裕	
地の骨	※暗黒大學（上・下）	1975	洪性裕	
点と線	※동경의 특파원 (東京の特派員)	1977	李文賢	
点と線	点과 線	1961	李文賢	眞文出版社
ゼロの焦点	제로의 焦点	1961	李圭稙	自由舍
点と線	点과 線	1963	李文賢	弘益出版社
点と線	点과 線	1974	李文賢	
一年半待て	一年半 기다려주세요 (一年半待って下さい)	1966	表文台	希望出版社
波の塔	波濤의 塔（上・下）	1966	玄雲	弘人文化社
点と線	点과 線	1967	尹稲原	第一文化社
地の骨	※暗黒大学（上・下）	1968	洪性裕	三耕社
地の骨	※벌레먹은 象牙塔 (蝕んだ象牙塔)	1970	洪性裕	

或る「小倉日記」伝	어느 고쿠라 日記傳 (或るコクラ日記伝)	1970	李元壽	三耕社
一年半待て	一年半 기다려라 (一年半待て)	1969	李姓教	藝文館
一年半待て	一年半 기다려주세요 (一年半待って下さい)	1969	表文台	新太洋社
-	殺意의 断層（短編集）	1974	李英朝	豊林出版社
危険な斜面	※殺意의 斷層			
薄化粧の男	※完全犯罪			
証言	証言			
確証	確証			
捜査圏外の条件	捜査圏外의 条件			
偶数	※偶然			
一年半待て	一年半 기다려라 (一年半待て)			
ゼロの焦点	0의 焦点	1974	李英朝	
黒い樹海	共犯者	1974	李英朝	
眼の壁	눈의 壁（眼の壁）	1975	李敏載	
-	안개 속의 흰 얼굴（短編集）	1979	李英朝	
白い闇	※안개 속의 흰 얼굴 (霧の中の白い顔)			
部分	部分			
薄化粧の男	※완전범죄（完全犯罪）			
証言	證言			
確証	確證			
捜査圏外の条件	捜査圏外의 条件			
偶数	※偶然			
一年半待て	一年半 기다려라 (一年半待て)			
共犯者	共犯者			
地方紙を買う女	地方紙를 사는 女人 (地方紙を買う女)			
理由	理由	1979	李英朝	
点と線	点과 線	1979	李英朝	
十万分の一の偶然	10萬分의 1의 우연 (十万分の一の偶然)	1981	李英朝	
影の地帯	※함정（陷穽）	1985	李英朝	
ゼロの焦点	제로의 焦点（ゼロの焦点）	1974	姜龍俊	河西出版社
点と線	点과 線			

点と線	点과 線	1977	姜龍俊	河西出版社
ゼロの焦点	제로의 焦点（ゼロの焦点）	1977	姜龍俊	
砂の器	모래그릇（砂の器）	1978	康炳希	
点と線	点과 線	1978	姜龍俊	
ゼロの焦点	제로의 焦点（ゼロの焦点）			
-	大男第1巻(短編集)	1976 /1978 /1982 /1983	文潚	三韓文化社 /良友堂
紐	끈（紐）			
喪失	喪失			
箱根心中	※人間密林			
ある小官僚の抹殺	小官僚의 抹殺			
坂道の家	언덕길의 집（坂道の家）			
二階	※二層의 天国（二階の天国）			
形	※定石法			
-	大男第2巻（短編集）	1976 /1978 /1982 /1983	文潚	
遭難	遭難			
危険な斜面	危険한 斜面			
誤差	誤差			
拐帯行	※逃避行			
たづたづし	※愛憎의 迷路（愛憎の迷路）			
鴉	까마귀（カラス）			
草	※麻薬病棟			
背広服の変死者	※生의 迷路（生の迷路）			
-	大男第3巻（短編集）	1976 /1978 /1982 /1983	文潚	
熱い空気	뜨거운 空気（熱い空気）			
濁った陽	※灰色太陽			
天城越え	※時効			
白い闇	白闇			
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 舟板 （カルネアデスの舟板）			
	大男第4巻（短編集）	1976 /1978 /1982 /1983	文潚	
事故	事故			
声	목소리（声）			
共犯者	共犯者			
地方紙を買う女	地方紙를 사는 여자 （地方紙を買う女）			
鬼畜	※怪畜			
一年半待て	※一事不再理			
途上	※使徒行伝			
凶器	凶器			

	大男第5巻（短編集）	1976 /1978 /1982 /1983	文澔	三韓文化社 /良友堂
点と線	点과 線			
寒流	寒流			
捜査圏外の条件	※捜査圏			
影	※숨쉬는 그림자（息づく影）			
額と歯	※토막（切片）			
顔	얼굴（顔）			
眼の壁	※大男第6巻	1976 /1978 /1982 /1983	文澔	
-	大男第7巻（短編集）	1976 /1978	文澔	
断線	断線			
発作	※強迫反応			
支払い過ぎた縁談	※二重幸運			
闇に駆ける猟銃	어둠을 달린 猟銃 （闇に駆ける猟銃）			
陸行水行	※陸路水路			
肉鍋を食う女	※人肉譚			
紙の牙	※종이덫（紙の罠）			
-	大男第8巻（短編集）	1976 /1978	文澔	
寝敷き	주름잡기（しわ直し）			
駅路	※蒸発			
空白の意匠	空白의 意匠（空白の意匠）			
二人の真犯人	두 사람의 真犯（二人の真犯）			
小さな旅館	※投資殺人			
種族同盟	種族同盟			
晩景	晩景			
老春	※老衰期			
ベイルート情報	베이루트 情報（ベイルート情報）			
連環	※大男第9巻	1976 /1978	文澔	
ゼロの焦点	※大男第10巻	1976 /1978	文澔	
高校殺人事件	高校生 살인사건 （高校生殺人事件）	1976	李圭稙	智炤林文庫社
点と線	点과 線	1976	辛相澈	
高校殺人事件	※고교생들의 추적 （高校生らの追跡）	1980	金甲洙	南島
黒革の手帖	※어느 女行員의 手帖（上・下）	1981	李文熙	太極出版社
黒革の手帖	※검은 手帖（上・下）	1985	李文熙	

混声の森	※大勝負8-知性遊戯	1981 /1982	洪性裕	青潮社 /青文出版社
	※大勝負9-夜行勝祭			
地の骨	※大勝負10-虚構大學			
	※大勝負11-愛情失業			
黒い樹海	※第五의 그림자（第5の影）	1984	金旭(翻案)	文教
ゼロの焦点	※안개 속 최후 証人 （霧の中の最後の証人）	1984	金旭(翻案)	
眼の壁	※目撃者	1984 /1985	金旭(翻案)	
聞かなかった場所	※처녀地 살인計（処女地殺人計）	1984	金旭(翻案)	
眼の壁	※사기단 25시(詐欺団25時)	1984	金輝文(翻案)	東亞文藝
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 배 널빤지 （カルネアデスの舟板）	1984	河有祥	ハングル （한그루）
捜査圏外の条件	수사권 밖의 조건 （捜査圏外の条件）			
危険な斜面	위험한 사면（危険な斜面）			
反射	반사（反射）			
眼の壁	눈의 벽（眼の壁）	1985	南廷賢	賢音社
点と線	点과 線	1985	鄭鍾國	三文堂
点と線	※호스테스 사냥꾼 （ホステス狩人）	1985	片忠植	イマヌエル （임마누엘）
高校殺人事件	※1・2・3의 살인 （1・2・3の殺人）	1985	片忠植	
点と線	※붉은 장미의 정사현장 （赤い薔薇の情死現場）	1985	片忠植	
熱い絹	※나비城（蝶の城）	1985	鄭性鎬	成正出版社
地の指	땅의 손가락（地の指）	1986	鄭性鎬	

翻訳本を刊行する際、原題を大幅に変更する理由はさまざまある。翻訳作品の意味をより明確に伝達するため、読者の興味をそそるため、または以前に刊行された書籍との重複を避ける意図などが考えられる。あるいはこれらが複合的に絡んでいる場合もある。以下、題目変更のパターンについて検討する。

(1) 作品の意味伝達のための題目変更

『地の骨』は1968年、洪性裕によって『暗黒大学』(上・下)(新丘文化社, 1968)という題目で初めて翻訳される。『暗黒大学』は1973年と1975年にも再刊行される。原題の『地の骨』は韓国語直訳としては『땅의 뼈（土の骨）』に近いが、韓国語題目は言葉として不自然であり、題目から内容を類推することも難しい。そもそも清張の原題が意味不明である。そうした理由から訳者は原題の直訳を避け、腐敗した大学教授と大学入試にまつわる不正問題を浮き彫りにする意図で『暗黒大学』に変更したと推測される。洪性裕はのちに『地の骨』を『벌레먹은 象牙塔（蝕

んだ象牙塔）』(三耕社、1970/新丘文化社、1974)という題目としても再版している。原作の内容をより明瞭にすると同時に、以前に刊行された『暗黒大学』とはあたかも別の作品であるかのようなことを意図したであろう。

『地の骨』は1981年に『大勝負10-虚構大学』(洪性裕訳、青潮社、1981/青文出版社、1981)、『大勝負11-愛情失業』(洪性裕訳、青潮社、1981/青文出版社、1982)という題目で再刊行されている。『大勝負』は 黒岩重吾, 清水一行, 城山三郎などの日本の有名作家の作品を14巻にまとめたもので、8巻から11巻までが松本清張の作品である。『大勝負』は、『大勝負1-慾望軍團』、『大勝負2-人生階級』、『大勝負3-原色地帯』というふうに、四文字漢字熟語で題目を付けている。『虚構大学』や『愛情失業』という四文字の題目はこのシリーズの題名方式によるものと思われる。『虚構大学』は原作の『地の骨(上)』における収賄による不正入学に焦点を当てた題目で、『地の骨(下)』は不倫と異性問題で同伴自殺に巻き込まれる内容に焦点を当てて『愛情失業』という題を付したものと思われる。

『混声の森』も『大勝負8-知性遊戯』、『大勝負9-夜行勝帝』(洪性裕訳、青潮社、1981/青文出版社、1982)という題で翻訳刊行されている。韓国語直訳「혼성의 숲（混声の森）」を避け、『知性遊戯』、『夜行勝帝』という四字熟語の題を付したのもこの作品が『大勝負』シリーズの一部として刊行されたからであろう。私立女子大学という空間を背景にし、理事長のポストをめぐって主人公がマダムと不適切な関係を結んでいる原作から『知性遊戯』『夜行勝帝』と題したと思われる。

『黒い樹海』は『共犯者』(李英朝訳、豊林出版社、1974/1976)という題になっている。『黒い樹海』を直訳すれば「검은 수해（黒い樹海）」になる。しかし、韓国語では樹海という言葉を日常的に使用せず、言葉自体が生硬であり、読者の理解も難しい。そのため、作品内容を明確に表すために『共犯者』という題を付したと思われる。李英朝訳の『共犯者』は1976年にもう一度刊行されている。

原題もそうであるが、『熱い絹』はその韓国語直訳が意味不明である。それで作中では蝶々が重要なモチーフになっていることから『나비城（蝶の城）』(鄭性鎬訳、成正出版社、1985)にしたと思われる。『影の地帯』を『함정（陥穽）』(李英朝訳、豊林出版社、1979/1985)と題したのも同じ理由からであろう。政治家が絡んだ殺人ミステリーを扱った原作の内容を浮き彫りし、また興味をそそるように、直訳の『그림자 지대（影の地帯）』という抽象的な題名を避け、『함정（陥穽）』という具体的な題目を付したように思われる。

短編推理小説においても題目の変更が多く見られる。李英朝訳の『殺意의 断層（殺意の断層）』(豊林出版社、1974)には7編の短編推理小説が収録されているが、そのなか、「危険な斜面」は表題の「殺意의 断層（殺意の断層）」に,「薄化粧の男」は「完全犯罪」に変更されている。興味をそそる側面もあるが、「薄化粧の男」を「엷은 화장의 남자（薄化粧の男）」と直訳した場合、犯罪事件というよりは化粧した男という第一義の意味が前面に強く出てしまうので原作の意図をより浮き彫りにするために変更したとも思われる。『안개 속의 흰 얼굴(霧の中の白い顔)』(豊林出版社、1979)の原作は『白い闇』であるが、「흰 어둠（白い闇）」を「안개 속의 흰 얼굴（霧の中の白い顔）」に変更し、失踪事件と事件をめぐる雰囲気を強調している。

『大男』に収録された短編推理小説は多くは原題と違う題名になっている。『大男』第1巻の「箱根心中」は「人間密林」に、「二階」は「二層의 天国（二階の天国）」に、「形」は 「定石法」に改題されている。『大男』 第2巻の「逃避行」と「愛憎의 迷路（愛憎の迷路）」、「麻

薬病棟」、「生의 迷路（生の迷路）」も翻訳過程で改題したケースである。「逃避行」の原題は「拐帯行」である。しかし、韓国語は「拐帯行」という漢字語を使用しないので、金品を持ち逃げする意味に近い「逃避行」が選ばれたように思われる。「愛憎의 迷路（愛憎の迷路）」の原題は「たづたづし」である。「たづたづし」は万葉集の「夕闇は道たづたづし月待ちて行ませ我が背子その間にも見む」という短歌に基づく言葉で、迫りくる夕闇と不安感を表現した言葉である。しかし、韓国読者にはこうした短歌的表現の意味は伝わらない。それで不倫仲である女性の強迫で自己人生の崩壊を恐れ、不倫相手の女性を殺害する男性の境遇を「愛憎의 迷路（愛憎の迷路）」と題したのであろう。「麻薬病棟」は病院内の薬剤室を中心に発生する殺人事件であることが推測できるように原題の「草」を「麻薬病棟」に改題したと思われる。「生의 迷路（生の迷路）」は探検小説「背広服の変死者」を改題したものである。人生に疲れ果てた男が自殺を図る内容から「生의 迷路（生の迷路）」にしたと思われる。

『大男』第3巻の「時効」は「天城越え」を改題したもので、天城という日本の生硬な地名を使うよりは小説内容と関連する時効を題目にしたであろう。『大男』第4巻の「怪畜」の原題は「鬼畜」で、「使徒行伝」の原題は「途上」である。『大男』第5巻においては「捜査圏外の条件」が「捜査圏」と短く、「影」は「숨쉬는 그림자（息づく影）」に、バラバラ殺人事件を扱った「額と歯」は「토막（切片）」と改題されている。原作の内容を現わしながら読者の興味をそそる題目に変更されている。『大男』第7巻に収録されている短編小説「発作」は「強迫反応」に、結婚詐欺を扱った「支払い過ぎた縁談」は「二重幸運」に改題され、言論の暴力を扱った「紙の牙」は「종이덫（紙の罠）」に変えられている。『大男』第8巻の「駅路」は「蒸発」という題目に変更されている。失踪を扱った作品内容に沿った題目である。「小さな旅館」は「投資殺人」、「老春」は 「老衰期」にそれぞれ分かりやすく改題されている。

このように、『大男』に収録されている短編は日本語原題が韓国読者に生硬であったり曖昧であったりする場合、韓国の読者に馴染みやすいように原題が改題されている。同時に読者の興味をそそることも強く意識されている。

(2) 以前の翻訳本とは別作であることを意図した改題

すでに指摘したように、『点と線』は1960年から1986年まで累計18回に翻訳刊行された。翻訳初期には原題を直訳した『点과 線』という題で刊行された。しかし、何度も刊行されていくにしたがって題目を変更するケースが発生する（図6）。1977年には『동경의 특파원（東京の特派員）』(李文賢、新丘文化社、1977)に改題されて刊行される。『동경의 특파원（東京の特派員）』は1961年に刊行された李文賢訳『点과 線』をそのまま再版したものであるが、題目を変え、表紙は事件を追う刑事の姿に変更し、それが以前の『点과 線』の再版であることを暗に隠している。松本清張の長編推理小説であると情報だけが提示され、原題も目次も提示されていないため、一般読者はそれが松本清張の最新作である勘違いして購入することも続出したと思われる。当初からそうした錯覚を意図したとも読み取れる。

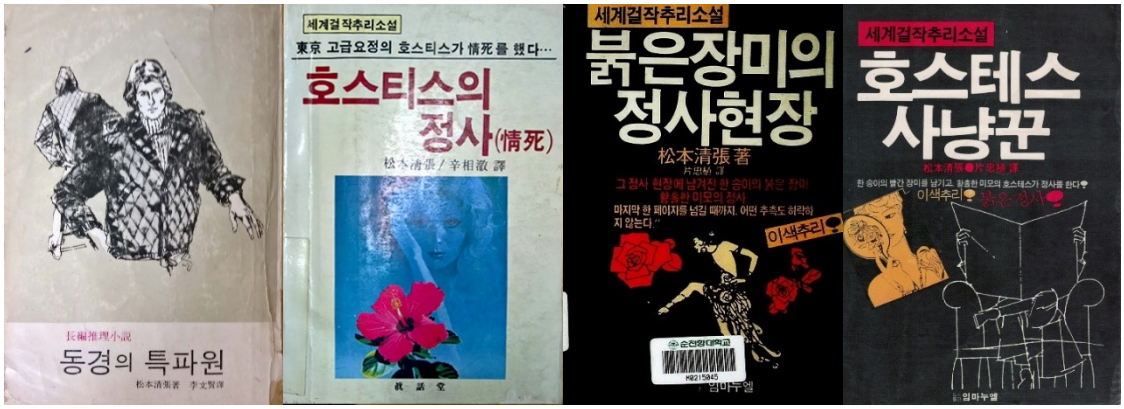
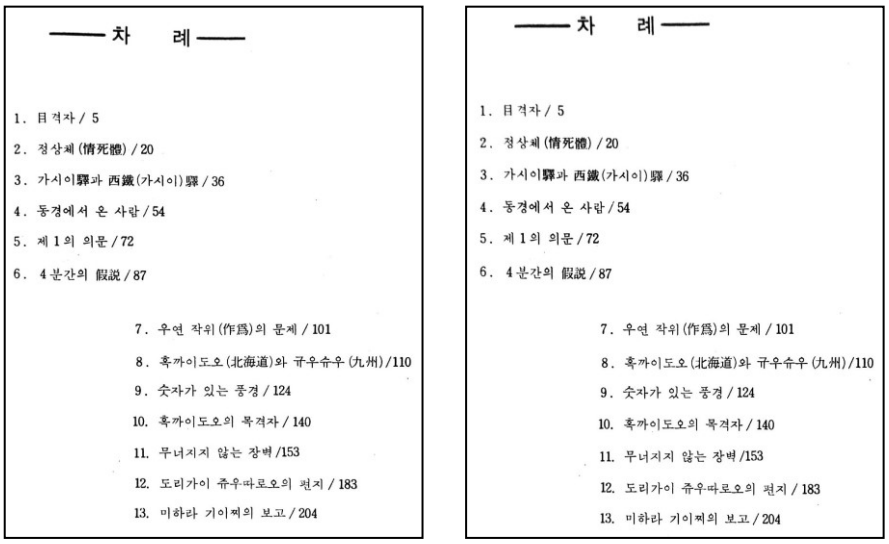


図 6 題目を変更して刊行された作品(原作は『点と線』)

1984年には『点과 線』という題目が『호스티스의 정사(ホステスの情死)』(辛相澈訳、眞話堂、1984)、1985年には『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』(片忠植訳、イマヌエル、1985)、1986年には『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』(片忠植訳、イマヌエル、1986)というような煽情的な題目に変更されている。翻訳本の表紙には「東京の高級料亭のホステスが情死を遂げた」(『호스티스의 정사(ホステスの情死)』)、「一輪の赤い薔薇を残して恍惚たる美貌のホステスが情死する。異色推理、赤い情死」(『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』)、「その情死の現場に残された一輪の赤い薔薇の恍惚たる美貌人の情死」(『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』)という広告文句を並べている。「ホステス」や「情死」という刺激的な題目を付した翻訳本はすべてが1976年の辛相澈訳『点과 線』の再版である。1976年に辛相澈訳として刊行された『点과 線』は、1984年には『호스티스의 정사(ホステスの情死)』に改題され、今度は訳者の名前を変えて片忠植訳『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』と『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』として改題刊行される。従って、片忠植訳の二冊は表紙と訳者の名前こそ違え、中身は辛相澈訳『点과 線』と全く同じである。

図7の目次で分かるように、片忠植訳『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』と『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』は目次とページを含め、すべての内容と版組が一致する。目次の「目격자」と「정상체(情死體)」という誤植まで一致している。二冊は出版社も同じである。一つの版本から題目だけをそれぞれ『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』と『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』と変更し、あたかも別の作品であるかのように偽装したとも思われる。『点과 線』の人気にあやかった商売戦略であったと思われるが、これは読者には最大の迷惑である。二度や三度、場合には四度も購入する事態もあったのかもしれない。それはもちろん松本清張『点と線』の人気を物語ってもいる。こうした例は次に紹介する『高校殺人事件』の翻訳本にも露骨に現れている。



차 례

1. 目擊者 / 5
2. 정상체(情死體) / 20
3. 가시이驛과 西鐵(가시이)驛 / 36
4. 동경에서 온 사람 / 54
5. 제 1의 의문 / 72
6. 4분간의 假說 / 87
7. 우연 작위(作爲)의 문제 / 101
8. 홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) / 110
9. 숫자가 있는 풍경 / 124
10. 홋까이도오의 목격자 / 140
11. 무너지지 않는 장벽 / 153
12. 도리가이 류우따로오의 편지 / 183
13. 미하라 기이찌의 보고 / 204

차 례

1. 目擊者 / 5
2. 정상체(情死體) / 20
3. 가시이驛과 西鐵(가시이)驛 / 36
4. 동경에서 온 사람 / 54
5. 제 1의 의문 / 72
6. 4분간의 假說 / 87
7. 우연 작위(作爲)의 문제 / 101
8. 홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) / 110
9. 숫자가 있는 풍경 / 124
10. 홋까이도오의 목격자 / 140
11. 무너지지 않는 장벽 / 153
12. 도리가이 류우따로오의 편지 / 183
13. 미하라 기이찌의 보고 / 204

図 7 『호스테스 사냥꾼(ホステスの狩人)』(左)と『붉은 장미의 정사현장(赤い薔薇の情死現場)』(右)の目次

『高校殺人事件』は李圭植訳『高校生 살인사건（高校生殺人事件）』(智炤林文庫社、1976)という題目で初めて刊行される。李圭植訳『高校生 살인사건(高校生殺人事件)』はのちに『제3의 캠퍼스(第3のキャンパス)』(李圭植訳、眞話堂、1984)に改題されて再刊行される。『제3의 캠퍼스（第3のキャンパス）』は1976年の『高校生 살인사건（高校生殺人事件）』をそのまま再版したものであるが、題目だけを変えている。 一方で、金甲洙『고교생들의 추적（高校生たちの追跡）』(南島、1980)という題目で翻訳刊行しているが、翻訳本の奥付にはなぜか表紙訳題の『고교생들의 추적（高校生たちの追跡）』ではなく、原作の『高校殺人事件』になっている。訳題は『고교생들의 추적（高校生たちの追跡）』、奥付は『高校殺人事件』という内部矛盾が発生している。おそらく原題を強く意識しながらも意図的に別の訳題をつけたであろう。一方、片忠植は高校生という言葉を削除し、『1・2・3의 살인（1・2・3の殺人）』(イマヌエル、1985)という題目で翻訳刊行する。しかし、金甲洙訳『고교생들의 추적（高校生たちの追跡）』を除き、『高校生 살인사건（高校生殺人事件）』と『제3의 캠퍼스（第3のキャンパス）』、『1・2・3의 살인（1・2・3の殺人）』は題目の違いこそあるものの、目次を含めた内容は全く同じである。その目次を比較し、以下に示す。

表 14 『高校生 살인사건（高校生殺人事件)』、『고교생들의 추적（高校生たちの追跡)』、『제3의 캠퍼스（第３のキャンパス)』、『1・2・3의 살인（1・2・3の殺人)』の目次
（色で塗られた箇所は目次が全く同じである）

高校生 살인사건(1976) (高校生殺人事件)	고교생들의 추적(1980) (高校生たちの追跡)	제3의 캠퍼스(1984) (第３のキャンパス)	1・2・3의 살인(1985) (1・2・3の殺人)
시인 (詩人)	詩人 (詩人)	시인 (詩人)	시인 (詩人)
늪의 바닥 (沼の底)	늪의 저변 (沼の底)	늪의 바닥 (沼の底)	늪의 바닥 (沼の底)

수색 (捜索)	수색 (捜索)	수색 (捜索)	수색 (捜索)
실종 (失踪)	실종 (失踪)	실종 (失踪)	실종 (失踪)
나카무라 선생 (なかむら先生)	나까무라 선생 (なかむら先生)	나카무라 선생 (なかむら先生)	나카무라 선생 (なかむら先生)
젊은 스님 (若い坊さん)	젊은 스님 (若い坊さん)	젊은 스님 (若い坊さん)	젊은 스님 (若い坊さん)
굴속의 사나이 (洞窟の中の男)	호 속의 사나이 (湖の底の男)	굴속의 사나이 (洞窟の中の男)	굴속의 사나이 (洞窟の中の男)
용(龍))	편지 手紙	용(龍))	용(龍))
녹슨 자전거 (錆びた自転車)	녹슨 자전거 (錆びた自転車)	녹슨 자전거 (錆びた自転車)	녹슨 자전거 (錆びた自転車)
무코(武古) 향토관 (武古郷土館)	무꼬 향토관 (むこ郷土館)	무코(武古) 향토관 (武古郷土館)	무코(武古) 향토관 (武古郷土館)
검은 천장 (黒い天井)	검은 천장 (黒い天井)	검은 천장 (黒い天井)	검은 천장 (黒い天井)
반달의 숲 (半月の森)	半月의 숲 (半月の森)	반달의 숲 (半月の森)	반달의 숲 (半月の森)
미혹 (魅惑)	迷宮 (迷宮)	미혹 (魅惑)	미혹 (魅惑)
사촌 누이 (従姉)	사촌 (いとこ)	사촌 누이 (従姉)	사촌 누이 (従姉)
교차점 (交差点)	교차선 (交差線)	교차점 (交差点)	교차점 (交差点)
측량 (測量)	측량 (測量)	측량 (測量)	측량 (測量)
진범 (真犯人)	진범 (真犯人)	진범 (真犯人)	진범 (真犯人)

1976年刊行された李圭稙訳の『高校生　살인사건（高校生殺人事件）』と1984年に刊行された『제3의 캠퍼스（第3のキャンパス）』、1985年に片忠植訳の『1・2・3의 살인（1・2・3の殺人）』は目次だけではなく、ページ数も完全に一致している。同じ版本を再利用したので起こった現象である。しかし、題目と表紙、訳者の名前を変えて意図的に別の作品を装っている。出版倫理は地に落ちている。

こうした同一内容の題目変更は翻案作品にも見られる。『眼の壁』を翻案した『사기단 25時（詐欺団25時）』(金輝文翻案、東亞文藝、1984)と『目撃者』(金旭翻案、文教、1984/1985)である。金輝文翻案の『사기단 25時（詐欺団25時）』は「日本のベストセラー推理小説を翻案した作品」と紹介され、『目撃者』は「松本清張の長編推理小説「目撃者」、金旭翻案」と表紙に書いてある。しかし、二作は翻案者の名前と出版社と表紙は違うものの、同一作品である。目次と内容とページ数が完全に一致しており、同一の版型が再利用されている。しかし、あたかも別の作品であるかのように偽装されている。海外の話題作を利用して目先の利益だけを追求した結果であろう。『사기단 25時（詐欺団25時）』と『目撃者』の目次を紹介する。

表 15 『사기단 25時（詐欺団25時)』と『目撃者』の目次

사기단 25時(1984) (詐欺団25時)	目撃者(1984/1985)
사기군（詐欺師） /11	사기군（詐欺師）/11
죽음（死）/ 27	죽음（死）/27
인물들（人々）/ 43	인물들（人々）/43
추적（追跡）/ 59	추적（追跡）/59
안개 속의 인간（霧の中の人間）/80	안개 속의 인간（霧の中の人間）/80
전개（展開）/99	전개（展開）/99
어떤 여행객（或る旅行客）/122	어떤 여행객（或る旅行客）/122
흔드리는 계단（揺れる階段）/141	흔드리는 계단（揺れる階段）/141
흑막（黒幕）/161	흑막（黒幕）/161
미궁（迷宮）/182	미궁（迷宮）/182
살인의 이유（殺人の理由）/203	살인의 이유（殺人の理由）/203
출생의 비밀（出生の秘密）/217	출생의 비밀（出生の秘密）/217
의문의 궤짝（疑問の櫃）/231	의문의 궤짝（疑問の櫃）/231
야릇한 종말（あやしい終末）/247	야릇한 종말（あやしい終末）/247
에필로그（エピローグ）/263	에필로그（エピローグ）/263

同様の現象は『ゼロの焦点』の翻案小説である『안개 속 최후 証人（霧の中の最後の証人）』(金旭翻案、文教、1984)と『아내의 추적（妻の追跡）』(金輝文翻案、東亞文藝、1987)においても見られる。金旭翻案『안개 속 최후 証人（霧の中の最後の証人）』は「松本清張の長編推理小説」と、金輝文翻案『아내의 추적（妻の追跡）』は松本清張の「最高ベストセラー推理小説を翻案した作品」と表紙に書いてあるが、二作は同じ版型のものである。したがって、目次、ページ数、内容は同一である。表紙と作者名と出版社名だけが違うのである。それでは翻案者とされている金旭と金輝文とはそれぞれどういう人物なのだろうか。同一人なのか別人なのかも気になる。

まず金旭については奥付に経歴が詳細に紹介されている。それによると、金旭は高麗大学校で国文学を専攻し、ソウル大学校新聞大学院を修了したのち、朝鮮日報と中央日報などで18年間新聞記者として働いている。そしてジョージ・オーウェル『動物農場』を初め、エーリッヒ・フロム『愛の技術』、三浦綾子『愛される女性になるために』、アガサ・クリスティー『死との約束』等の作品を翻訳したとされている。こうした金旭の経歴は、自身が翻訳・翻案を手掛けた書籍の奥付に共通して紹介されている。他方、金輝文の経歴は明らかでない。金輝文の名前で刊行された多くの翻訳本には訳者経歴が紹介されていない。しかし、金輝文という名前は東亞文藝から出版された翻訳書から頻繁に確認できる。森村誠一の小説を翻案した『여인살해사건（女人殺害事件）』(東亞文藝、1984)と『악몽의 설계（悪夢の設計）』(東亜文藝、1984)、さらに『소설손자병법（小説孫子兵法）1・2・3』(東亜文藝、1985)等もそうである。金旭、金輝文の二人は共通して

多くの種類の作品を翻訳・翻案しているのである。しかし、『目撃者』と『사기단 25時（詐欺団25時）』、『안개 속 최후 証人（霧の中の最後の証人）』と『아내의 추적（妻の追跡）』が同一内容であることを考えると、金旭と金輝文のうち、片方は実際には翻訳せず、名義貸しだけを行った可能性が高い。

『聞かなかった場所』を翻案したと思われる『처녀地 살인計（処女地殺人計）』(金旭翻案、文教、1984/1987)と『미인計의 함정（美人計の陥穽）』(金輝文翻案、東亜文藝、1984／金聖鍾、図書出版韓脈、1984)も題目変更の一例である。『미인計의 함정（美人計の陥穽）』は1984年に金輝文の名前で翻案され、東亜文藝から刊行されている。しかし、その内容は金旭翻案の『처녀地 살인計（処女地殺人計）』と金聖鍾翻案の『미인計의 함정（美人計の陥穽）』の内容と一致している。要するに、作品内容は一つであるが、 翻案者は三人、作品題目は二つ存在している。以下、その目次部分を紹介する。

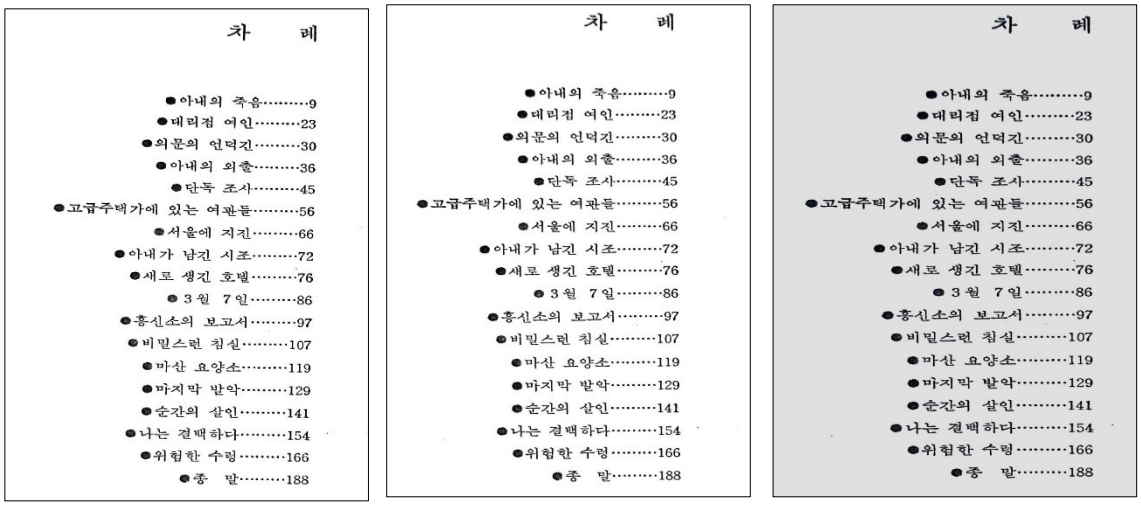


図 8 金旭翻案『처녀地 살인計(処女地殺人計)』(左) 、金輝文翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』(中央)、金聖鍾翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』(右)の目次

図8は、金旭翻案『처녀地 살인計（処女地殺人計）』、金輝文翻案『미인計의 함정（美人計の陥穽）』、金聖鍾翻案の『미인計의 함정（美人計の陥穽）』の目次を並べたものである。三つの作品は目次の前に黒丸を入れる方式をはじめ、ページ番号においても一致している。こうしたことから金輝文翻案『미인計의 함정（美人計の陥穽）』は翻案者と題目を変更して全3回にわたり刊行されたことが分かる。これは発行日から明らかである。金輝文翻案『미인計의 함정（美人計の陥穽）』は1984年8月15日である。金旭翻案『처녀地 살인計（処女地殺人計）』と金聖鍾翻案の『미인計의 함정（美人計の陥穽）』はともに1984年9月20日が発行日になっている。

翻案作品の題目と翻案者の名前を変更して再刊行することは当時として珍しいことではなかった。これはそのよい一例になるかもしれない。しかし、金輝文翻案の『미인計의 함정（美人計の陥穽）』(東亞文藝1984)と金聖鍾翻案の『미인計의 함정（美人計の陥穽）』(図書出版韓脈、1984)は題目や内容だけではなく、表紙も全く同じである。しかし、なぜなのか翻案者の名前だけが違う。東亞文藝から出版された『미인計의 함정（美人計の陥穽）』表紙には「金輝文翻案長編推理小説」と表記されているが、同書の奥付には翻案者が「金聖鍾」になっている。それ以

外の箇所は全く同じで両方を見分けすることは不可能である。なぜこうした現象が起こったのかじつに不思議である。これらを総合すると、金輝文とは韓国推理小説の大御所である金聖鍾の仮名ではないかとも推測される。あるいは金聖鍾側によるなんらかの事情で、1か月後に表紙の名前だけを金輝文に変更したが、奥付はそのままに放置した結果なのかもしれない。表紙をすり替えて二重購買を図る効果は皆無であったにも関わらず、なぜこうしたややこしい細工をする必要があったのかは謎である。

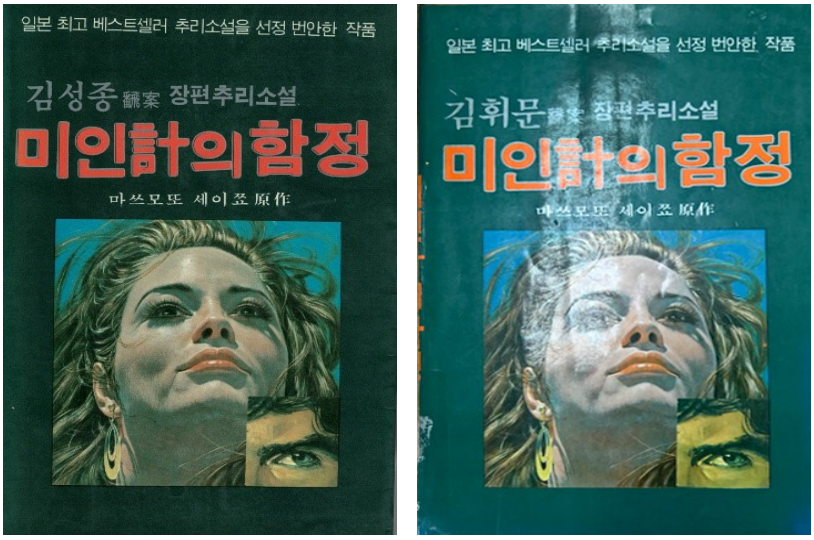
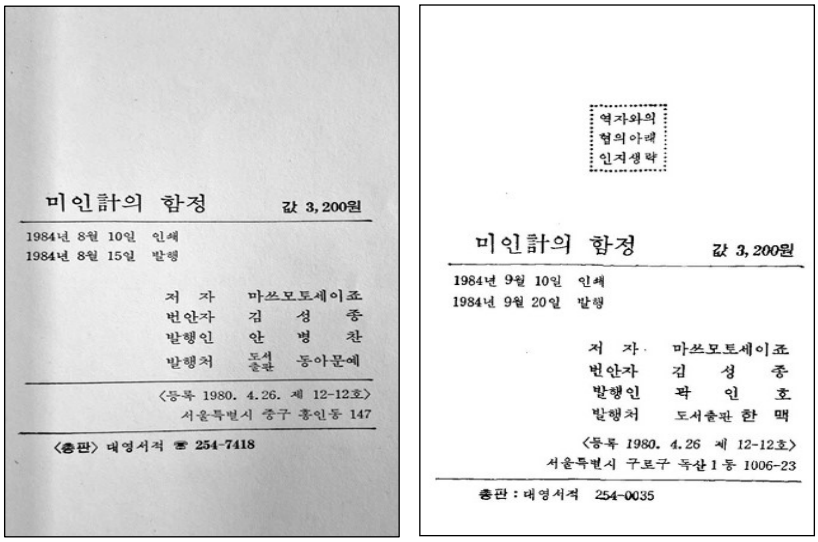


図 9 金聖鍾翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』(左)と金輝文翻案『미인計의 함정(美人計の陥穽)』(右)の表紙


미인計의 함정 값 3,200원
1984년 8월 10일 인쇄
1984년 8월 15일 발행
저 자 마쓰모토세이쪼
번안자 김 성 종
발행인 안 병 찬
발행처 도서출판 동아문예
〈등록 1980. 4.26. 제 12-12호〉
서울특별시 중구 흥인동 147
〈총판〉 대영서적 ☎ 254-7418

역자와의 협의아래 인지생략
미인計의 함정 값 3,200원
1984년 9월 10일 인쇄
1984년 9월 20일 발행
저 자 마쓰모토세이쪼
번안자 김 성 종
발행인 박 인 호
발행처 도서출판 한 맥
〈등록 1980. 4.26 제 12-12호〉
서울특별시 구로구 독산1동 1006-23
총판 : 대영서적 254-0035

図 10 金聖鍾翻案 『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の奥付(左)と
金輝文翻案 『미인計의 함정(美人計の陥穽)』の奥付(右)

図9と図10はそれぞれ金聖鍾と金輝文による翻案小説 『미인計의 함정（美人計の陥穽）』の表紙と奥付である。表紙の翻案者の名前以外は全く同じである。表紙の翻案者は金聖鍾と金輝文であったが、奥付の翻案者のいずれも金聖鍾となっている。なぜこのような状態になったのかを

推理するのは難しい。実名と仮名で同じ本を2冊刊行して試してみたことになるが、その意味と真意を推し量るのは容易でない。しかし、無秩序な混乱であることは間違いない。

このように、内容において「同じ著作が別の題名で置き換えられ、あたかも別の著作であるかのようにいくつかの出版社から競争的に出版されて読者を混乱させる」ことは当時においてよく見られる現象で、「ひどい場合には一つ出版社から同じ本に別の二つの題名を付けて出版するほど出版倫理は地に落ちていた」という[9]。一つの版型を利用して複数の出版社がそれぞれに別々の名前を付けて出版したり、同一出版社から同一の著作にそれぞれ別の題目を付して刊行したりすることも珍しいことではなかった。こうした翻訳出版文化の堕落については当時の新聞記事においても厳しく批判されていた。やや長いが引用する。

> この頃にわかに問題になっている翻訳作品の海賊出版についても今まで奇想天外の手法が動因されてきた。その一つがさすらいの翻訳者を幾人か集め、共同翻訳させる例である。この時、一冊を翻訳するのに普通2〜3人の翻訳者を動員し、遅くても10日以内に作業を終える。こうした翻訳者は殆どが40代以上の日本語翻訳者たちで、英語、フランス語、ドイツ語などの日本語訳を韓国語に重訳している。出版社がこうした人たちに翻訳を依頼するのは一冊をばらして分担翻訳させたほうが時間的に早く、またこうして出来上がった原稿は出版社が勝手にいじることができ、なにより原稿料が安いという利点がある(200字1名に2〜300ウォン)。従って、海外で話題になった著作の出版競争が行われる時にはこうした人たちを集める。4〜5人集めればよほどの分量でない本は3〜4日あれば翻訳原稿が完成する。
>
> こうした現象は毎年発表されるノーベル文学賞受賞作品の翻訳において顕著に現れる。スウェーデンの委員会からその年の受賞作家と受賞作品が発表されると日本などからその書籍を入手し、翻訳と印刷作業を同時に進行する。したがって、ノーベル文学賞の発表から10日余りで韓国語翻訳本が書店に並ぶ。こうした翻訳書は多数の訳者が部分別に翻訳をするので登場人物や外来語表記に相違が発生するケースも多い。
>
> 二つ目は、すでに別の出版社から刊行された翻訳書籍を利用するいわゆる手直し作業である。文章のテニヲハなどを少し変え、あたかも別の人物が翻訳したように装う。出版業界にはこの作業だけを専門とする職業人も多いことはよく知られている。酷いケースは、出版社がこうした人たちを正規職員として採用し、テニヲハ直しだけを専担させている。
>
> 三つ目は、すでに市場で売られている本の写真を撮り、編集だけを変えるケースもある。そのため、2種類の翻訳書が誤字まで同じ状態になる。おもに古典文学全集でよく行われてると言われている。
>
> こうした数々の方法で作られた訳書の公式翻訳者となると、それはほとんどが学界や文化界において名のある人物である。有名人の名前を借りて訳書の権威を高めようとしているのである。こうした時、名前を貸す著名人には5〜10万ウォンの謝礼金を支払う。もちろん多くの著名人はこうした訳書の内容に手を加えているが、場合には名義だけを貸して訳書の内容を全く知らないケースも多々ある。結局は社会的に尊敬を受けている学界、文

[9] 「地に落ちた出版倫理」『京郷新聞』1966年10月8日付

化界の著名人までがこうした出版不正に間接的に加わっていると言える[10]。

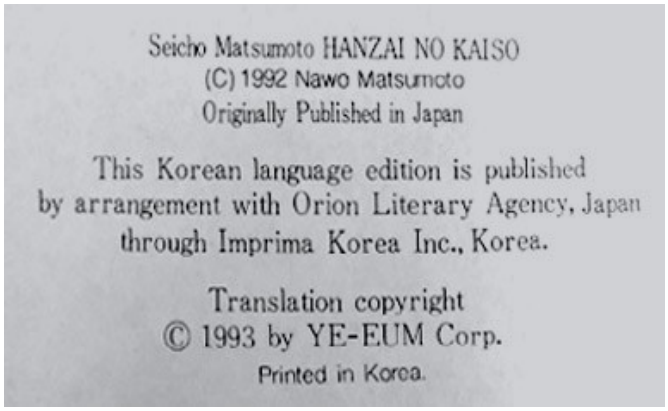
「低質、不良、剽窃を根絶する」という『京郷新聞』の記事は、1970年代において翻訳出版の現状がいかに酷かったのか具体的によく示している。多くの訳者による一作品の分担翻訳、他社が訳した書籍の一部を微細に直す専門職人の存在、他社刊行物の写真複写による編集、誤字まで一致する丸写し、著名人の名義貸しの横行などが挙げられる。外国作品を翻訳刊行する過程に見られるこうした現象は、著作権法未導入期の特徴をよく現わしている。すでに見てきたように、それらは松本清張文学の翻訳出版に最もよく現れていると言える。つまり、清張作品の翻訳においてこうした現象が一層酷く観察されるのは、清張が海外作家の中でもっとも売れる人気作家だったからである。

こうした海賊版の問題は1980年代まで続く。海賊版とは原著者から許可を受けずに外国の書籍を無断で翻訳刊行する行為を指す。しかし、韓国は1987年まで国際著作権協会に加入しておらず、少なくともこうした行為は国内法では違法ではない。あくまでも出版倫理の問題で法律違反ではないので、その状態を法律で規制することはできなかった。また原著者や原出版社から翻訳許可を得て刊行したとしても、海賊版が横行している現実があるので、出版倫理を守った出版社が損害を被る皮肉な結果となった。たとえば、1984年に刊行された新刊書籍1万8千冊のうち、23%に該当する4千余冊が翻訳図書であるが、翻訳図書の殆どは無断翻訳であった[11]。こうした翻訳図書を刊行する出版社は大半が小規模の零細出版社であり、現実的に著作権料を払いながら出版できる経営状態ではなかった。

著作権法未導入期である1960年から1986年までに翻訳刊行された松本清張文学の翻訳はこうした時代的な現状を最もよく現わしている。

[10] 「低質、不良、剽窃を根絶する」『京郷新聞』1979年3月21日付
[11] 「中小出版社、運営が難しい」『東亜日報』1984年2月27日付

第２節　著作権法導入期（1987年～1994年）


Seicho Matsumoto HANZAI NO KAISO
(C) 1992 Nawo Matsumoto
Originally Published in Japan

This Korean language edition is published
by arrangement with Orion Literary Agency, Japan
through Imprima Korea Inc., Korea.

Translation copyright
© 1993 by YE-EUM Corp.
Printed in Korea.

図 11 **『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』** Copyright

韓国政府は1987年、「万国著作権条約」に加入する。これによって1986年までの「著作權法」（大韓民国、第3916号）が全面改定（第1次改定）される。そうした動きとあいまってのように、日本の出版社と公式な独占販売契約を結んだ翻訳書が刊行される。その嚆矢が『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』（犯罪の回送、禮音、1993）である（図11）。翻訳書の奥付には英文で「この著作の韓国語版著作権は著作権者との契約によって株式会社禮音にある」ので、「無断転載と無断複写を禁ずる」と明らかにしている。

『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』が正式著作権契約を結んだのは当時改定された新しい「著作権法」によるものである。1986年に改定された「著作權法」は「万国著作権条約」発効果以降の外国人著作物、すなわち1987年10月1日以降から発行された外国人著作物の著作権は法的に保護しなければならないという内容である。『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』の原作である『犯罪の回送』は『小説新潮』（1962.1～1963.1）に連載された『対曲線』を全面的に改作した作品で、清張が死亡した後の1992年9月に角川書店から出版されたものである。

しかし、「著作權法」は「万国著作権条約」の相互主義原則に従い、同条約の発効以前（1987年9月30日以前）に発行された外国人著作物については保護対象としなかった（「著作權法」第3条）。そのため、1987年9月30日以前に刊行された著作は依然として著作権者との契約なしで発行されていた。

2.1. 翻訳作品の題目修正

著作権法導入期に該当する1987年から刊行された松本清張の作品数は計18編で、冊数は22冊である。この時期になると様々な変化が見られる。まずは出版社の交替である。著作権法未導入期に松本清張の作品をおもに刊行した出版社は新丘出版社（８冊）、豊林出版社（13冊）と河西出版社（5冊）、選集『大男』を刊行した三韓文化社（10冊）や良友堂（22冊）などである。これらの出版社が松本清張の作品を中心的に刊行し、それ以外の出版社は一、二冊を刊行する程度であった。しかし、1987年から著作権法導入期が始まると出版社が大幅に交替される。従前に松本清張作品を多く刊行した出版社が清張の作品を刊行しなくなる。その代わり、小規模の出版社が人気作品に限って一冊、二冊を刊行する傾向が現れる。

また著作権法導入期には松本清張の新作を翻訳刊行するよりは1987年以前に刊行された作品の題目だけを変更して再刊行する傾向が見られる。そのため、原作とは違う題目をつけたケースが多く発生する。以前の翻訳本の題目だけを変更して刊行し、著作権法を巧妙に避けようとしたのかもしれない。他方で、翻訳者の交替も顕著に現れる。

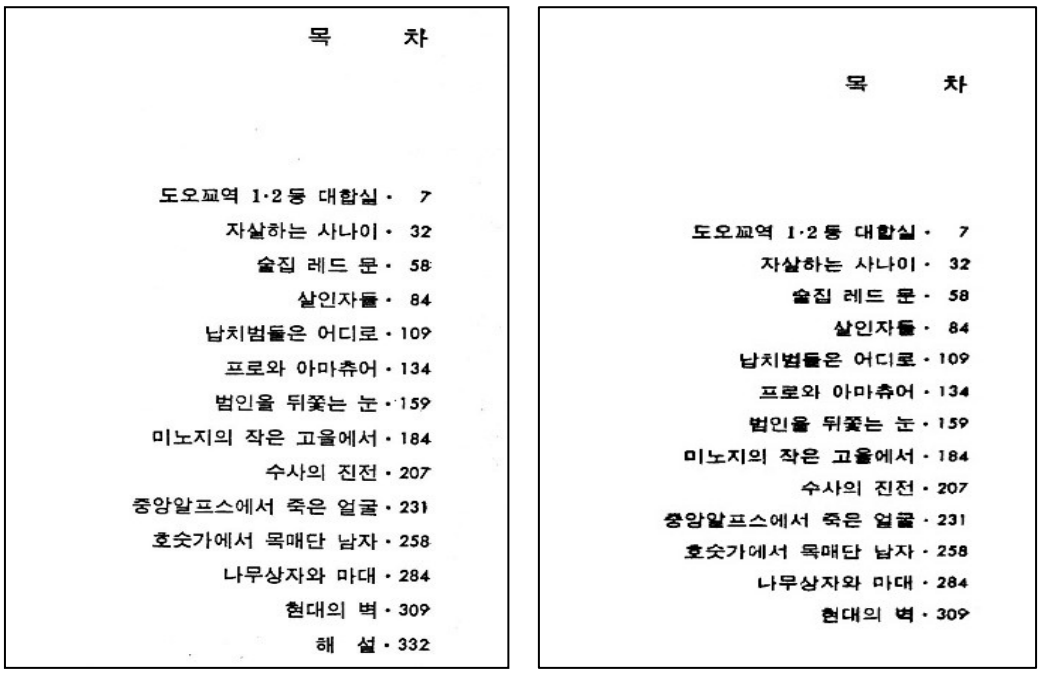
表 16 著作権法導入期に刊行された作品目録(出版社別)

(訳題目名に※で印したものは原作の題目と一致しないものである。)

原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
聞かなかった場所	※처녀地 살인計（処女地殺人計） *1984年の再版	金旭（翻案）	文教	1987
波の塔	波濤의 塔（上・下）	鄭性鎬	成正出版社	1987
眼の壁	※특종을 노리는 사회부 기자 （特種を狙う社会部記者）	南廷賢		1988
地の指	※유혹의 덫（誘惑の罠）	鄭性鎬		1993
熱い絹	※나비성（蝶の城）	鄭性鎬		1993
天保図録	※아무도 대권을 잡지 못했다上・中・下 （誰も大権が取れなかった）	金南煥	青脈	1987
小説東京帝国大学	소설 동경제국대학 （小説東京帝国大学）	任軒永	カチ（까치）	1987
北の詩人	※북의 시인 임화（北の詩人林和）	金炳傑	未來社	1987
点と線	※해변의 정사（海辺の情死）	鄭鍾國	恩光社	1987
声	※접지선（接地線）	キム・ウクジン （김욱진）		1991
顔	※각본인생（脚本人生）			
点と線	※음모의 손（陰謀の手）	조진수 （ゾ・ジンス）		1993
ゼロの焦点	※아내의 추적（妻の追跡）	金輝文（번안）	東亞文藝	1987
或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記伝 （或るコクラ伝）	徐炳珦・兪文東 共訳	文藝春秋	1987
声	※접지선（接地線）	キム・ウクジン （김욱진）	セジン出版社 (세진출판사)	1989
顔	※각본인생（脚本人生）			
点と線	※음모의 손（陰謀の手）	ゾ・ジンス（조진수）		1989
網	※사라진 선거참모上・下 （消えた選挙参謀）	柳柳呈	聖訓出版社	1992
地の骨	※블랙 유니버시티上・下 （ブラック・ユニバーシティ）	イ・ウンシク(이은식)	ソヨン（서연）	1992
北の詩人	※북으로 간 시인（北に行った 詩人）	ジョン・スヨン （정수연）	ビッナム（빛남）	1992
徳川家康	※松本清張의 徳川家康	イ・ウォンヨン （이원용）	芸々苑（예예원）	1992

犯罪の回送	※바다에 남긴 유언 (海に残した遺言) *著作権契約によって刊行	南尙賢	禮音	1993
地の指	※적색등 (赤色灯)	金旭	安岩文化社	1993
影の地帯	※필사의 게임 (必死のゲーム) *『陷穽』(1985)の再版	李英朝	豊林出版社	1994

著作権法導入期における清張翻訳に見られる主な特徴は原題とは違う意味の題目が多く付けられていることである。原作・原題を類推することさえ困難なほど変更が行われたケースも多い。例えば、南廷賢訳の『특종을 노리는 사회부 기자 (特種を狙う社会部記者)』(1988)は 『眼の壁』を翻訳したものである。南庭賢は以前に同作を『눈의 벽 (眼の壁)』(賢音社, 1985)として直訳したことがあるが、著作権法導入期に題目を修正して再刊行している。作品では主人公である萩崎竜雄と新聞記者の田村満が事件の真相を追跡する内容を強調する訳題とも思われるが、『眼の壁』という原題を連想するのはかなり難しい。両作は目次、ページ数、版型まで同じであるが、1985の『눈의 壁 (眼の壁)』にあった解説だけは1988年の『특종을 노리는 사회부 기자 (特種を狙う社会部記者)』において削除されている。



목 차

도오교역 1·2등 대합실 · 7
자살하는 사나이 · 32
술집 레드 문 · 58
살인자들 · 84
납치범들은 어디로 · 109
프로와 아마츄어 · 134
범인을 뒤쫓는 눈 · 159
미노지의 작은 고을에서 · 184
수사의 진전 · 207
중앙알프스에서 죽은 얼굴 · 231
호숫가에서 목매단 남자 · 258
나무상자와 마대 · 284
현대의 벽 · 309
해 설 · 332

목 차

도오교역 1·2등 대합실 · 7
자살하는 사나이 · 32
술집 레드 문 · 58
살인자들 · 84
납치범들은 어디로 · 109
프로와 아마츄어 · 134
범인을 뒤쫓는 눈 · 159
미노지의 작은 고을에서 · 184
수사의 진전 · 207
중앙알프스에서 죽은 얼굴 · 231
호숫가에서 목매단 남자 · 258
나무상자와 마대 · 284
현대의 벽 · 309

図 12 『눈의 壁 (眼の壁)』(1985) の目次(左)と『특종을 노리는 사회부 기자 (特種を狙う社会部記者)』(1988)の目次(右)

図12は、1985年に刊行された『눈의 壁 (眼の壁)』(左) と1988に刊行された『특종을 노리는 사회부 기자 (特種を狙う社会部記者)』 (右) の目次である。左に存在していた332頁の解説が右では削除されている。右の表紙には「推理長編小説、特種を狙う社会部記者」という情報しか存在せず、同作が以前の『눈의 벽 (眼の壁)』と同じであることを推測するのは難しい。

以前の『点과 線（点と線）』は著作権法導入期に2回刊行されている。1987年には『해변의 정사（海辺の情死）』(鄭鍾國訳、恩光社)という題目で、1989年には『음모의 손（陰謀の手）』(ゾ・ジンス訳、セジン出版社)という題目で刊行される。しかし、両作からそれが松本清張の代表作で、すでに何度も翻訳された『点と線』であることを気づくことは容易ではない。鄭訳の『해변의 정사（海辺の情死）』の表紙右上段には「推理小説の強国、日本推理文壇の巨人、松本清張の代表作、日本読書界を強打したベストセラー、東京駅列車時刻表には4分間の隙間があり、駅務員さえ気づかないこの4分を利用した殺人事件とアリバイ」という解説が付され、さらに下段には「推定年齢21歳、肌が白く、濃い黒色で大きい目、魅惑的な微笑の女性。職業は赤坂の高級料亭の女給、秘密に包まれた私生活、いまだ男とのデートの経験さえない」という煽情的な情報が提示されている。この表紙の情報で鋭敏な読者はそれが以前の『点と線』の訳であることに気づくことが可能だろうが、別の新作であると勘違いした読者も多かったであろう。

一方で、ゾ・ジンスの『음모의 손（陰謀の手）』は内容が推測できるいかなる情報も載せていない。翻訳本の表紙には「松本清張の推理小説、陰謀の手、この世に奇想天外な新種の犯罪手法の出現！！だれが彼らを地球上に送ったのか？これから奇抜な二人の捜査官を驚かす巧妙な犯罪が展開される！！」という刺激的な文句が並べられている。二人の捜査官を驚かす新種の犯罪事件からそれが以前の『点과 線』であることを見抜く読者は少ないであろう。ほとんど詐欺まがいの手法である。書籍を購入した読者はページを開いた瞬間、自身が訳者と出版社の「음모의 손（陰謀の手）」に引っかかったことにようやく気づくであろう。

さらに指摘しておきたいのは、ゾ・ジンスの『음모의 손（陰謀の手）』は松本清張『点と線』から直接翻訳したものではなく、1986年に李英朝が翻訳した『点과 線』を利用したもので、単語と文章の一部を修正して刊行したものである。李英朝訳の特徴は原作の目次を再構成している点にある。こうした特徴は李英朝が翻訳した別の作品にも現れており、翻訳者個人の性格と翻訳態度を示すものと言える。そうした李英朝訳の個性的な特徴がゾ・ジンス訳にも同じく見られる。原作、李英朝訳、ゾ・ジンス訳の目次を示しておく。

表 17 『点と線』の原作、李英朝訳本、ゾ・ジンス（조진수）訳本の目次

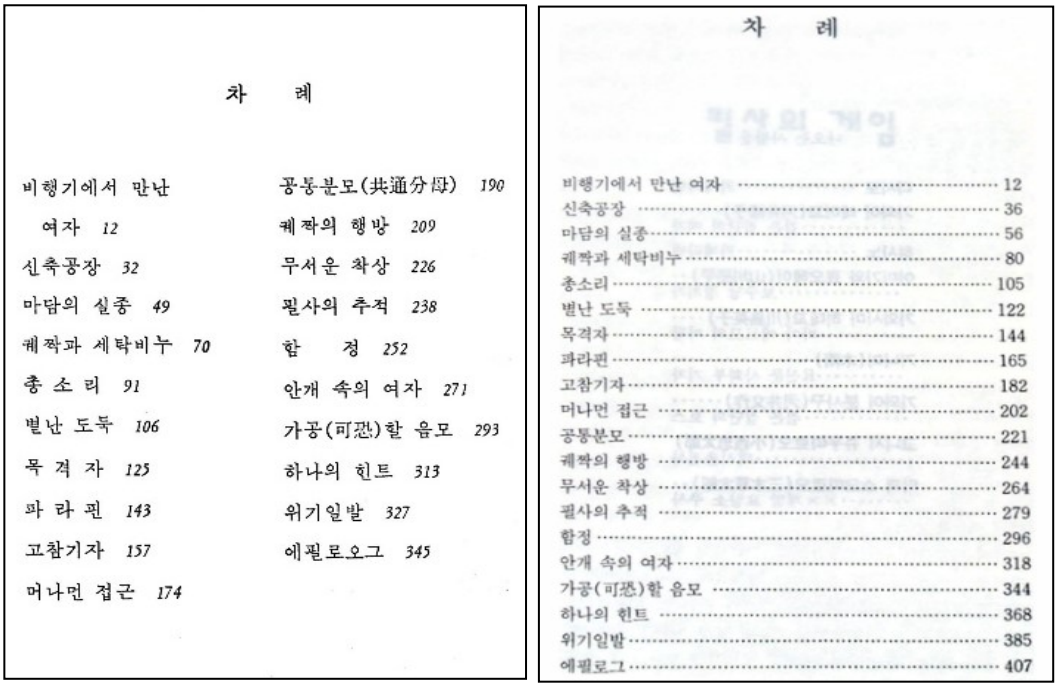
章	原作目次	李英朝訳目次	ゾ・ジンス訳目次
1	目撃者	목격자	밀월여행
2	情死体	정사체(情死體)	해변의 정사
3	香椎駅と西鉄香椎駅	전철역과 열차역	외로운 결행
4	東京から来た人	도오꾜오에서 온 사람	도쿄에서 온 사람
5	第一の疑問	첫째의 의문	떠나는 사람들
6	四分間の仮説	4분간의 假設	새로운 관심
7	偶然と作為の問題	우연과 작위의 문제	우연과 작위의 문제
8	北海道と九州	서쪽과 동쪽 끝	서쪽과 동쪽 끝
9	数字のある風景	숫자가 있는 풍경	숫자가 있는 풍경
10	北海道の目撃者	완전한 실패	완전한 패배
11	崩れぬ障壁	무너지지 않는 장벽	무너지지 않는 장벽
		야망의 덫	야망의 덫

12	鳥飼重太郎の手紙	두 쌍의 남녀	두 쌍의 남녀
		무너진 알리바이	무너진 알리바이
13	三原紀一の報告	무서운 여자	무서운 여자

李英朝訳は原文の11章「崩れぬ障壁」を「무너지지 않는 장벽（壊れぬ障壁）」と「야망의덫(野望の罠)」という二つの章に分けている。また12章の「鳥飼重太郎の手紙」も「두 쌍의 남녀(二組の男女)」と「(무너진 알리바이) 崩れたアリバイ」という二章に分けている。そして13章の「三原紀一の報告」は「怖ろしい女」に変更している。李英朝は目次の章を独自に分け、各章の分量を20頁前後に統一している。一方で、3章「香椎駅と西鉄香椎駅」、8章「北海道と九州」、10章「北海道の目撃者」はそれぞれ「電車駅と列車駅」、「西と東の果て」、「完全な失敗」などに変更している。これは日本の地名に馴れていない韓国の読者を考慮した結果と思われる。こうした地名の変更と回避は本文の翻訳でも同じく見られる。例えば、2章「情死体」では博多湾一帯についての描写を削除するなど、推理的叙事に大きな影響を与えない範囲で日本の地名に関連する叙述を省略している。李英朝訳においてこうして省略された箇所は조진수(ゾ・ジンス)訳においても同じく省略されている。こうした一致性からゾ・ジンス訳は清張の原作からではなく、李英朝訳の一部単語や文章を適当に修正したもので、それを翻訳者と題目を変えて出版したものと思われる。著作権法を意識して巧妙に改良したのである。こうしたことからゾ・ジンスは先に指摘したいわゆる手直し専門翻訳者なのかもしれない。

一方で、李英朝が翻訳した『필사의 게임（必死のゲーム）』(豊林出版社、1994)の原作は『影の地帯』である。李英朝は『흑점(黒點)』と『죽음의 시그널（死のシグナル）』や『공포의 뿌리（恐怖の根）』のような長編推理小説を創作し、コナン・ドイルの『汚れた紐』と『恐怖の谷』のような推理小説を翻訳する傍ら、『기초일본어회화（基礎日本語会話）』などの語学教材も執筆している。李は以前の1985年に『影の地帯』」を『함정（陥穽）』として豊林出版社から刊行していたが、1994年にこれを『필사의 게임（必死のゲーム）』に題目を変更して刊行している。内容は同じであるが版が組み直されている。そのため、頁数が大きく変わっている。以下に紹介する。

図13で分かるように、『함정（陥穽）』と『필사의 게임（必死のゲーム）』の目次は同じである。「共通分母」のような漢字表記の一部が省略され、「에필로오그(エピローグ)」が「에필로그（エピローグ)」に表記変更されているが、これは韓国語の表記法の変更によるものと思われる。一方で両作は出版社と翻訳者が同一であることから『함정（陥穽）』を再刊行する際に、文字体を新字体に変え、新表記法に従い、旧来の版を新版に組み直した性質が強いと言える。その過程で商業的なことも考えて題目を『필사의 게임』に変更したであろう。『함정（陥穽）』は、「巨大な組織によって行われる奇想天外の完全犯罪、彼らを追跡する若いカメラマン」という文句で作品内容を紹介しているが、『필사의 게임（必死のゲーム）』は「松本清張の長編推理小説」という紹介に止まり、原作の内容が推測できるような文面は提示されていない。以前の翻訳本との関連性を避ける意図があったのかもしれない。



차 례

비행기에서 만난 여자 12
신축공장 32
마담의 실종 49
궤짝과 세탁비누 70
총소리 91
벌난 도둑 106
목격자 125
파라핀 143
고참기자 157
머나먼 접근 174
공통분모(共通分母) 190
궤짝의 행방 209
무서운 착상 226
필사의 추적 238
함정 252
안개 속의 여자 271
가공(可恐)할 음모 293
하나의 힌트 313
위기일발 327
에필로오그 345

차 례

비행기에서 만난 여자 ····· 12
신축공장 ····· 36
마담의 실종 ····· 56
궤짝과 세탁비누 ····· 80
총소리 ····· 105
벌난 도둑 ····· 122
목격자 ····· 144
파라핀 ····· 165
고참기자 ····· 182
머나먼 접근 ····· 202
공통분모 ····· 221
궤짝의 행방 ····· 244
무서운 착상 ····· 264
필사의 추적 ····· 279
함정 ····· 296
안개 속의 여자 ····· 318
가공(可恐)할 음모 ····· 344
하나의 힌트 ····· 368
위기일발 ····· 385
에필로그 ····· 407

図 13 **『함정(陷穽)』**(1985)の目次(左)と**『필사의 게임**（必死のゲーム）**』**(1994)の目次(右)

長編推理小説『地の骨』は、1992年に『블랙 유니버시티（ブラック・ユニバーシティ）上・下』(イ・ウンシク訳、ソヨン社、1992)という題目で刊行される。『블랙 유니버시티（ブラック・ユニバーシティ）』を翻訳したイ・ウンシク(이은식)は高等学校の教師や出版社編集部長の経歴があり、一方では日本文学を研究するかたわら『금각사（金閣寺）』を初め、『설국（雪国）』、『나는 고양이다(吾輩は猫である)』等の作品を翻訳した。『地の骨』はすでに洪性裕が『벌레먹은 象牙塔（蝕んだ象牙塔）』(新丘文化社、1970)、『暗黒大學』(新丘文化社、1971)、『虛構大學』(青潮社、1981)という題目で翻訳したものである。イ・ウンシク(이은식)訳『블랙 유니버시티（ブラック・ユニバーシティ）上・下』も「大学入試問題紙の紛失、不正入学、学生らによる授業拒否、教授らによる確執と争いなど大学の闇を明るみにした社会派小説」という内容を表紙に提示し、原作の内容を重視して『블랙 유니버시티（ブラック・ユニバーシティ）』と変更した。大学内の不正を扱った小説であることを示しながら、以前に刊行された題目との差別化を図ったように思われる。清張が付した原題の意味があまりにも突飛であるということも関係していると思われる。日本語題目も意味不明であるが、それが韓国語直訳になるとその度合いはさらに酷くなる。題目の変更は止むをなかったのかもしれない。

イ・ウンシク訳は当時の読者を配慮して目次においても小説の内容が分かるように工夫した。1981年に刊行された洪性裕訳は日本語直訳であるが、イ・ウンシク訳は読者が目次だけでも小説の展開が推測でき、面白く読めるように配慮している。例えば、洪性裕訳の目次は「失踪」「ライバル」「因縁」のように、内容のキーワードだけが提示されているが、イ・ウンシクは「大学入試問題を紛失する」「反主流派教授らとの反目」「学長の公金流用」などというように、その章の内容を簡潔に纏めて紹介している。

『地の指』は1993年に2冊も刊行されている。鄭性鎬訳の『유혹의 덫（誘惑の罠）』(成正出版社、1993)と金旭訳『적색등（赤色灯）』(安岩文化社1993)がそれである。いずれも原題が大幅に変更されている。鄭性鎬はカトリック大学神学校を卒業した後、高等学校で英語と日本語を

教え、1980年からは専門翻訳者として活動している。松本清張の『나비城（蝶の城）』（熱い絹）をはじめ、森村誠一の『공포의 쇠사슬（恐怖の鎖）』と『죽음의 연립방정식（死の連立方程式』、遠藤周作の『악령의 오후（悪例の午後）』『숙적（宿敵）』等の作品を翻訳した。鄭性鎬は1986年にすでに『地の指』の韓国語訳『땅의 손가락（地の指）』(成正出版社、1986)を刊行している。『유혹의 덫（誘惑の罠）』は以前の『땅의 손가락（地の指）』の内容を少し修正し、題目を変更して刊行したものである。目次にも若干の変更が行われている。二つの目次を紹介する。

表 18 **『땅의 손가락**（地の指)**』과 『유혹의 덫**（誘惑の罠)**』** の目次
（色で塗られたものは題目がやや違うものである）

땅의 손가락(血の指、1986)	유혹의 덫(誘惑の罠、1993)
심야의 시체	죽음의 메시지
추적	어떤 추적
요정 쓰쿠시	요정 쓰쿠시
살의의 충동	살의의 충동
삼각관계	삼각관계
혐의	혐의
실종	실종된 여자
새로운 사실	새로운 사실
세 건의 살인사건	세 건의 살인사건
증언	뜻밖의 증언
빨간 등불	빨간 등불
옮긴이의 말	옮긴이의 말

1986年に翻訳した『땅의 손가락（地の指）』は原題の『地の指』の直訳であるが、1993年の『유혹의 덫（誘惑の罠）』は原題を大幅に変えている。『유혹의 덫（誘惑の罠）』は1986年に刊行された『땅의 손가락（地の指）』に依拠しながら微細な変更を加えている。目次の「深夜の死体」は「死のメッセージ」に、「追跡」は「ある追跡」に、「失踪」は「失踪した女」に変更されている。いずれも鄭性鎬による翻訳で、出版社も同じく成正出版社である。再刊に際して題目と微細な変更を加えたものと思われる。

短編小説である「声」や「顔」は金旭鎭によってそれぞれ「접지선（接地線）」（セジン出版社、1989）と「각본인생（人生脚本）」(セジン出版社、1989)に改題されている。アガサ・クリスティ(Agatha Christie)の小説『쥐덫（ネズミ捕り)』と一緒に組まれているが、金旭鎭訳の特徴は原題の目次には存在しない目次を恣意的に設けているところにある。「접지선（接地線）」は「두 개의 유해（二つの遺体）」と「検死所見」という細部目次が付され、「각본 인생（人生脚本）」は「加害者の視点」と「目撃者の視点」という細部目次を付して読者の理解を助けている。しかし、こうした原題の大きな変更と目次の追加は読者の理解を助ける側面がある一方で、原作の存在を曖昧にし、なによりも以前に出版された翻訳本との差別化を難しくしている。あるいは既存翻訳本との重複と二重販売を意図したとも解釈できる。

著作権法導入期におけるこうした題目変更は翻案作品を再刊行する場合においても見られる。金輝文翻案の『아내의 추적（妻の追跡）』(東亞文藝、1987)は『ゼロの焦点』を翻案したものであるが、これは既に1984年刊行の金旭翻案の『안개속 최후 證人（霧の中の最後の証人）』(文教、1984)の表紙だけを変えて再刊行したものである。両書は表紙を除いて全く同じである。図14と図15の目次を比べると同じ版本であることが分かる。しかし、表紙だけを見る限り、両作は全く別の作品のように見える。

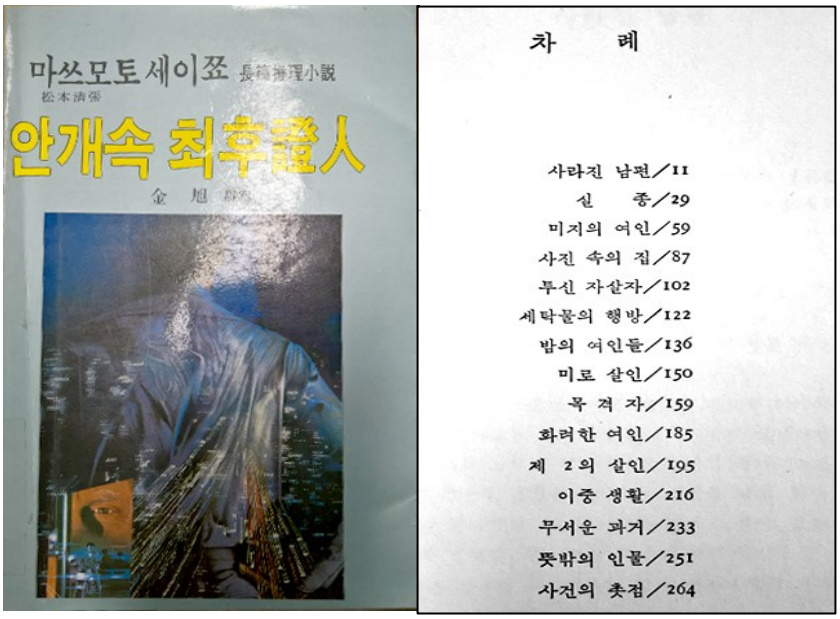


図 15 『안개속 최후 証人(霧の中の最後の証人)』(1984) の表紙と目次

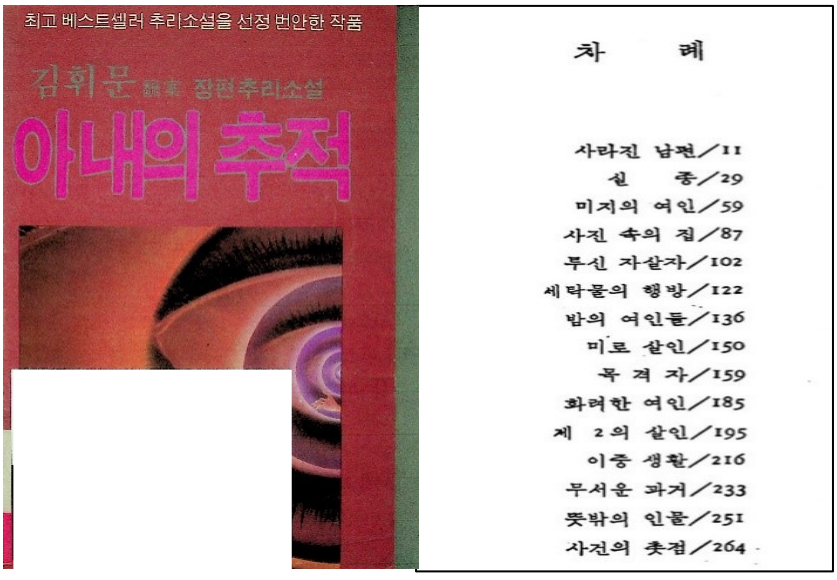


図 14 『아내의 추적（妻の追跡)』(1987)の表紙と目次

『안개속 최후 證人（霧の中の最後の証人）』の表紙（図14）には「松本清張長編推理小説」と銘打っているが、『아내의 추적（妻の追跡）』の表紙（図15）には「金輝文翻案長編推理小

説」となっており、翻案対象の原作名と原作者名（松本清張）が表紙から消えている。ようやく奥付で原作者（松本清張）の名前を残している。著作権法の回避と二重販売を意図したようにも思われる。

すでに指摘したが、著作権法導入期には原作の題名を変更した作品が多い。著作権法導入期に刊行された松本清張の作品は計22冊であるが、そのうち18冊の題目が変更されている。以前に刊行された版本が翻訳者と出版社名を変えて再利用されたケースも多く見られ、場合によっては内容のごく一部分を変えて刊行されるケースも見られる。著作権法導入期に新しく翻訳刊行されたものは任軒永訳『소설 동경제국대학（小説東京帝国大学）』(カチ、1987)と金炳傑訳『北의 詩人 林和（北の詩人林和）』(未来書、1987)、柳柳呈訳『사라진 선거 참모(消えた選挙参謀)上・下』(聖訓出版社、1992)、南尙賢訳『바다에 남긴 유언（海に残した遺言）』(禮音、1993)程度であろう。それ以外はおおむね既に翻訳刊行されたものを別の題名や訳者名で刊行したものである。こうした現象は著作権法を回避する出版社の思惑と深く関係しているように思われる。重複出版と題名変更は新しい著作権法のなかで生き残りを図る出版業界の歪な努力が生み出した現象と言える。

著作権法導入期において、訳題名が原題と同じか類似するものは5冊ほどある。『北の詩人』は『北의 詩人 林和（北の詩人林和）』(金炳傑訳、未來社、1987)と『北으로 간 詩人（北に行った詩人』(ゾン・スヨン訳、ビッナム)、1992)と訳されている。訳題名で原題の『北の詩人』を推測するのは容易い。類例であるが、『松本清張의 徳川家康』(イ・ウォンヨン訳、芸芸苑、1992)は松本清張作の『徳川家康』を翻訳したものである。韓国で一大ベストセラーになった山岡荘八『徳川家康』の翻訳本『大望』ではなく、松本清張の作品であることを明確に示すために題目に「松本清張」を加えたが、原題のまま言ってよいであろう。 ほかに、『波の塔』を翻訳した『波濤의 塔』（鄭性鎬訳、成正出版社、1987)、『小説東京帝国大学』を翻訳した『소설 동경제국대학（小説東京帝国大学）』(任軒永訳、カチ、1987)、「或る「小倉日記」伝」を翻訳した「어느 고쿠라日記伝（或るコクラ日記伝）」(徐炳珥・兪文東協共訳、文藝春秋、1987)がある。著作権法導入期に刊行されたこれ以外の作品は殆どが以前の翻訳本を再利用したものである。

以上のような現象は著作権法導入期における翻訳出版物の特徴をよく示している。1960年から1986年までは著作権法が不備で、国際条約にも加入していなかったため、外国著作物の刊行は自由であった。しかし、国際条約に加入し、著作権法が整備されるにしたがって、出版社は著作権法を意識せざるを得なくなる。一定の制限がかかり、苦肉の策が生まれる。1987年から1994年までの7年にわたる著作権法導入期に刊行された清張翻訳本に題名変更と表紙変更が多く見られるのはこうした所以である。全体として新しい翻訳本が減っているのもこれに原因する。ちょうどこの時期は松本清張の最晩年期に当たり、清張自身の創作も減っており、1992年には松本清張が死去している。これも翻訳減少の一因になったのかもしれない。

2.2. 時代状況を反映した翻訳

1987年から1994年までは韓国が政治的に激動していく時期である。この激動期に合わせて松本清張作品も政治的な色彩の強いものが集中的に翻訳紹介される。その一つが『北の詩人』である。『北の詩人』は発表当時から韓国社会で注目を受けたが、それが越北作家（北朝鮮に行った作家）に対する解禁措置（禁書から解かれること）と相俟って1987年にようやく翻訳紹介されている。

『北の詩人』は金炳傑訳『北의 詩人 林和（北の詩人林和）』(未來社、1987)という題で初めて翻訳される。その後、ジョン・スヨンによって『北으로 간 詩人（北に行った詩人）』(ビッナム、1992)という題でも翻訳される。

『北の詩人』は松本清張による発表当初から韓国で話題になった。1962年の新聞記事は「大きな波紋を起こした長編『北の詩人』」という題で[12]、「日本の推理作家松本清張氏の作品」が朝鮮共産党による「精版社偽造紙幣事件などを実名小説に書いて左翼を擁護」すると指摘し、松本清張が客観的な歴史的事実を歪めて事件を扱っていると批判している。新聞記者は、松本清張が「精版社偽造紙幣事件」（1946）をアメリカ軍政が韓国警察と共謀して共産党を弾圧するためにでっち上げたものと断定したこと、「10・1大邱暴動事件」なども共産党の正当な運動であったかのように描いている点などを批判した。1962年頃の韓国においては越北文人である林和を扱う小説自体がタブーで、林和の左翼活動を正当化する小説の内容は大きなタブーであった。

越北作家に対する解禁が始まる1987年、そうした時代的雰囲気のなかで『北の詩人』は『北의 詩人 林和（北の詩人林和）』として初めて翻訳紹介される。この翻訳刊行に対し新聞報道は、「我が国の推理小説ファンにはアガサ・クリスティーに匹敵する人気作家松本清張」の作品であるが、内容は北朝鮮の裁判記録を根拠にし、解放（終戦）直後から林和が越北する1947年11月までの林の足跡を推理手法によって再構成したものであると紹介された。この小説に対する文壇の評価はおおよそ否定的であったが、その主な理由は同作が北朝鮮の裁判記録に過度に依拠していることであった。詩人申庚林は「林和のスパイ罪というのはいかなる確固たる根拠にかも関わらず捏造された可能性が高い」と指摘し、歴史的状況の中に実在人物を登場させているが、歴史小説として見做すまでには林和と当時の状況を総体的に表すことができなかったと批判している。[13]

1987年の時点において林和は南と北で忘れられた存在であった。したがって、1980年代まで林和に関する研究はソウル大学の金允植教授による『林和研究』（1989年）がほぼ唯一のものであった。こうした状況で、松本清張『北の詩人』の翻訳刊行は林和に対する文学史的な再評価を促した。『北의 詩人 林和（北の詩人林和）』は文学作品というより林和への関心から翻訳紹介され、それが実在の人物像をどれほど反映しているかに注目された。

他方、1987年と1992年は韓国で大統領選挙が行われた年であった。こうした政治的激動期には政治状況を扱った作品が好まれて翻訳紹介されている。『아무도 大権을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）上・中・下』と『사라진 선거참모（消えた選挙参謀)上・下』などのような政治と選挙を扱った作品である。韓国大統領選挙と関連させて興味の誘発を意図したと思われる。『아무도 大権을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』(青脈、1987)の訳者である金南煥は梨花女子大学国文学科を卒業し、『月刊文学』新人賞を受賞して文壇にデビューした作家である。『아무도 大権을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』の原作は題目では想像できないであろうが、時代小説『天保図録』である。天保時代の幕府をめぐる権力闘争を描いた作品である。しかし、原典である『天保図録』の内容を考えると、翻訳本の表紙（図16）は奇妙である。日本の天保時代を類推するような表紙ではなく、背広姿の三人の写真風の図が配置されている。その前後の赤い紹介文に「いま韓国では三人が大権を目指して走っている」「この本を読まずに

[12] 「大きな波紋を起こた『北の詩人』」『京郷新聞』1962年12月29日付

[13] 「『北の詩人林和』国内に翻訳刊行」『毎日経済』1987年9月23日付

はいられない」という文面が強調されている。表紙を見る限りでは誰もが同時進行的にヒートアップしている韓国大統領選挙に思い出したであろう。またそれと関連する作品と勘違いしたに違いない。しかし、言うまでもなく『天保図録』と韓国大統領選挙は直接的になんら関係がない。

『天保図録』は日本で1964年に発表された作品であるが、翻訳されないまま放置されてきた作品である。しかし、韓国大統領選挙に際してこの作品の価値が再発見されたのである。1964年発

図 16 『아무도 대권을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』 表紙

表の原作を1987年に翻訳刊行しているが、「緊急独占入手」という文句まで付し、過去の作品ではなくいかにも最新作であるかのように装っている。また作品内容を韓国大統領選挙に無理に絡めている。

政治への興味が沸騰状態にいた1987年の政治状況から『天保図録』が持つ政治性が再解釈されたのである。そして作品の表紙には「読まずにはいられない」八つの理由が箇条書きに並べられている。①は後継者問題を扱い、②は権力者への「投書」が事件の発端であること、③は推理小説であるが推理小説の領域を超えた高級小説であること。④はとても面白いことが挙げられ、「この本を一気に読めない人は文盲者だけ」であるとまで誇張している。⑤は我が国の現実を映したような錯覚に陥ること、⑥は政治が腐敗した時に治者の刃がどこに向かうのかを明らかにしていること、⑦は世論と民意を背負うのがいかに難しいかを描いていること、そして最後の⑧は大きい虫のために小さい虫は殺されてもよいのかが問題提起されていることを挙げている。いずれも韓国の政治状況を反映するような解釈になっている。牽強付会の感も否めないが、清張の時代小説が韓国の政治状況のなかで再解釈され、新たな需要を模索していたのである。

図 17 1987年13代大統領選挙の候補者たち
（左から金大中、盧泰愚、金泳三）

『아무도 大権을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』は1987年7月刊行されたが、1987年12月は13代大統領選挙が行われる予定であり、1987年の「6月抗争」の結果、ようやく国民による大統領直接選挙が行わることになったのである。1971年、第7代大統領を国民投票で選出して以来、16年ぶりに国民自らが直接選挙で大統領を選ぶことになった。そのため、当時の大統領選挙への関心はほぼ沸騰状態に近いものがあった。ちょうど大統領候補者である盧泰愚、金泳三、金大中の三人が世論と支持率において僅差で競り合っており、政治への関心は飽和状態に達していた（図17）。当時、独裁政権の後継者格であった盧泰愚候補に対抗した民衆陣営側は金泳三候補と金大中候補に分裂し、二人の単一化が連日の話題となり、三人のうち、誰が大統領になるかは国民の焦眉の関心事であった。『天保図録』が原題と大きくかけ離れた『아무도 大権을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』という題目で翻訳刊行されたのは韓国の政治的熱気を反映するものである。『天保図録』は推理時代小説に属するが、その内容が韓国大統領選挙と類似していると解釈され、新たな需要を見出そうとしたのである。このことは翻訳がたんに作家の正当な紹介を目的にしていないことを示す。受容側の必要性に応じて内容は再解釈され、意味付けられ、評価されるということである。受容側の必要性というのは言うまでもなく「商業性」である。

柳柳呈訳『사라진 선거참모（消えた選挙参謀）上・下』（成正出版社、1992)は『網』を翻訳したものである。訳者の柳柳呈は大学で日本文学を専攻し、大学講師を勤めているかたわら、『川端康成全集』(6巻)の共訳も手掛けている。『사라진 선거참모（消えた選挙参謀）』の表紙は、「<選挙>というお金と権力による凄惨な戦いを背景に展開する謎めいた殺人と驚愕する陰謀、これを追跡する主人公である小説家の冒険」という文句に、ボストンバッグをひっ提げたバーバリーコート姿の男の後ろ姿を配置している。『사라진 선거참모（消えた選挙参謀）』訳の注目すべき特徴は訳本が単行本『網』からの翻訳ではなく、『日本経済新聞』に連載されたものを翻訳したことである。『網』は1975年3月9日から1976年3月17日まで『日本経済新聞』に連載された後、1984年に光文社から単行本として刊行された。単行本から翻訳したのではなく、無理をして新聞連載本から翻訳した理由は不明であるが、もしかしたら訳者は『日本経済新聞』を講読し、作品をスクラップしていたのかもしれない。あるいは以前に翻訳したが、出版の機会を逃し、それを待っていたのかもしれない。とならば最もよいタイミングになる。

イ・ウォンヨン訳『松本清張의 徳川家康』(芸芸苑、1992)も日本の戦国時代を代表する三人の人物に焦点を当てた原作が韓国の政治状況にも類似しているから再解釈されたのであろう。この訳本の特異な点は松本清張の小説に後藤長男の漫画の一部を収録し、文画版として編集していることである。後藤長男は『徳川家康』という学習漫画を刊行している。イ・ウォンヨン訳『松本清張의 徳川家康』は日本の歴史を分かりやすく説明し、読者が「日本を一瞬で渉猟」できる

ことを意図している。翻訳本の表紙（図18）には、「信長が餅をつき、秀吉が形を作り、家康が食べる」という文句を載せ、織田信長から豊臣秀吉を経て徳川家康に至る戦国政治史を分かりやすく説明している。徳川家康だけではなく、三人を登場させ、三人が競争していた当時の韓国政治状況と暗に関連させている。

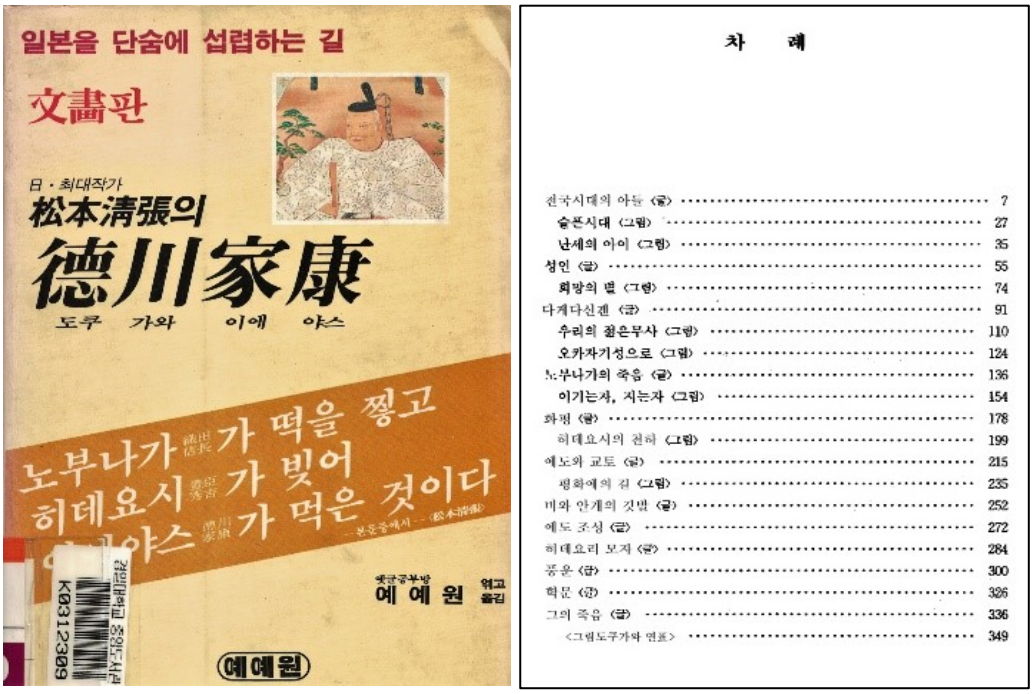


図 18 『松本淸張의 徳川家康』の表紙と目次

『松本淸張의 徳川家康』は原作をそのまま翻訳するのではなく、読者が日本の戦国時代をよく理解できるように工夫して編まれている。訳者の「はしがき」にはこうした意図がよく現れている。

まずは日本の歴史的な根っこを理解したい。我が国にも日本の戦国時代のように強者だけが生き残る激しい対立抗争時代があった。中国においても三国誌に見られるような激しい展開の歴史があった。

しかし、歴史的にもそれほど遠くない時代に、しかも狭い島国日本で、生死をかけた熾烈な抗争が展開された戦国時代は私たちにもっとも差し迫るものがある。

パノラマのように展開される戦国時代の変遷は日本歴史の圧巻といえよう。戦国時代の主人公織田信長に端を発し、豊臣秀吉を経て、徳川家康によって時代が終結され、近代日本の繁栄をもたらす。

こうしたことから我が芸芸苑はあえてこの複雑難解な日本の戦国時代に焦点を当て、文章と絵を組み合わせ、一冊に編んだ。日本の「島国文化の知恵」を一気に理解するためには時間的な効率のよいこの「文画版」一冊の徳川家康を読むほど効果的なものはない[14]。

[14] イ・ウォンヨン訳『松本淸張의 徳川家康』（芸芸苑1992）の「はしがき」

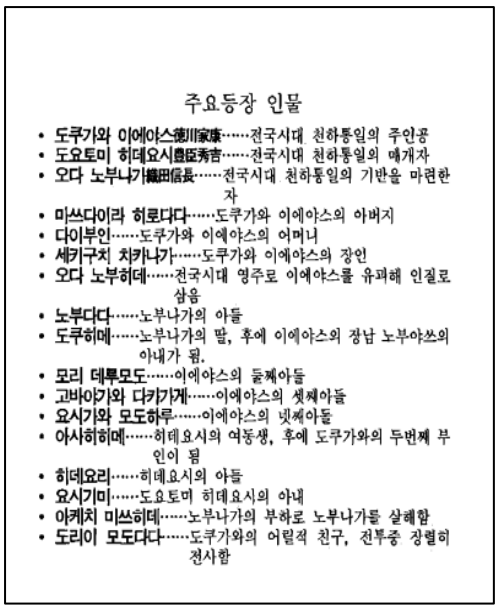


図 19 『松本清張の의徳川家康』
登場人物紹介

要するに訳書は、主人公の徳川家康だけでなく、織田信長、豊臣秀吉の智謀と抗争の展開が圧縮されているので、この一冊さえ読めば時間に追われる現代人が短期間で日本を渉猟できると銘打っている。読者に作品内容をより分かりやすく伝えるため、主要登場人物に関する簡単な紹介図も付している（図19）。徳川家康は「戦国時代に天下統一を成し遂げた主人公」であり、豊臣秀吉は「天下統一の媒介者」であり、織田信長は「天下統一の基盤を作った者」であると説明されている。それ以外の主要人物と家族についても説明されている。読みやすさを重視している。これに加え、「日本の指折りの伝記漫画作家である後藤長男の漫画を本文の間にサンドウィッチのように挟んで」歴史的な事件に対する理解を高めようとした。

つまり、小説が始まる前に登場人物を紹介し、事件が展開された後には漫画を通して小説の内容をもう一度整理している。具体的にいうと、「戦国時代の息子（文）」という小説が先に展開され、それに続いて「悲しい時代（画）」「乱世の子供（画）」という漫画が挿入されて文章の内容をもう一度整理している。もう少し例を挙げると、「成人（文）」には「希望の星（画）」を、「武田信玄(文)」には「我が若き武士（画）」を並べ、文章と漫画を交互に配置している(図 20)。小説を読む面白みと漫画を読む面白みを同時提供し、読者が日本の歴史を分かりやすく理解できるように意図したのである。形態としてはきわめて珍しい形であると言える。他方では著作権法が整備されていないので生まれた現象でもある。

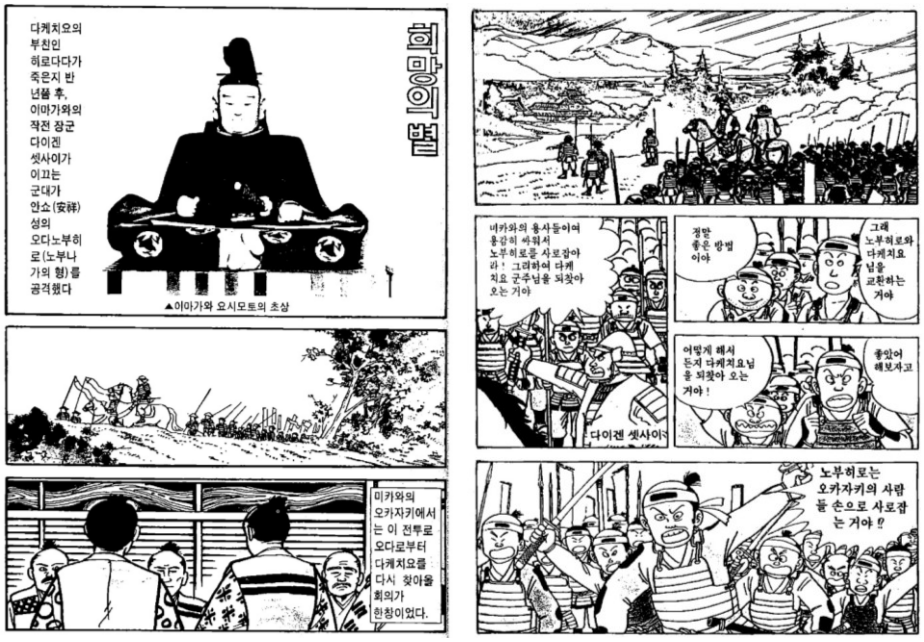


図 20 『松本清張의 徳川家康』に挿入された後藤長男の漫画

第3節　著作権法定着期（1995年～現在）

正式な著作権契約によって翻訳刊行されるシステムが1995年以降にようやく構築される。著作権契約が必要なため、大型の出版社が翻訳出版に加わり、以前には紹介されなかった松本清張の作品が体系的に紹介され始める。泰東出版社とブック・スピア、モビーディックのような大型出版社が松本清張文学の翻訳出版を中心的に担い、金京南，イ・キュウォンのような専門翻訳者が登場する。この時期に活躍する翻訳家は日本留学を経験し、日本文学を専門にする人たちが多い。韓国語と日本語に精通しているため、正確に翻訳しながらも読者に読みやすい韓国語を使用している。

3.1. 初訳作品の紹介

表 19 著作権法定着期に翻訳された作品目録(出版社別)
（原題名に※で印されたものは初訳の作品である）

原題名	韓国語題名	訳者	出版社	年度
※黒の回廊	일본여자 관광특급（上・下）	キム・ジョンソク (김종석)	三韓出版社	1995
点と線	点과 線	キム・ジョンス (김종수)	韓国アラム (韓国아람)	1995
或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記伝	徐炳**珦**	文藝春秋	1999
顔	얼굴	鄭泰原	泰東出版社	1999
[黒い画集(1)]	검은 화집(1)（短編集名）	鄭泰原		2009
遭難	조난			
坂道の家	언덕길의 집			
[黒い画集(2)]	검은 화집(2)（短編集名）			
紐	끈			
天城越え	아마기고개			
証言	증언			
寒流	한류			
[黒い画集(3)]	검은 화집(3)（短編集名）			
凶器	흉기			
濁った陽	흐린 태양			
草	풀			
点と線	点과 線 : 두 개의 점에 선을 긋다	鄭泰原		2009

点と線	점과 線	姜英吉	東西文化社	2003
ゼロの焦点	제로의 焦点			
砂の器	모래그릇	許文純		2004
眼の壁	너를 노린다	文澔		2004
[松本清張傑作短篇コレクション（上)]	松本清張 걸작 단편 컬렉션(上)(短編集名)	イ・ギュウォン (이규원)	ブック・スピア (북스피어)	2009
或る「小倉日記」伝	어느 <고쿠라 일기> 전			
※恐喝者	공갈자			
一年半待て	一年半만 기다려			
地方紙を買う女	지방지를 구독하는 여자			
※理外の理	이외지리			
※削除の復元	삭제의 복원			
捜査圏外の条件	수사권 외의 조건			
※真贋の森	진위의 숲			
※二・二六事件（『昭和史発掘』）	쇼와사 발굴—2.26 사건			
※追放とレッド・パージ（『日本の黒い霧』	추방과 레드퍼지 —『일본의 검은 안개』에서			
[松本清張傑作短篇コレクション（中)]	松本清張 걸작 단편 컬렉션(中)(단편집명)			
※遠くからの声	멀리서 부르는 소리			
巻頭句の女	권두시를 쓰는 여자			
※書道教授	서예 강습			
※式場の微笑	결혼식장의 미소			
共犯者	공범			
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 판자			
空白の意匠	공백의 디자인			
※山	산			
[松本清張傑作短篇コレクション（下)]	松本清張 걸작 단편 컬렉션(下)(短編集名)			
支払い過ぎた縁談	과다 지불한 중매 사례비			
※生けるパスカル	살아있는 파스칼			
※骨壷の風景	뼈단지 풍경			

※帝銀事件の謎 (『日本の黒い霧』)	데이코쿠은행 사건의 수수께끼 —『일본의 검은 안개』에서	イ・ギュウォン (이규원)	ブック・スピア (북스피어)	2009
鴉	까마귀			
※西郷札	사이고사쓰			
※菊枕	국화베개—누이조 약력			
※火の記憶	불의 기억			
※けものみち	짐승의 길 (上・下)	キム・ソヨン (김소연)		2012
※青い描点	푸른 묘점	金旭		2013
十万分の一の偶然	10만분의 1의 우연	イ・ギュウォン (이규원)		2013
※球形の荒野	구형의 황야(上・下)	キム・ソヨン (김소연)		2014
※黒い手帖	검은 수첩	南宮佳潤 (남궁가윤)		2014
※無宿人別帳	범죄자의 탄생	イ・ギョウォン (이규원)		2015
※わるいやつら	나쁜 놈들(上・下)	金京南		2015
※小説日本藝譚	예술가로 산다는 것	イ・ギュウォン (이규원)		2016
※絢爛たる流離	현란한 유리	イ・ギュウォン (이규원)		2018
ゼロの焦点	제로의 焦点	梁億寛	イサン・ブックス (이상북스)	2011
[張込み]	잠복 (短編集名)	金京南	モビーディック (모비딕)	2012
顔	얼굴			
張込み	잠복			
鬼畜	귀축			
※投影	투영			
声	목소리			
地方紙を買う女	지방신문을 구독하는 여자			
一年半待て	一年半만 기다려			
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 널			

[日本の黒い霧(上)]	일본의 검은 안개(上) (短編集名)	金京南	モビーディック (모비딕)	2012
※下山国鉄総裁謀殺論	출근길에 사라진 총재 —시모야마 국철총재 모살론			
※「もく星」号遭難事件	10분간 2000피트, 고도 유지 —목성호 추락 사건			
※白鳥事件	누가 자전거를 쏘았는가 —시라토리 사건			
※ラストヴォロフ事件	쓸모 있는 자와 쓸모 없는 자 —라스트보로프 사건			
※革命を売る男・伊藤律	혁명을 파는 남자 —이토 리쓰 사건			
※二大疑獄事件	검은 돈의 뿌리, 빙산의 일각 —2대 부정부패 사건			
[日本の黒い霧(下)]	일본의 검은 안개(下) (短編集名)	金京南		
帝銀事件の謎	열여섯 잔의 독배 —제국은행 사건의 수수께끼			
※鹿地亘事件	소설가인가 스파이인가 —가지 와타루 사건			
※推理・松川事件	레일을 분리하라 —마쓰카와 사건을 추리한다			
※征服者とダイヤモンド	다이아몬드를 사랑한 사람들 —정복자와 다이아몬드			
追放とレッド・パージ	우익을 추방하라. 아니, 다시 좌익을 없애라 —추방과 빨갱이 사냥			
※謀略朝鮮戦争	그들의 이상한 전쟁 —모략 한국전쟁			
※Dの複合	D의 복합	金京南		2012
[ミステリーの系譜]	미스터리의 계보(短編集名)	金旭		2012
※肉鍋を食う女	전골을 먹는 여자			
二人の真犯人	두 사람의 진범			
闇に駆ける猟銃	어둠 속을 내달리는 엽총			
点と線	点과 線	金京南		2012
※時間の習俗	시간의 습속	金京南		2013

[駅路]	역로（短編集名）	田惠善	モビーディック（모비딕）	2013
薄化粧の男	옅은 화장을 한 남자			
駅路	역로			
捜査圏外の条件	수사권에 벗어나는 조건			
誤差	오차			
巻頭句の女	권두시를 쓰는 여자			
偶数	짝수			
ある小官僚の抹殺	어느 하급 관리의 죽음			
白い闇	하얀 어둠			
※わるいやつら	나쁜 놈들(上・下)	金京南		2015
[或る「小倉日記」伝]	어느 「고쿠라 일기」전（短編集名）	金京南		2017
※父系の指	아버지를 닮은 손가락			
或る「小倉日記」伝	어느 「고쿠라 일기」전			
菊枕	국화 베개			
※赤いくじ	빨간 제비			
※火の記憶	불의 기억			
※青のある断層	청색단층			
※断碑	깨진 비석			
※弱味	약점			
※石の骨	돌 뼈			
箱根心中	하코네 동반 자살			
※笛壺	피리 단지			
喪失	상실			
[火と汐]	불과 해류（短編集名）	イ・ハユン（이하윤）	海文出版社	2012
※火と汐	불과 해류			
※証言の森	증언의 숲			
種族同盟	종족동맹			
山	산			
砂の器	모래그릇(上・下)	李秉鎭	文学ドンネ(문학동네)	2013
顔	얼굴	金京南	アラジン(알라딘)	2013

1995年から外国作品の翻訳出版に対する著作権法の適用が厳格になった。これによって以前までは翻訳されなかった松本清張の作品が翻訳紹介され、推理小説でない作品も積極的に翻訳され

るなど、松本清張文学の体系的な翻訳紹介が行われていく。しかし、2004年以前に刊行された作品はまだ以前の再刊本が少なくない。すでに何度も翻訳された松本清張の代表作である『点と線』、『ゼロの焦点』、「或る「小倉日記」伝」、1970年代に翻訳された『모래그릇（砂の器）』(許文純訳、東西文化社、2004)、『너를 노린다（あなたを狙う）』(文澔訳、東西文化社、2004)も以前に刊行されたものである。2009年に刊行された鄭泰原訳の『검은 화집（黒い画集）1・2・3』(泰東出版社、2009)も以前に翻訳された作品を再訳したものである。しかし、著作権契約を結んで刊行されたものである。鄭泰原は推理小説の専門翻訳者として有名であるが、訳書には解説や訳者のあとがきが付されていない。一つの現象として、著作権契約を結んで翻訳される書籍は一般的に「解説」と「あとがき」を付ける傾向があるが、鄭訳にはそれがまだ導入されていないのである。

2012年からブック・スピアとモビーディックのような大型出版社の登場によって松本清張文学が体系的に紹介されていく。以前には主に松本清張の長編の人気推理小説を中心に紹介されたが、この時期になると短編小説も体系的に翻訳され始める。その代表格が『松本清張 걸작 단편 컬렉션（松本清張傑作短編コレクション上・中・下』(イ・ギュウォン訳、ブック・スピア、2009)である。

ブック・スピアが出版した『松本清張 걸작 단편 컬렉션（松本清張傑作短編コレクション)上・中・下』は従来において大衆向けの推理小説作家として消費されていた清張文学の新たな側面を紹介した企画である。「巨匠の出発点から終着点まで100年の足跡をたどる大作業」という宣伝文面が示すように、松本清張の初期から晩年に至る代表作を選定した宮部みゆき編『松本清張傑作短篇コレクション』(文藝春秋、2004)を翻訳したものである。翻訳本の序文には文春文庫編集部の提案で宮部みゆきが松本清張傑作コレクションの刊行に至る経緯を翻訳紹介している。一方で、「序文」には宮部みゆきについても 紹介しているが、宮部みゆきは文学的に「松本清張の長女」と知られており、自らも「松本清張文学こそ私の故郷であり根っこである」と自負するほどであると紹介している。宮部みゆきは韓国でも人気のある推理小説作家で、宮部みゆきの評価を使って松本清張の位相を示している。

従前に松本清張の短編小説はおもに李英朝訳の『안개 속 흰 얼굴（霧の中の白い顔）』と文澔訳の『大男』を通じて紹介されてきた。文澔訳は原題名を変えたケースも多かったので読者が清張の原作を推測するのは難しいところがあった。これとは対照的に、『松本清張 걸작 단편 컬렉션（松本清張傑作短編コレクション）』は原作の題目を正確に翻訳しており、作家の創作意図に忠実であることを翻訳の基本目的にしている。そして今まで翻訳されなかった多くの短編を紹介している。『松本清張 단편 컬렉션（松本清張傑作短編コレクション）』には全26編の短編小説が翻訳されているが、上巻には10編の短編が収録されている。このなか、「恐喝者」、「理外の理」、「削除の復元」、「真贋の森」、「二・二六事件」、「追放とレッド・パージ」等の6編は韓国で初めて翻訳されたものである。中巻には8編の短編が載せられているが、「遠くからの声」、「書道教授」、「式場の微笑」、「山」 等の4編が初めて翻訳されたものである。下巻には8編が収められているが、「生けるパスカル」、「骨壷の風景」、「帝銀事件の謎」(『日本の黒い霧』収録)、「西郷札」、「菊枕」、「火の記憶」などの6編が初めて翻訳されたものである。『松本清張 단편 컬렉션（松本清張傑作短編コレクション）』に翻訳された全26編のうち、16編が初めて翻訳紹介されたことになる。そして巻末には「커피브레이크-담당 편집자의 추억(コーヒーブレイク、担当編集者の追憶）」という文章を載せ、松本清張がどのような作家であるか

を読者に紹介している。北九州市立松本清張記念館の館長で文藝春秋社の編集者であった藤井康栄の「자유자재한 창작공간（自由自在な創作空間）」も訳載され、最後には松本清張の年譜が載せられている。松本清張文学の全体像を読者に伝えようとしているのである。

2012年からはブック・スピアとモビーディックの二社が共同で企画した「세이초 월드(清張ワールド)」シリーズが刊行される。両出版社は「清張ワールド」の企画意図について、従前に翻訳紹介された松本清張の作品は代表作『点と線』『ゼロの焦点』『砂の器』などに集中し、しかもそのほとんどがベルヌ協定以前の海賊版であることを問題提起している。また松本清張が韓国では推理小説家として紹介されているが、『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』や『쇼와사 발굴（昭和史発掘）』等々の多くのノンフィクションを書いた作家であり、優れた歴史学者の側面を持っていることも強調している。現在、日本ミステリーを主導している宮部みゆきや東野圭吾などが松本清張の「長女」や「嫡子」とも言われているが、その産みの親に当たる日本社会派小説の創始者である松本清張については正当に評価されていないとも指摘している。そのため、清張文学の本格的な紹介を通し、韓国の読者が多様なミステリーのジャンルに接することができることを意図したと述べている。しがたって、松本清張の膨大な作品から一、二冊を翻訳刊行してもさほど意義がないという認識で、両出版社が定期的にシリーズとしての刊行を企画したという。こうした「清張ワード」企画によって松本清張のフィクションとノンフィクションを含む多様な作品が紹介されるようになる。

ブック・スピアは松本清張の長編小説をおもに刊行したが、キム・ソヨン訳『짐승의 길(けものみち)上・下』、『구형의 황야(球形の荒野)上・下』は清張ワールド企画として初めて翻訳されたものである。キム訳の『짐승의 길(けものみち)』(ブック・スピア、2012)の上巻は416頁、下巻は400頁に及ぶ大作である。上巻の表紙には「人は自らと無関係なことには至極公平な立場になる。彼女を理解してくれる人は誰一人いなかった」という内容を紹介し、下巻の表紙には「特異な環境からではなく、日常から設定すること、私は幻想ではなくリアリズムの中からミステリーを書きたい」という松本清張自身の言葉を付し、創作の背景が分かるようにしている。さらに『짐승의 길（けものみち）』という題目についても説明している。「けものみち」とは山羊やイノシシなどが通って出来る山中の小道であるが、山を歩く人はしばしばこれを人間の道として勘違いをする。そのけものみちに人間が入り込むとどのような事態が発生するかを扱っている小説であることを紹介し、作家の社会意識を浮き彫りにしている。

キム・ソヨン訳『구형의 황야（球形の荒野）』(ブック・スピア、2014)の原作は『球形の荒野』で、日本で映画としても制作され、8回ほどドラマとして制作された松本清張の代表作の一つである。『구형의 황야（球形の荒野）』は日本の敗戦工作を行った男の秘話をミステリー風に書いたものである。日本の敗戦を予感し、犠牲を最小化限に止めるため、早い段階で降伏を意図した人たちが存在していたことが素材になっている。日本の敗戦を意図した背信行為によって主人公は家族のもとに戻れないまま犯罪事件に巻き込まれる。一般的な歴史的な事実とは裏腹に、日本外務省が1944年から終戦工作を行い、それによって戦争の終結が早まったという話は韓国の読者には斬新なものであった。

金旭訳『푸른 묘점（青い描点）』(ブック・スピア、2013)も「清張ワールド」企画で刊行された作品である。『푸른 묘점（青い描点）』は608頁の長大な分量を一冊にまとめたものである。訳書表紙の下段には「作家の中には編集者を隣の部屋に待機させて一晩のうちに書き上げる作家がいる反面、編集者と談笑をしながら絶え間なく原稿用紙にペンを転がして書いていく作家もい

る。一方では真昼にも窓を閉めて一人の状態でなければ書けない作家もいる。主人公の村谷阿沙子は後者に近いかもしれない」と紹介されている。『푸른 묘점（青い描点）』は松本清張がもっとも旺盛に執筆活動をしていた時期に書かれた作品で、人気作家と三流記者を中心に事件が発生し、それに事件の真相を探っていく男女編集者の恋愛感情をマッチさせた興味津々な作品であるという紹介も添えている。そしてゾ・ヨンイルによる概説、「푸른 가로등과 붉은 제등（青い街路灯と赤い提灯）」という文章が載せられている。ゾ・ヨンイルは解説の中で、清張ミステリーにおいて重要なのは事件の解決ではなく、事件に対する共感であると説いている。

イ・ギュウォン訳の『범죄자의 탄생（犯罪者の誕生）』(ブック・スピア、2014)は1958年に刊行された短編集『無宿人別帳』を翻訳したものである。『無宿人別帳』に収録された作品はそれぞれ「특별사면」(町の島帰り)、「쓰나미」(海嘯)、「그의 얼굴」(おのれの顔)、「도망」(逃亡), 「나는 몰라」(俺は知らない)、「어둠 속의 발소리」（夜の足音）、「유형지 탈출」(流人騒ぎ)、「붉은 고양이」(赤猫)、「왼팔」(左の腕)、「빗소리와 강물 소리」(雨と川の音)等々の題目で翻訳された。この作品は江戸時代を背景にした時代小説であり、そのため、作品理解において重要な概念となる「人別帳」などのような時代用語の説明を加えている。訳者の概説によると、「人別帳」は江戸時代の戸籍帳簿で、農村から江戸へ逃亡したために江戸の人別帳に名前が載せられていない人たちで、いわゆる「無宿」となる。清張は「無宿人別帳」という架空の帳簿を作り、身分制度で呻吟する無宿人の境遇を描いているとする。また訳者は「犯罪に関係せざるを得ない最下層の人間模様を描いた時代小説の嚆矢」と呼ばれた理由も紹介している。年を追う飢饉と災害、物価の暴騰と失業で大量の農民が江戸へ逃亡して無宿人となる。幕府の統治者はその根源を無視したまま一方的に取り締まりを強化する。無宿人はもとより生業に怠け、放蕩な品性で、貧困と犯罪は彼らの個人的な理由によるもので、無宿人を犯罪者予備軍と見做していた。まっとうな職につくことが法的に禁止された無宿人は金品を盗むなどの罪を犯し、官員に追われ、牢屋に入れられる。清張はこうした無宿人の姿を通して犯罪の本当の原因は権力機構の不条理によるものであることを訴えていると概説している。

金京南訳の『나쁜 놈들（わるいやつら)上・下』(ブック・スピア、2015)は『わるいやつら』を翻訳したもので、「真の悪人は誰か」という問題を扱っている。訳本の表紙には、「悪いやつらと悪女の復讐劇、欲望に駆られて無限に残酷化する人間群像の悲劇、はたして誰が真の悪人なのか」と紹介されている。そして日本で映画とドラマで5回も作られた清張の「悪女シリーズ」の決定版であるという説明を加えている。さらに概説では、この小説は、『짐승의 길（けものみち）』(ブック・スピア、2012)、『검은 가죽 수첩（黒革の手帖）』とともにいわゆる「悪女シリーズ」と呼ばれるが、これは三つの作品に登場する女性キャラクターが常識を逸脱しているからであるとも紹介している。

『현란한 유리(絢爛たる流離)』の概説では、同作は1963年1月から12月まで『婦人公論』に連載された連作短編小説集で、1964年に中央公論社から単行本として刊行されたものを翻訳したとする。『현란한 유리(絢爛たる流離)』は3カラットのダイヤモンド指輪が人の手から人の手へと移っていく過程を追ったもので、指輪の持ち主をめぐって様々な犯罪事件が発生するという設定である。十二の話は自己利益と欲望のために詐欺、暴力、殺人さえ犯す人間模様が描写されており、特に「백제의 풀（百済の草）」と「도망（逃亡）」は背景が朝鮮で、松本清張が韓国の龍山と井邑で衛生兵として勤務した経験が反映されている点を強調して紹介している。

一方、海文出版社からはイ・ハユン 訳『불과 해류（人と汐）』（2012)という中短編集が刊

行された。「火と汐」、「証言の森」、「種族同盟」、「山」などの4編の中短編小説を収めたものである。これらの作品はいずれも韓国では初めて翻訳された作品である。『불과 해류（火と汐）』は、「火のある所で発生した犯罪、その犯罪が行われた時に容疑者は海流の中にいた。その完璧なアリバイを崩せ！」という宣伝文句とともに、「불과 해류（火と汐）」は完全犯罪ミステリーを追う本格推理小説であると紹介している。

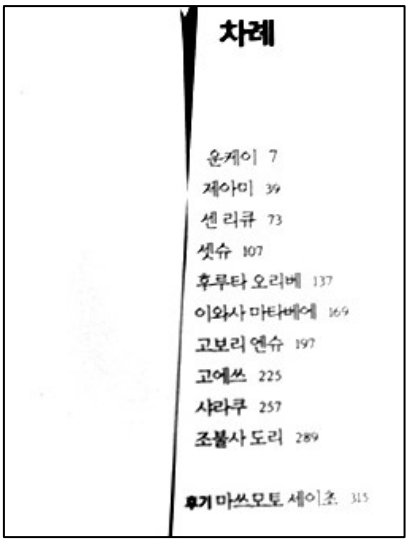
他方、松本清張の随筆を集めた『검은 수첩（黒い手帖）』(南宮佳潤訳、ブック・スピア、2014)が翻訳刊行される。『검은 수첩（黒い手帖）』は1958年から1961年までの松本清張の推理エッセイを集めた中央公論社の『黒い手帖』を翻訳したものである。訳本の背表紙には、戦後社会派ミステリーという新しい潮流を作り出した松本清張が爆発的に増加した当時の推理小説読者の要望に応え、「推理小説はどのようにかくのか」「社会派推理小説とはなにか」について、自作を例にしながら解き明かしたエッセイ集であると紹介されている。『검은 수첩（黒い手帖）』を通して訳者は、松本清張が従前の探偵小説に見られる「誇張して飾る文体」や「神様のような天才的探偵」の存在を否定し、日常性に基づくリアリティを重視し、いわゆる「유령의 집（幽霊の家）（お化屋敷の掛小屋の訳）」のような恐怖ではなく、誰もが日常生活で経験し、予感できるサスペンスを追求する傍ら、トリックや謎解きという推理小説の本質も否定しなかったことを強調する。長い間、清張の推理小説ばかりが翻訳されてきたが、『검은 수첩（黒い手帖）』の翻訳は松本清張という作家への興味を示すもので、清張の多様な側面を紹介したいという出版傾向の成熟による時代的変化がもたらしたものと言える。

目次

運慶……七
世阿弥……三七
千利休……六七
雪舟……九七
古田織部……一二五
岩佐又兵衛……一五五
小堀遠州……一七七
光悦……二〇一
写楽……二三一
止利仏師……二五九
後記……二六一

解説　針生一郎
社会の力学のなかの芸術家たち　前田恭二

図 21 『小説日本芸談』
(新潮社、1958)


차례

운케이 7
제아미 39
센리큐 73
셋슈 107
후루타 오리베 137
이와사 마타베에 169
고보리 엔슈 197
고에쓰 225
샤라쿠 257
조불사 도리 289
후기 마쓰모토 세이초 315

図 22 『예술가로 산다는 것
(芸術家として生きること)』(2016)

2016年には『小説日本芸談』(図 21)を翻訳した『예술가로 산다는 것（芸術家として生きること）』(イ・ギュウォン訳、ブック・スピア、2016)も刊行されている。『예술가로 산다는 것（芸術家として生きること）』は短編伝記小説のシリーズで、日本美術史を代表する芸術家を列伝形態で書いたものである(図 21)。日本の芸術家たちを扱った小説であることを現わす『小説日本芸談』という題目を『예술가로 산다는 것（芸術家として生きること）』に変更し、日本語漢

字表記の人名はウンケイ、ゼアミなどのように音読みのハングル表記にしている(図 22)。漢字が読めない世代が増えている韓国の事情が考慮されたかもしれない。それ以外は原作に忠実な翻訳である。松本清張による「後記」も翻訳紹介されている。

出版社モビーディックは松本清張の短編小説を集中的に翻訳紹介したが、翻訳は金京南が主に担当している。金京南は梨花女子大学校で哲学を専攻し、東京大学大学院で博士学位を取得している。金京南は松本清張の『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』と『点과 線』をはじめ、佐木隆三『복수는 나의 것（復讐は我らのもの）』など、多くの日本作家の作品を翻訳している。

出版社モビーディックから刊行されたシリーズ「세이초 월드（清張ワールド）」の最初の単行本は『잠복（潜伏）』(金京南訳、モビーディック、2012)である。『잠복（潜伏）』（張込み）は金京南とモビーディックが組んで出した最初の単行本で、計8編の短編小説を収録している。『잠복（潜伏）』に収録された短編小説のうち、「얼굴（顔）」、「잠복（潜伏）」、「귀축（鬼畜）」、「목소리（声）」、「지방신문을 구독하는 여자（地方新聞を講読する女）」、「一年半만 기다려（一年半だけ待て）」、「카르네아데스의 널（カルデアネスの板）」は以前に翻訳された作品で、「투영(投影)」は初めて翻訳されたものである。『잠복（潜伏）』（張込み）には小説だけではなく、松本清張による「「張込み」の執筆動機を回想して」も翻訳紹介している。創作の背景を紹介し、作家と作品に対する読者の興味と理解を助けるためであったと思われる。

「세이초월드（清張ワールド）」シリーズとして刊行された金京南訳『일본의 검은 안개上・下（日本の黒い霧）』(モビーディック、2012)は、『日本の黒い霧』の翻訳である。『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』には12話の作品に加え、「「日本の黒い霧」から抜け出る方法」―モビーディック編集部から捧げる文」と載せられている。

『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』について編集部は、累積販売部数が一億冊を超える社会派ミステリーの創始者である松本清張の代表的なノンフィクションミステリーであると紹介する。敗戦後、アメリカによる占領期において奇妙で謎のような事件が連続して起こったが、この時に起こった12の奇怪な事件はおしなべて未解決として闇に葬られた。閉店直後の銀行に入り込んで行員に毒物を飲ませ、阿鼻叫喚の中で現金と手形を盗みだした1948年の「帝国銀行事件」、日本国有鉄道の初代総裁であった下山貞則が出勤途中に失踪し、翌日に死体として発見された1949年の「下山事件」、日本航空(JAL)の搭乗者37人全員が死亡した1952年の「木星号墜落事件」などの衝撃的な事件はいずれも迷宮入りしたままである。また混沌としたこの時代にはスパイ関連事件がよく現れ、伊藤律事件、ラストヴォロフ事件、鹿地亘事件などが続出した。また権力者たちの大型不正事件、労働組合への弾圧、赤狩りなどの強風によって多くの犠牲者が生まれた。

松本清張は未解決事件を執拗に追跡し、資料を収集し、それぞれの事件に斬新な仮説を展開した。そしてそれを誰もが手軽に、「事実的」に読まれるよう、ノンフィクションという形式の簡潔な文体で書いた。松本清張によるノンフィクションの連載によって日本社会は大きく動揺し、「黒い霧」はそのまま時代的な流行語になった。松本清張は『일본의　검은 안개（日本の黒い霧）』を執筆するなか、事件を再度調査し、「資料を加工することなく配列し、その資料を推理を通してつなぐ」という独自的なノンフィクションスタイルを作り上げた。そのようにして完成された「ミステリーノンフィクション」は新聞報道や公式発表では明らかにされなかった事件の表裏、その背後に蠢く人間たちや権力の欲望、表裏に存在する点と線を綿密に解剖してフィクション以上の戦慄と感動を読者に与えたと、『日本の黒い霧』の意義を編集部は韓国の読者に提供している。そのため、『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』は原題の変更を行い、原題は副題

の形式で付け加える方法を取っている。以下に紹介する。韓国の読者に分かりやすい題目になっている。

表 20 『日本の黒い霧』と『일본의 검은 안개(日本の黒い霧)』の目次

日本の黒い霧・上	일본의 검은 안개(日本の黒い霧)・上
下山国鉄総裁謀殺論	出勤途中で消えた総裁―下山国鉄総裁謀殺論
「もく星」号遭難事件	10分間2000フィートの高度維持―木星号墜落事件
白鳥事件	誰が自転車を射たのか―白鳥事件
ラストヴォロフ事件	使える者と使えない者―ラストヴォロフ事件
革命を売る男・伊藤律	革命を売る男―伊藤律事件
二大疑獄事件	黒い金の根、氷山の一角―2大不正事件
日本の黒い霧・下	**일본의 검은 안개(日本の黒い霧)・下**
帝銀事件の謎	16杯の毒盃―帝国銀行事件の謎
鹿地亘事件	小説家なのかスパイなのか―鹿地亘事件
推理・松川事件	レールを分離せよ―松川事件を推理する
征服者とダイヤモンド	ダイヤモンドを愛した者たち―征服者とダイヤモンド
追放とレッド・パージ	右翼を追放せよ、いやまた左翼を消せ―追放と赤狩り
謀略朝鮮戦争	彼らの奇妙な戦争―謀略韓国戦争

金京南は『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』を翻訳する過程で自ら新しい題目を付し、原作の題目を副題に残している。たとえば、「鹿地亘事件」や「松川事件」という題目を直訳した場合、韓国の読者には全く意味不明になる。それで「小説家なのかスパイなのか」という題にしてそれがスパイ関連の事件で、同様に「松川事件」が鉄道レールに何らかの工作をした疑惑事件であることを類推させるため、「レールを分離せよ」と題したのである。原題を副題として同時に付したので原作の意図も十分に汲み取っている。原作を尊重しながら韓国の読者が分かりやすく配慮している。翻訳者の工夫の一端をよく示している。

『Dの複合』も「清張ワールド」のシリーズとして刊行されたものである。2012年、金京南によって『D의 복합（Dの複合）』（モビーディック、2012)として翻訳刊行されている。訳本の表紙には、「伝説を追う僻地への旅、そして準備された殺人事件」という文句が提示されている。『D의 복합（Dの複合）』という題目は韓国の読者にはきわめて生硬である。読者は「D」はなんなのか、「복합（複合）」は何を意味するのか、疑問を持つ。それで訳本では伝説を追って旅する過程で殺人事件が起こるという情報を表紙に提供したと思われる。

ここで一つ指摘しておきたいことは、日韓における書籍の形態の違いである。韓国の書籍は一般的に本の帯が存在しない。大概の日本の書籍は帯で重要な情報を提供しているが、韓国書籍はそれに該当するものが存在しない。また日本の書籍の場合は裏表紙、あるいは表紙の折の部分に作者紹介や作品紹介のような文書を入れる傾向がある。しかし、韓国の書籍にはこうした習慣が存在しないので、どうしても表紙の前面に情報を書き込むしかない。こうした書籍形態は日本の

書籍を翻訳する諸外国の書籍一般に見られる現象である。書籍形態が翻訳にも影響するのである。ついでに指摘しておく。

以前に数多く翻訳された『点と線』も2012年、金京南訳によってモビーディックから翻訳刊行されている。金京南訳『点과 線』は、原作者である松本清張について詳細に紹介し、『点と線』についての作品解説とともに、翻訳過程で訳者が感じた感想を「訳者後記」として付している。そして挿絵も多く使っている。モビーディックが著作権契約を結んだ光文社版にはもともと挿絵が存在しない。しかし、2009年、文藝春秋社から「松本清張生誕100周年記念」として挿絵を入れた『点と線』特別版が刊行され、その挿絵を翻訳書に使ったことを前もって断っている。小説の途中に挿絵を入れ、事件の状況をより理解しやすく、読みやすくしているのである。読者の興味をそそり、理解を助ける様々な努力が行われていたことが分かる。

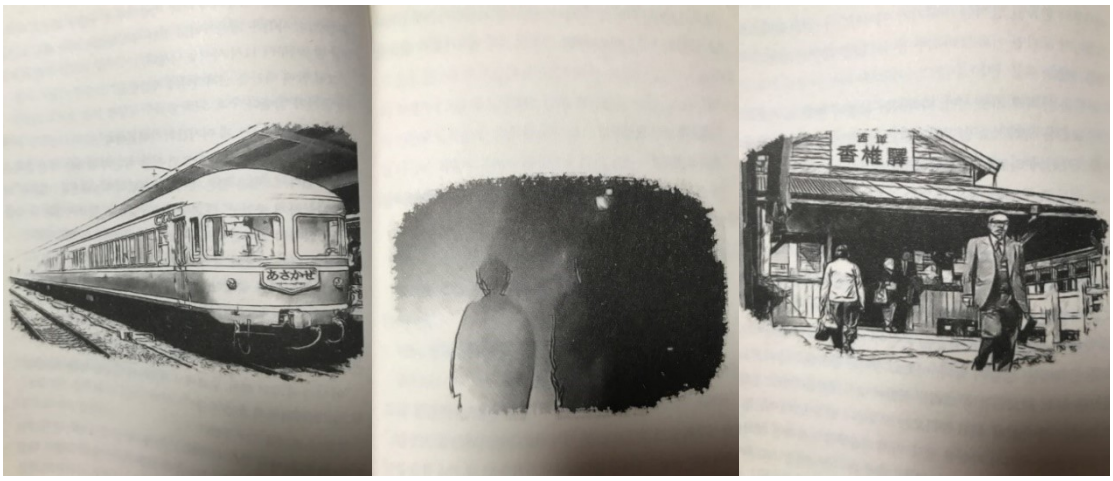


図 23 『点과 線』(2012)の挿絵

韓国語訳『点과 線（点と線）』の解説では、社会派推理小説と呼ばれるものは『点と線』から出発したもので、松本清張はこの作品で犯罪の動機と社会的な背景を重視する2大命題を提示しているとする。松本清張にとっては、動機を描写することは人間を描写することで、人間を描写することはそのまま社会を描写することになる。こうした清張の作風が社会派と呼ばれ、後続作家たちに決定的な影響を与えている。現在、「ポスト清張」と呼ばれる宮部みゆき、東野圭吾などの作家たちによってミステリーの黄金時代が築かれているが、彼らはいずれも清張の社会派ブームで育った作家であるとする。また清張はこの作品で鉄道を舞台にしてアリバイ崩しの新風を起こし、旅行ミステリーの序幕を切り開いたと指摘する。そのため、『点と線』を抜きにして清張と日本ミステリーを論ずるのはナンセンスであるとも評価している。

長編推理小説『시간의 습속（時間の習俗）』もモビーディックから初めて訳される。金京南訳『시간의 습속（時間の習俗）』(モビーディック、2013)は『点と線』 の第2弾や後日談ではなく、新たな始まりで、「時間の常套性をあざ笑う犯人のアリバイ、再結集した『点と線』の名コンビの奮闘記」と紹介されている。『時間の習俗』は1961年5月から翌年の11月まで『旅』に連載されたが、この時期は『点と線』の連載から四年ほど経っており、ちょうど小説の中でも『点と線』での時間から4年後に発生した事件を扱っている設定になっている。松本清張の作品の中で同一人物を登場させたのは『時間の習俗』がほぼ唯一のものであるとも解説されている。さら

に『時間の習俗』は犯人を先に示し、その犯人のアリバイを崩していくいわゆる倒叙型アリバイ崩しの小説で、犯人の峰岡は神事で撮影した写真のフィルムを強力なアリバイとし、三原刑事はそのアリバイを崩すために峰岡の移動経路を推理によって再構成する。また歪な出世欲がもたらした背任行為を殺人の動機として提示し、高度成長期における出世一偏の社会雰囲気を現わすとともに、犯人の助力者を「ゲイ」に設定し、日本社会の性風俗の変化を盛り込むなど、社会派作家ならではの観点が小説の随所によく投影されていると紹介している。

「或る「小倉日記」伝」も再訳されている。金京南訳『어느 고쿠라 日記伝（或るコクラ日記伝）』(2017)はモビーディックが企画した『松本清張 걸작단편선（松本清張傑作短編選）』のうち、『잠복（潜伏）』、『역로（駅路）』に続く第3番目の作品集である。松本清張作品の中でも、「어느 고쿠라 日記伝（或るコクラ日記伝）」は既に何度も翻訳されたものだが、作品集には以前に紹介されなかった短編小説も多く含まれている。「아버지를 닮은 손가락（父に似た指）」(父系の指)と「빨간 제비(赤いくじ)」、「불의 기억(火の記憶)」、「청색탄층（青色断層）」(青のある断層)、「깨진비석（割れた石碑）」(断碑)、「약점(弱味)」、「돌뼈(石の骨)」、「피리단지(笛壺)」、「상실(喪失)」などは初めて紹介された短編小説である。

出版社モビーディックは、「或る「小倉日記」伝」を第28回芥川賞受賞作であり、松本清張という巨匠の出発点になったと紹介している。表題作である「或る「小倉日記」伝」は1952年『三田文学』9月号に掲載され、日本の大衆的人気を反映する直木賞の候補にもなったが、審査委員の一人であった永井龍男が「この作品は直木賞ではなく、芥川賞により相応しい」と主張し、芥川賞の本選に残り、当選した逸話を紹介している。また収録された12編の短編小説は一種の実名小説または伝記小説で、清張は実在した人物から自身の分身を発見し、彼らの生涯に自身の悲劇的なドラマを投影し、痛ましい話を作り出したと説明している。

モビーディックはおもに短編小説を中心に翻訳しているが、金旭訳『미스터리의 계보（ミステリーの系譜）』(2012)には「전골을 먹는 여자(肉鍋を食う女)」、「두 사람의 진범」(二人の真犯人)、「어둠 속을 내달리는 엽총(闇に駆ける猟銃)」の3編が翻訳紹介されている。『ミステリーの系譜』は1967年8月から1968年4月まで『週刊読売』に連載されたものを集めたもので、いわゆるノンフィクションに分類される。ただし、単行本を刊行するに際し、相対的に完成度の低い「탈옥（脱獄）」と「夏夜の連続殺人」は除外されたと説明されている。『미스터리의 계보（ミステリーの系譜）』には義理の娘を殺害した悲惨な実話を描いた「전골을 먹는 여자」(肉鍋を食う女)、一つの事件に二人の犯人が現れた奇怪な事件を追跡した「두 사람의 진범(二人の真犯人)」、21歳の青年が一夜に30人ほども殺害した事件の背景を探った「어둠 속을 내달리는 엽총(闇に駆ける猟銃)」などの3編が収録されている。こうした作品を通して清張が追求したのは、事件の猟奇性や謎ではなく、どこにもいる平凡な人間がなぜそれほど残酷な事件を起こしたのか、という人間存在の不可思議であったと紹介されている。

田恵善訳の『역로（駅路）』(モビーディック、2013)には全8編の短編小説が収録されているが、すべて以前に翻訳されたことのある作品である。「옅은 화장을 한 남자」（薄化粧の男）と「역로」（駅路）、「수사권에서 벗어나는 조건」（捜査圏外の条件）、「오차」（誤差）、「권두시를 쓰는 여자」（巻頭詩を書く女）は以前の『大男』で紹介された作品である。「짝수」(偶数)は以前に「우연（偶然）」という題名で翻訳され、短編集『殺意의 断層（殺意の断層）』(李英朝訳、豊林出版社、1974)に収録されたことがある。「권두시를 쓰는 여자」（巻頭詩を書く女）は2009年ブック・スピアから刊行された『松本清張 걸작 단편 컬렉션（松本清張傑作短

編コレクション）上』にも収録されており、「하얀 어둠(白い闇)」は1979年李英朝が訳した短編集『안개속의 흰 얼굴（霧の中の白い顔）』において「白闇」という題名で翻訳されたものである。

しかし、『역로（駅路）』は作品の翻訳だけに留まる既存の翻訳とは違い、作品の特徴や意義を訳者自身が紹介し、読者の理解を助けている。「역로（駅路）」は日本のテレビドラマとして四回も放映された作品で、定年退職を迎えて第2の人生を夢見た中年男性の失踪を扱ったものである。「수사권에서 벗어나는 조건（捜査圏外の条件）」は犯罪者の視点から事件を描写した作品で、完全犯罪を企む話を扱っている。法医学を土台にした「오차（誤差）」は心理的な妄信を描いた作品として紹介されている。そして 『역로（駅路）』は全体的に文学性と大衆性が絶妙に結合された短編小説である点を強調している。

このように文学系の出版社であるブック・スピアと歴史批評系の出版社であるモビーディックが版型とデザインを統一し、2012円から「세이초월드（清張ワールド）」をシリーズとして松本清張の作品集を共同で刊行した意義は高い。そこには既存の長編だけでなく、多くの新しい短編小説やノンフィクションまで含まれており、清張文学の幅広い受容を図ったのである。

以上、見てきたように、著作権法定着期には以前には紹介されなかった推理小説だけでなく、芸術論、推理小説論まで翻訳されている。翻訳対象を多様化することで松本清張文学の全体像を浮き彫りにしている。そして専門翻訳者が翻訳を手掛けることになり、原作に忠実な翻訳でありがながら韓国の読者に受け入れやすい文章が使われている。またこの時期は専門翻訳者が大型出版社と組んで翻訳していることも一つの特徴である。『松本清張 단편 컬렉션（松本清張短編コレクション）上・中・下』、『10만분의 1의 우연（十万分一の偶然）』、『예술가로 산다는 것（芸術家として生きること）』、『현란한 유리（絢爛たる流離）』を翻訳したイ・キュウォンは韓国外国語大学で日本語を専門にした専門翻訳者であり、主にブック・スピアから刊行した清張文学を集中的に翻訳している。『불과 해류（火と汐）』を翻訳したイ・ハユン（이하윤)はソウル女子大学校日語日文学科を卒業し、SBS放送アカデミーの日本語映像翻訳課程を修了し、日本の小説と漫画などを翻訳している。『제로의 焦点（ゼロの焦点）』を翻訳した梁億寛は大学で国語国文学を専攻し、日本の亜細亜大学経済学部博士課程で勉強した履歴を持っている。『어느 <고쿠라 일기>전（或る〈コクラ日記〉伝）』、『나쁜놈들（わるいやつら)上・下』、『시간의 습속（時間の習俗）』、『点과 線（点と線）』、『잠복（潜伏）』（張込み）、『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）上・下』、『D의 복합（Dの複合）』を翻訳した金京南は梨花女子大学校で哲学を専攻し、東京大学大学院で文学博士の学位を取っていると紹介されている。

このように、著作権法定着期になると韓国で大学教育を受け、日本の大学や大学院などで勉強し、日本語に対する素養を十分に備えている専門翻訳者が活動している。韓国語と日本語に熟達した力量のある翻訳者らによって清張文学はより自然な韓国語に置き換えられ、結果的には読者層の裾も広がり、多様化しつつある。

3.2. 翻訳権契約による出版

著作権協定以前には翻訳作品の再刊行、重複刊行などが横行していた。松本清張の日本語原本からではなく、既存の翻訳本の文章を適当に修正して刊行するケースさえあった。しかし、著作

権協定に加入し、著作権法が厳格に適用されるにしたがってそれに適応できない零細規模の旧来の出版社は翻訳事業から撤退し、著作権契約が結べる大型出版社が独占的に翻訳出版する傾向が現れる。著作権協定と著作権法によって韓国の出版文化は大きく変貌したと言える。こうした傾向はさらに強化されていくだろうと予想される。

表 21 著作権法定着期における著作権契約の現状(出版社別)

(著作権契約の有無について確認できたものは「契約確認」とし、それ以外は「不明」にした)

著作権契約	原題名	韓国語題名	訳者	年度	出版社
不明	黒の回廊	일본여자 관광특급 (上・下)	キム・ジョンソク (김종석)	1995	三韓出版社
不明	点と線	点과 線	キム・ジョンス (김종수)	1995	韓国アラム (한국아람)
不明	或る「小倉日記」伝	어느 고꾸라 日記伝	徐炳珦	1999	文藝春秋
不明	顔	얼굴	鄭泰原	1999	泰東出版社
契約確認	黒い画集	검은 화집(1～3)	鄭泰原	2009	
契約確認	点と線	点과 線 : 두 개의 점에 선을 긋다	鄭泰原	2009	
不明	点と線	点과 線	姜英吉	2003	東西文化社
	ゼロの焦点	제로의 焦点			
不明	砂の器	모래그릇	許文純	2004	
不明	眼の壁	너를 노린다	文澔	2004	
契約確認	松本清張傑作短篇コレクション	松本清張 걸작 단편 컬렉션(上・中・下)	イ・ギュウォン (이규원)	2009	ブック・スピア (북스피어)
契約確認	けものみち	짐승의 길 (上・下)	キム・ソヨン (김소연)	2012	
契約確認	青い描点	푸른 묘점	金旭	2013	
契約確認	十万分の一の偶然	10만분의 1의 우연	イ・ギュウォン (이규원)	2013	
契約確認	球形の荒野	구형의 황야(上・下)	キム・ソヨン (김소연)	2014	
契約確認	黒い手帖	검은 수첩	南宮佳潤	2014	
契約確認	無宿人別帳	범죄자의 탄생	イ・ギュウォン (이규원)	2014	

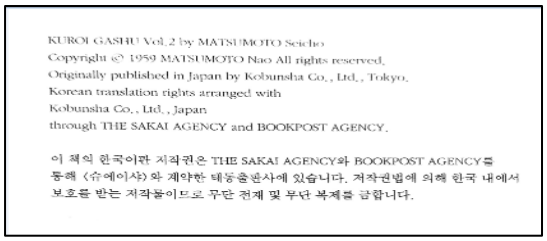
契約確認	わるいやつら	나쁜 놈들(上・下)	金京南	2015	ブック・スピア (북스피어)
契約確認	小説日本藝譚	예술가로 산다는 것	イ・ギュウォン (이규원)	2016	
契約確認	絢爛たる流離	현란한 유리	イ・ギュウォン (이규원)	2018	
契約確認	ゼロの焦点	제로의 焦点	梁億寛	2011	イサン・ブックス (이상북스)
契約確認	張込み	잠복	金京南	2012	モビーディック (모비딕)
契約確認	日本の黒い霧	일본의 검은 안개 (上・下)	金京南	2012	
契約確認	Dの複合	D의 복합	金京南	2012	
契約確認	ミステリーの系譜	미스터리의 계보	金旭	2012	
契約確認	点と線	점과 선	金京南	2012	
契約確認	時間の習俗	시간의 습속	金京南	2013	
契約確認	駅路	역로	田惠善	2013	
契約確認	或る「小倉日記」伝	어느 <고쿠라 일기>전	金京南	2017	
契約確認	火と汐	불과 해류	イ・ハユン (이하윤)	2012	海文出版社
契約確認	砂の器	모래그릇(上・下)	李秉鎭	2013	文学ドンネ (문학동네)
イベント図書	顔	얼굴	金京南	2013	アラジン (알라딘)

韓国が1995年から「知的所有権の貿易関連の側面に関する協定」に参画することによって著作権法の遵守義務を負うことになる。しかし、初期には厳格に守られていなかった。たとえば、1995年に翻訳された『일본여자 관광특급(日本女子観光特急)』(原作は『黒の回廊』)は「관광추리소설 장미여행(観光推理小説薔薇の紀行)」という副題を付して刊行されたが、この訳書は著作権契約を結ばずに刊行されたと推測される。著作権法が厳格化する以前に刊行されたので出版が可能だったようにも思われる。 同様のケースは『点と線』の翻訳にも見られる。『点と線』は著作権法定着期に3名の訳者によって刊行されたが、韓国アラム社から刊行されたキム・ジョンス訳『점과 선(点と線)』(1995)は著作権契約を結んだ形跡が見受けられない。発効当初の1995年には著作権契約がまだ定着していなかったのであろう。それ以降に翻訳された2冊は版権を購入して刊行している。それを以下に整理する。

表 22 著作権法定着期に翻訳刊行された『点と線』

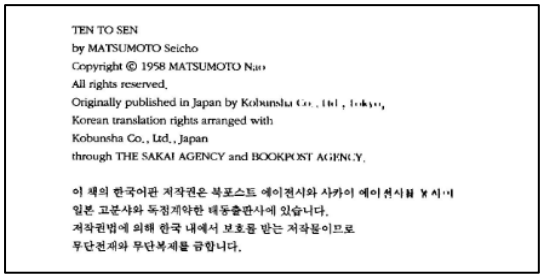
NO	訳者	題目	出版社	年度	特徴
1	姜英吉	「점과 선(点と線)」	東西文化社	2003	版権購入の形跡がない。
2	鄭泰原	「점과 선」	泰東出版社	2009	版権(1958年版)を購入して刊行、現在は絶版。
3	金京南	「점과 선」	モビーディック	2012	版権(1960年版)を購入して刊行、現在刊行中。

上記の姜英吉訳は版権購入の形跡が見られないが、これは1995年に全面改定された「著作權法」(大韓民国、第5015号)の猶予条件を利用したからではないかと推測される。この訳本は文澔訳『大男』収録本を基本テキストにし、『大男』収録本から削除された箇所は姜龍俊訳本から補っているものである。これを現行の韓国語表記法(1988)及び外来語表記法(1986)に則って表記を修正し、各章の題目と一部の表現を修正して刊行されたものである。そのため、日本語原文を直訳した生硬な表現が多く見られ、著作権法の対象外に扱っているのかもしれない。そうした事情が原因したのか、奥付には初版が1977年とされ、2003年に重版されたことを記している。


KUROI GASHU Vol. 2 by MATSUMOTO Seicho
Copyright © 1959 MATSUMOTO Nao All rights reserved.
Originally published in Japan by Kobunsha Co., Ltd., Tokyo.
Korean translation rights arranged with
Kobunsha Co., Ltd., Japan
through THE SAKAI AGENCY and BOOKPOST AGENCY.

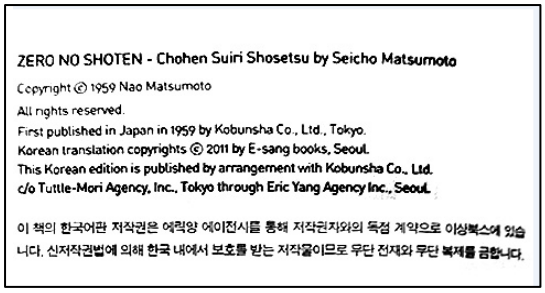
이 책의 한국어판 저작권은 THE SAKAI AGENCY와 BOOKPOST AGENCY를
통해 (주)에이사와 계약한 태동출판사에 있습니다. 저작권법에 의해 한국 내에서
보호를 받는 저작물이므로 무단 전재 및 무단 복제를 금합니다.

図 24 『검은 화집(黒い画集)』 Copyright


TEN TO SEN
by MATSUMOTO Seicho
Copyright © 1958 MATSUMOTO Nao
All rights reserved.
Originally published in Japan by Kobunsha Co., Ltd., Tokyo.
Korean translation rights arranged with
Kobunsha Co., Ltd., Japan
through THE SAKAI AGENCY and BOOKPOST AGENCY.

이 책의 한국어판 저작권은 북포스트 에이전시와 사카이 에이전시를 통해
일본 고분샤와 독점계약한 태동출판사에 있습니다.
저작권법에 의해 한국 내에서 보호를 받는 저작물이므로
무단전재와 무단복제를 금합니다.

図 26 『점과 선(点と線)』のCopyright


ZERO NO SHOTEN - Chohen Suiri Shosetsu by Seicho Matsumoto
Copyright © 1959 Nao Matsumoto
All rights reserved.
First published in Japan in 1959 by Kobunsha Co., Ltd., Tokyo.
Korean translation copyrights © 2011 by E-sang books, Seoul.
This Korean edition is published by arrangement with Kobunsha Co., Ltd.
c/o Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo through Eric Yang Agency Inc., Seoul.

이 책의 한국어판 저작권은 에릭양 에이전시를 통해 저작권자와의 독점 계약으로 이상북스에 있습니다. 신저작권법에 의해 한국 내에서 보호를 받는 저작물이므로 무단 전재와 무단 복제를 금합니다.

図 25 『제로의(焦点)』 Copyright

その一方、鄭泰原と金京南の翻訳本は版権を獲得して刊行されたものである。鄭泰原は日本語原文を最大限に尊重した翻訳を行っているが、金京南は韓国人読者の理解を優先して翻訳している。いわゆる直訳と意訳の対比をなす。

徐炳珥訳の「어느 고꾸라 日記伝（或るコクラ日記伝）」(1999)は著作権導入期である1987年に刊行された『아꾸다가와(芥川龍之介)文学賞 受賞作品 選集』の収録本をそのまま再版したものである。鄭泰原訳の「얼굴（顔）」(1999)は『J미스터리傑作選（Jミステリー傑作選）』に収録されているが、該当図書には版権への言及が見当たらない。また以前に松本清張の著作を多数刊行した東西出版社は1977年に刊行した『点과 線』、『모래그릇（砂の器）』、『너를 노린다（あなたを狙う）』を2003年と2004年に再刊しているが、版権獲得の言及は見当たらない。初版が著作権法の発効前ということによるのかもしれない。

以上、著作権法定着期の初期に当たる1995年から2008年までを概観すると、松本清張作品の翻訳刊行は以前に比べて顕著に減少している。13年間に刊行されたのは6冊である。これは著作権法によって出版自体を躊躇していたとも考えられる。以前のように自由に刊行するのが難しくなったのである。

それ以降、ブック・スピアやモビーディックという二つの大型出版社が登場し、松本清張の作

品を体系的に紹介し始める。両出版社が合同で企画し、2012年からは「세이초월드（清張ワールド）」シリーズが刊行されることになる。

ブック・スピアは長編推理小説 『짐승의 길（獣の道）』、『푸른묘점（青い描点）』、『10만분의 1의 우연（10万分の1の偶然）』、『구형의 황야（球形の荒野）』、『나쁜놈들（わるいやつら）』を刊行し、モビーディックは『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）上・下』、『D의 복합（Dの複合）』、『미스터리의 계보（ミステリーの系譜）』、『点과 線（点と線）』、『시간의 습속（時間の習俗）』、短編小説集『역로（駅路）』と『어느 고쿠라 日記伝（或るコクラ日記伝）』を刊行した。両者はともに版権契約を結んでいることを明らかにしている。著作権による翻訳対象作品を明示しているのである。著作権を販売戦略にしているのである。そして大手出版社の資本を背景に著作権が獲得できない零細出版社を駆逐していくのである。

こうした結果、2009年からは概ね著作権契約を結んでから翻訳刊行している。そのなか、翻訳対象になる原本や作家をより体系的に紹介し始める。版権契約がなかった時代には作品と簡略な作家紹介に止まっていたが、著作権を獲得して刊行する翻訳本は著者である松本清張について詳細に紹介する傾向が見られる。また専門家や翻訳者による作品解説を載せ、作者や作品が持つ文学的・社会的な意義と意味を仔細に説明している。訳者は概ね専門翻訳者であり、翻訳者自身が翻訳者としての自己アイデンティティを高めている。翻訳という成果を翻訳者自己の成果物と見做し始めていくのである。いわば翻訳者の地位は以前に比べ物にならないほど高まったのである。こうした出版文化の変化によって、松本清張の作家的位相も高まっていく。松本清張を理解する土台はますます整ってきたと言える。

第3章　松本清張文学の翻訳にみられる特徴

第1節　推理小説に集中する翻訳
第2節　松本清張『大男』の翻訳刊行
2.1. 翻訳による再構成
2.2. 『大男』の構成―中短編小説
2.3. 『大男』の構成―長編小説
第３節　社会派推理小説と韓国語翻案
3.1. 『처녀地 살인計（処女地殺人計）』系列
3.2. 『第五의 그림자（第五の影）』系列
3.3. 『아내의 추적（妻の追跡）』系列
3.4. 『目撃者』系列

第１節　推理小説に集中する翻訳

松本清張は韓国においても「日本文学の巨人」「日本における真の国民作家」などと紹介されるほど日本文学を代表する作家の一人である。清張文学の領域はフィクションだけではなく、ノンフィクションの評伝、古代史、現代史、考古学、美術史などの広範な範囲にわたっている。作品総数は一千点を越えるとも言われ、なかでも大ベストセラーになった『点と線』に始まる一連の推理小説は犯罪の動機を重視することからいわゆる「社会派推理小説」と呼ばれ、一大「清張ブーム」を巻き起こした。しかし、清張の作品はじつに多岐にわたり、一定の範疇で定義することはできない。直木賞候補であった作品が純文学の最高権威である芥川賞を受賞していることもそのよい例になるであろう。また一方で清張は優れた伝記作家であり、歴史小説作家であり、歴史研究者の側面をも持っていた。『日本の黒い霧』『昭和史発掘』などは今なお歴史的な議論の端緒ともなっているのである。大衆的な人気作家であると同時に純文学者の側面を持ち、他方では歴史学や考古学などにも独自の見解を示している作家である。

他方で、清張の推理小説が追求したテーマも従前の荒唐無稽な探偵小説ではなく、ごく平凡な人間が社会環境の中で犯罪者になっていく現実を描いている。刺激的な事件の背後にある歪で矛盾をはらんだ社会構造を批判的に浮き彫りにしている。常に社会構造への洞察と批判精神に裏打ちされているのである。

しかし、松本清張が韓国に紹介された初期にはこうした側面が殆ど看過された。たんに日本で最もお金を稼ぐ人気作家として紹介され、あくまでも推理作家の枠で扱われた。刺激的な事件を面白く書いて見せる作家と見做され、清張の作品もそうした印象から長編推理小説を中心に偏って翻訳紹介されることになる。たとえば、1960年から2000年まで韓国で翻訳された松本清張の作品は殆どが推理小説であった。これから紹介する『大男』もこうした側面を如実に現わしている。清張の推理小説が持つ社会的な洞察に基づく批判精神は無視され、刺激的な事件や人間欲望を巧みに描く作家として、作品は手軽に消費されるものとして扱われた。そのため、清張作品の広告宣伝や挿絵も刺激的で煽情的なものが積極的に使われる。以下に紹介する金聖鍾と金輝文による紹介文章からもそうした認識を窺うことができる。

著者である松本清張は一部の読者はご存じだろうが、日本で指折りの推理作家である。氏は多作でも有名であり、私が知っている限りではおおむね二百冊を優に越えている。

松本清張は、最初は純文学者として出発し、日本で最も権威のある芥川賞を今から40年ほど前に受賞している。そのこともあり、この作家の推理小説には本格文学の薫り高いものがある。読者は推理小説の緊張感あふれる面白さと本格文学の深々しい香りの両方を満喫できるであろう。

現在、日本には推理作家が多いことで広く世界に知られているが、本書の著者である松本清張ほど高級な面白みを読者に提供する作家は珍しいであろう。

この点は読者が直接読んでみれば実感できるだろう。

この小説の原題は『青い樹海』である。しかし、原著があまりも膨大で、さらに日本的な趣きが強いので我が国の読者が読んで分かりやいように、部分的に翻案をしたものであることを断っておく[15]。

金聖鍾は清張の作品の純文学性について高く評価しているものの、清張をあくまでも推理作家の枠組みで論じている。そのため、純文学作品にはあまり許されていない翻案を試みたのであろう。推理の過程さえ伝えればよいという認識があったのかもしれない。多作、販売実績、面白さなどが強調されている。次の金旭の評価も似通ったものである。

この作家はまた多作でも有名である。氏の推理小説は既に百冊を越えている。世界の推理作家のなか、清張ほど多作の作家は珍しいであろう。

もう一つ有名なのは、この作家が書いた作品は漏れなく興味津々な内容で、一度刊行されると50刷以上は刷られる。要するに、一千万部ほど売れるということになる。我が国の出版業界では想像もできないほどの売れ行きで、羨ましい限りである。これだけでも清張の推理小説がいかに面白いか推測できるであろう。

作家松本清張は最初から推理小説を書いたのではない。今から30年余り前に日本で最も権威のある芥川賞を受賞し、純文学作品を書いてきたが、途中から推理小説に移っている。氏の旺盛な創作意欲は純文学だけに満足することができなかったのである。出発が純文学であったので氏の推理小説は他の推理小説作家とは違うところが多い。

例えば、簡潔な文体と作品構図のようなものは他の推理作家が真似できないほど完璧である。これに面白みが加わる[16]。

松本清張の文学について言及した言説は少ないが、作家の金聖鍾と翻訳者の金旭による松本清張の評価は、従前の韓国出版界が清張をどのように認識し、評価していたか端的に示している。両者はともに松本清張が多作の作家で、作品は面白く、日本で一千万部ほど売れる一大人気作家

[15] 金聖鍾翻案『美人計의 陷穽』図書出版韓脈、1984
[16] 金旭翻案『第五의 그림자（第5の影）』文教、1984

である点を挙げている。また両者は松本清張が本格文学（純文学）でデビューしたため、他の推理小説作家とは文体において決定的に違うことを指摘している。他の推理作家にはない完璧な文体と構成を備え、そこには「本格文学の薫り高い」「高級な面白み」があることも強調している。たんに推理小説という側面ではなく、あくまでも本格文学、純文学的な文体と経歴（芥川賞受賞）を借りて評価しているのである。純文学に対抗して大衆文学の価値を高める言説として清張文学が取り上げられているのである。これは推理小説が韓国で占めている位置を暗に示すものでもある。しかし、両者ともに清張文学が持つ社会意識などの主題的な側面に関しては言及していない。清張はあくまでも推理小説作家であり、それが従来の推理文学とは違い、純文学の「薫り」が高いという評価に止まっている。これが当時の韓国における松本清張に対するある程度共通した評価である。

要するに、当時の松本清張はあくまでも大衆文学の一分野である推理小説作家であった。前述の両者も松本清張の読者に面白みを提供する巧みな推理技法に注目しており、清張の作品がもつ社会的な視線、社会的な矛盾に対する洞察には無関心であった。こうした認識は当時において松本清張が韓国でどのように消費されたかをよく示す。清張の推理小説の面白さは日本ですでに検証されたもので、韓国の読者においても当然ながら面白く消費されるものであるという認識である。そのため、清張の面白い原作が文化的な違いによって韓国の読者に退屈にならないように、不要な箇所は削除し、場合によってはもっと面白く再構成してよいと判断したのである。清張文学に対する翻案が行われ、『大男』10 巻が組まれたのはこうした所以である。それが川端康成や三島由紀夫のような純文学を標榜する作家だったら 同様の現象は起こらなかったであろう。

このように、従前の韓国において松本清張はあくまでも大衆小説の一ジャンルである推理小説を代表する推理作家であった。芥川賞受賞作である「或る「小倉日記」伝」は明らかに推理小説ではなく、また『大男』（1976）に紹介された「人間密林」(箱根心中)、「生의 迷路（生の迷路）」(背広服の変死者)、「使徒行伝」(途上)、「숨쉬는 그림자（息づく影）」(影)、「発作」、「空白의 意匠(空白の意匠)」、「晩景」、「老衰期」(老春)、そしてハ・ユサン訳の『괘륜의 핏자국（悖論の血潮）』に訳載された「反射」なども本格的な推理小説とは言えないが（郷原宏の分類）、その個別性は認識されなかった。これらの作品も多少の推理的な要素があり、しかも他の推理短編小説と一緒に翻訳されたので、殆どが推理小説の枠に埋もれることとなった。ほかに長編社会小説の枠として『混声の森』が、長編恋愛小説として『波濤의 塔』(波の塔)が紹介されたが、それらの作品も以前の『点と線』や『ゼロの焦点』の延長線にある推理小説として認識された。つまり、松本清張=推理小説作家という認識が強烈に存在していたのである。

こうしたなか、著作権法導入期に『松本清張의 德川家康』（1992）という歴史物も紹介される。2000 年には清張の創作ノートである『黒い手帖』と日本の芸術家を紹介した『小説日本芸談』、さらにノンフィクション『日本の黒い霧』などが紹介され、松本清張文学の多様な側面が紹介され始める。著作権が確立した 2000 年代以降になると、松本清張文学の全体像が俯瞰できる作品が体系的に翻訳紹介されていく。

2012 年、ブック・スピアとモビーディックという二つの出版社が共同企画した「세이초 월드（清張ワールド）」シリーズに至ってようやく松本清張の作家的な位相と文学的意義が全面的に見直されていく。両社は清張の膨大な作品群から部分的に一二冊刊行しても意味がないという認

識から、両社合同で清張シリーズを構想したのである。「세이초 월드（清張ワールド）」シリーズに至って松本清張の全体像を紹介する多様なフィクションとノンフィクションが偏りなく翻訳紹介される。以前は文学性の低い推理小説作家として認識されてきたが、著作権法が整備さえた 2000 年代に入り、多様な領域の作品が体系的に翻訳され、日本を代表する作家としての位相と地位を確立しつつあると言える。これには推理小説に対する固定観念の変化も大きく起因していると思われるが、なにより著作権法の確立と活発な翻訳事業に負うところが大きいと思われる。

第２節　松本清張『大男』の翻訳刊行

1976年、松本清張の作品を全10巻に編んだ翻訳集『人間小説・大男』が三韓文化社から刊行される。松本清張文学の韓国語翻訳における画期的な出来事である。一人の作家に対してこれほど纏まった翻訳集が刊行されることは極めて珍しい現象である。清張文学への受容が沸騰していたのである。しかし、これほどの大がかりな翻訳であったにもかかわらず、原作者である松本清張に関する紹介と情報は極めて少ない。清張のどの作品を翻訳したものなのか、その原典も記されていない。表紙には「人間小説　大男、松本清張/文澔訳」というごく簡単な情報しか提示されていない。

『大男』に収録された作品は、清張の長編推理小説と中編推理小説、短編推理小説が中心で、いくつかの非推理系の短編小説が含まれている。当時としては珍しく豪華な洋装上製本の装幀で、一冊は概ね 450～480 頁の分厚いものであった。『大男』刊行以前の 1976 年までに翻訳された松本清張の作品は長編と短編を合わせて計 14 編ほどであった。「或る「小倉日記」伝」、「一年半待て」、「危険な斜面」、「薄化粧の男」、「証言」、「確証」、「捜査圏外の条件」、「偶数」、「黒い樹海」、「点と線」、「ゼロの焦点」、「地の骨」、「波の塔」、「眼の壁」程度である。しかし、『大男』全 10 巻には計 53 編が翻訳収録されている。以前に紹介されていない多くの作品が翻訳紹介され、あたかも松本清張の全集を思わせる大がかりな翻訳事業であった。松本清張に関する作品がこれほど纏まった形で刊行されたのは日本以外では類例がないかもしれない。まさに画期的な翻訳事業と言えよう。

『大男』は計 4 度に渡って刊行されているが、1976 年三韓文化社から 10 巻本が最初に翻訳刊行され、1978 年には良友堂から同じ版本の 10 巻本が再刊行される。そして 1982 年と 1983 年に良友堂から 6 巻本『大男』が刊行される。10 巻本の 1～6 巻までを分離したもので、6 巻本は各巻ごとに副題を付けている。第 1 巻は「野獣」、第 2 巻は「青炎」、第 3 巻は「女魔」、第 4 巻は「猪突」、第 5 巻は「劣悪」、第 6 巻は「女虫」である。副題は清張の原題とは全く無関係のもので、編者によって再構成された題名である。以下に全体の目録を紹介する。

2.1. 翻訳による再構成

表 23 『大男』の作品収録目録

原題名	韓国語題名	出版社	年度	備考
-	大男第1巻	三韓文化社	1976	
紐	끈（紐）			
喪失	喪失			
箱根心中	人間密林			
ある小官僚の抹殺	小官僚의 抹殺			
坂道の家	언덕길의 집（坂道の家）			
二階	二層의 天国			
形	定石法			
-	大男第2巻	三韓文化社	1976	
遭難	遭難			
危険な斜面	危険한 斜面			
誤差	誤差			
拐帯行	逃避行			
たづたづし	愛憎의 迷路			
鴉	까마귀（カラス）			
草	麻薬病棟			
背広服の変死者	生의 迷路（生の迷路）			
-	大男第3巻	三韓文化社	1976	
熱い空気	뜨거운 空気（熱い空気）			
濁った陽	灰色太陽			
天城越え	時効			
白い闇	白闇			
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 舟板			
-	大男第4巻	三韓文化社	1976	
事故	事故			
声	목소리（声）			
共犯者	共犯者			
地方紙を買う女	地方紙를 사는 女子 （地方紙を買う女）			
鬼畜	怪畜			

一年半待て	一事不再理	三韓文化社	1976	
途上	使徒行伝			
凶器	凶器			
-	大男第5巻	三韓文化社	1976	「点と線」の目次を省略し、中編小説程度の分量を減らしている。
点と線	点과 線			
寒流	寒流			
捜査圏外の条件	捜査圏			
影	숨쉬는 그림자（息づく影）			
額と歯	토막（切片）			
顔	얼굴（顔）			
(※眼の壁)	大男第6巻	三韓文化社	1976	『大男』第6巻は『眼の壁』を翻訳したものである。しかし、その事実を明らかにせず、原作とは違うを題名を付され、いくつかの小目次が追加されてあたかも短編小説集になっている。またそのように意図したのかもしれない
東京駅の一二等待合室	首脳会議			
自殺行	自殺行			
酒場・レッドムーン	追跡線			
殺人者	競馬			
拉致	拉致者			
玄人と素人	背後의 어둠（背後の闇）			
捜査の眼	正攻法			
美濃路の小さな町にて	交錯点			
捜査の前進	捜査前進			
中央アルプスの死者	事件速報			
湖岸の首吊り男	生命反応			
木箱と麻袋	巨大한 壁			
死の沸騰	告白書			
	大男第7巻	三韓文化社	1976	
断線	断線			
発作	脅迫反応			
支払い過ぎた縁談	二重幸運			
闇に駆ける猟銃	어둠을 달린 猟銃			
陸行水行	陸路水路			
肉鍋を食う女	人肉譚			
紙の牙	종이덫（紙の罠）			

	大男第8巻	三韓文化社	1976	
寝敷き	주름잡기（しわ直し）			
駅路	蒸発			
空白の意匠	空白의 意匠			
二人の真犯人	두 사람의 真犯(二人の真犯)			
小さな旅館	投資殺人			
種族同盟	種族同盟			
晩景	晩景			
老春	老衰期			
ベイルート情報	베이루트 情報（ベイルート情報）			
(※連環)	大男第9巻	三韓文化社	1976	『大男』第9巻は『連環』を翻訳したものである。しかし、その事実を明らかにせず、原作にない小題目をいくつも付け加えているのであたかも短編小説集のようにもみられる。またそのように意図したかもしれない。
	活字의 함정			
	殺人謀議			
	快楽上京			
	黄色出版			
	돈줄（金づる）			
	黒心			
	두번째 殺人			
	悪霊			
	危険信号			
	挿入文字			
	上申書			
(※ゼロの焦点)	大男第10巻	三韓文化社	1976	『大男』第10巻は『ゼロの焦点』を翻訳したものである。しかし、その事実を明らかにせず、原作とは違う小題目をいくつかも付け加えているのであたかも短編小説であるかのような印象を受ける。
ある夫	失踪된 男子			
失踪	그해 늦가을（その年の晩秋）			
北の疑惑	破壁			
地方名士	写真 두 장			
海沿いの墓場	証拠物			
義兄の行動	異常한 사나이（異常な男）			
前歴	남편의 과거（夫の過去）			
毒死者	屈従者			
北陸鉄道	소용돌이（渦）			
逃亡	輪廻의 소리（輪廻の声）			

夫の意味	再会	三韓文化社	1976	
雪国の不安	남편의 秘密			
ゼロの焦点	人間歴程			
	事件連発			
	黄昏			
	予感의 실마리（予感の糸口）			
	捜査難航			
	背後女人			
	自殺者			
	제2의 殺人（第二の殺人）			
	演奏曲			
	一人二役			
	秘話			
	警報気流			
	黒幕			
	壁 속의 눈（壁の中の眼）			
	突破口			
	바닷가 무덤（海辺の墓）			
	바보 寓話			
	大男1～10巻	良友堂	1978	『大男』(1976)の再版
-	大男第1巻　野獣	良友堂	1982	
紐	끈			
喪失	喪失			
箱根心中	人間密林			
ある小官僚の抹殺	小官僚의 抹殺			
坂道の家	언덕길의 집（坂道の家）			
二階	二層의 天国			
形	定石法			
-	大男第2巻　青炎	良友堂	1982	
遭難	遭難			
危険な斜面	危険한 斜面			
誤差	誤差			
拐帯行	逃避行			

たづたづし	愛憎의 迷路	良友堂	1982	
鴉	까마귀（カラス）			
草	麻薬病棟			
背広服の変死者	生의 迷路			
-	大男第3巻　女魔	良友堂	1982	
熱い空気	뜨거운 空気（熱い空気）			
濁った陽	灰色太陽			
天城越え	時効			
白い闇	白闇			
カルネアデスの舟板	카르네아데스의 舟板			
-	大男第4巻　猪突	良友堂	1982	
事故	事故			
声	목소리（声）			
共犯者	共犯者			
地方紙を買う女	地方紙를 사는 女子			
鬼畜	怪畜			
一年半待て	一事不再理			
途上	使徒行伝			
凶器	흉기（凶器）			
-	大男第5巻　劣悪	良友堂		
点と線	点과 線			
寒流	寒流			
捜査圏外の条件	捜査圏			
影	숨쉬는 그림자（息づく影）			
額と歯	토막（切片）			
顔	얼굴（顔）			
（※眼の壁）	大男第6巻　女虫	良友堂	1982	『大男』第6巻は『眼の壁』を翻訳したものである。しかし、その事実を明らかにせず、原典にない小題目を多くつけ加えたのであたかも短編小説のような印象を受ける。
東京駅の一二等待合室	首脳会議			
自殺行	自殺行			
酒場・レッドムーン	追跡線			
殺人者	競馬			
拉致	拉致者			

玄人と素人	背後의 어둠	良友堂	1982	
捜査の眼	正攻法			
美濃路の小さな町にて	交錯点			
捜査の前進	捜査前進			
中央アルプスの死者	事件速報			
湖岸の首吊り男	生命反応			
木箱と麻袋	巨大한 壁			
死の沸騰	告白書			
-	大男1～6巻	良友堂	1983	『大男』(1982)の再版

日本では松本清張作品が 1959 年から選集の形態で刊行されている。1959 年に東都書房から刊行された『松本清張選集（1～5 巻）』を皮切りに、1963 年から 1965 年の間に『松本清張短編全集（1～11 巻）』が光文社より刊行される。そして 1971 年からは『松本清張全集（1～38 巻）』が文藝春秋社から刊行されている。『大男』は日本でのこうした選集・全集の刊行に影響を受けたとも考えられる。しかし、『大男』は日本の選集・全集の形態をそのまま取り入れたのではなく、編集者の基準でもう一度選び直され、多くの追加や修正が行われ、さらに韓国的な文化と論理で再構成されている。こうした『大男』の刊行意図は当時の新聞広告にもよく現れている。

『東亜日報』に掲載された『大男』の広告（図 27）は、「お金、権力、女の人間感情をこの本を読む前には論ずることなかれ！」という刺激的な白抜きの文句で強調されている。『大男』がお金と権力、そして女に向かう人間の欲望を扱った小説であることを前面に打ち出しているのである。そして具体的に「大男の 13 人、彼らだけが悪魔の弟子なのか、あなたの周りに彼らはいないのか？」という質問が投げかけられ、13 名の悪魔の弟子がいかなる人物なのかを箇条書きで紹介する。

- 社会、女性、金、良心までを食い尽くす偉大な悪食家
- 一通の電話内容で不倫の死神を呼び出す電話交換嬢
- 大スターの夢に押されて虚無の殺人相を描く端役俳優
- 姦夫との蜜月のために夫を徐々に毒殺する妻
- 政界や財界の裏で大物の弱点につけ込む男
- 美貌と精力で社長夫人と会社を蝕む野獣
- 殺人的な技で女性を篭絡する脱サラリーマンの汚れた男
- 歓楽とプレイボーイで連続殺人劇を演出するホステス
- 社会の空気を凶器に変えて富を貪る千の顔の記者
- 自己欺瞞で学問と権力の間を遊泳する夜行教授
- ベッド上の熱気で財閥二世を攻略する猛烈女性
- 恋敵の情事現場を車輪の下に踏みつぶした男

● 裸女肉林の桃楽園を作って地獄行きになる財団総裁

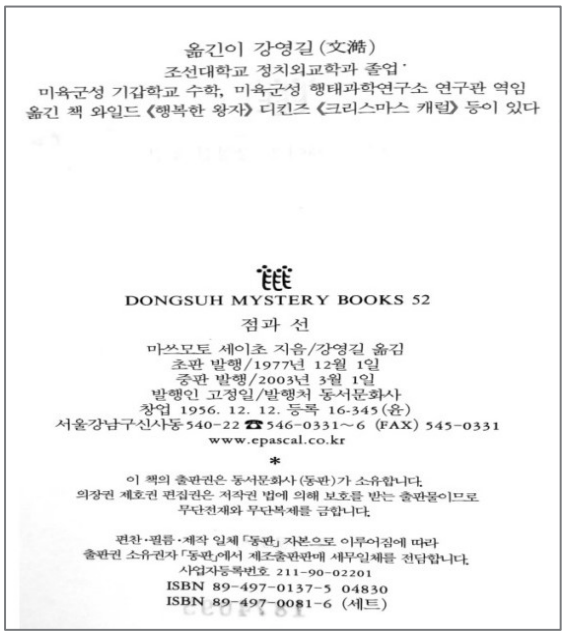
図 27 『大男』広告、『東亜日報』1977.3.22.

『大男』は歪な人間群像の欲望に注目する。女、金、不倫、殺人などの刺激的な事件を前面に出して読者の注意を引こうとする。じじつ、松本清張の推理小説には刺激的な事件が素材として多く使われている。しかし、事件自体に重要な意味があるのではなく、そうした事件を発生させる社会性が必ず問われている。平凡な個人が犯罪に駆り立てられる過程と社会構造が批判的に捉えられている。これが「社会派推理小説」と呼ばれる所以である。しかし、『大男』においては清張のそうした側面と意図は全く捨象される。『大男』の広告から見るように、松本清張が批判する社会構造の問題は消え、「夫を毒殺する妻」や「大物の弱点につけ込む男」、「殺人劇を演出するホステス」などのように刺激的な状況と個別的な悪徳だけが浮き彫りにされている。

こうした新聞広告を通して類推できるのは、『大男』10 巻は必ずしも松本清張文学と作家松本清張への強い興味から出発したものとは言えないかもしれないことである。売れる作家なら、あるいは松本清張の名前なら何でもよいという発想が強く透けて見えている。そのため、松本清張文学とはなんら関連性のない『大男』という題名を付けたのである。多くの作品題目も恣意的に変更されている。その結果、日本にも存在しない奇妙な選集もしくは全集が誕生したのである。ここに韓国での推理小説の位相と大衆の趣向がおのずと見えてくる。推測だが、『大男』という題名は、同時代に空前の人気を博した山岡荘八『徳川家康』の韓国語訳名が『大望』であり、『大男』は『大望』に対抗する意味で付けられたのかもしれないと思っている。販売と消費を前提にした題名である。 『大望』に対抗できる面白くて売れる小説が必要とされ、白羽の矢が松本清張に立てられ、清張の一連の推理小説が選ばれた可能性が高いのである。日本にはない読まれ方である。おそらく世界にも類例が少ないであろう。こうした行為は作家や作品に対する冒涜になるのか、創造的な敬意なのかを判断するのも難しい。

『大男』の翻訳者である文澔は姜英吉の筆名のように思われる。『大男』には原作者である松本清張に対する詳細な説明が付されていないが、翻訳者である文澔の経歴なども全く紹介されていない。松本清張の作品を 50 編以上も翻訳しているが、『大男』以外には文澔という翻訳者が活動した痕跡は見られない。しかし、1977 年に東西文化社から刊行された『점과 선（点と線）』

(図 28)の奥付に訳者が「姜英吉(文澔)」と表記されている。この奥付の内容は姜英吉と文澔が同一人物であることを示している。


옮긴이 강영길(文澔)
조선대학교 정치외교학과 졸업
미육군성 기갑학교 수학, 미육군성 행태과학연구소 연구관 역임
옮긴 책 와일드《행복한 왕자》디킨즈《크리스마스 캐럴》등이 있다

DONGSUH MYSTERY BOOKS 52
점과 선
마쓰모토 세이초 지음/강영길 옮김
초판 발행/1977년 12월 1일
중판 발행/2003년 3월 1일
발행인 고정일/발행처 동서문화사
창업 1956. 12. 12. 등록 16-345(윤)
서울강남구신사동 540-22 ☎ 546-0331~6 (FAX) 545-0331
www.epascal.co.kr
*
이 책의 출판권은 동서문화사(동판)가 소유합니다.
의장권 제호권 편집권은 저작권 법에 의해 보호를 받는 출판물이므로
무단전재와 무단복제를 금합니다.

편찬·필름·제작 일체「동판」자본으로 이루어짐에 따라
출판권 소유권자「동판」에서 제조출판판매 세무일체를 전담합니다.
사업자등록번호 211-90-02201
ISBN 89-497-0137-5 04830
ISBN 89-497-0081-6 (세트)

図 28 姜英吉訳の『점과 선 (点と線)』の奥付、翻訳者名が姜英吉(文澔)となっている

姜英吉は朝鮮大学校政治外交学科を卒業し、アメリカ陸軍省機甲学校で修学し、アメリカ陸軍省形態化学研究所の研究員を歴任したとされている。姜は清張以外にも多くの翻訳を行っているが、オスカーワイルドの『幸福な王子』、チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』を初め、アーネスト・ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』とマーガレット・ミチェル『風と共に去りぬ』のような英語小説も多数翻訳しており、アガサ・クリスティーの『趣味殺人』(セジン出版社、1990)も翻訳している。姜英吉(文澔)が日本語小説を翻訳したのは松本清張の作品が唯一である。訳業から見る限り、姜英吉は日本語と英語に精通した者とも思われるが、それは姜の不思議な経歴とともに明らかでない。英訳は日本語訳の重訳の可能性も高いが、姜の不思議な経歴からすると軽々に判断することはできない。きわめてユニークな翻訳者である。今日の感覚からすれば、翻訳者としての自己アイデンティティが薄いようにも感じられ、それがまた原作者の清張に対しても投影されているようにも思われる。文学はたんに消費物で、原作者や翻訳者の存在にそれほどの意味を感じていなかったようにも思われる。古典文学が一概にそうであるが、もしそうであるならば、これまた本質的な課題を投げかけている。

『大男』の装丁は洋装上製本で、褐色の単純な表紙の裏には華麗な色彩の挿絵が一枚挟まれている。そして個別の作品が紹介される前に、小説の核心的な内容を抜粋した文章と挿絵が添えられている。内容を予告するとともに読者の興味を誘発するための工夫と思われる。

『大男』には従来に翻訳紹介されていない清張作品が多く収録されている。『大男』第 1 巻には 2 編の中編推理小説「끈(紐)」と「언덕길의 집(坂道の家)」、ほかに 4 編の短編推理小説「喪失」、「小官僚의 抹殺」(ある小官僚の抹殺)、「二層의 天国」(二階)、「定石法」(形)に、短編小説「人間密林」(箱根心中)が掲載されている。これらの作品はいずれも初めて翻訳されたものである。

『大男』第 2 巻には計 8 編の作品が掲載されている。掲載作品は「遭難」、「麻薬病棟」(草)、「危険한 斜面(危険な斜面)」、「誤差」、「逃避行」(拐帯行)、「愛憎의 迷路」(たづたづし)、「까마귀(カラス)」(鴉)、「生의 迷路(生の迷路)」(背広服の変死者) などである。このうち、「危険な斜面」は李英朝が翻訳した松本清張短編集『殺意의 断層』(豊林出版社、1974)に同名の「殺意의 断層」という題目で翻訳紹介された作品である。それ以外はすべて韓国で初めて翻訳された作品である。『大男』第 3 巻は「뜨거운 空気(熱い空気)」、「灰色太陽」(濁った陽)、「時効」(天城越え)、「白闇」(白い闇)、「카르네아데스의 舟板(カルネアデスの舟板)」が載せ

られているが、いずれも韓国では初訳である。

『大男』 第 4 巻は計 8 編が掲載されている。「事故」、「목소리(声)」、 「共犯者」、「地方紙를 사는 女子(地方紙を買う女)」、「怪畜」(鬼畜)、「一事不再理」(一年半待て)、「凶器」(凶器)、「使徒行伝」(途上)である。このうち、「一年半待て」は「일 년 반 기다려 주세요 (一年半待って下さい)」(表文台訳、希望出版社、1966)や「일 년 반 기다려라 (一年半待ってくれ)」(李姓教訳、藝文館、1969)という題目で翻訳されたことがある。それ以外は初訳である。『大男』第 5 巻には計 6 編が掲載されている。「点과 線(点と線)」、「寒流」、「捜査圏」(捜査圏外の条件)、「토막 (切片)」(額と歯)、「얼굴 (顔)」、「숨쉬는 그림자 (息づく影)」(影)などである。このうち、『点と線』は 1961 年に李文賢訳として眞文出版社から翻訳紹介され、1963 年と 1974 年にも同じく李文賢によって弘益出版社から再刊行されている。しかし、『大男』に紹介された『点과 線』は作品目次と内容の一部が削除され、中編小説の分量に縮小されている。「捜査圏外の条件」は『殺意의 斷層 (殺意の断層)』(李英朝訳、豊林出版社、1974)に翻訳掲載されたものである。それ以外は初訳である。

『大男』 第 6 巻は長編推理小説『眼の壁』が翻訳紹介されている。『眼の壁』は以前に李敏載訳 (1975) として豊林出版社から刊行されている。しかし、『大男』第 6 巻は李敏載訳とは明らかに違う態度で翻訳されている。李敏載訳は原作を充実に翻訳しているが、文澔訳は目次を独自に構成している。

表 24 『眼の壁』と『大男』第6巻の目次比較

眼の壁	大男第6巻
東京駅の一二等待合室	首脳会議
自殺行	自殺行
酒場・レッドムーン	追跡線
殺人者	競馬
拉致	拉致者
玄人と素人	背後의 어둠 (背後の闇)
捜査の眼	正攻法
美濃路の小さな町にて	交錯点
捜査の前進	捜査前進
中央アルプスの死者	事件続報
湖岸の首吊り男	生命反応
木箱と麻袋	巨大한 壁 (巨大な壁)
死の沸騰	告白書

『眼の壁』と『大男』第 6 巻の目次を比較してみると、それぞれが 13 の章で構成されているが、章題には大きな相違がある。「東京駅の一二等待合室」は「首脳会議」 に、「酒場・レッドムーン」は「追跡線」に変更されている。翻訳者が自身の意図で章題をつけ、内容においても翻訳者が自己の意図で削除したり、変更したりしている。

『大男』第 7 巻には計 7 作が紹介されている。「断線」、「二重幸運」(支払い過ぎた縁談)、「어둠을 달린 猟銃(闇に駆ける猟銃)」、「陸路水路」(陸行水行)、「人肉譚」(肉鍋を食う女)、「종이덫(紙の罠)」(紙の牙)、「脅迫反応」(発作)である。すべてが初訳である。『大男』第 8 巻は計 9 作が掲載されている。「두 사람의 真犯(二人の真犯人)」、「주름잡기(しわ直し)(寝敷き)、「蒸発」(駅路)、「投資殺人」(小さな旅館)、「種族同盟」、「베이루트 情報(ベイルート情報)」、「空白의 意匠(空白の意匠)」、「晩景」、「老衰期」(老春)である。いずれも初訳である。

『大男』第 9 巻は長編推理小説『連環』を翻訳したものである。しかし、この作品が『連環』の翻訳である情報は見当たらない。目次も翻訳者が恣意的に構成しているため、一般読者が原作を知ることはできない。原作の題名が『大男』であると思われたであろう。『大男』第 10 巻は『ゼロの焦点』を翻訳したものである。しかし、『ゼロの焦点』の翻訳である情報は見当たらない。『ゼロの焦点』は 1961 年に李圭植訳として自由舎から初めて翻訳され、1974 年には李英朝訳(豊林出版社)と姜龍俊訳(河西出版社)が刊行されている。しかし、文澔訳の『大男』第 10 巻は原作とも違い、また以前に刊行された翻訳本とも大きく違うものである。

『大男』には計 53 編の作品が翻訳紹介されている。長編推理小説が 5 篇、中編推理小説が 7 編、短編推理小説 33 編、短編小説が 8 編である。このうち、「危険な斜面」、「一年半待て」、『点と線』、『眼の壁』、『ゼロの焦点』の 5 編が以前に翻訳されたことのある作品で、それ以外は初訳である。初訳の割合が非常に高い。ほぼ初訳に限定して翻訳した可能性すらある。以下、『大男』に収録された作品を郷原宏の分類基準に沿って整理し、原作を示しておく。

表 25 『大男』に収録された作品の分類

	長編推理小説	中編推理小説	短編推理小説	短編小説
1巻	-	끈(紐)	喪失	人間密林 (箱根心中)
			小官僚의 抹殺 (ある小官僚の抹殺)	
		언덕길의 집 (坂道の家)	二層의 天国(二階)	
			정석법(形)	
2巻	-	遭難 (遭難)	危険한 斜面(危険な斜面)	生의 迷路 (背広服の變死者)
			誤差,	
		麻薬病棟 (草)	逃避行(拐帯行)	
			愛憎의 迷路(たづたづし)	
			까마귀(鴉)	
3巻	-	뜨거운 空気 (熱い空気)	灰色太陽(濁った陽)	-
			時効(天城越え)	
			白闇(白い闇)	
			카르네아데스의 舟板 (カルネアデスの舟板)	

4巻	事故	-	목소리(声)	使徒行伝 (途上)
			共犯者	
			地方紙를 사는 女子 (地方紙を買う女)	
			怪畜(鬼畜)	
			一事不再理 (一年半待て)	
			凶器	
5巻	点과 線 (点と線)	-	寒流	숨쉬는 그림자(影)
			捜査圏 (捜査圏外の条件)	
			토막(額と歯)	
			얼굴(顔),	
6巻	眼の壁	-	-	-
7巻	-	断線	二重幸運 (支払い過ぎた縁談)	脅迫反応 (発作)
			어둠을 달린 猟銃 (闇に駆ける猟銃)	
			陸路水路(陸行水行)	
			人肉譚(肉鍋を食う女)	
			종이덫(紙の牙)	
8巻	-	두 사람의 真犯 (二人の真犯人)	주름잡기(寝敷き)	空白의 意匠 (空白の意匠)
			蒸発(駅路)	
			投資殺人(小さな旅館)	晩景(晩景)
			種族同盟(種族同盟)	老衰期(老春)
9巻	連環	-	-	-
10巻	ゼロの焦点	-	-	-

2.2. 『大男』の構成—中短編小説

『大男』に翻訳収録された作品は 1950 年代から 1960 年代半ばに発表された松本清張の推理小説と短編小説の計 53 編である。それを翻訳者自身が独自の基準で選定し、独自の基準で翻訳・翻案し、全体を再構成している。しかも原作を明らかにせず、翻訳者が任意で題名を大きく変えているため、原作を推定することは容易でない。長編の場合は題名自体が存在しなかったり、原

作の目次を削除したり、原作とは違う目次を作り上げているケースもある。また各巻ごとに作品を載せる基準においても統一性がない。長編小説と中編小説、短編小説が同じ巻に無作為的に入れられたり、『ゼロの焦点』『連環』のように一冊として編まれたりすることもある。長編小説の場合は、新たに小題目を設け、あたかも一連の短編小説のように工夫されてもいる。一方で、一冊にいくつかの短編小説を配置する場合は、各作品題目の前に、一番目の話、二番目の話、三番目の話等々と記している。しかし、長編小説の場合はこのスタイルを取らず、細部目次を構成し、その代わりにしている。じつに奇妙な翻訳企画である。

図 29 『大男』第2巻(左)と第6巻(右)の中表紙

『大男』第 1 巻にはすでに紹介したように、「끈(紐)」、「喪失」、「人間密林」(箱根心中)、「小官僚의 抹殺」(ある小官僚の抹殺)、「언덕길의 집(坂道の家)」、「二層의 天国（二階の天国）」(二階)、「定石法」(形)の計 7 編が収録されている。おもに 1950 年代に発表された中短編小説である。しかし、『大男』の編集方法は極めてユニークなもので、7 編の中短編小説はそれぞれが独立した作品であるにもかかわらず、それが、一番目の話、二番目の話、三番目の話などのように紹介されている。あたかもなんらかの関連性があるように編集されている。オムニバス小説を装っているのである。それによって関連のないものが無理矢理に関連付けられてしまうのである。いわば、点と点に無理な線が強制的に引かれている状態である。事件で言うと冤罪になるであろうか。そもそもなぜこのような方法が取られたのだろうか。

また『大男』の特徴として、作品が始まる前に冒頭作品の最も重要な内容を反映する挿絵が載せられていることが挙げられる（図 30~31）。たとえば、一番目の話である 「끈（紐）」には「格闘した痕跡がないのである。被害者は自身の両手、両足が相手に縛られるまで少しも抵抗しなかったのだろうか」という内容が提示され、これから展開される内容の肝心な謎の部分を読者に事前提供し、興味をそそっている。それに続く二番目の話である「喪失」（喪失）もこれまた同じである。「いつの間にか彼女をものにしていた自負心は揺れ動き、渦を巻く。それは執着なのか、意地なのか、悲哀なのか、訳の分からない複雑な心境であった」と紹介され、一人の男の執着によって事件が発生する話であることを推測させる。さらに三番目の話である「人間密林」（箱根心中）には「行動は戻るという考えと正反対であった。勇気の喪失が意志を失わせていた」

というような文句に、刺激的な挿絵が配置されている。四番目の話である「小官僚의 抹殺」（ある小官僚の抹殺）は縊死した男性の死体の隣に、「義理という旧い道徳が自己犠牲を美化する。彼を自殺に追い込んだのは数々の圧力と周りの狂信的な脅迫であった」という文章を付し、自殺男性に起こった事件の真相についての興味を惹起させている。

図 30 『大男』第1巻の一番目の話「끈（紐）」(左)と
二番目の話「喪失」(右)の挿絵

図 31 『大男』第1巻の三番目の話「人間密林」(箱根心中、左)と
四番目の話「小官僚의 抹殺」(ある小官僚の抹殺、右)の挿絵

五番目の話である「언덕길의 집（坂道の家）」は若くて綺麗な女性と老いて醜い男を対比させた挿絵に、「殺意は意識のある瞬間から生まれたものであろう。人間の意識の不動状態を的確に捉えてそれを明快に指摘することはできるのだろうか」という作品文中の一節を紹介し、殺人を予感させる。六番目の話である「二層의 天国」（二階）は恐怖を感じさせる挿絵に、「何かの脅威を二階から感じた」という内容を添えて緊張感を抱かせる。七番目の話である「定石法」（形）は埋蔵された人間と逃亡者を上下に配置し、「異臭は強い。三ヵ月前に埋めたと雖もその上には樹木と雑草は茂るであろう」という内容を添え、殺人事件の形態を真相解明に対する読者

の興味を煽り立てている。

小説が始まる前に小説内容を予見する挿絵と核心内容の提示は、作品内容を予見させて期待を高める方法と思われ、『大男』全 10 巻に一貫して見られる。このように、『大男』は全体が一つの統一的な方針で編集されている。それは長編と短編が混じっている場合にも全体を題目の『大男』のシリーズの一部として統一を図った。そして一連の話は個別な話ではなく、それらが全体的に関連するものとして無理に意義付けられている。そうした統一性を図る重要な手段の一つが同じ画家によって描かれた同一パターンの挿絵である。当時、一大ブームを起こした『大望』（山岡荘八『徳川家康』）が連続する歴史ものとして完結していたことに対抗し、『大男』も連続する推理小説として完結していることを強引に強調したかったのかもしれない。その手法として『千夜一夜』や『デカメロン』の構成方法を借りたのかもしれない。わざわざ 10 巻本の完結体にしたのもそうした心理があったのかもしれない。

2.3. 『大男』の構成―長編小説

すでに述べたように、『大男』は松本清張の選集もしくは全集の形態であるが、作品は出版社や翻訳者によって再構成されている。そのため、個別作品の原題においても多くの変更が多く見られる。短編小説の半分以上が原題とはいささか違う題目になっている。読者が清張の原作を知ることはほぼ不可能である。

長編小説だけで一冊を構成している『大男』第 6 巻、第 9 巻、第 10 巻は表紙に原題が付されていない。読者からすれば、いずれの作品も題目は『大男』ということになる。翻訳本の章題においても原題の章題とは全く違うものを付されている。『점과 線（点と線）』の場合は最初から章題をすべて削除し、内容の一部を削除し、あたかも中編小説のように縮めている。他方、『눈의 壁（眼の壁）』や『연환（連環）』、『제로의 焦点（ゼロの焦点）』は任意で章題を設け、それが一連の短編小説であるかのように編まれている。章題の本文内容が始まる前には以前の短編小説集で行われていたように、該当章題の核心的な内容を挿絵と文章で提示し、読者に一定の情報と方向性を前もって示している。読者の興味を煽り立てる意図と思われるが、 翻訳においてはじつに重大な変更である。

図 32 『大男』第10巻の中表紙

こうした諸々の点から『大男』は必ずしも清張文学の紹介を目的としているようには思われない。松本清張の本来の文学的造形の紹介ではなく、編集者や翻訳者が望み、そうあるべき松本清張の造形が新たに造り出されたともいえる。極言すれば、翻訳者や編集者においては松本清張文学が真に必要だったのではなく、『大望』全 10 巻に匹敵する販売成績が期待される『大男』全 10 巻がほしかったのかもしれない。その役目を松本清張文学が担わされた観もある。極端な営利目的で企画された側面が強いのである。そのため、原作は再構成され、短編も連作小説であるかのように再編集されたのであろう。以下に『大男』第 10 巻である『제로의 焦点』（ゼロの焦点）の細部目を紹介する。

表 26 『ゼロの焦点』と『大男』第10巻の目次

『ゼロの焦点』	『大男』第10권
ある夫	失踪된 男子（失踪した男）
	그해 늦가을（その年の晩秋）
失踪	破壁
	写真 두 장（二枚の写真）
	証拠物
北の疑惑	異常な한 사나이（異常な男）
	남편의 過去（夫の過去）
地方名士	屈従者
	소용돌이（渦）
海沿いの墓場	輪廻의 소리（輪廻の音）
	再会
義兄の行動	남편의 秘密（夫の秘密）
	人間歴程
前歴	事件連発
	黄昏
毒死者	予感의 실마리（予感の糸口）
	捜査難航
北陸鉄道	背後女人
	自殺者
逃亡	제2의 殺人（第2の殺人）
	演奏曲
夫の意味	一人二役
	秘話
雪国の不安	警報気流
	黒幕
	壁 속의 눈（壁の中の眼）
ゼロの焦点	突破口
	바닷가 무덤（海辺の墓）

両者の比較で分かるように、原作『ゼロの焦点』での細部目次は全く考慮されず、翻訳者が任意で新たに目次を作っている。当初の目次は分割され、新たな目次が多く生まれている。これは『大男』に翻訳された長編小説の共通した特徴でもある。一方で短編の場合は、すでに指摘したように、一番目の話、二番目の話、三番目の話というふうに、話の前に連番が設けられている。しかし、長編小説においてはこうした連番が設けられず、章題だけが提示されている。そして各章題の間に作品内容を象徴する挿絵が付されている。短編小説の場合は短編ごとに挿絵が添えられているが、長編小説においては翻訳者が任意で区分けた目次ごとに挿絵と核心的な文章が添えられている。『ゼロの焦点』の場合、原作には 13 の章題が存在するが、翻訳本はそれが 29 に増えている。それであたかも 29 個の短い短編が並んでいるようにさえ見える。各章が始まるところでは挿絵が付され、その挿絵には内容の核心的な文章が紹介されている。

図 33 『大男』第10巻の挿絵

もう一つの特異な点は、『大男』第 10 巻は長編小説『ゼロの焦点』だけを収録したものであるが、巻末には原作にない「바보우화(阿呆な寓話)」という小話が付け加えられていることである(図 34)。「巻末話」とは表記されているが、一般読者には『ゼロの焦点』に連続する話として受け止められた可能性がある。それが『ゼロの焦点』とは全く無関係の話であることを見分けるのはやや難しい。おそらく本の分量を考慮してつけ加えたのであろう。『大男』10 巻は分量が 450～480 頁で一定している。この分量を考えて長編小説と中編小説、短編小説を一冊に配置してのであろう。一冊の長編小説で構成されているのは『大男』第 6 巻、第 9 巻、第 10 巻であるが、第 10 巻の『ゼロの焦点』だけはやや分量が足りず、致し方なく「阿呆な寓話」を付け加えて編集したのであろう。清張作といわれる「阿呆な寓話」の原題は不明である。

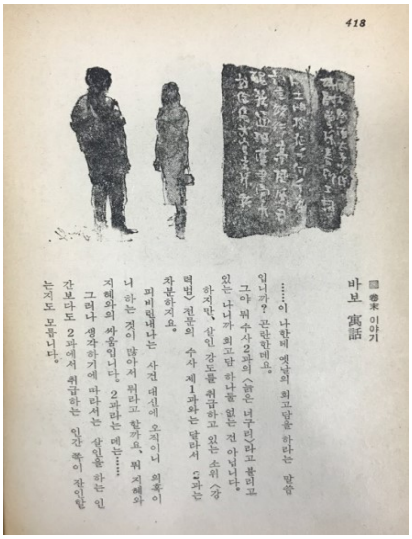

418
바보 寓話

図 34 『大男』第10巻の巻末話「**바보우화**(阿呆な寓話)」と挿絵

このように、『大男』はじつに奇妙な性質の翻訳集である。翻訳者と編集者の意図が強く介在された類例の少ない翻訳集といえる。正確に翻訳した箇所もあり、強引に削除したり、加味したり、場合によってはバラバラに分割されたりもする。一方では装丁に懲り、膨大な挿絵を使うなど、かならずしも安上がりを目指しているのでもない。努力の軽減を図ったとも思えないのである。そのまま単純に直訳したほうが、再構成をするよりは遥かに労力が削減されるのであろう。そうした意味ではまことに不思議で、また珍しい翻訳体系である。しかし、こうした現象は商業利益を図る過程で生まれたことは間違いないであろう。商業主義がもたらした一つの歪な翻訳形態とも言えるが、他方では翻訳者と編集者が自己の目的と意図をこれほど強く投影している点には翻訳の本質における重要な問題を投げかけている。翻訳と編集とはなにかを強く考えさせられる。おそらく世界でも類例が少ない試みであろう。

他方、翻訳者と編集者がこれほどまでに原作を再構成したのは、当時の推理小説をめぐる韓国の状況を反映しているようにも思われる。つまり、推理小説が置かれた位相である。純文学であったならばこのような改編は存在しえなかったと思われ、そもそもこれほどの長大な規模で翻訳刊行されることもなかったであろう。商業主義に耐えうる作品として判断されたので、全 10 巻ものの高価な翻訳集がで刊行されたのであろう。読者に面白みを与え、商業利益が担保されると判断されたので、松本清張が選ばれ、膨大な歪な努力が注がれ、少なからぬ出版資本が投入され、それに見合う結果を得ようとしたのであろう。こうした事情は韓国の読者層が求める 1976 年における推理小説の位相を反映するものであろう。

松本清張翻訳集『大男』が含む問題はじつに多岐にわたる。『大男』の意義と評価については今後において詳細な研究分析が必要であろう。

第３節　社会派推理小説と韓国語翻案

日本のベストセラーの翻訳が過熱を帯びていく 1980 年代、いくつかの出版社が同じ原著をほぼ同時期に刊行する現象が頻繁に起こる。例えば、日本でミリオンセラーを記録した田中康夫『なんとなく、クリスタル』（1980）の場合、五つの出版社が同時に翻訳刊行して大きな話題にもなった。著作権契約による独占翻訳が守られなかったからである。こうした競争的な翻訳は多様な翻訳を妨げ、出版社自身の収益にもよい結果をもたらすものではなかった。これに差別化を図るため、流行作の一部または全体を改作した翻案物が推理小説界に登場し始める。

1980 年代は韓国で推理小説に対する興味が急増していた時期でもある。『미스터리（ミステリー）』という推理小説専門の雑誌が刊行され、黄皙英、朴範信、趙善作などの中堅作家たちが推理小説を創作し、推理技法を応用した作品を発表した。こうした流行のなか、既存の翻訳本が再刊行され、また既存のものと差別化を図るために翻案物が制作される。そのよい対象になったのが松本清張である。松本清張の名を冠した翻案物は 1984 年から 1987 年まで『처녀地 살인計（処女地殺人計）』、『미인計의 함정（美人計の陥穽）』、『第五의 그림자（第五の影）』、『아내의 추적（妻の追跡）』、『目撃者』、『사기단 25 時（詐欺団 25 時）』などが刊行された。翻案者は共通的に「翻案小説」 を以下のように説明する。

> 人名、地名、生活様式または作品の筋を翻案者の意図から書き直す行為を言います。…[中略]…こうした観点から最近の若者に民族的な異質感を抱かせる人名や地名、生活様式をそのまま翻訳するよりは読むことに抵抗感がないよう、日本で最も人気のある推理作品を翻案しました。

翻案者は「翻案者の意図から書き直す」ことを強調しながらもその対象が「日本で最も人気のある推理作品」であることを強調する。そしてその作家として松本清張を取り上げ、「松本清張が心血を注いだ力作」であり、「複雑な現代社会の断面を浮き彫りにした」いわゆる「社会派推理小説」であると紹介している。要するに、読者は翻案者の名前で購入しているのではなく、それが松本清張の推理小説であるから購入している。そのため、表紙には翻案者よりはそれが「松本清張長編推理小説」である点が強調される。奥付、表紙の裏側に作家の写真を配置する時にもこの点が強調される。要するに、松本清張という名前が必要だったのである。しかし、他方では原作の題目を勝手に変更し、内容を大きく変え、あたかも『처녀地 살인計（処女地殺人計）』、『미인計의 함정（美人計の陥穽）』、『第五의 그림자（第五の影）』、『아내의 추적（妻の追跡）』、『目撃者』、『사기단 25 時（詐欺団 25 時）』という題目の松本清張の小説が存在しているかのように読者を誤解させている。相矛盾しているようにも思われるが、これは当時の推理小説ブームの中における一つの販売戦略であったと思われる。1984～1987 年の間にこうした翻案書が刊行され、再版されていたことは、こうした販売戦略がある程度有効であったことを示している。もちろんそれは松本清張に限られる現象なのかもしれない。

松本清張の作品が韓国の実情に合うように翻案されることで発生した大きな問題は、清張文学が持つ社会派推理小説の側面が大きく弱められたことである。日本の文化的要素を含む社会問題

が、韓国の文化的事情では機能せず、また文化的側面はしばしば削除の対象になるので、それに含まれていた当初の社会性も消えてしまうのである。また翻案過程においては韓国の読者が気軽に読むことが優先され、複雑な推理的叙事は簡略化され、主人公の活劇がいたずらに強調される結果となる。清張の意図する方向性とは逆の方向になってしまう現象が起きている。以下、それをいくつかのパターンに分けてみていく。

3.1. 『処女地殺人計』の系列

『처녀地 살인計(処女地殺人計)』系列の翻案物は松本清張の作品をはじめて翻案したものである。 1984 年金旭翻案で出版社文教から刊行され、1987 年には同出版社から再版されている。ほかにも同じ内容が 1984 年には『美人計의 陷穽』という題目で二度刊行されているが、それぞれ金輝文翻案と金聖鍾翻案になっている。そのため、金旭、金輝文、金聖鍾があたかも同一人物のようにも思われる。金輝文の場合はその素性を把握することは困難であるが、金旭は記者出身の翻訳者で、金聖鍾は韓国推理文学を代表する作家であり、少なくとも金旭と金聖鍾は別人である。

金旭翻案『처녀地 살인計(処女地殺人計)』には翻案者のはしがきがある。翻案者の金旭は、「この作品は松本清張の「『검은 바다나무(黒い樹海)』」を翻案したものである」と明らかにしながら、「原著があまり膨大であり、日本的な趣向が強い」ので、韓国の読者のために「人名や地名、生活風習などのすべて変更した」と述べている。金のはしがきを見る限りにおいては『処女地殺人計』が『黒い樹海』の翻案物となっているが、実際の内容を検討すると両作は全く違う。訳文は日本文を直訳したようなものであるが、訳文の箇所を『黒い樹海』から見つけることは容易でない。しかし、書籍の表紙には「松本清張原作」であると記され、「日本最高ベストセラーの推理小説を選んで翻案」したことをアピールしている。両作を比較し、以下の表に示す。

表 27 『黒い樹海』と『처녀地 살인計 (処女地殺人計)』の比較

区分	黒い樹海	처녀地 살인計(處女地殺人計)
目次	1.その姉	1. 妻の死
	2.病院の壁	2. 代理店の女性
	3.バスの座席	3. 疑問の坂道
	4.入社の目的	4. 妻の外出
	5.寄稿家廻り	5. 単独調査
	6.遇った人々	6. 高級住宅街の旅館
	7.歓待	7. ソウルの地震
	8.殺人	8. 妻が残した時調
	9.協力者	9. 新しいホテル
	10.リスト	10. 三月七日
	11.影	11. 興信所の報告書
	12.黒い彷徨	12. 秘密の寝室
	13.波高島からくる列車	13. 馬山療養所

	14.事件の個性	14. 最後のあがき
	15. 誰が知っていたか	15. 瞬間の殺人
	16.犯人の資格	16. 私は潔白である
	17.自家用車の疑惑	17. 危険な罠
	18.核	18. 週末
	19.バスの客	
	20.二つの顔	
	21.終章	
名前／特徴	笠原祥子／商事会社の社員	（オム・ジュヒョン（엄주현） ／XX部の食糧課の係長
	笠原信子 ／笠原信子の姉、R新聞社文化部の記者	ミョンヒ（명희） ／オム・ジュヒョンの妻、詩人
	西脇満太郎／Q病院の小児科の医長	パン・ミョンジュン（판명준） ／繊維会社の総務部長、お金持ち
	妹尾郁夫／評論及び翻訳家	キム・ミラ（김미라） ／ミラ化粧品専門店の女主人
中心地域	東京	ソウル市
主人公が訪ねる場所	山梨県西八代郡下部町波高島	主人公は妻の頻繁な外出には気づいているが、その行き先には分からない。
主人公の家族が殺害された場所	静岡県浜松市	ソウル市の城北洞
主人公家族の持病	（なし）	心臓病
家族の死亡に対する主人公の疑い	姉が行くと言った正反対の場所で姉が死亡した点と姉の定期券入れが無くなった点	城北洞は妻に縁故のない場所で、妻は心臓病の持病があるので坂道は絶対に登らないが、妻が坂道を歩く時に死亡した点
家族の死亡原因に対する主人公の推理	姉と同行した人物がいたが、なんらかの事故が発生し、自身が現場にいたことを隠蔽するために姉を放置して逃亡したと推測。	妻との不倫関係の男がソウル城北洞の近くにいたが、妻が突然に心臓発作を起こしたので不倫事実の発覚を恐れて妻を放置したまま逃亡したと推定。
事件の真相を突き止める推理課程	主人公が事件現場を調査し、吉井の助力で事件の真相を明らかにする。	興信所に依頼して事件と関連する情報を集め、真相を明らかにする。
結末	犯人は逮捕される。	主人公は妻と不倫関係にいた男を殺害し、自身は逃亡する。

表27の比較で分かるように、両者には様々な相違がある。『처녀地 살인計（処女地殺人計）』の主人公はXX部の食糧課係長であるオム・ジュヒョン（엄주현)で妻が犠牲者になっているが、原作では姉妹関係の姉が犠牲者である。オムは地方の出張中、妻のミョンヒ（명희)が城北洞の坂道で心臓発作を起こして死んだ知らせを受ける。オムはこれに疑問を懐く。妻は心臓病の持病が

あって普段は坂道を歩かないこと、時調(韓国の定型詩)と東洋画を習いに外出することはあっても城北洞には全く縁故がなかったからである。その疑問からオムは妻の死の真相を求めて城北洞の一帯を探索する。その過程で城北洞の高級住宅街の周辺に旅館が多いことを発見し、ミョンヒがここで不倫相手と逢引の途中で心臓発作を起こして死んだのではないかと疑う。不倫相手は社会的な立場と面子からミョンヒを病院に連れて行かず、放置したに違いないと推測する。この疑問からオムは妻の不倫相手を探し、事件の真相を明らかにするために犯人を追跡する。両作の類似点は親族の不自然な死について追跡する基本枠組みだけである。

事件の展開においても両作には大きな相違がある。『처녀地 살인計（処女地殺人計）』では主人公が事件の真相を明らかにするキーポイントとして妻が作った時調に登場する「蘇民将来」と「山麓灯籠」という日本の民芸品と事件当日に（3月7日)にソウルで地震が発生した点が挙げれる。しかし、民芸品も地震も原作『黒い樹海』には登場していない。翻案者が意図的に作り替えた部分である。しかし、翻案には独創性さえ疑う無理な改変が多い。蘇民将来や山麓灯籠は韓国には馴染のない民芸品であり、そもそも2000年代まで韓国は事実上の「地震安全国」と呼ばれるほど地震とは無縁であったからである。さらにパン・ミョンジュン（판명준)が自身にはなんの罪もないと強弁しながら、「姦通罪は我が国の刑法から消えている」とも言っているが、これは出版当時の韓国の事情とも符合しない。日本の場合、1947年の刑法改正から戦前の姦通罪が廃止されたが、韓国では姦通罪が2015年に違憲判定を受けるまで、刑法上において合憲だったのである。こうした様々な点から『처녀地 살인計（処女地殺人計）』の原作は翻案者が主張する松本清張『黒い樹海』ではないと考えられる。全体の内容から見ると原作は明らかに松本清張『聞かなかった場所』(1971)である。

なぜこうした重大な間違いが発生したのだろうか。1984年、金旭は出版社文教から『처녀地 살인計（処女地殺人計）』を初め計3編の松本清張作品を翻案しているが。そのなかには松本清張『黒い樹海』を翻案した『第五의 그림자（第五の影）』が存在する。『처녀地 살인計（処女地殺人計）』と『第五의 그림자（第五の影）』のはしがきを見ると、共通して「松本清張の「『검은 바다나무(黒い樹海)』」を翻案した」とされている。もちろん実際においてはそれぞれ清張の別の作品である。このような間違いを今日の出版感覚で論理的に説明するのは難しい。翻案者や出版社によるたんなるミスなのか、あるいは「黒い樹海」を原題に仕立てたほうが有利ななにかがあったのかは定かでない。しかし、こうした誤記は1987年の再版だけでなく、1984年に刊行された金輝文翻案『美人計의 陥穽』と金聖鍾翻案『美人計의 陥穽』においてもそのまま踏襲されている。明確で重要な間違いであったにもかかわらず、それが修正されずそのまま再コピーされ、刊行されたのである。

こうした現象は、第2章第１節で指摘したように、著作権法未導入期という時代とも関係しているように思われる。翻訳図書を刊行する出版社は大半が小規模の零細出版社であった。1980年代に入って翻訳物の出版競争は過熱化し、それによって出版社の経営状況は悪化していく。翻案小説の刊行はこうした状況を打開するものとして生まれたものと思われる。原作の内容的な縛りに捉われることなく、また煽情的な翻案題目を自由に付けることができるからである。『처녀地 살인計(処女地殺人計)』が1984年だけで3回も刊行され、その過程で煽情的な別の題目が付けられ、翻案者と表紙を変えられ、あたかも別の作品であるかのような偽装が行われているのである。

しかし、多くの偽装にも関わらず、あるいはそうであればあるほど、原作者の重要性は増していく。原作者の名前に商品価値が発生するのである。たとえば、『처녀地 살인計(処女地殺人計)』

と 『美人計의 陷穽』の表紙は全く違うが、両方とも「日本最高のベストセラー推理小説作家」としての松本清張の名前を前面に出している。松本清張の名声に便乗することが重要だったのである。幸いに、集中的に翻訳された「或る「小倉日記」伝」や『点と線』などの一部有名作を除けば、松本清張の作品はそれほど紹介されていない状態であった。わりと知名度のある『黒い樹海』は1974年以降に何度か翻訳されたが、その韓国語題目が『共犯者』であり、『黒い樹海』という原作名はまだ新鮮なイメージがあると判断したのかもしれない。他方、『처녀地 살인計(処女地殺人計)』の原作である『聞かなかった場所』は一度も翻訳紹介されたことのない作品であった。したがって、やや知名度の落ちる『聞かなかった場所』という題目を前面に出すより、やや知名度のある『黒い樹海』を原作として利用した可能性も想像できる。もちろんたんなる誤記の可能性も高いが、いずれにせよ、原作の題名などはさほど重要でなかったと思われる。重要なのは、それが新しい「松本清張原作」であることだったであろう。『처녀地 살인計(処女地殺人計)』系列の作品に反復的に見られる原作誤記の間違いはこうした時代相の一側面をよく示しているように思われる。

3.2. 『第五의 그림자（第五の影）』系列

金旭翻案『第五의 그림자（第五の影）』(1984)は松本清張の『黒い樹海』を翻案した作品で、原典にわりと忠実な翻案である。もとより翻案という規定は曖昧で、どこからが翻案でどこまでが翻訳なのか、その境界線は定かでない。訳の改編程度によって創作に近かったり、翻案に近かったり、直訳に近かったりする。翻案と翻訳は究極的に突き詰めれば、原典に向かう訳者の態度・姿勢によって決定されるものなのかもしれない。こうした観点からすると、『第五의 그림자（第五の影）』の態度と姿勢は極めて翻訳に近い翻案という線上に位置するであろう。というのは、人名や地名に限るごく一部が韓国風に置き換えられているからである。

以下、比較のために『黒い樹海』と『第五의 그림자（第五の影）』の目次を紹介する。

表 28 『黒い樹海』と『第五의 그림자（第五の影)』の比較

区分	黒い樹海	第五의 그림자（第五の影）
目次	1.その姉	1. 第５の影
	2.病院の壁	2. 口を閉じた姉
	3.バスの座席	3. 事故の秘密
	4.入社の目的	4. 糸口を探すため
	5.寄稿家廻り	5. 隠れている犯人たち
	6.遇った人々	6. 暗い影
	7.歓待	7. 過剰な親切
	8.殺人	8. 殺人
	9.協力者	9. 闇の中の光芒
	10.リスト	10. リストの人々
	11.影	11. 追われる黒い影
	12.黒い彷徨	12. 霧の中の影
	13.波高島からくる列車	13. 帰り来ぬ証人

	14.事件の個性	14. 事件の個性
	15. 誰が知っていたか	15. 誰が知っていたか
	16.犯人の資格	16. 犯人の資格
	17.自家用車の疑惑	17. 自家用車の行方
	18.核	18. 捉えられた核
	19.バスの客	19. 二つの顔
	20.二つの顔	
	21.終章	20. 最後の章
名前 ／職業	笠原祥子／主人公、商事会社の社員	キム・ヨンイ（김영이） ／主人公、貿易会社の社員
	笠原信子 ／笠原信子の姉、R新聞社文化部の記者	キム・ソンイ（김선이） ／キム・ヨンイの姉、R新聞社文化部の記者
	斎藤常子／浜松の丸藤食堂の女中	イ・スンドク（이순덕） ／水原のゲミ食堂の女中
	大島卯介／R新聞社文化部長	文化部長(名前なし)／R新聞社文化部長
	神谷良三／R新聞社文化部の次長	オム次長（엄 차장)／R新聞社文化部の次長
	町田知枝／R新聞社文化部の記者	キム・ミヘ（김미혜)／R新聞社文化部の記者
	吉井／R新聞社社会部の記者	ヨム記者（염 기자)／R新聞社社会部の記者
	妹尾郁夫／評論及び翻訳家	ハン・ギルナム（한길남)／評論・翻訳者
	高木とく子／評論家	ベク・ナンヒ（백난희)／評論家
	高木利彦／高木とく子の夫、彫刻家	バク・ゾンシク（박종식)／彫刻家
	佐敷泊雲／生花の大家	イ・ギュテ（이규태)／生花の大家
	関谷／佐敷泊雲の秘書	ホン・ナンスン（홍난순)／イ・ギュテの秘書
	内牧淳子／洋裁学院の院長	イ・ソンエ（이성애)／洋裁学院の院長
	内牧淳子の夫、洋裁学院の理事長	洋裁学院の理事長
	倉野むら子／デザイナー	シン・ドンエ（신동애)／デザイナー
	下田	ミスターチェ（미스터 채）
	宇野より子／デザイナー	チェ・ミョンファ（최명화)／デザイナー
	鶴巻莞造／宇野より子の夫、画家	ミン・ワンシク（민완식)/ チェ・ミョンファの夫、画家
	西脇満太郎／Q病院の小児科の医長	イム・ゾンホァン（임종환)／Q病院の小児科長
	上田／医者、西脇満太郎の弟子	ミスタークァン（미스터 권)／医者、イム・ゾンホァンの弟子
	ジョージ・バウエル ／横浜のアメリカ商社マン	ジョージ・バウエル（조지 파월） ／仁川(インチョン)のアメリカ商社マン
主人公の家	このアパートは高台にあって、それに祥子の部屋は三階だから、窓からは大久保や新宿方面の灯が海のように下に拡がって見えた。	キム・ヨンイが住んでいるアパートは南山の麓にある高台にあったので漢江が一目下に眺められた。キム・ヨンイは3階に住んでいた

地名	東京	ソウル市
	東北の仙台	忠清南道の大田市
	静岡県 浜松市	京畿道の水原市
	山梨県西八代郡下部町波高島	京畿道漣川郡全谷里
	東京都北多摩郡狛江町和泉附近 多摩川河畔	ソウル市のトゥクソム堤防
	銀座	ソウル市の明洞
	熱海	慶尚南道の釜谷
	京都	京畿道の山井湖水
	大阪	釜山市
	名古屋	大邱市／京畿道の安陽市
	矢野口駅	京畿道の東豆川駅
会社名	南遠交通	南遠交通
その他	定期入れ	통근패스(通勤パス)

金旭翻案の『第五의 그림자（第五の影）』は以前に韓国で翻訳された翻訳本を参照したものではなく、原文から直接翻案したものである。これは韓国で『黒い樹海』の最初の翻訳本である李英朝『共犯者』（1974）と比較すると一目瞭然である。文章表現に明らかな相違があり、李英朝が時々省略した文章を丁寧に訳している。また表28で分かるように、目次や登場人物においても『黒い樹海』とほぼ一致しているので、翻案の度合いは低い。翻案者の金旭は原作の筋や構造、文章をそのまま維持しながら日本の人名・地名を韓国風に変更している。原作に充実な翻案と言える。あるいは翻訳に近いかもしれない。しかし、翻案者が原文の地名、人名、一部の文化表現を韓国風土に合わせていく作業は原文に充実であればあるほど別の問題が発生する。地名の場合で言うと位置によって移動の距離が合わなくなる問題である。それが場所と風土と時間差のトリックを生命線とする清張の推理小説には致命的な欠陥をもたらす。時間差の盲点が盲点にならず、時刻表によるアリバイが当初から成立しなくなるのである。

図 35 ソウル，水原，大田の位置

推理小説として致命的な欠陥が発生する。場所が持つ風土性は消滅してしまう。『第五의 그림자（第五の影）』は原作に近い翻案であるが、そのため物語としては多くの欠陥を発生させている。原作に忠実であればあるほど荒唐無稽なストーリーとして原作と乖離していくのである。

例えば、『第五의 그림자（第五の影）』における姉のバス事故がそのよい例になる。姉がバス事故に遭遇したのは原作の静岡県浜松市から水原市に置き換えられているが、これは原作での時間と距離を十分に反映するものではない。致し方なく、適当な韓国の地名を利用せざるを得なかったであろう。そのため、原作とは大きな相違をもたらす。原作では姉の事故が、姉が当初計画した東北地方の旅とは反対の方向である浜松で起きたので女主人公の疑念を呼び起こす。浜松に行った理由が分からなかったからである。しかし、韓国の水原は姉が旅を計画した大田とは反対方向ではない。水原は

主人公が住んでいるソウルから大田に向かう中間地点の経由地だからである。そのため、主人公が姉の事故死に疑問を抱くのは韓国の読者には奇怪に思われる。このように事故場所が変更された結果、主人公が事故現場に移動する時間も変更されるが、それが直訳を引きずられたため、さらに理解不能の現象が起こる。両作においてその移動の時間を整理すると以下のようになる。

表 29 『黒い樹海』と『第五의 그림자（第五の影)』の移動時間と経路の比較

黒い樹海	第五의 그림자（第五の影）
9/10、18：00　バス事故発生 9/11、20：00 電報を受けた祥子は東京駅に移動 21：00頃、東京駅に到着 21：15発急行、(02：05、浜松到着予定) 9/12、02:00頃、浜松駅到着	9/10、18:00、バス事故発生 9/11、20:00 電報を受けたヨンイは水原に向かう 21:15、水原行22：00に乗車するためタクシーに乗る。 22:00 水原駅到着

水原はソウルの近郊に位置しているので主人公は電報を受けた当日に事件現場に到着することができる。しかし、翻案過程でこれを緻密に修正できなかった結果、あるいは原典を重視してそれに引きずられたため、いくつかの誤謬が発生する。たとえば、翻案本ではソウル駅 22 時発水原行きの電車に乗るため、21 時 15 分にソウル駅に向かうタクシーに乗ったことになっているが、一方では 22 時に水原駅にも到着している。移動時間は 0 である。おそらく「乗車」は「到着」の誤りであろう。それが誤りであったとしても更なる疑問が残る。ソウル駅から水原駅までは 1 時間程度かかるため、少なくとも 21 時にはソウル駅に到着していなければならない。家から 21：15 分にソウル駅に向かうタクシーに乗っていては 22 時水原着にはとても間に合わない。これは移動時間を緻密に計算しなかったためであろう。もう一つ重要な問題は、水原駅の到着時間を 22 時に変更したにも関わらず、都会を描写する表現は原文のまま充実に翻訳している。原作では主人公が真夜中の 2 時頃に浜松駅に到着したため、「深夜というよりも未明に近い浜松市内」というふうに市内風景を描写している。しかし、翻案者は地名と時間を変更したにも関わらず、該当表現をそのまま充実に翻訳した。その結果、主人公が水原に到着した時間がまだ深夜とは言えない 22 時であったにも関わらず、「深夜というよりも未明に近い水原」なってしまう。22 時の水原は「未明」ではない。

また同一の日本地名が状況によって二つになるケースも発生している。原作では事件当日、西脇満太郎は学会参加のために名古屋に出張している。これを翻案する過程で西脇満太郎はイム・ゾンホァン (임종환)に変えられ、学会場所の名古屋は大邱に変更された。韓国の大邱市が名古屋市規模の都会で、医学学会が開かれるに相応しい地方都市であることを考慮したからであろう。しかし、事件当日における 6 人のアリバイが明らかになる 12 章になって、임종환(イム・ゾンホァン)は安養で開かれた学会に参加したと変更される。事故当日の容疑者 6 人のうち、西脇満太郎が姉の事故現場である浜松から最も近い名古屋にいたという原作の設定を反映する必要性があったからであろう。大邱から水原までの距離がソウルから水原までより遥かに遠いため、推理を成り立たせるため、学会場所を安養に調整する必要性が生じたのである。しかし、医学学会が開かれた大邱はそのままになっているので読者の混乱を招く。統一すれば、ソウルに隣接する小規模の安養市に医学学会が開かれるというのもやや不自然であり、そもそも名古屋市に匹敵する都

市ではない。それで名古屋市は大邱市になったり、安養市になったりする。

ほかにも韓国の事情が十分に考慮されずに直訳されたケースが多く見られる。原作では死亡した姉の身分が判明した理由として、姉が「定期入れ」に住所と名前を書いた姉妹の写真を挟んでおいたからであるとされている。しかし。『第五의 그림자（第五の影）』は「定期入れ」を「通勤パス」と翻訳している。これは誤訳というより「定期入れ」に対応する韓国語がなかったため、「通勤のための財布」というような意味で「通勤パス」という造語を作ったように思われる。韓国では「パスポート」が財布という意味で通用された時期があり、『黒い樹海』を最初に翻訳した李英朝の『共犯者』には「定期入れ」が「パスポート」に訳されてもいた。しかし、「通勤パス」という造語は韓国語読者には財布より「定期券」を連想させる。それより奇怪なのは韓国の成人は自分の名前と住所と個人番号が記された「住民登録証」の携帯が義務付けられているが、それが不問にされていることである。変死体の身元確認で住民登録証が不問とされることは韓国の捜査上あり得ないからである。

以上の問題点はたんに翻案者の不注意から発生した問題ではない。翻案者金旭が言う「民族的な異質感のある人名や地名や生活様式」を丁寧に韓国風に変更するのはそう容易いものではないのである。地名や人名や生活様式の一部を韓国風に変更したからそれがそのまま韓国の読者にすんなり受け入れられるものではない。人名と地名と文化様式の変更はそれに付随する膨大な要素のさらなる修正を要求する。そうなるとますます原典から遠くなる。最終的には翻案というより創作に近い状態になってしまう。前述した『처녀地 살인計（処女地殺人計）』がそうした例であろう。一方で原文に忠実しようと努力すればするほど内容は不自然になる。夜 22 時が「未明に近い」真夜中になったり、大邱が場合によって移動したり、変死者の住民登録証が不問にされたりするのである。

『第五의 그림자（第五の影）』は比較的原典に忠実であるが、一方では翻案過程で削除されたり、修正されたりした箇所も存在する。これは新菊版(152×225mm) 300 頁内外という図書分量に合わせる過程で生じたものと思われる。まず翻案者は韓国の実情に置き換えられない箇所や翻案者自身の判断で不要と判断した箇所については削除や縮約を行っている。韓国側から発生する事情によって致し方なく変更を加えている。例えば、『第五의 그림자（第五の影）』の第 1 章は原作の第 1 章の第 3 節に該当する部分、つまり姉の事故の知らせを受ける場面が先に叙述され、その後、事故が発生する前の状況（原作の第 1 章の第 1 から第 2 節）が叙述される。この過程で原作に比べて第 1 章の分量は 1/3 程度に縮約されてしまう。主人公が姉の事故電報を受ける前になにげなく交通事故に関連する新聞記事を読んでいる場面やアパート管理人から列車時刻表を確認する場面などは削除されている。その過程で伯父についての叙述も削除されたので姉の旅行目的が原作とは違うものになっている。 原作では姉が休暇期間に仙台にいる伯父に挨拶をした後、十和田湖を見物するのが目的であった。しかし、『第五의 그림자（第五の影）』では姉が休暇期間を利用して大田市近辺の鶏龍山にある東学寺を旅行することになっている。伯父を省略した結果である。

また第 19 章は全面削除された。原作の該当部分は共犯者がいると知り、姉の事故当時の状況を推理していく部分である。浜松駅の上下線に人物が到着する複雑なトリックを推理する箇所で、これを韓国の鉄道事情に合わせて翻訳することは難しかったであろう。さらに主人公が事件の真

相と犯行動機を説明する終章の第 2 節部分も削除されている。そのため、二人の犯人が争う中で警察に逮捕され、警察の取り調べによって事件の真相が明らかになってしまう。しかし、主人公が真相を求めて孤軍奮闘する部分は忠実に翻訳されている。そのため、主人公の四方八方にわたる孤軍奮闘にも関わらず、真相は警察の捜査によってあっけなく解決されてしまうのである。原作の推理的叙事は大きく毀損させれている。

翻案者の金旭は原作を忠実に「翻訳」したと言っているが、こうした翻案的な手法は根源的な限界があったといえる。翻案においての忠実と翻訳の倫理とは必ずしも一致しない。忠実に翻案すれば意味不明のものになってしまい、意味を明瞭にしようとすれば翻案は原作を離れた創作になってしまうのである。翻案者はその間に苦悩しているようにも思われる。問題の大小こそ違えこれは翻訳にも当てはまる。そもそも翻案と翻訳の境界線は曖昧なのである。

金旭は『黒い樹海』から二つの翻案小説を作り上げた。一つは韓国読者に対する意味伝達の忠実さを図った『처녀地 살인計（処女地殺人計）』であり、もう一つは清張の原作への忠実を図った『第五의 그림자（第五の影）』である。しかし、それぞれで忠実の方向性は違う。両作には相反する矛盾を含んでいる。金旭は図らずも翻案が持つ根源的な問題についてみずからが実践して見せている。文学は読者のためのものか、作者のためのものかという根源的な問題である。それを相反する二つの翻案を行って実践的に見せた翻訳者はおそらく類例がないであろう。その目的は基本的には利益の追求にあったと思われるが、その結果が偶然にもたらした大きな意義は評価されてもよいであろう。

3.3. 『아내의 추적（妻の追跡）』系列

金旭訳『아내의 추적（妻の追跡）』の原作は『ゼロの焦点』、1984 年に出版社文教から刊行されたものである。翻案過程で章が二つ増えているが、これは第 12 章「雪国の不安」と第 13 章「ゼロの焦点」をそれぞれ二つの章に分離したからである。おそらく各章の分量を一定にしたいという翻案者の意図からであろう。章題は内容を反映したものを翻案者自身が付け直している。全体的には原作の筋や構造、文章表現が忠実に訳されているが、日本風の地名や人名は韓国風に置き換えられている。韓国の読者が「なるべく距離感なしにこの作品が鑑賞できる」ことを意図したと言う。この過程で、以前の『第五의 그림자（第五の影）』と同様、韓国の地域的な特性が十分に考慮されていないところが多く見られ、それがかえって読者の違和感を生む原因にもなっている。以下、両作を比較する。

表 30 『ゼロの焦点』と『아내의 추적（妻の追跡)』の比較

区分	ゼロの焦点	아내의 추적（妻の追跡）
目次	1. ある夫	1. 消えた夫
	2. 失踪	2. 失踪
	3. 北の疑惑	3. 路の女性
	4. 地方名士	4. 写真の中の家
	5. 海沿いの墓場	5. 投身自殺者
	6. 義兄の行動	6. 選択物の行方
	7. 前歴	7. 夜の女
	8. 毒死者	8. 迷路殺人
	9. 北陸鉄道	9. 目撃者
	10. 逃亡	10. 華麗な女
	11. 夫の意味	11. 第2の殺人
	12. 雪国の不安	12. 二重生活
		13. 怖ろしい過去
	13. ゼロの焦点	14. 意外な人物
		15. 事件の焦点
名前／特徴	板根禎子	イ・ヨンオク（이연옥）
	鵜原憲一 ／鵜原憲一の夫	チェ・クァンソク（최광석）
	本多良雄	パク・ヨンギル（박영길）
	田沼久子	チョン・ヒョンスク（정현숙）
	鵜原宗太郎	チェ・クァンス（최광수）
	室田儀作	メン・キルミョン（맹길명）
	室田佐知子	ハン・ヨンスク（한영숙）
	曽根益三郎	イ・ソンギ（이승기）
地域	東京	ソウル
	立川	東豆川
	北陸	嶺南(慶尚道)
	金沢	釜山
	高岡	大邱
	羽咋	忠清道槐山郡
	能登半島	釜山影島
	大阪	大田

『아내의 추적（妻の追跡）』は『ゼロの焦点』の背景である北陸地方を韓国の嶺南地方に、金沢を釜山に、高岡を大邱に置き換えた。これによって原作の北陸の訛りは嶺南地方の方言に置き換えられる。しかし、「雪がよく降る北国」である北陸とは違い、嶺南地方は暖かい南国のイメージがある。それほど雪は降らない。北陸地方を韓国で降雪量の多い嶺東地方に置き換えたほうが風土的には自然だが、そこには鉄道網と時間的距離という別の問題が発生する。そこでソウルから最も離れた嶺南地域が選ばれたのであろう。しかし、それでも地方性と距離感は十分に確保することができず、ソウルから釜山までが原作のように 20 時間もかかるという非現実的な設定になっている。ソウルから釜山までの所要時間は各駅停車でも 10 時間を超えることはない。

図 36 嶺南地域の位置

金沢が釜山に置き換えられたことで、能登半島は釜山港と太宗台が位置する釜山影島の一体になる。太宗台が韓国でも有名な自殺名所ということを考慮した結果であるが、太宗台のある影島一体は歩いて 2〜3 時間で島を一周できるほどの狭い地域であり、また遊園地の多い観光名所でもある。したがって、『ゼロの焦点』の能登半島が持つ奥深さと寂れた地方性とは距離がある。そのためなのか、田沼久子が住む能登の羽咋地域は狭い釜山近郊では収まらず、中部地域の忠清道槐山郡として設定される。これは金沢と羽咋間の距離を韓国の地域距離に合わせて選択した結果であろう。また原作の主人公である禎子は田沼久子が住む羽咋地方を訪ねているが、原作では金沢駅から電車に乗って羽咋駅まで移動した後、羽咋からまた電車に乗って高浜へ移動することになっている。翻案者はこれを釜山から清州まで移動した後、清州からバスで槐山を訪れることにしているが、これは韓国の交通網を全く無視したものである。釜山から清州をつなぐ鉄道路線は存在しないので、多くの読者は違和感を覚えたであろう。

また東京の立川を京畿道の東豆川に置き換えているが、これまた東豆川に米軍基地があることに着案したものと思われるが、地域的な特性が合致しない。東京の立川とは違い、東豆川には原作のような「航空部隊基地」が存在したことはなく、翻案当時である 1980 年代の東豆川は軍事施設保護区域（グリーンベルト）であった。そのため、東京立川のような繁華街のイメージとは距離がある。そのため、東豆川を東京立川のような繁華街として描写することに読者は違和感を覚えたに違いない。こうした例はほかにも多く見られる。たとえば、第 1 章の主人公夫婦の新婚旅行であろうが、最初は秋の紅葉を考え、「慶州から仏国寺を回って大田に出てからソウルに戻るコース」が設定されるが、実際の二人は新婚旅行先として済州島に到着し、島一帯の見物を楽しんでいる。こうした翻案者による誤りも読者の理解を混乱させたであろう。

また翻案過程で原作の一部の文章や会話が削除されているところが見られる。これは以前の『第五의 그림자（第五の影）』のような推理叙事の全面的な削除ではないが、主な対象は当該地域の風土を描写する箇所や戦後日本の GHQ 占領期に関連する記述である。GHQ 占領期を韓国の歴史に置き換えることは困難だったので削除せざるを得なかったであろう。しかし、その結

果、作品中の女性人物たちが関わった売春行為という時代性と社会性も消去されるようになった。原作は GHQ 占領期に米軍を相手にした女性の売春行為から社会的悲劇を浮き彫りにしている。彼女らは自身の過去を消して新しい出発を試みるが、そうした過去が彼女らの人生を翻弄する。不幸な過去を消して新しい出発をするため、過去を封印するために連続殺人が行われている。これが『ゼロの焦点』の最大の文学性であり、社会派推理小説の根幹的な部分である。

しかし、『아내의 추적（妻の追跡）』においては原作の GHQ 占領期という時代状況が消去されたため、彼女らの売春行為はたんに「自慢であった英語力が彼女をそのような女にしてしまった」かのように歪曲されている。英語ができたためにアメリカ兵隊を相手に売春を行ったことになる。本末転倒である。したがって、彼女らの売春行為は占領時代や社会の責任ではなく、個人的な堕落や逸脱として矮小化される。その結果、清張文学が本来持っていた「社会派推理小説」としての意義は全く失われてしまう。たんに「多くの読者を魅了する面白い」煽情的な小説に変化したのである。

当時の韓国においても米軍基地の周辺にいわゆる「洋公主」と呼ばれる売春女性が多く存在しており、それが文学的・社会的なテーマにもなっていた。したがって、原作のように、米軍相手の共通する売春問題を韓国の実情に沿う形で社会的な問題として翻案することも可能だったかもしれない。しかし、翻案者はそうした側面を消去した。これは GHQ 時代の翻案という難題に加え、推理小説に重苦しい社会問題を求めるよりは気軽に面白く読めることを優先する翻訳者と出版社の意図が総合的に生み出したものと思われる。これはまた韓国の一般読者が推理小説に社会問題の批評性を読み取るよりは刺激的な面白みを求めたこととも関係している。読者のレベルに合わせ、読者の興味を優先し、なにより販売を優先した結果の産物で、それはまた韓国における推理文学の時代的な現状でもあったように思われる。

1984 年における韓国の推理小説はまだ萌芽期で、その地位は確立されておらず、十分に成熟した状態ではなかった。翻案という古めかしい形態がそれを物語っている。純文学においてはこうした翻案は存在しないが、松本清張の社会派推理小説の輸入によって日本の明治期を思わせるような翻案物が復活している。推理小説は翻案でもよいという文学における価値観のようなものが存在していたようにも思われる。一方では、清張の社会派推理小説が強靭な風土性と社会性を基盤にしているため、当時の読者に受け入れられる正当な翻訳が不可能だったかもしれない。それではなぜ敢えて手間のかかる難しい翻案をしなければならなかったのだろう。たんに売り上げだけだろうか。清張文学の固有の性質のためなのだろうか。清張文学の韓国語翻案はさまざまな疑問を投げかけている。

3.4. 『目撃者』系列

金旭『目撃者』の原作は『眼の壁』で、1984 年 刊行された。翌年の 1985 年には再刊されているが、松本清張の翻案推理小説の中では最後のものであった。同年には金輝文翻案の 『사기단 25 時（詐欺団 25 時）』として題を変えて刊行されているが、すでに述べたように『目撃者』と『사기단 25 時（詐欺団 25 時）』は全く同じものである。となると、韓国で出版された松本清張の翻案の多くに金旭が関係していることになる。出版社は殆どが出版社文教である。それも 1984 年前後に集中している。ここで一つの推測になるが、出版社文教は当初から金旭による松本

清張翻案本の刊行を企画していた可能性がある。従来のような翻訳とは違うものを作り上げて販売することを目論んでいたとも思われる。あるいは出版社文教と金旭は推理小説の生硬な直訳ではなく、翻案に文学的な意義を見出していたのかもしれない。 『目撃者』の特徴を示すため、原作『眼の壁』といくつかの場面を比較しておく。

表 31 『眼の壁』と『目撃者』の比較

区分	眼の壁	目撃者
目次	東京駅の一二等待合室	詐欺師
		死
	自殺行	
		人物たち
	酒場・レッドムーン	追跡
	殺人者	霧の中の人間
	拉致	展開
	玄人と素人	
		ある旅行客
	捜査の眼	
		揺れる階段
	美濃路の小さな町にて	黒幕
	捜査の前進	迷宮
	中央アルプスの死者	殺人の理由
		出生の秘密
	湖岸の首吊り男	
		疑問の櫃
	木箱と麻袋	
		あやしい終末
	死の沸騰	
		エピローグ
名前／特徴	萩崎竜雄 ／昭和電業の会計課次長	ソン・ジュンモ（성준모） /日出峯電業の会計課係長
	関野徳一郎 ／昭和電業の会計課長	イ・キョンソプ（이경섭） /日出峯電業の会計課係長
	黒池健吉 ／堀口次郎、山本一夫	パク・チュンシク（박준식） ／キム・ミョンシク（김명식）、 チェ・キョンス（최경수）

	大山利雄／R相互銀行の常務	オ・カンユン（오강윤） ／K相互銀行の常務
	田村満吉 ／新聞社社会部の記者	ホァン・ハクト（황학도） ／新聞社社会部の記者
	瀬沼俊三郎 ／昭和電業の顧問弁護士	ハン・キルリョン（한길련） ／日出峯電業の顧問弁護士
	田丸利市 ／瀬沼弁護士社務所の職員	イ・ムシク（이무식)／ ハン・ギルリョン弁護士社務所の職員
	岩尾輝輔 ／長野県選出の国会議員	キム・ハクソン（김학성） ／慶南梁山郡出身の国会議員
	山杉喜太郎 ／山杉商事の社長	ユン・ヒョンヘ（윤형희） ／ユン・ヒョンヘ商社の社長
	上崎絵津子 ／山杉商事の女秘書	ゾン・ヨンスン（전연순） ／ユン・ヒョンヘ商社の女秘書
	舟坂英明 ／右翼団体のボス	イ・チャンウ（이찬우） ／右翼団体のボス
	梅井淳子 ／「レッドムーン」のマダム	ケ・インオク（계인옥） ／「別世界」のマダム
地名	東京駅	ソウル駅
	西銀座	明洞
	麻布	鐘路
	三宅坂	国会議事堂の前
	目黒	往十里
	羽田空港	金浦空港
	北海道	釜山
	大阪	
	名古屋	
	湯河原	天安
	熱海	仁川
	岐阜	光州
	西筑摩	晋陽
	瑞浪	慶州／大邱
	北安曇	慶州
会社名	昭和電業	日出峯電業
	R相互銀行	K相互銀行
	レッドムーン	別世界

翻案小説『目撃者』の巻末には金旭による松本清張の紹介が載せられている。それによると松本清張は「女性ファンの多い推理作家」で、「ミステリー小説がどれほど面白いものかを女性読

者に知らしめた」と紹介されている。こうした評価は韓国の女性読者を意識したものと思われる。当時の韓国では推理小説のブームはあったが、その読者は殆ど男性であった。それで女性読者の関心を呼び起こそうと意図したのかもしれない。

また翻案者の金旭は、「原作の構成と枠組みを最大限に生かしながらも」「我が国の実情に合うように翻案したもの」と述べている。この方針にしたがって、金旭は以前の『第五의 그림자（第五の影）』や『아내의 추적（妻の追跡）』の方法に倣い、人名と地名などを韓国風に置き換えている。本文は全体的に原文に忠実である。しかし、今まで同様、人名や地名の機械的な置き換えによってさまざまな問題点が発生する。たとえば、北海道、大阪、名古屋はいずれもが釜山に変更されている。これは地域的な特性よりソウルから離れた距離が作品中で要求されたからであろう。それはさらなる矛盾を発生させる。

たとえば、東京駅から名古屋駅を経由して岐阜駅に経由する急行列車がソウル駅から釜山駅を経由した光州行きの急行列車に変更される。これは韓国の交通事情を全く無視した設定である。ソウル駅から釜山駅を経由して光州駅に向かう急行列車は存在しないだけでなく、釜山駅から光州駅に向かうためには乗り換えが必要である。これは名古屋を釜山に置き換えたので、作品の推理叙事を維持する過程で発生したものである。その結果、韓国の鉄道路線ではありえない「ソウル-釜山-光州」を走る急行列車が誕生したのである。ほかにも同一の日本地名が章によって変更されるケースも見られる。それが瑞浪の翻案である。瑞浪は 慶州として置き換えられたが、途中から大邱に置き換えられ、後半にはまた慶州に置き換えられる。杜撰な翻案とも言えるが、韓国地名の置き換えによって推理が破綻し、破綻した推理を維持するために今度は地名を変更していくのである。韓国の地理を変えて最小限度の推理を維持しようとしたのである。推理と地理・風土による悪循環である。翻案者の異様な努力とも言える。じじつ、翻案者の努力の痕跡も随所に見られる。

図 37 韓国の鉄道路線

たとえば、第 1 章の東京駅の風景を描写する部分においては東京駅の風景をそのまま訳するのではなく、当時のソウル駅の風景に置き換えている。原文の「そこには外人が多かった」という表現は「その日に限り外人が多かった」と修正し、米軍を意味する「青い服を着た軍人」も「青い服を着た女」に置き換えている。これは 1980 年代の初めにソウル駅に外国人や米軍がいるケースが稀だったからである。東京駅とは違い、ソウル駅にはソウルの郊外、つまり地方へ向かう列車しか存在せず、電車駅は当時「ソウル駅前駅」と呼ばれてソウル駅からやや離れて存在していた。翻案者はこうした交通事情も勘案して待合室に関連する描写も修正している。また盗難された手形の金額も変更されている。原作では「三千万円」であったが、『目撃者』では「1 億ウォン」に修正されている。韓国の事情を踏まえた変更であろう。しかし、本文中の「三千万円」を意味する「大形三個」という表現は修正していない。

前作同様、翻案過程で内容の一部が削除される箇所も見られるが、これらはおもに地名に付随

する風土描写や戦後日本の政治史と関連する箇所である。地域の風景描写の場合、韓国の実情に合わせて置き換えると事実上新たな創作になってしまう。翻案者は原作の内容を遥かに超えるこうした行為は回避している。翻案に対する金旭自身の一定の度合いが存在していたのであろう。しかし、日本戦後史の省略は必然的に原作の持つ社会派推理小説の特徴を弱めることになる。たとえば、原作での舟坂英明にあたる『目撃者』のイ・チャンウ（이찬우)が自身の出自を中国人に偽装した理由や右翼団体に入った動機などは紹介されていない。また手形詐欺事件に関わる時代的な説明も消去され、「眼の壁」という題目の意味を現わす結末部分も削除されている。そのため、手形詐欺事件の真相を追跡する過程は一種の冒険活劇を思わせる。活劇によって事件は解決され、主人公は「万事、これで終わりである」と安堵し、作品は終わる。社会派推理小説があたかも冒険活劇小説になった印象さえある。これは韓国の読者のレベルに合わせた側面もあるが、人名や地名の変更によって翻案小説がたどり着く最終的な姿でもあろう。

固有名詞は常に時代や風土と緊密に結ばれている。それを分離して固有名詞だけを置き換えることははなはだ難しい。時代と風土を離れた固有名詞は次々と内部矛盾を起こし、翻案小説自体を破綻させる。それを食い止めるためには膨大な削除と創作が必要となるが、そうなると翻訳・翻案の枠を超えてしまう。金旭によって試みられた四つの松本清張の翻案はこうした事実を如実に現わしている。またこうした試みが松本清張の文学に限って行われたことも特異である。それは清張の推理小説が固有名詞に支えられた日本の風土と歴史と強靭に密着していることを逆に証明しているかもしれない。置き換えが容易ではないのである。松本清張文学の本質が金旭の挫折によって浮き彫りにされているのである。それは看過されがちな極めて重要な清張文学の特徴である。

第4章　松本清張作品の韓国語訳にみられる特徴

第1節　「或る「小倉日記」伝」の翻訳
1.1. 李元壽の翻訳本（1960）
1.2. 徐炳珦の翻訳文（1987）
1.3. イ・ギュウォンの翻訳本(2009)
第2節　『点と線』の翻訳
2.1.辛相澈の翻訳本（1976）
2.2. キム・ジョンスの翻訳本(1995)
2.3. 金京南の翻訳本（2012）

第１節　「或る「小倉日記」伝」の翻訳

松本清張文学の翻訳状況を著作権法未導入期、著作権法導入期、著作権法定着期に分けて考察したが、ここでは「或る「小倉日記」伝」の韓国語訳に限定してそれぞれ三つの時期の特徴を考察する。それによって翻訳本の個性と時代的な特徴が明らかにされると思われる。まず対象になるのは、李元壽の翻訳本(新丘文化社、1960)、徐炳珦の翻訳本(文藝春秋社、1987)、そしてイ・ギュウォンの翻訳本(ブック・スピア、2009)である。

李元壽の「어느 고꾸라 日記伝（或るコクラ日記伝）」は「或る「小倉日記」伝」の最初の翻訳本で、1960 年に刊行されて以来、1970 年代までに計 4 回も再刊行されたものである。徐炳珦の「어느 고꾸라 日記伝（或るコクラ日記伝）」は 1987 年に「著作權法」(大韓民国、第 3916 号)が全面改定（第 1 次改定）された直後に刊行されたものである。いわゆる著作権法導入期の翻訳である。以上の二つの翻訳本はいずれも版権を獲得していない。一方、イ・ギュウォンの「어느 고꾸라 日記伝（或るコクラ日記伝）」は著作権法定着期の 2009 年に刊行されたもので、公式的な版権を獲得している。それぞれの翻訳の相違を以下に考察する。

1.1. 李元壽の翻訳本（1960）

李元壽は1911年に生まれた児童文学者で、日本語による国語教育を受けた世代である。童話や世界偉人伝記などを翻訳しているが、日本文学は「或る「小倉日記」伝」が最初であり、最後である。これを原文と比較すると以下のようになる。

表 32 李元壽訳「或る「小倉日記」伝」の特徴

区分	「或る「小倉日記」伝」	李元壽の翻訳本
意訳	匂いのいい煙草のパイプ	향기 높은 파이프
	耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明し	고오사꾸는 되도록 천천히 찾아온 사정을 설명

	た。	했다.
直訳	終日風雪。そのさま北国と同じからず。	종일 풍설(風雪). 그 모습 북국과 같지 않다.
	Kが興味を起したのは、この手紙の主が小倉時代の鷗外を調べているということである。	K가 흥미를 느낀 것은, 이 편지 주인이 고꾸라 시절의 오오과이를 조사하고 있다는 그 사실이다.
	この党員に白井正道という者がいて、佐々と共に政治運動に一生を送った。	그 당원에 <시라이 세이도오>(白井正道)라는 사람이 있어 사사(佐佐)와 더불어 정치운동으로 일생을 보냈다.
	こんな身体でも、ふじから見れば杖とも柱とも頼りに思えるのである。	아무리 병신 같은 몸일지라도 후지가 볼 때엔 지팡이요 기둥인 의지(依持)였다.
	彼は後年こういう憐愍には強い反撥を覚えたが、六歳の彼にはまだこのような感情があるわけでなく、老夫婦の歓待に甘えた。	그는 훗날 이런 연민(憐愍)에는 극심한 반발을 느꼈지만 여섯 살 때의 그에게는 아직 그러한 감정이 있을 리 없었고 오직 늙은 부부의 환대를 달게 여겼다.
	近く漁村からとれる釣り魚である。	가까운 어촌에서 잡히는 낚은 고기였다.
翻訳上の誤り	白井正道	<시라이 세이도오>(白井正道)
	麻生君	아사부군
	羽左衛門	『우사에몽』(羽左衛門)
	香春口	고오슌꼬오(香春口)
固有名詞(人名、地名等)	菊五郎	『기꾸고로오』(菊五郎)
	小倉市／九州	고꾸라시(小倉市)／규우슈우(九州)
	森鷗外	<모리 오오과이>(森鷗外)
	岩波	『이와나미』(岩波)
	響灘	히비끼나다(響灘)
	俳人	하이진(俳人—일본의 정형시 하이꾸를 짓는 사람)
	半被	한삐(半被)
	明治／昭和	명치(明治)／소화(昭和)
	歌人	가인(和歌를 짓는 사람)
	東禅寺	동선사(東禪寺)
呼称	耕ちゃん	얘
	鷗外さん	오오과이 선생
	森さん	모리 씨
漢字語	養子	서양자(壻養子)
	南蛮文化研究	남만연구(南蠻研究)
	仏人	불란서인
外来語	F・ベルトラン	베르트랑

	グループ	그루프
	パトロン	파트론
	腫物(ツモール)	트모올(腫物)
	でんびんや	덴빙야
	アンパン	안빵
その他	ヤミ米／ヤミ魚	야미 쌀／야미 생선
	窮余の結果	궁여지결과(窮餘之結果)
	宮の心	황자(皇子)의 마음
	四里	四十리

(1)原作との相違、翻訳文体

李元壽訳は原文に忠実である。表 32 で分かるように、日本語を単語対単語で直訳する傾向が強く見られる。こうした傾向は翻訳者が日本語を国語として修得し、日本語文章や単語に馴れていたからであろう。そのため、李元壽の韓国語訳には日本語がそのまま入り込んでいる所も散見される。例えば、「そのさま北国と同じからず」を「그 모습 북국과 같지 않다」と直尺しており、「조사하고 있다는 그 사실」における「고 있다」のように、日本語の「ている」をその都度「고 있다」に直訳している。こうした過程で、「가까운 어촌에서 잡히는 낚은 고기였다」のような翻訳調の非文も発生している。「釣り魚」をわざわざ「낚은 고기」と直訳したので発生した意味不明の非文である。

一方で、必要に応じて意訳を行ったところもある。韓国の読者に意味を明確に伝えるためである。たとえば、「こんな身体」や「事情」などを「병신 같은 몸(不具者のような体)」、찾아온 사정(訪れた事情)」などと原文にはない説明を加えているのである。しかし、この過程で「匂いのいい煙草のパイプ」を「향기 높은 파이프(香りの高いパイプ)」というように、翻訳語の選択を誤って文章がかえって生硬になる場合に見られる。「그윽한 향이 나는 파이프」という意味を表現するため、「고향(高香)」という漢語をハングルに置き換えたので発生したものである。しかし、韓国語においては「향기（香気）」を「높다（高い）」という高低では表現しないため、やや不自然な感じがする。

また「耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明した」においては、「事情」を「찾아온 사정(訪れた事情)」と補って訳しているが、文章全体の構造が考慮されなかったため、二重の曖昧な意味を帯びている。「고오사꾸는 되도록 천천히 찾아온 사정(訪れた事情)을 설명했다」という訳になり、耕作が自身の「事情をゆっくり説明した」という意味以外にも「ゆっくり訪れた事情」を弁解している意味にも解釈できてしまうのである。

(2) 固有名詞、漢語、外来語など

李元壽は日本語固有名詞のなか、人名と地名は概ね日本語原音をそのまま音借している。しかし、李元壽が日本音を表記する方法は同時期の他の翻訳者が一般的に使用する方法とは違う。例えば、鷗外の場合、「오오가이(オオガイ)」と表記するのが一般的であるが、李元壽は「오오과이(オオグァイ)」と表記している。実際の音を重視した日本語の旧表記法である。一方で、一部

の日本語固有名詞は韓国語の漢字音読をそのまま利用している。明治、昭和のような元号、東禅寺というような神社仏閣の名前がこれに属する。当時の韓国においては明治、昭和のような日本元号や漢字の寺社名は韓国語漢字音読で表記するのが一般的であったからであろう。他方、「俳人」の場合は日本音をそのまま借りて「하이진(ハイジン)」と表記したが、「歌人」は該当漢字を韓国語音読である「가인(カイン)」と表記した。韓国には存在しない漢字語である「俳人」とは違い、「歌人」は「歌を歌ったり創作したりする人」という意味で一般的に使われていたことを考慮したのであろう。

他に、日本語の場合でも当時の韓国で一般的に使われていた言葉には日本語のまま使用している。「ヤミ米」と「ヤミ魚」は韓国語に訳せず、「ヤミ」をそのまま音写して「야미 쌀（ヤミ米）」「야미 생선（ヤミ生鮮）」に表記した。これは当時の韓国では「암시장의 물건（闇市場のもの）」という意味で「야미（ヤミ）」という言葉が広く通用されていたので、「야미 쌀（ヤミ米）」に訳したのであろう。

地名や人名を除いた日本語のなか、「俳人」や「わらじ」のように韓国人読者が理解しづらい日本文化的な言葉には補足説明を加えている。しかし、「でんびんや」の場合はそのまま音写して「덴빙야（テンビンヤ）」にしている。補足説明も加えていない。これは翻訳者自身が小倉地域の言葉である「でんびんや」の意味を正確に理解していなかったのかもしれない。韓国語読者のために補足説明の加えようとしても当時の辞書には出ておらず、致し方なくそのまま音写した可能性がある。また翻訳本には地名や人名を無理に音写したところも見られる。日本語原文には振り仮名がついているにもかかわらず、これを無視して音読みにしている。例えば、地名である「香春口」の場合は、振り仮名の「かわらぐち」と訓読せず、「고오슌꼬오(コウシュンコウ)」と音読して表記している。これは「白井正道」という人名にも見られ、「しらいまさみち」ではなく、「시라이 세이도오(シライセイドウ)」に表記している。やや類似するが、「羽左衛門」は「ウザエモン」と濁音表記にせず、「우사에몽(ウサエモン)」に表記している。おそらく日本語が流暢だったので、辞書で確認せず、日本人が一般的に使う習慣的な読みをそのまま踏襲しているように思われる。

しかし、呼称の接尾辞「さん」の場合は文脈によって「씨（氏）」や「선생（先生）」に使い分けている。例えば、「森さん」や「鷗外さん」の場合、話者によって「모리 씨(モリサン)」または「오오과이 선생(オオガイ先生)」と分けて訳している。一方で、「耕ちゃん」という愛称は大人が子供を呼ぶときに使う「얘」に訳している。こうした変化は「ちゃん」や「さん」のような呼称が韓国語に存在していなかったからであろう。一方で、距離の場合は、韓国の里と日本の里に十倍の差があることを考慮し、原文の「4 里」を「40 里」に訳している。

（3）編集体系、その他

翻訳は縦書きになっている。必要に応じて漢字語を併記しており、反復される漢字語の場合は最初だけを記し、後は省略している。セリフの場合は、鉤括弧(「」)を使用しており、強調や引用のために使われている原文の鉤括弧（「」）は二重鉤括弧（『』）に変え、人名は山鉤括弧（〈〉）を、図書と出版社の名前は二重鉤括弧（『』）を使用している。しかし、「菊五郎」や「羽左衛門」のような歌舞伎俳優の名前の場合は、鉤括弧(< >)ではなく、二重鉤括弧(『』)を使用して

いる。一般的な人名ではなく、襲名の名跡であることを考慮したようにも思われる。

1.2. 徐炳珦の翻訳文（1987）

徐炳**珦**は『朝鮮日報』、『韓国日報』、『釜山日報』などで政治や経済関連の記事を担当する記者で、韓国現代政治に関連する書籍を多数執筆した人である。主な翻訳としては 『アクタガワ賞受賞作品選集』全 2 巻があるが、その中に含まれているのが「或る「小倉日記」伝」である。訳書の翻訳者略歴によると、徐は東京大学政経学部を卒業したことになっているが、東京大学には政経学部が存在していないので、経歴の信憑性は疑わしい。徐の翻訳本と原文を比較すると次のようになる。

表 33 徐炳**珦**訳の特徴

区分	原作	徐炳**珦**の翻訳本
原作の変更	この党員に白井正道という者がいて、佐々と共に政治運動に一生を送った。	그 당원에 시라이 세이도라는 당원은 사사 도모후사와 더불어 국권당을 이끄는 양대 축으로 명성을 날렸다.
	四十年の歳月の砂がその痕跡を埋め、もはや鴎外が小倉に住んでいたということさえこの町で知った者は稀だと、この筆者は言うのだ。	벌써 40년에 가까운 세월의 모래가 그 흔적을 파묻어 버렸고, 벌써 오오과이가 고꾸라에 살았다는 사실까지도 까마득하여 이 동네에서 알고 있는 사람이 드물다는 사실을 감안하면 얼마나 어려운 일인가를 알 수가 있다.
	実際の例が書いてある。読んでみて面白かった。	K는 편지의 사연도 그렇거니와 첨부된 원고에 대해서도 무척 재미있다고 생각했다.
	匂いのいい煙草のパイプ	향기 좋은 파이프
	近く漁村からとれる釣り魚である。	가까운 어촌에서 잡히는 작은 고기였다.
	こんな身体でも、ふじから見れば杖とも柱とも頼りに思えるのである。	비록 불구의 몸일지라도 후지가 볼 때엔 빛이었고 넓은 바다였다
	寄進　玉水俊虎 （中略）戸上駒之助	（なし）
意訳	耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明した。	고오사꾸는 되도록 천천히 찾아온 사정을 설명했다.
直訳	Kが興味を起したのは、この手紙の主が小倉時代の鷗外を調べているということである。	K가 흥미를 느낀 것은, 이 편지 주인이 고꾸라 시절의 오오과이를 조사하고 있다는 그 사실이다.
	彼は後年こういう憐愍には強い反撥を覚え	그는 뒷날 이런 연민에는 극심한 반발을 느

	たが、六歳の彼にはまだこのような感情があるわけでなく、老夫婦の歓待に甘えた。	였지만 여섯 살 때의 그에게는 아직 그러한 감정이 있을 리 없었고 오직 늙은 부부의 환대를 고맙게 여겼다.
誤訳	終日風雪。そのさま北国と同じからず。	종일 눈보라. 그 모습 북극과 같지 않다.
翻訳上の間違い	麻生君	아사부군
	羽左衛門	우사에몽
	香春口	고오슌꼬오
固有名詞（人名、地名等）	森鷗外	모리 오오과이
	岩波	이와나미
	菊五郎	기꾸고로오
	小倉市／九州	고꾸라시／큐우슈
	響灘	히비끼나다
	半被	한삐
	東禅寺	동선사
	俳人	하이진(俳人—일본의 정형시 하이꾸를 짓는 사람)
	明治／昭和	명치／소화
	歌人	가인(和歌를 짓는 사람)
呼称	森さん	모리 씨
	鷗外さん	오오과이 선생
	耕ちゃん	얘
漢字語	南蛮文化研究	남만연구
	仏人	불란서인
	養子	양자
外来語	グループ	모임
	パトロン	후원자
	F・ベルトラン	베르트랑
	腫物（ツモール）	혹
その他	でんびんや	덴빙야
	アンパン	안빵
	窮余の結果	궁여지책
	宮の心	황족의 마음
	四里	40리

（1）原作との相違、翻訳文体

徐炳珦訳は原文から直接翻訳したのではなく、以前の李元壽訳を土台（テキスト）にしているように推測される。なぜなら、李元壽訳と多くの部分において一致しているからである。例えば、徐炳珦は李元壽訳本と同じく鷗外を「오오과이(オオグァイ)」に表記している。こうした特殊な表記方法は李元壽訳の個性であり、この一致は徐炳珦が李元壽訳を参照したことを強く示唆するものである。しかし、その一方で徐炳珦は、李元壽の訳本にみられる翻訳調の生硬な文章と非文を直し、一部の表現を変え、差別化を図っている。この過程で原作にない表現が追加されたり、原作の一部が削除されたりしている。たとえば、「佐々と共に政治運動に一生を送った」という文章は、「사사 도모후사와 더불어 국권당을 이끄는 양대 축으로 명성을 날렸다.（ササトモフサと共に国権党を率いる両輪としての名声をほしいままにした）」というように翻訳され、原文には存在しない文章が追加されている。一方、李元壽が「匂いのいい煙草のパイプ」を「향기 높은 파이프(香りの高いパイプ)」翻訳した生硬な部分は、「향기 좋은 파이프(香りのいいパイプ)」と自然な韓国語に直している。

しかし、原文を確認せず李元壽訳をそのまま取り入れる過程でさらなる誤訳も発生している。例えば、「北国」という単語の場合、李元壽が「북국(北国)」と直訳したものを、徐炳珦は「북극(北極)」に間違って写し、これによって該当文章の意味が曖昧になっている。こうした現象は著作権法導入期における出版状況と深く関係する。いまだ「或る「小倉日記」伝」は著作権法上において保護される作品ではなかったので、原作者の許可なく翻訳が可能であり、零細出版社はすでに翻訳された先行訳書を適当に修正して刊行し、利益を追求したのである。日本語に無知な人たちや翻訳活動にそれほど縁のない新聞記者が翻訳に携わっているのはこうした所以である。

（2）固有名詞、漢字語、外来語など

徐炳珦訳は外来語のハングル転写を規定している「外来語表記法」(1986)に則って、李元壽の外来語表記法を一部修正しているに過ぎない。そのため、李元壽訳に見られる人名と地名の誤訳を概ねそのまま引き継いでいる。徐炳珦訳が原文からの翻訳ではなく、李元壽訳の修正であることを示す証拠ともなっている。

（3）編集体系、その他

徐炳珦は李元壽の縦書きを横書きに変更し、漢字語を併記せず、ハングル表記だけに統一している。横書きに合わせ、二重引用符(“ ”)が使用され、強調や引用は一重引用符(‘ ’)を用いられている。図書は二重山括弧(《》)として区分している。

1.3. イ・ギュウォンの翻訳本(2009)

イ・ギュウォンは韓国外国語大学で日本語を学び、多様な日本書籍を翻訳した専門翻訳家である。李が翻訳した書籍のなかには清張の作品も多数存在している。李訳の「或る「小倉日記」伝」は宮部みゆきが編集した『松本清張傑作短篇コレクション』に収録されたものである。それを原文と比較する。

表 34 イ・ギュウォン訳の特徴

区分	原作	イ・ギュウォン訳
意訳	終日風雪。そのさま北国と同じからず。	온종일 눈보라다. 그 모양이 북쪽 지방과 같지 않다.
	Kが興味を起したのは、この手紙の主が小倉時代の鷗外を調べているということである。	K가 흥미를 느낀 이유는 이 편지를 보낸 이가 고쿠라 시절의 오가이를 조사하고 있다고 했기 때문이다.
	彼は後年こういう憐愍には強い反撥を覚えたが、六歳の彼にはまだこのような感情があるわけでなく、老夫婦の歓待に甘えた。	그는 훗날 이런 연민에 강하게 반발하지만 여섯 살 꼬마에게는 아직 그런 감정이 있을 리 없어서 아무 사심 없이 노부부의 환대를 누렸다.
	こんな身体でも、ふじから見れば杖とも柱とも頼りに思えるのである。	몸은 성치 않아도 후지에게는 지팡이 같고 기둥 같은 아들이었다.
	近く漁村からとれる釣り魚である。	가까운 어촌에서 낚시로 잡는 생선이었다.
	匂いのいい煙草のパイプ	냄새 좋은 파이프
直訳	この党員に白井正道という者がいて、佐々と共に政治運動に一生を送った。	당원 중에 시라이 마사미치라는 자가 있어 삿사와 함께 정치 운동에 평생을 바쳤다.
	耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明した。	고사쿠는 가능한 한 천천히 사정을 설명했다.
固有名詞（人名、地名等）	森鷗外	모리 오가이
	岩波	이와나미 출판사
	菊五郎、羽左衛門	기쿠고로, 하자에몬 두 사람 모두 일본의 전통 무대극 가부키의 유명 배우
	小倉市／九州	고쿠라 시／규슈
	北九州	기타규슈
	明治／昭和	메이지／쇼와
	響灘	히비끼나다 바다
	東禅寺	도젠지
	半被	핫피 직공 등이 작업복 삼아 맨 위에 걸쳐 있는 웃옷
	俳人	시인
	歌人	가인
呼称	森さん	모리 씨
	鷗外さん	오가이 선생
	麻生君	아소 군
	耕ちゃん	고짱

漢字語訳	南蛮文化研究	네덜란드 문화 연구
	仏人	프랑스인
	養子	양자
外来語役	グループ	그룹
	パトロン	후원자
	F・ベルトラン	F. 베르트랑
	腫物(ツモール)	종양
その他	でんびんや	전편꾼
	アンパン	호빵
	窮余の結果	궁여지책
	宮の心	귀인의 마음
	四里	사 리

（1）原作との相違、翻訳文体

以前の翻訳と違い、イ・ギュウォン訳では翻訳調の文章が減り、原文の構造が維持されたまま巧みに意訳されている。これは不自然な翻訳調の文章を忌避する近年の翻訳風土を反映した結果であろう。イ・ギュウォンは従来の翻訳者と違い、日本語と日本語翻訳に関する専門教育を受けた世代である。従来の慢性的な翻訳調の文章は排除し、自然な現代韓国語になるよう細心の注意が払われている。イ・ギュウォン自身、ハングル教育の最新世代で、現代韓国語に馴れた世代である。それが近年の読者に文章の読みやすさを与えているのかもしれない。しかし、韓国語の変化によってイ・ギュウォン訳もまた古くなり、いずれ生硬な訳として受け止められる時代が来るかもしれない。原典は固定しているが、翻訳は生き物のように時代と共に常に変化するのである。

（2）固有名詞、漢字語、外来語の翻訳

イ・ギュウォンは人名と地名等の固有名詞を翻訳する際、「外来語表記法」(1986)に則って日本語の原音をそのまま韓国語に表記している。いわゆる音借である。李元壽訳に見られるような母語話者の習慣的な読みも見当たらない。外国語として日本語を勉強しているので徹底的に辞書等で調べたのであろう。またイ・ギュウォン訳は韓国語読者が読みやすいように、固有名詞や文化的単語には訳文中に小文字で補足説明を加えている。読書を邪化しないように本文中に注記しているのである。しかし、森鷗外のように長い説明が必要な場合は、脚注の形式で別途注記している。一方、「俳人」や「歌人」の場合は、李元壽訳の「하이진(俳人—일본의 정형시 하이꾸를 짓는 사람)」や「가인(和歌를 짓는 사람)」とは違い、それぞれを「시인（詩人）」と「가인（歌人）」に訳し、別途の補足説明を省略している。このため、韓国の一般読者にそれぞれは「現代西洋詩を作る人」と「歌を歌う人」と理解される可能性もある。これは漢字を使用しないハングル世代が抱える一つの限界かもしれない。「和歌」や「短歌」は根源的に漢字に付随するもので、「ワカ」という音や「短い歌」というハングルの訓に収斂されるものではないからである。これは翻訳の難しさとして今後も残る課題である。

一方、呼称の「さん」は李元壽訳と同様、場合によっては「씨（氏）」や「선생（先生）」に

変更されている。しかし、「耕ちゃん」という愛称は日本語原音をそのまま音借して「고짱(コチャン)」と表記している。親が子を愛称で呼んでいる本文内容が考慮されたかもしれない。ほかに、「南蛮」は「네덜란드（ネーデルランド）」に訳されているが、これは現代の韓国読者を意識した結果と思われる。韓国では「南蛮」という漢字語は文字通りの「南の野蛮人」を意味するだけで、日本のような歴史的な意味が存在しない。しかし、ネーデルランドと南蛮あるいはオランダの間には意味の隔たりが大きくあるが、現代の読者にそこまで伝えるのは至難の業なのかもしれない。

（3）編集体系、その他

横書きですべての漢字は除去されている。セリフは二重引用符合(“ ”)が使用され、図書は鉤括弧(「」)で表示されている。

第２節『点と線』の翻訳

『点と線』の韓国語訳は 13 人の翻訳家によって計 25 回も翻訳されているが、ここでは比較の対象として辛相澈の翻訳本(智炤林文庫 1976)とキム・ジョンスの翻訳本(韓国アラム、1995)、そして金京南の翻訳本(モビーディック、2012)を取り上げる。辛相澈訳は『点と線』の最初の韓国語翻訳本ではないものの、1976 年から 1995 年まで、翻訳者名と表紙を変えながら計 7 回も再版されているので注目に値する。一方でキム・ジョンスの翻訳本は 1995 年に全面改定された「著作權法」(大韓民国、第 5015 号、第 8 次改定)が効力を発揮する以前に刊行されたもので、いわゆる著作権法導入期の翻訳本である。以上の二つの翻訳はいずれも著作権を獲得せず刊行されたものである。他方、金京南の翻訳本は 2012 年、日本の光文社から版権を購入して刊行されたもので、いわゆる著作権法定着期を代表する作品である。

2.1. 辛相澈の翻訳本（1976）

辛相澈による翻訳は松本清張『点と線』がほぼ唯一のものである。辛相澈の個人的な経歴を確認することは出来ない。生年や学歴、他の経歴も不明である。辛相澈が翻訳した『点と線』は安田辰郎の年齢が「三十五六」に設定された版本である。以下、原文と比較する。

表 35 辛相澈訳『点と線』の目次と特徴

区分	原作	辛相澈の翻訳本
目次	目撃者	목격자
	情死体	정사체(情死體)

	香椎駅と西鉄香椎駅	가시이驛과 西鐵(가시이)驛
	東京から来た人	東京에서 온 사람
	第一の疑問	제1의 의문
	四分間の仮説	4분간의 假設
	偶然と作為の問題	우연 작위(作爲)의 문제
	北海道と九州	홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州)
	数字のある風景	숫자가 있는 풍경
	北海道の目撃者	홋까이도오의 목격자
	崩れぬ障壁	무너지지 않는 장벽
	鳥飼重太郎の手紙	도리가이 쥬우타로오의 편지
	三原紀一の報告	미하라 기이찌의 보고
傍点	だが、十三番線には、電車がまだはいっていなかった。	그러나 13번선에는 아직 전차가 들어와 있지 않았다.
意訳	安田辰夫は、一月十三日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した。客の正体は、某省のある部長である。	야스다 다쓰오(安田辰夫)는 정월 13일 밤 아까사까(赤坂)의 요정 「고유끼」(小雪)에 한 사람의 손님을 초대했다. 그 손님은 모 성(省)의 부장이었다.
	「へえ。そうなの？お時さんからは、昨日、五六日郷里に帰るから休ませてくれと言われていたんだけど、へえ、男の人とねえ」	「하아…… 그래? 오도끼가 어제 고향에 다녀와야겠으니 대엿새쯤 쉬어야겠다고 했는데 …… 허어 남자하고……」
	安田辰郎は、三十五六で、広い額と通った鼻筋をもっていた。 色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。	야스다 다쓰오는 서른 대여섯 살 쯤으로 이마가 넓고 날씬한 콧날에다 얼굴색은 좀 검지만 부드러운 눈과 그린 듯한 짙은 눈썹을 하고 있었다.
	院長は自分で興に乗ったようであった。その随筆を掲載した雑誌を見せようか、と言った。三原は頼んだ。	원장은 흥겨운 모양이었다. 그 수필을 실은 책을 보여줄까 하고 말했다. 미하라는 보고 싶다고 했다.
	（そうだ、安田の主張はもう一つ類似がある。）	(그렇다, 야스다는 또 한 가지 비슷한 주장을 하고 있었다.)
方言の訳	「はあ。 二人ですたい。 男と女のごつありました やな」 「どけえあったな？」(中略) 「すぐ、そこの海ばたですたい。あたしが案内ばしまっしょ」	「네 두 사람이라요, 남자와 여자」 「어디 있지?」(中略) 「바로 저기 바닷가라요. 지가 안내하지요.」

	「部長さん。こいは無理心中じゃなかでっしょ な？」 刑事の一人が訛をまる出しにして言った。	「계장님, 이거 억지 정사는 아이겠지예?」 형사 한 사람이 사투리를 써 가며 말했다.
直訳	そんなことを言いあって、安田は帰ったが、仕事の都合なのか、また、あくる晩に二人の客を連れてきて飲んだ。	야스다는 그런 말을 주고받다가 돌아갔다. 사업상의 사정 때문일까 다음날 밤 또 두 사람의 손님을 초대하여 마셨다.
	しかし、そのお時は、同伴の男といっしょに、思いもかけぬ場所で、死体となって発見されたのである。	그런데 그 오도끼가 동반했던 남자와 생각지도 않은 곳에서 시체로 발견된 것이다.
	「胸を悪くしていましてね。ずっと前から別居しているのです。…」	「가슴이 나빠져서요. 훨씬 전부터 별거하고 있어요.」
誤訳	一月二十一日	11월 21일
	A紙は小倉で、 M紙は門司で印刷しているから、この日本の二大新聞をはじめ、 地元の有力紙もみな大きな見出しのスペースをつくった。	A지는 고꾸라(小倉)에서, M지는 모 지에서 인쇄하고 있으므로 이 일본의 대신문을 비롯하여 지방의 유력지도 큰 표제를 붙여 넓은 지면을 할애하고 있었다.
	「ちょっと、妙なことでおたずねにあがりました。お忙しいところをどうも」	「잠깐, 묘한 것이 있어서 몇 가지 물어보려고 찾아왔습니다. 무척 바쁘실 텐데.」
	このときも、とみ子と八重子が座敷に出 たで、安田との間に、お時さんのことが 話題となった。	이 때도 도미꼬와 야헤꼬가 객실에 나갔기 때문에 야스다와의 사이에는 오도끼의 일이 화제에 올랐다.
	仮名のない文字と、数字の充満した時刻表は、このごろの私の、ちょっとした愛読書になっている。	가명(假名)이 없는 글자와 숫자가 가득찬 시간표는 요즘의 나의 조촐한 애독서로 되어 있다.
固有名詞(人名、地名等)	鳥飼重太郎	도리가이 쥬우따로오
	八重子	야헤꼬
	官幣大社香椎宮	가시이노미야(香椎宮)
	志賀島／残島	시까노시마(志賀島)／노꼬노시마(残島)
	俳句／和歌	하이꾸(俳句)／와까(和歌)
	博多湾／香椎潟	하까다만(灣)／가시이 포구(浦口)
	「海の中道」	「바다 가운데 길」
呼称	女中たちはコーさんとか、 ウーさんとか言っているが、	여급들은 고씨라든지 우씨라든지 이니시얼로만 부르고 있을 뿐
	ヤーさん／八重ちゃん	야스다 씨／야헤꼬
	お時さん／新田さん	오도끼 양／닛다 씨
漢字語訳	女中／女将	여급, 종업원／마담

	心中	정사(情死)
	素性は全然知らされなかった。	누구인지는 전연 알려지지 않았다.
	主人	그이, 남편
	汚職／駐在所	독직(瀆職)／파출소
	電車／情死	전차／정사(情死)
外来語訳	(小雪の)ママ	마담
	アベック／ホーム	아베크／홈
その他	天ぷら	튀김
	和服	일본옷
	香の物	김치
	モンペ	몸빼

(1) 原作との相違、文体翻訳

辛相澈訳は基本的に原文に忠実である。しかし、編集や組版の過程で発生したミスも多く見られる。たとえば、第 2 章の「情死体」においては「一月二十一日」が「11 月 21 日」になっている。これ以外の箇所では「1 月」に正しく訳されているので、編集や組版の際に発生した誤植と推測される。また第 2 章の「情死体」において北九州の地名である「門司」を「모 지(モ ジ)」と間違って分かち書きをしている。該当部分以外は日本語原音を音借した「모지(モジ)」と翻訳し、漢字の「門司」を併記している。しかし、該当部分に限っては漢字併記が省略され、「모 지(モ ジ)」と分かち書きにされ、「某地」と誤解される余地が残っている。これまた編集や組版の際に起こった誤りであるといえる。さらに「二大新聞」も翻訳過程で「２」の字が抜け落ちている。ほかに、原作にある傍点は一律的に削除されている。零細出版社が出版を急いだ結果のように思われる。

表 35 で分かるように、辛相澈訳は直訳というより意訳に近い。必要な時には一つの文章を二つに分けて訳している。そのため韓国語訳は概ね自然な文章で、文体としては翻訳調の不自然さが少ない。こうした文体の変化は解放後（戦後）にハングルの正規教育を受けた 1970 年代の若い読者を意識した結果ともいえる。日本語教育を受けていない戦後世代にとって、戦前風の日本語直訳はやや生硬な文章になる。訳者が直訳を回避しているのはこうした読者の変化を意識したからであろう。もちろん直訳の箇所も散見される。たとえば、「このごろの私の、ちょっとした愛読書になっている」の場合、「요즘의 나의 조촐한 애독서로 되어 있다」と直訳され、いかにも日本語翻訳調になっている。

辛相澈訳は意訳を基本にしているが、こうした過程において誤訳や生硬な表現も少なからず見られる。これは訳者の日本語に対する理解不足というよりは韓国語の語彙選択に起因するもであろう。その一つが敬語の問題である。原文中の「おたずねにあがりました」のような謙譲表現の場合、「몇 가지 물어보려고 찾아왔습니다.」のように丁寧語で翻訳している。また日本語をそのまま韓国語に置き換えたので意味のズレが発生した例も見られる。例えば、「とみ子と八重子が座敷に出たので」を「도미꼬와 야헤꼬가 객실에 나갔기 때문에」に置き換えているが、韓国の読者は「とみ子と八重子がお客様の部屋で仕事中であった」という原意ではなく、「とみ子と

八重子がお客様の部屋から外に出た」という意味に受け取る可能性が生じている。他方、辛は九州方言を韓国慶尚道方言に置き換えているが、それが語尾に限定されているため、いちおう方言であることは分かるが、当該方言の話者からすれば違和感を覚えるであろう。方言と標準語が無秩序に混在しているのである。

(2) 固有名詞、漢字語、外来語の翻訳

辛相澈は人名、地名などの固有名詞は基本的に音借している。しかし、地名の翻訳には混乱を起こしている箇所も多く見られる。たとえば、「海の中道」という九州地域の名所については「바다 가운데 길(海の真ん中の道)」というように意味を訳しているが、「橿日の浦」は「가시이노우라(カシイノウラ)」と音訳している。また地名に関連する「湾」は韓国の漢字音である「만(マン)」に訳しているが、「潟」は「포구(浦口)」に置き換えている。しかし、「島」や「浦」は日本の訓読にしたがって、「시마(シマ)」や「우라(ウラ)」に訳している。ほかにも「官幣大社」のような文化歴史的な用語は翻訳自体を省略している。また列車名の「あさかぜ」の場合、基本的には「아사까제」として翻訳されているが、しばしば「아사가제」に訳されている。編集や校正が疎かになっているようにも思われる。

辛相澈訳のもう一つの特徴は、「八重子」という人名が「야헤꼬(ヤヘコ)」に訳されていることである。これは辛相澈の翻訳本に限って見られる現象で、おそらく旧仮名遣の表記を韓国語で音借したからであろう。これは辛相澈が戦前の旧仮名遣に馴れていたのでそのような表記になったのかもしれない。呼称の場合、「さん」は文脈によって「씨（氏）」、「양（嬢）」などに訳されているが、これは日本語の「さん」が韓国語の「氏」と一対一の対応関係を持っていないからであろう。一方で、「コーさん」や「八重ちゃん」といった愛称は韓国では一般的に使用しないので、追加的な説明を加えたり、削除したりしている。「コーさん」のような呼称の場合、そのまま音訳しながら、原文の「言っている」を「이니셜로 부른다（イニシャルで呼ぶ）」に変えて状況を説明している。

漢字語の場合、電車や情死などのように、韓国語読者にも理解できる漢字語は韓国漢字音読に変えているが、誤解が生ずる言葉については別の韓国語に変えている。たとえば、「素性」や「主人」のように、韓国語にも存在する漢字だが、その意味が全く違うものには文脈に応じて変更している。特に「主人」の場合は、同時期の翻訳者によく見られる誤訳の典型例である。日本では妻が自身の夫について「主人」と呼ぶが、この使い方は韓国では存在しない。しかし、これを無視してそのまま「主人」として訳するケースが頻繁に見られ、これによって夫婦関係が主と下女、大家と入居者の関係として誤解されたりする。しかし、辛相澈訳にはこうした誤解が見られない。辛は夫を意味する「그이」または「남편(男便)」と適切に置き換えている。また「汚職」のように、韓国語にも存在するが一般的でない言葉は別の漢字語に変えている。他方、「女中」、「女将」、「心中」などのように、韓国では使用しない漢字語の場合はそれぞれを「여급(女給)」、「종업원(従業員)」、「마담(マダム)」、「정사(情死)」に置き換えている。ほかにも「1月」を「正月」に変えている。適切な訳といえる。

しかし、「別居」の場合はそのまま「別居」に訳している。「別居」という言葉は、日本では仕事や病気などで一時的に夫婦が別れて住む場合においても「別居」が使われている。しかし、

韓国語の「別居」は夫婦関係が破局して別れて暮らす意味にやや限定されている。「別居」がそのまま翻訳されることによって、韓国の読者は妻の病気療養によって「夫と別に暮らしている」意味ではなく、夫婦の関係が悪化して「夫とは目下別居中」の意味として受け止める可能性がある。また「仮名」の場合、日本の文字として「かな」ではなく、文字通りの「仮の名前」を意味する「가명（仮名）」に誤訳されている。その結果、駅の名前が漢字ばかりであるという意味の「仮名がない」という表現は「가명이 없는（本名でない名前がない）」という意味で受け止められる可能性があり、原作の意味を不明瞭にしている。

外来語の場合はおおむね音借している。ただ「ママ」を「마담(マダム)」に置き換えたように、韓国で一般的でない言葉は一般的な言葉に変えている。他方、衣服の場合は必要によって翻訳しているが、たとえば「モンペ」のように、韓国で当時に通用していた日本語はそのまま「몸빼」に訳しているが、「和服」の場合は「일본옷（日本服）」に変えている。料理や飲食物の名前は韓国人がよく理解できるものに置き換えられている。例えば、「天ぷら」はこれに対応する「튀김（揚げ物）」に訳され、「香の物」は「김치(キムチ)」置き換えられている。

（3）その他

翻訳本の各章の構成は原文と同じである。横書きが使用され、必要によって漢字が併記されているが、それが反復される場合は最初だけの併記に止め、それ以降は省略されている。セリフの場合は鉤括弧(「」)を使用する原文とは違い、二重鉤括弧(『』)が使用されている。しかし、人物の内面的なつぶやきは原文同様、括弧( ))を使用している。鉤括弧(「」)で強調された原文は同じく鉤括弧(「」)で強調されている。他方、翻訳本には原作の時刻表（図 38）が再編集されている。横書きに合わせて横書きに作り直されている。しかし、翻訳本の時刻表（図 39）には大阪と博多に表示されている「1 月 15 日、2：00」と「11：15」という時刻が漏れている。これは編集もしくは組版の過程で抜け落ちたのかもしれない。

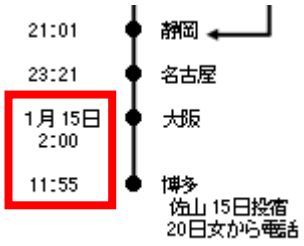


図 38 原作の時刻表

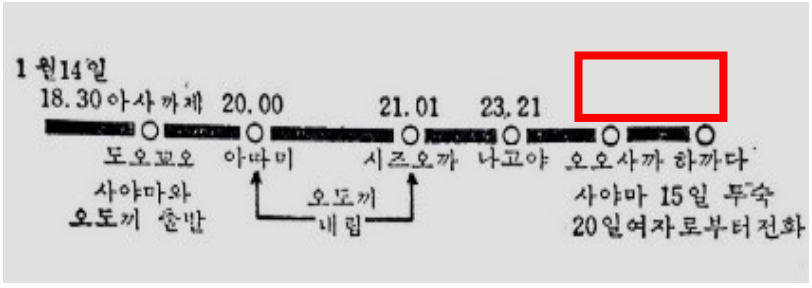


図 39 辛相澈訳本の時刻表

2.2. キム・ジョンス（김종수)の翻訳本(1995)

キム・ジョンス（김종수)は『外国傑作推理小説シリーズ（1・2 巻）』（韓国アラム社、1995）の訳者である。第 1 巻は森村誠一の『真昼の誘拐』で、第 2 巻が松本清張の『点と線』である。訳書には翻訳者の略歴紹介がないので、生年や学歴などを知る手掛かりはない。同じ時期に日本の経済関連の書籍やシェイクスピアの作品を翻訳している同名の人物は存在しているが、同一人

物であるかどうか、現時点でそれを確認するすべはない。キムが翻訳した『点と線』は主人公の安田辰郎の年齢が「三十五六」歳に設定された版本であるが、キムの翻訳は日本原文を参照して訳したものではなく、おそらく以前に刊行された辛相澈の翻訳本を土台にし、一部の表現を修正したのではないかと思われる。しかし、目次については一部の題目は原文や辛相澈の翻訳本とも違いを見せている。誤字、脱字も散見される。例えば、「西鉄香椎駅」では「鉄」が抜け落ち、「西香椎駅」になっている。これが本文になると「서철(西鉄) 가시이(香椎)역」と正しく訳される。以下、原文と比較する。

表 36 キム・ジョンス（**김종수**)訳の目次と特徴

区分	原作	キム・ジョンスの翻訳本
目次	目撃者	목격자
	情死体	정사한 시체들
	香椎駅と西鉄香椎駅	가시이역과 서가시이 역
	東京から来た人	도쿄에서 온 사람
	第一の疑問	첫 번째 의문
	四分間の仮説	4분동안에 대한 가설
	偶然と作為の問題	우연과 작위의 문제
	北海道と九州	홋카이도와 규슈
	数字のある風景	숫자들이 있는 풍경
	北海道の目撃者	홋카이도의 목격자
	崩れぬ障壁	무너지지 않는 장벽
	鳥飼重太郎の手紙	도리가이 쥬우타로오의 편지
	三原紀一の報告	미하라 기이찌의 보고서
傍点	だが、十三番線には、電車がまだはいって いなかった。	하지만 13번 선에는 아직 전동차가 들어와 있지 않았다.
追加	（なし）	수많은 인파가 몰려들며 항상 휘황찬란한 네온사인의 빛이 가득한 도쿄 시내의 거리에 어떤 요정이 자리잡고 있었다.
意訳	安田辰夫は、一月十三日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した。客の正体は、某省のある部長である。	야스다 다쓰오(安田辰夫)는 정월 십삼일 밤 아까사까(赤坂)에 있는 요정 「고유키(小雪)」에 한 사람의 손님을 초대했다. 초대된 사람은 모성(省)의 고급관리였다.
	「へえ。そうなの？お時さんからは、昨日、	「하아…… 그래? 오도키가 어제 고향에

	五六日郷里に帰るから休ませてくれと言われていたんだけど、へえ、男の人とねえ」	다녀와야겠으니 대엿새쯤 쉬어야겠다고 했는데…… 허어 남자하고……」
	安田辰郎は、三十五六で、広い額と通った鼻筋をもっていた。 色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。	야스다 다쓰오는 서른 대여섯 살 쯤으로 이마가 넓고 날씬한 콧날에다 얼굴색은 좀 검지만 부드러운 눈과 그린 듯한 짙은 눈썹을 하고 있었다.
	このときも、とみ子と八重子が座敷に出 たで、安田との間に、お時さんのことが 話題となった。	이 때도 도미꼬와 야헤꼬가 객실에 들어갔기 때문에 야스다와의 사이에 오도끼에 대한 이야기가 화제에 올랐다.
	（そうだ、安田の主張はもう一つ類似がある。）	<그렇다, 야스다는 또 한 가지 비슷한 주장을 하고 있었다.>
	院長は自分で興に乗ったようであった。その随筆を掲載した雑誌を見せようか、と言った。三原は頼んだ。	원장은 흥겨운 모양이었다. 그 수필을 실은 책을 보여 드릴까요? 하고 말했다. 미하라는 보고 싶다고 대답했다.
方言	「はあ。 二人ですたい。 男と女のごつありました やな」 「どけえあったな？」(中略) 「すぐ、そこの海ばたですたい。あたしが案内ばしまっしょ」	「네 두 사람이요, 남자와 여자」 「어디에 있지?」(中略) 「바로 저쪽의 바닷가요. 제가 안내하지요.」
	「部長さん。こいは無理心中じゃなかでっしょ な？」 刑事の一人が訛をまる出しにして言った。	「계장님, 이거 억지 정사는 아니겠지예?」 형사 한 사람이 사투리를 써 가며 말했다.
直訳	そんなことを言いあって、安田は帰ったが、仕事の都合なのか、また、あくる晩に二人の客を連れてきて飲んだ。	야스다는 그런 말을 주고받다가 돌아갔다. 사업상의 사정 때문이었을까. 다음날 밤 또 두 사람의 손님을 초대하여 마셨다.
	しかし、そのお時は、同伴の男といっしょに、思いもかけぬ場所で、死体となって発見されたのである。	그런데 그 오도키가 동반했던 남자와 함께 생각지도 않았던 곳에서 시체로 발견된 것이다.
	「胸を悪くしていましてね。ずっと前から別居して いるのです。…」	「가슴이 나빠져서요. 오래 전부터 별거하고 있어요.」
誤訳	一月二十一日	11월 21일
	A紙は小倉で、 M紙は門司で印刷しているから、この日本の二大新聞をはじめ、 地元の有力紙もみな大きな見出しのスペースをつくった。	A지는 고쿠라(小倉)에서, M지는 모지에서 인쇄하고 있으므로 이 일본의 대신문을 비롯한 지방의 유력지들은 큰 표제를 붙여 넓은 지면을 할애하고 있었다.
	「ちょっと、妙なことでおたずねにあがりました。お忙しいところをどうも」	「묘한 일이 있어서 잠깐, 몇 가지 물어보려고 찾아왔습니다. 무척 바쁘실 텐데.」

	仮名のない文字と、数字の充満した時刻表は、このごろの私の、ちょっとした愛読書になっている。	가명(假名)이 없는 글자와 숫자들이 가득찬 시간표는 요즘의 나에게 있어 조촐한 애독서로 되어 있다.
固有名詞（人名、地名等）	鳥飼重太郎	도리가이 쥬우타로오
	八重子	야헤코
	俳句／和歌	하이쿠(俳句)／와카(和歌)
	官幣大社香椎宮	가시이노미야(香椎宮)
	志賀島／残島	시카노시마(志賀島)／노코노시마(残島)
	博多湾／香椎潟	하카다만(灣)／가시이 포구(浦口)
	「海の中道」	「바다 가운데의 길」
呼称	女中たちはコーさんとか、 ウーさんとか言っているが、	여급들은 고씨라든가 우씨라는 식으로 이니시얼로만 부르고 있을 뿐
	ヤーさん／八重ちゃん	야스다 씨／야헤코
	お時さん／新田さん	오도키 양／닛다 군
漢字語	女中／女将	여급, 종업원／마담
	心中／情死	정사(情死)／정사(情死)
	素性は全然知らされなかった。	누구인지는 전혀 알려지지 않았다.
	主人	그이, 남편
	汚職／駐在所	독직(瀆職)／파출소
	電車	전동차, 전차
外来語	(小雪の)ママ	마담
	アベック／ホーム	아베크／홈
その他	天ぷら	튀김
	香の物	김치
	和服	기모노／일본옷
	モンペ	몸빼

（1）原作との相違、翻訳文体

キム・ジョンスの翻訳本はすでに紹介した辛相澈の翻訳本と殆ど類似している。同時期に制定された「ハングル正書法」(1988)と外来語の表記を規定している「外来語表記法」(1986)に合わせ、表記を改めて一部の表現を直しているに過ぎない。ただし、表 36 に示したように、第 1 章の冒頭に「수많은 인파가 몰려들며 항상 휘황찬란한 네온사인의 빛이 가득한 도쿄 시내의 거리에 어떤 요정이 자리잡고 있었다（多くの人々が集まり、常に恍惚絢爛たるネオンの光に満ちた東京市内に或る料亭がひっそり佇んでいた）」という文章が追加されている。これは松本清張の『点と線』にはもちろん、辛相澈の翻訳本にも存在しない文章で、片忠植が 1985 年に翻訳した『点と線』の翻訳本に初めて追加された文章である。辛相澈との差別化を図るために意図的に挿入された文章のようにも推測される。そもそも片忠植の翻訳本自体が辛相澈の翻訳本を土台に

したもので、第 1 章の冒頭を除けばほぼ一致している。これから類推すると、キム・ジョンスは辛相澈の翻訳本ではなく、片忠植の翻訳本を利用して一部表現を修正した可能性が高い。片やキムの翻訳は原文から直接翻訳したものではなく、既存翻訳本の一部を修正し、手っ取り早く刊行し、速やかに商売につなげたい目的から生まれたものと思われる。こうした諸々の事情から類推すると、キム・ジョンスはもとより日本語の翻訳専門者ではなく、既存翻訳本の字句修正者である可能性が高い。もしそうだとすれば、これまた世界に類例のない職業であり、翻訳の新たな側面でもある。つまり、翻訳とはなにかを根源的に考えさせる翻訳行為（？）なのである。翻訳とは実体がなく、揺れ動くテキストに過ぎないという認識である。

キム・ジョンスは日本語原文を確認せず、辛相澈の翻訳本をそのまま利用したと推測するのは辛相澈の翻訳本に現れた誤りが同じく反復されているからである。第 2 章「情死体」では「一月二十一日」を同じく「11 月 21 日」に誤訳している。「二大新聞」で「２」が抜け落ちている部分も同じである。そのなか、「門司」を「모 지(モ ジ)」に間違って表記した部分は分かち書きを修正し、「모지(モジ)」にしている。しかし、これは原文を参照して誤りを直したものではなく、1988 年に制定された「ハングル正書法」の影響によるものと思われる。要するに、キム訳は当初から「門司」という漢字語を併記せず、ハングル表記だけにしているので、依然として「某地」と誤解される余地は残ったままの状態である。不自然な分かち書きを修正したにすぎない。またキム・ジョンス訳は辛相澈の訳文同様、むしろ当たり前であるかもしれないが、原作における傍点も省略されている。しかし、稀なケースであるが、辛相澈訳に見られる曖昧な文意を明確にしているところも見られる。例えば、「とみ子と八重子が座敷に出たので」の場合には、「도미꼬와 야헤꼬가 객실에 들어갔기 때문에（とみ子と八重子が客室に入ったので）」に直して文意を明確にしている。これは本来、辛相澈が「객실에 나갔기 때문에（客室に出たので）」と訳した部分で、その文意をより明確にしているのである。また「その随筆を掲載した雑誌を見せようか、と言った」の場合にも、「그 수필을 실은 책을 보여 드릴까요? 하고 말했다」と敬語表現にしている。しかし、キムの修正箇所はいずれも原文を確認せず、翻訳文だけでも修正が可能な部分である。翻訳本の文脈を自己流に直しているにすぎない。

一方、キムは九州方言を韓国の地域方言に置き換えることはしなかった。辛相澈訳の慶尚道方言をソウル地域の標準語に直している。しかし、「刑事の一人が訛をまる出しにして言った」という箇所に限っては辛相澈訳を参照して慶尚道方言にしている。それ以外の箇所ではまた標準語に戻っている。

（2）固有名詞、漢字語、外来語など

キム・ジョンス訳は辛相澈訳を土台にしているので人名や地名、日本文化性の強い単語においても辛訳を踏襲している。しかし、一部の地名においては「外来語表記法」(1986)に則って修正したところも見られるが、それはおもに東京、北海道、九州など、韓国でも広く知られた地名に限られている。人名においては「外来語表記法」ではなく、辛相澈訳の日本語音借をそのまま写したところが多く見られる。例えば、「八重子」の人名は「外来語表記法」に合わせて音読しているが、辛相澈訳の「야헤코(ヤヘコ)」をそのまま取り入れている。金が日本語原文を確認せず辛相澈訳を真似た重要な証拠である。キムに翻訳に耐え得る日本語力が備わっていたかどうかは

極めて疑問である。

地名の翻訳においても辛相澈訳に依拠したため、辛相澈訳同様、「海の中道」は「바다 가운데의 길(海の中にある道)」と訳され、「橿日の浦」は「가시이노우라(カシイノウラ)」に訳されている。地名と関連する「湾」、「潟」、「島」、「浦」等の翻訳も辛相澈訳と同じである。辛相澈が省略した「官幣大社」のような言葉は同じく省略している。さらに辛相澈訳には列車名である「あさかぜ」の音訳が「아사카제（アサカゼ）」と「아사가제（アサガゼ）」で混用されているが、キム訳はこの部分においてさえ一致する。呼称においても辛相澈訳と同じである。

漢字語の場合においても基本的には辛相澈訳と同じである。そのため、「別居」や「仮名」を韓国語漢字読みにする誤りも引き継がれている。ただし、「電車」の場合は「전동차(電動車)」に変えている。電車と電動車が同義語である日本とは違い、韓国語での電車は路面電車に限って使われていたが、1968 年から路面電車が全面的に廃止されることになり、電車という表現は徐々に使われなくなっていた。キム・ジョンスはこうした時代的な変化を取り入れ、辛相澈が音読した「전차(電車)」を「전동차(電動車)」に変更したのである。しかし、すべての「電車」を「電動車」に修正することはなく、両者は混用されている。

外来語を含む文化用語なども辛相澈訳を真似ている。「外来語表記法」が改変されたにもかかわらず、多くの外来語は辛相澈訳の個性的な表記方法を踏襲している。したがって、「코오피（コウヒ）」、「코우트（コウト）」のような辛相澈訳がそのまま使われている。しかし、「和服」の場合は辛相澈訳の「일본옷（日本服）」ではなく、「기모노（キモノ）」に変更しているが、これまたすべてを統一して修正したのではなく、「기모노（キモノ）」と「일본옷（日本服）」が混用されている。こうしたキム訳の意義を論理的に説明することは困難である。完全コピーではないという裁判用としての意義と目的があったのかもしれない。

（3）編集体系、その他

原文の大きな削除や追加、修正は見られない。しかし、各章の構成には原文と多少の相違が見られる。たとえば、第 1 章の「目撃者」の場合、原文は 1～3 の小節で構成されているが、キム訳は 2 と 3 を合わせて 2 にしている。それ以外の大きな相違は見られない。

表記においては辛相澈訳同様、ハングル横書きで、必要に応じて漢字語を併記し、反復する漢字語の場合は最初だけに止め、その後は省略している。横書きに合わせてセリフは二重引用符(“ ”)を使用しているが、人物の内面的なつぶやきは山括弧(<>)を使用している。鉤括弧(「」)で強調されている原文は同じく鉤括弧(「」)で強調している。一方、時刻表は辛相澈訳の時刻表(図 38)と同じ時刻表（図 40）が使用されている。全く同一の時刻の図絵で辛相澈訳の時刻表同様、「1 月 15 日、 2:00」と「11:55」という時刻が抜け落ちている。しかし、なぜか辛相澈訳に存在していた博多駅を示す〇印と線路を表す棒線が消滅している。大阪と博多が一括りになって「오오사카 하카다(大阪博多)」になっている。おそらく編集上の都合から辛相澈訳に存在した博多駅を印す〇印と棒線が削除されたであろう。これは翻訳上の重大な誤りである。翻訳本の字句修正がもたらした弊害の延長線であろう。

2.3. 金京南の翻訳本（2012）

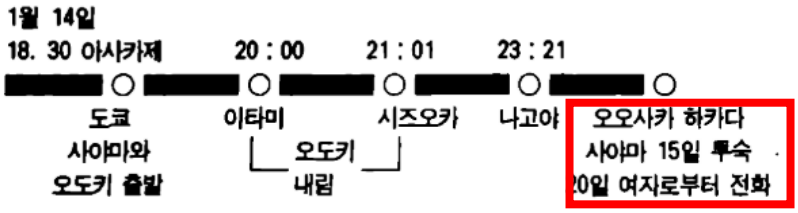


図 40 キム・ジョンス（**김종수**)の翻訳

翻訳本の訳者紹介によると、金京南は梨花女子大学哲学科を卒業し、東京大学大学院で仏教学を専門にし、2010 年に文学博士を取得した人物である。それ以降、韓国では専門翻訳家として活動している。金は専門分野である仏教関連書籍の翻訳を手掛ける一方、モビーディック社を中心に松本清張の著作を多数翻訳している。韓国で著作権契約を結んで刊行された金訳の『点と線』は以前の翻訳本とは違い、安田辰郎の年齢が「四十ぐらい」に設定された版本を使用している。以下、金京南訳『点と線』と原本を比較する。

表 37 金京南訳の目次と特徴

区分	原作	金京南の翻訳本
目次	目撃者	목격자
	情死体	동반 자살 사체
	香椎駅と西鉄香椎駅	국철 가시이 역과 니시테쓰 가시이 역
	東京から来た人	도쿄에서 온 사람
	第一の疑問	첫 번째 의문
	四分間の仮説	4분간의 가설
	偶然と作為の問題	우연과 조작의 문제
	北海道と九州	홋카이도와 규슈
	数字のある風景	숫자가 있는 풍경
	北海道の目撃者	홋카이도의 목격자
	崩れぬ障壁	무너지지 않는 장벽
	鳥飼重太郎の手紙	도리카이 주타로의 편지
	三原紀一の報告	미하라 기이치의 보고
傍点	だが、十三番線には、電車がまだはいって いなかった。	그러나 13번선에는 아직 전철이 들어오지 않았다.
原作の変更	このときも、とみ子と八重子が座敷に出たで、安田との間に、お時さんのことが 話題となった。	이때도 도미코와 야에코가 접대했기 때문에, (なし) 오토키가 화제에 올랐다.

	A紙は小倉で、 M紙は門司で印刷しているから、この日本の二大新聞をはじめ、 地元の有力紙もみな大きな見出しのスペースをつくった。	(なし) 중앙 일간지를 비롯해서, 지방의 유력지들도 모두 지면을 할애해서 대대적으로 보도했다.
	院長は自分で興に乗ったようであった。その随筆を掲載した雑誌を見せようか、と言った。三原は頼んだ。	흥이 난 원장은 그 수필이 실린 잡지를 가져왔다.
意訳	安田辰夫は、一月十三日の夜、赤坂の割烹料亭「小雪」に一人の客を招待した。客の正体は、某省のある部長である。	야스다 다쓰오는 1월 13일 밤, 아카사카의 요정 '고유키'에서 한 손님을 접대했다. 손님은 ○○성省의 부장이었다.
	「へえ。そうなの？お時さんからは、昨日、五六日郷里に帰るから休ませてくれと言われていたんだけど、へえ、男の人とねえ」	"어머, 그래? 어제 오토키가 고향에 내려가야 해서 오륙일 쉬겠다고 하더니. 세상에, 남자하고 같이 있었다고?"
	安田辰郎は、四十ぐらいで、広い額と通った鼻筋をもっていた。 色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。	야스다 다쓰오의 나이는 마흔 살쯤으로, 이마가 넓고 콧날이 날렵했다. 얼굴은 약간 거무스름했고, 눈썹이 그린 것처럼 짙고 눈매가 부드러웠다.
	そんなことを言いあって、安田は帰ったが、仕事の都合なのか、また、あくる晩に二人の客を連れてきて飲んだ。	야스다는 그런 말을 주고받다가 돌아갔는데, 일 때문인지 다음날 밤에도 다시 손님 둘을 데리고 와서 마셨다.
	しかし、そのお時は、同伴の男といっしょに、思いもかけぬ場所で、死体となって発見されたのである。	그런데 그 오토키가 생각지도 못한 곳에서, 동행한 남자와 함께 시신으로 발견되었다.
	「ちょっと、妙なことでおたずねにあがりました。お忙しいところをどうも」	"바쁘신데 죄송합니다. 뭘 좀 여쭤보려고 찾아왔습니다."
	「胸を悪くしていましてね。ずっと前から別居しているのです。極楽寺の辺に一軒借りて、ばあやを一人つけて静養させています。…」	"네, 아내가 폐결핵을 앓고 있어서 (なし) 오래 전부터 고쿠라쿠지 근처에 집을 빌려서 가정부를 두고 요양하고 있습니다. …"
	…燕の群がさえずるようであった	…참새 떼가 재잘거리는 것 같았다.
	（そうだ、安田の主張はもう一つ類似がある。）	'그러고 보니 야스다의 주장에는 또 다른 유사점이 있다.'
直訳	-	-
方言	「はあ。 二人ですたい。 男と女のごつありました やな」 「どけえあったな？」(中略) 「すぐ、そこの海ばたですたい。あたしが案	"네. 남자랑 여자, 두 사람이에요." "어딥니까?" (中略) "바로 저기에요. 안내할게요."

	内ばしまっしょ」	
	「部長さん。こいは無理心中じゃなかでっしょ な？」 刑事の一人が訛をまる出しにして言った。	“계장님, 한쪽이 자살을 강요한 건 아니겠죠?” 다른 형사가 (なし) 질문했다.
固有名詞（人名、地名等）	鳥飼重太郎	도리카이 주타로
	八重子	야에코
	博多湾／香椎潟	하카타 만(灣)／가시이 만(灣)
	官幣大社香椎宮	간페이타이샤官幣大社신전에 바치는 공물 혹은 그 대금을 국가에서 지급하는 신사였던 가시이 신사
	志賀島／残島	시카노 섬／노코노 섬
	「海の中道」	‘바다 가운데 길’규슈 본토와 시카노 섬을 연결하는 길이 8km의 모래톱
	俳句／和歌	하이쿠5·7·5의 3구 17음절로 된 일본 고유의 단시 ／와카일본 고유의 정형시
呼称	女中たちはコーさんとか、 ウーさんとか言っているが、	종업원들은 고 선생님이라든가 우 선생님이라고 부르고 있었지만,
	ヤーさん／八重ちゃん	사장님／야에코
	お時さん／新田さん	오토키／닛타
漢字語	女中／女将	종업원/마마[ママ]
	情死／心中	동반자살(同伴自殺)
	素性は全然知らされなかった。	신분은 전혀 알지 못했다.
	主人	그이, 남편
	電車／汚職／駐在所	전철[電鉄]／비리[非理]／파출소
義雷吾	(小雪の)ママ	마마[ママ]
	アベック／ホーム	젊은 연인／플랫폼
その他	天ぷら	튀김
	和服	기모노
	香の物	야채절임
	モンペ	평상복

（1）原作との相違、翻訳文体

金京南は可能な限りにおいて単純な直訳を避け、韓国語読者が理解しやすいように意訳を多用している。例えば、「胸を悪くしていましてね」の場合は、以前の翻訳本は一概に「가슴이 나빠져서요」と直訳しているが、金京南は「結核を病んでいるので」とその病気が結核であるという日本語の情報を汲み取って訳している。これは今日の韓国読者が自然に読めるように工夫した

結果と思われる。今日の若者は結核の怖さなどを知らないからである。こうした追加情報は日本語による専門教育を受けた新しい世代の特徴ともいえる。読者も若い層を想定している。表 37の比較でも分かるように、直訳すれば多少の違和感があったり、くどくなったりする表現は躊躇なく削除している。翻訳者が作家の文章表現を機械的に韓国に置き換えるのではなく、意味の伝達を優先しながら、全体的に作品の文体の雰囲気を伝えようとしたことによる。自然な韓国語のなかで作家の文体的な雰囲気を盛り込もうとしたのかもしれない。しばしば看過されているが、直訳は原文の文体を破壊する。文章の訳と文体の訳は別のものである。文体の訳は訳者が独自にもう一度作り上げなければならないものである。それを考慮したのか、原文の九州方言はすべてソウル地域の標準語に置き換えられている。当然ながら、刑事の一人が「訛をまる出しにして言った」といような叙述は削除される。文意を強調する傍点は原作通りに付している。

（2）固有名詞、漢字語、外来語

金京南は人名や地名などの固有名詞や文化用語を翻訳する際、「外来語表記法」(1986)に則って音借している。地名に関連する「湾」や「潟」の場合、湾は韓国語の漢字音読である「만(マン)」に訳し、「島」は韓国語の意味訳である「섬」に翻訳した。しかし、「海の中道」の場合「바다 가운데 길(海の中にある道)」とその意味を訳し、文中に小文字で「九州本土とシカノ島をつなぐ長さ 8 キロの砂浜」と補足説明している。一方で、「官幣大社」の場合は日本語音借である「간페이타이샤（カンペイタイシャ）に訳し、文中に小文字で「神殿に捧げる供物もしくはその代金を国家が支給する神社」という補足説明を付している。このように、金京南訳の大きな特徴は、韓国語読者に生硬な日本文化的な単語については躊躇なく補足説明を加えていることである。印刷技術の発達で小文字の使用が自由になったこともこれを可能にしている。

もう一つの特徴は原典に忠実な態度や姿勢である。忠実な翻訳態度や姿勢は削除と改編を躊躇させ、本文に多くの補足説明を加えるかたちで現れる。当たり前であるが、補足説明は作者のものではない。翻訳者がテキストに恣意的に顔を出しているとも解釈される。ここから翻訳テキストはいったい誰のものなのかという本質的な問題も発生し得る。忠実な翻訳行為によってテキストは神聖化され、翻訳自体は注釈書化していく。昨今、多くの注釈を伴う翻訳が忠実かつ誠実な翻訳であるかのように思われているが、そうとは一概に言えないところもある。近年、世界的に進んでいる翻訳においての忠実、誠実さをめぐる数々の戦略やポーズは、それが必ずしも翻訳というアダプテーションの正道とは言えないかもしれない。翻訳はアダプテーションの一種で、それには必ず変容が伴われ、再生産性さえ有しているのである。そうした意味で金旭の翻案小説『처녀地 살인計（処女地殺人計）』と金京南訳『点と線』はよい対照をなしているのかもしれない。翻訳やアダプテーションの行為の両極端で、なにを「よい訳」にするか判断するのは難しい。

他方、金京南は以前の翻訳家たちとは違い、「さん」を殆ど翻訳しない。必要な場合に限って「선생님（先生）」または「사장님（社長）」等の呼称に変更している。たとえば、「コーさん」は「고 선생님（コ先生）」に、「ヤーさん」はたんに「사장님(社長)」になっている。これは「さん」の意味を翻訳するのは難しく、一般的に「さん」に対応する言葉として使われている「씨(氏)」には敬語的要素がないからであろう。また漢字語の翻訳においても以前の翻訳者のように漢字語をそのまま使用するのではなく、読者の理解のために修正している。以前とは違い、最近は殆ど

使われていない「電車」、「情死,」、「汚職」等の漢字語は「전철」（電鉄）、「(동반)자살」（同伴自殺）、「비리(사건)（非理事件）」等に訳され、「素性」や「主人」のように、日韓において意味の違う言葉は文脈によって適切に訳している。また「女中」や「心中」などのように、韓国では使用しない漢字語の場合には「종업원」（従業員）、「(동반)자살」（同伴自殺）に置き換えている。ただし、「女将」は「마마(ママ)」に訳しているが、これは日本の料亭という場所が考慮されたように思われる。それが温泉旅館であったら成立しなかったかもしれない。

こうした積極的な置き換えは外来語訳にも現れている。日本語の外来語をそのまま表記するのではなく、文脈によって修正している。例えば、「モンペ」は「평상복（平常服）」に訳され、「和服」は「일본옷（日本服）」に、「香の物」は「야채 절임（野菜の塩漬け）」に訳されている。ただし、「ママ」は「마마(ママ)」のままにした。これも料亭という場所を考慮したからであろう。

（3）編集体系、その他

各章の構成は原文と同じである。横書きで、必要に応じて漢字を併記している。セリフは二重引用符(“ ”)が使用され、人物の内面のつぶやきは一重引用符(‘ ’)を使用している。鉤括弧(「」)に強調した原文は一重引用符(‘ ’)で強調している。他方、以前の翻訳本とは違い、原文の時刻表(図38)を正確に翻訳している（図 41）。また読者の理解のために独自の挿絵（図 42）を追加している。図 42 の挿絵は日本語の原文には存在しない挿絵で、松本清張誕生 100 周年を記念する作品集に挿絵が挿入されたことを意識し、韓国の出版社もこれに刺激されて作成し、挿入したものと思われる。

図 42 金京南翻訳本の挿絵

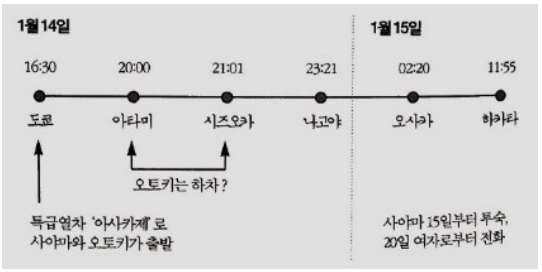


図 41 金京南翻訳本の時刻表

第5章　結論

5.1.

松本清張は韓国でもっとも人気を博した日本の小説家の一人である。おそらく一番多く翻訳された作家と言ってよいであろう。しかし、松本清張文学に関連する研究は少なく、翻訳刊行された正確な書誌的調査は行われてこなかった。清張文学は韓国で膨大に消費されたにもかかわらず、その実態は明らかでない。本研究は、清張文学の受容実態を調査するため、「或る「小倉日記」伝」が最初に翻訳された1960年から2018年までの松本清張の韓国語翻訳の実態の一切を調査し、現物を確認し、翻訳目録を作成した。表紙、目次、奥付や内容まで確認し、正確な目録作成を完成した。さらにそれを土台に松本清張文学が韓国語に翻訳される過程で現れた特徴を分析した。同時にこれを韓国の著作権導入過程、翻訳をめぐる出版文化の歴史とも照らし合わせて検討した。以下、各章ごとにその内容を要約しておく。序章である第1章では本研究の研究目的を紹介し、先行研究を紹介したものである。

5.2.

第2章においては松本清張文学の韓国における翻訳現況を紹介した。松本清張の作品は重版や再版を含めると、その冊数は265を越える。これはおそらく韓国で翻訳された外国人著作の規模としては最大であると言える。こうした膨大な翻訳刊行の全体像は著作権の問題を基準にして分類するのが分かりやすい。本論ではそれを著作権法未導入期、著作権法導入期、著作権法定着期に分類した。韓国は1987年から国際著作権協会に加入し、それ以降何度か法律を整備しながら1995年に国際的な水準に達し、それ以降は国際的な規定で運用している。ということで、1987年と1995年は韓国の出版業界においては大きな分岐点となる。清張文学の翻訳受容もこうしたエポックと連動している。

例えば、1987年以前の著作権法未導入期においては外国人の著作物は一様に保護されなかった。したがって、1960年から1986年までの翻訳本はほどんどが無断で翻訳されたもので、清張文学はその恰好の標的となる。版権が保証されない外国書籍はどの出版社も勝手に出版して販売できる宝物であった。そのため、販売が期待される有名な書籍は様々な出版社が競争的に刊行していた。表紙と訳者の名前だけを変更した同一本の再版も横行していた。

たとえば、『点と線』の翻訳本は1961年に初めて翻訳刊行され、1986年までに計18回も刊行されている。この過程に計8名の翻訳者の名前で計13の出版社から刊行されている。しかし、その翻訳本の大半は原作から直接翻訳したものではなく、以前に刊行された他社の翻訳本をそのまま再刊行したり、ごく一部の文章を修正したり、題目や作者名だけを変えたりしたものである。一例を挙げれば、1976年刊行の辛相澈の翻訳本(智炤林文庫社)は1984年に『호스티스의 정사（ホステスの情死）』(眞話堂)という題目で出版社名を変更して刊行されている。そして同じ内容のものが片忠植訳として『호스테스 사냥꾼（ホステスの狩人）』(イマヌエル、1984)と『붉은 장미의 정사현장（赤い薔薇の情死現場）』(イマヌエル、1985)としても題目と訳者名が変更され

て刊行されている。鄭鍾國訳の『点과 線』(三文堂, 1985)と『해변의 정사(海辺の情死)』(恩光社、1987)も1976年刊行の辛相澈訳とほぼ同一のものである。出版社や翻訳者の名前と表紙は変わっているが、翻訳内容は同じで、同一のものが再利用されているのである。まことに混沌とした翻訳状況である。

上記の『点と線』の例もそうであるが、著作権未施行期に刊行された清張の翻訳本は原作とは明らかに違う題目を付けたケースが多く見られる。題目の変更と改編は作品の内容を正確に伝達したい目的によるものと、以前に翻訳刊行されたものとは別の作品であることを偽装するためのものがある。たとえば、『地の骨』を『暗黒大学』(1968)や『벌레먹은 象牙塔(蝕んだ象牙の塔』(1970)に変更したのは作品内容を分かりやすく伝達するためであったと思われる。『地の骨』とは韓国語では「땅의 뼈(土の骨)」と直訳されるが、題名は不自然であり、意味不明である。そのため、腐敗した大学教授と入試をめぐる不正を前面に打ち出した『暗黒大学』に変更されたのであろう。しかし、こうした例は少ないほうである。より多くは既存の翻訳とは違うものであると偽装するため、あえて別の題目にしている。上述した『点と線』がそのよい例である。『点と線』とは全く関連のない煽情的な題名がいくつも付けられているのである。商業販売主義がもたらした歪な結果である。

このように、同一原作にいくつかの出版社がそれぞれ別の題目を付けて競争的に刊行することは著作権法未導入期にしばしば見られる現象である。一人の専門家が責任を持って一冊を翻訳するのではなく、人気作品を数名が分担して急ピッチで翻訳したり、有名翻訳家の名前を借りて翻訳したりするケースも多く見られる。1960年から1986年までの松本清張作品の韓国語翻訳には特にこうした現象が露骨に現れている。著作権が保護されず、清張が一大人気作家だったからである。

1987年から1994までは著作権法導入期である。1987年、韓国は世界著作権協約(UCC)に正式に加入する。これによって国内の「著作権法」が全面改定され、外国人の著作物が法的に保護されることになる。こうした法的措置によって、『바다에 남긴 유언』(「犯罪の回送」)のように、日本の出版社と著作権契約を結んだ作品が翻訳刊行され始める。しかし、この時期の著作権法は1987年以前にすでに刊行された外国人著作物を遡及的に保護することはしなかったので、以前に刊行されたものは継続的に流通される。著作権法導入期に刊行された松本清張の作品は計18編で、冊数で言うと22冊になる。しかし、著作権を獲得した新しい作品は少なく、大半は以前に刊行したものを再版したり、翻訳者の名前を変えて刊行したりしたものが多い。新しく翻訳刊行されたものは、『바다에 남긴 유언(海に残した遺言)』(犯罪の回送)、『소설 동경제국대학(小説東京帝国大学)』(1987)、『北의 詩人 林和(北の詩人林和)』(1987)、『아무도 大權을 잡지 못했다(誰も大権が取れなかった)』(天保図録、1987)、『사라진 선거참모(消えた選挙参謀)』(網、1992)、『松本清張의 徳川家康』(1992)程度である。

著作権法導入期には松本清張の原作が推測できないような全く別の題目を付したケースも多く見られる。たとえば、「声」と「顔」は「접지선(接地線)」と「각본인생(脚本人生)」(1989)に、「地の指」は「유혹의 덫(誘惑の罠)」(1993)と訳された。『眼の壁』は「특종을 노리는 사회부 기자(特種を狙う社会部記者)」(1988)という題目で刊行された。『특종을 노리는 사회부 기자(特種を狙う社会部記者)』は以前の1985年に刊行された『눈의 壁(眼の壁)』

の再版である。1985年に刊行した際には、題名を『眼の壁』を直訳した『눈의 壁』であったが、これが1993年には題目を『특종을 노리는 사회부 기자（特種を狙う社会部記者）』に変更されたのである。こうした現象は著作権法導入期に広く見られる現象である。この時期に刊行された清張の22の作品のなか、18の作品が原作とは別の題目を付している。また既存の翻訳を再刊行する際においても題目をだけをすり替え、あたかも新作のように装っている。これは著作権法導入期から浮上した著作権を避ける苦肉の策として現れたようにも思われる。

一方で、著作権法導入期には松本清張の作品のなかでも、政治問題を扱った作品が集中的に翻訳された。『網』を翻訳した「사라진 선거참모（消えた選挙参謀）」(1992)を初め、『天保図録』を翻訳した『아무도 대권을 잡지 못했다（誰も大権が取れなかった）』(1987)、『松本清張의 徳川家康』(1992)のような政治問題を素材にした作品が紹介された。1987年から1994年までの韓国は政治的な激動期で、1987年6月抗争の結果、国民が直接選挙によって大統領を選ぶことになり、政治と大権（大統領）についての熱気が非常に高まっていた。こうした時代を反映し、日本の歴史や政治について書いた清張の作品が韓国の政治状況と無理矢理に関連させられてもいる。

さて、著作権法定着期である1995年以降になると、著作権契約によって刊行されるシステムが定着していく。著作権契約が必要なため、資本力の強い大手の出版社が登場し、以前には紹介されなかった松本清張の作品を体系的に紹介していく。その代わり、零細出版社は淘汰される。こうした出版社の交替とともに翻訳者も交替していく。日本文学を専門にした者や日本留学経験者が大挙登場する。新しい翻訳者は日本語と韓国語に馴れており、とくに正確な翻訳と読者の理解を重視する傾向を持っている。

著作権法が厳格になるにしたがって、また出版社と翻訳者の交替によって、従来のように一部人気作の競争的な翻訳はなくなり、翻訳対象は広がる。推理小説だけではなく、松本清張の多様な文学ジャンルを体系的に紹介していく。2012年からブック・スピアとモビーディックの大手二社が共同企画した「세이초 월드(清張ワールド)」シリーズがそのよい例である。両社は、以前に韓国で紹介された清張文学が代表作『点と線』や『ゼロの焦点』」などのいくつかの作品に集中し、しかもそれらのほとんどはベルン協約以前の海賊版であり、翻訳は低レベルのものであったと厳しく批判する。また松本清張が韓国では推理小説作家としてのみ紹介されているが、これも実情ではなく、清張は『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』や『쇼와사 발굴（昭和史発掘）』のようなノンフィクションを多く書いている作家であり、また優れた歴史家でもあると紹介する。こうした松本清張の全体像を知るためには清張の多様なフィクションと幅広いノンフィクションの世界を知る必要があるとする。

こうした認識と方針のもと、ブック・スピアは松本清張の長編小説を主に出版したが、清張の推理小説論である『검은 수첩（黒い手帖）』(2014)、日本の代表的な芸術家を紹介した『예술가로 산다는 것（芸術家として生きること）』(小説日本藝譚、2016)のような作品も翻訳している。モビーディック社はおもに短編小説の翻訳に集中したが、金京南訳の短編集『잠복（潜伏）』(張込み、2012)、ノンフィクション『일본의 검은 안개（日本の黒い霧）』(2012)、短編集『어느 고쿠라 일기전（或るコクラ日記伝）』(或る「小倉日記」伝、2017)を始め、金旭訳『미스터리의 系譜（ミステリーの系譜）』(2012)、 田恵善訳の短編集『역로（駅路）』(2013) などを

刊行している。

ブック・スピアとモビーディックの二社は、お互いに版型とデザインを統一して松本清張の作品を刊行している。「세이초 월드（清張ワールド）」シリーズには清張の長編小説だけではなく、多くの短編小説、さらにノンフィクションまでが含められている。こうした企画によって松本清張の全体像がようやく浮き彫りになっていく。また新しい専門翻訳家の登場によって原作に忠実な翻訳が図られ、同時に読者にとって自然な韓国語の提供が優先されていった結果、読者もそれを求めるようになったのである。

著作権法定着期になると版権契約によって刊行されることが一般化していく。1995年から2004年の間には一部において版権未契約の書籍も見られたが、著作権法が一層強化された2009年以降は翻訳権のない著作はほとんど刊行されなくなる。こうした著作権契約による大きな変化は翻訳対象の作品や作家に対する詳細な情報である。以前の場合は著者に関する記述は非常に少なかったが、著作権契約が一般化されてからは著者である松本清張についても詳細に説明している。また専門家や翻訳者の解説も載せ、作品に含まれている社会的な意味や意義についても読者が分かりやすいように詳細な説明を加えている。それは原著者や原作だけではなく、訳者についても同様である。翻訳者の経歴紹介も以前に比べて遥かに詳細に述べられている。著作権法の定着によってなにより翻訳者の地位が非常に向上されたといえる。翻訳者が自己アイデンティティを持つようになっていくのである。それと並行して原作や原作者に対する詳細な紹介や緻密な作品解説が加えられていく。

5.3.

第3章においては松本清張の翻訳集に見られる特徴を分析した。特に注目したのは、松本清張文学が韓国で紹介される過程でみられる異様な形態の作品集である。文潮が翻訳した『人間小説・大男』(全10巻、三韓文化社、1976)は松本清張の小説を全集形態に編んだものである。しかし、全集形態の翻訳書でありながら、原著者である松本清張についての紹介がなく、また松本清張のどの作品を翻訳したのかについての情報もない。ただ表紙に「人間小説大男、松本清張/文潮訳」という簡単な情報が提示されているだけである。当時として珍しく洋装上製本の装幀で、一冊当たり450～480頁になる分厚いものである。『大男』は全10巻本として2度にわたって刊行され、以降は全6巻本としても2回刊行された。松本清張の作品がこれほど纏まった形で刊行されたのは日本以外にはほぼ類例がなく、韓国翻訳史においても特異な現象である。

『大男』には5編の長編推理小説と7編の中編推理小説、そして33編の短編推理小説、8編の短編小説を翻訳紹介している。このなかで、「危険한 斜面（危険な斜面）』、「일사부재리（一事不再理）」（一年半待て）、『点과 線（点と線）」、『눈의 壁（眼の壁）』、『제로의 초점（ゼロの焦点）』の5編はすでに翻訳されたもので、それ以外は初めて翻訳紹介されたものである。『大男』は松本清張の作品を網羅した全集形態の翻訳集であるが、その目的は必ずしも清張文学の神髄を韓国に紹介することにあったとは思えない。『大男』を紹介する新聞広告には、「황금, 권력, 여체의 인간強占 근성（お金、権力、女体への人間強占、根性）」を扱ったものとして紹介されている。原作者である松本清張の文学思想を伝えるのではなく、煽情的な宣伝で

販売を図ることを主たる目的としている。そのため、販売戦略に沿う形で清張の作品は選ばれ、翻訳者や出版社の視点から作品はさらに再構成されている。その象徴的なものが松本清張の作品世界とは全く関係のない『大男』という題名である。また多くの個別作品の題名も恣意的に修正されている。その結果、世界に類例のない松本清張の翻訳全集らしきものが1970年代に誕生したのである。これは推理小説に対する韓国の文学的風土と共に読者の趣向を如実に反映するものでもある。

松本清張文学が韓国で翻訳紹介される過程に見られる看過できないもう一つの特徴は翻案小説の刊行である。翻案小説は1984～1987年という特定の時期に刊行されているが、この背景には1980年代における推理小説ブームがある。また翻案を通して既存翻訳と差別化を図ろうとした意図もある。それに韓国の現実により合致させようとした努力と欲望も挙げられる。より高度で過激なアダプテーションを図ったとも言えるが、不思議な現象も多くある。翻案者は自身の意図から翻案したことを強調しながら、一方ではそれが「松本清張の長編推理小説」であることを前面に打ち出している。販売のためにはどうしても松本清張という名前が必要であったのかもしれない。一方で、翻案作は韓国読者の理解を優先するあまり原作とはかけ離れたものともなる。その結果、原作の社会派推理小説としての性格は弱められ、主人公の冒険活劇のように変貌するケースも発生する。清張が重視した風土性と社会性の側面がそぎ落とされ、清張が否定した「「お化け屋敷」の掛け小屋」のような作品に変貌したりするのである。同時に重要な基礎的な間違いも散見される。

たとえば、『처녀地 살인計（処女地殺人計）』は 『聞かなかった場所』を翻案したものであるが、翻案者はそれを松本清張『黒い樹海』の翻案であると述べている。こうした誤謬・間違いは再版だけではなく、書名を変更して刊行した『미인計의 함정（美人計の陥穽）』においても受け継がれている。原作に対する考察さえ行われていなかったのである。あるいは意図的に無視された可能性もある。人気作家である松本清張の名声に便乗して販売することばかりが優先され、原作を明らかにすることなど、さほど重要でなかったのかもしれない。その翻案物が「松本清張原作」であることが重要だったのであろう。こうした現象は、清張文学がどのように受容されいかに消費されていったかを示すよい一例であろう。

『第五의 그림자（第五の影）』は『黒い樹海』を翻案した作品で、原作の枠組みや文章表現をそのまま維持しながら日本の人名や地名、文化や風土を韓国風に置き換えたものである。しかし、翻案作品においては日本の地理や風土が韓国の地理や風土と矛盾をきたし、時間的なトリックを基調とする推理は破綻する。さらに韓国の実情に置き換えられない箇所は翻訳者が任意で削除したり、直訳したりしているので、もともと弱い推理的叙事は殆ど機能しなくなる。場合によっては韓国の地理や地形が原作に引きずられて勝手に変更されたりする。推理的叙述の弱体化によって主人公の奮闘にもかかわらず、事件は警察の捜査によってあっけなく解決される。こうなると探偵役と推理は不要となる。

こうした推理の弱体化は『ゼロの焦点』を翻案した『아내의 추적（妻の追跡）』、『眼の壁』を翻案した『目撃者』のような翻案小説にも同様に現れている。『아내의 추적（妻の追跡）』は『ゼロの焦点』の枠組みや文章表現はそのまま維持し、人名や地名、歴史文化的な言葉を韓国風に変えたものである。この過程で韓国の地理的な位置と特性は原作の地理的な位置と特性と大

きな矛盾をきたす。また日本の戦後 GHQ 占領期のように、韓国史に置き換えられないものは削除され、米軍相手の売春婦の問題は女性の個人的な逸脱と不道徳によるものとされる。これによって原作の持つ社会派推理小説の特性は大きく毀損される。一方、『目撃者』は『眼の壁』を翻案したものである。他の翻案小説よりは韓国の実情に一致しているほうであるが、韓国の地理的な位置や文化、風土性がもたらす矛盾は前作同様である。日本の高度成長期における時代的雰囲気や手形詐欺事件という日本的な経済的慣習や慣習などは翻案過程で削除されたため、社会派推理小説の側面は抜け落ち、いたずらに主人公が犯人を追いかけて立ち振る舞う冒険活劇と化している。こうした翻案小説で見られる多くの矛盾と破綻は、逆に清張文学が日本の風土性と文化性、社会性に強く根ざしていることを証明するものでもある。

5.4.

第4章では、韓国で何度も翻訳された「或る「小倉日記」伝」と『点と線』を対象に、松本清張の作品が時代ごとにどうのように翻訳されてきたのか、その翻訳史の一端を考察するとともに、それらの作品と原作の比較を通してそれぞれに見られる特徴を明らかにした。「或る「小倉日記」伝」と『点と線』の韓国訳は数多くあるが、それらは著作権法未導入期、著作権法導入期、著作権法定着期において翻訳傾向に変化が見られる。

翻訳権未導入期（1960～1986）を代表する作品として、李元壽訳「或る「小倉日記」伝」(1960)と辛相澈訳『点と線』(1976)を挙げることができる。この時期にはまだ外来語転写方法を規定する「外来語表記法」が存在していない時期である。植民地期に日本語教育を受けた世代は広く存在していたが、翻訳に関連する専門的な教育を受けた人たちはあまり存在していなかった。日本語以上に韓国語を体系的に教わっておらず、ハングル表記法さえも統一されていなかったため、翻訳者個人によってハングル表記法に相違が見られ、戦前風の直訳による非文や誤訳さえ多く見られる。また当時は日常生活においても日本語単語や日本風の文章が通用されていたので、日本語をそのまま音借するケースも多く見られる。たとえば、李元壽は基本的に日本語原文を直訳する方法を好んだが、これは李自身が植民地期の日本語教育を受けた世代であり、日本語文章に熟達していたからであろう。李にとっては日本語より韓国語が難しかったのかもしれない。一方で、辛相澈は日本語教育を受けたことのない終戦後の若い読者層を意識してか、直訳ではなく意訳を好んだ。

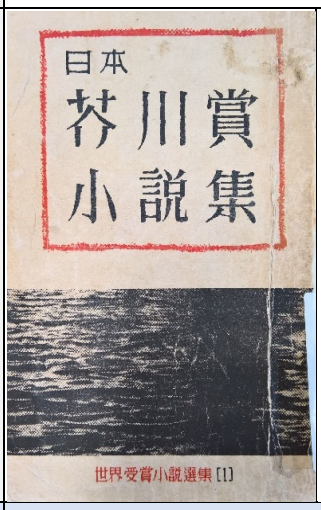
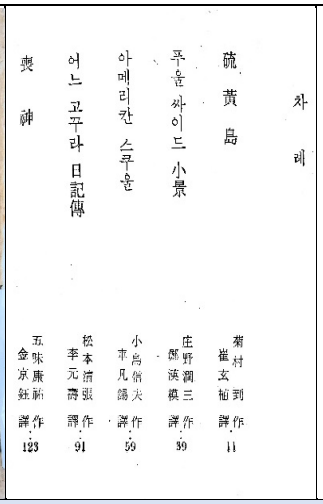
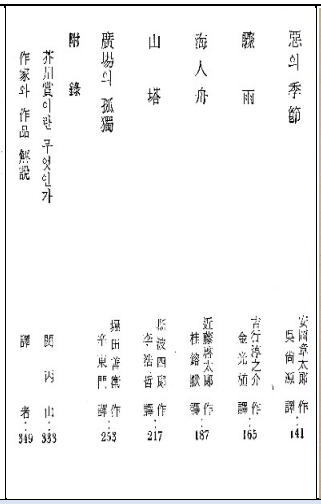
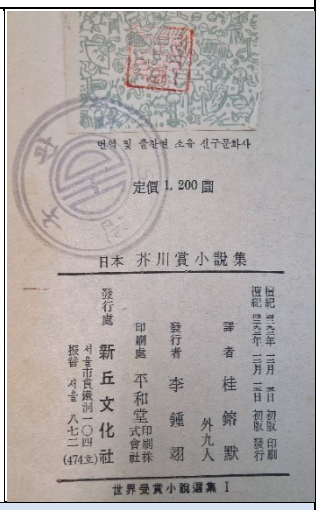
著作権法導入期（1987～1994）を代表するものとして、徐炳珦訳「或る「小倉日記」伝」(1987)とキム・ジョンス訳の『点と線』（1995）を挙げることができる。キム・ジョンスの翻訳本は1995年に全面改定された「著作權法」が効力を発揮する以前に刊行されたもので、いわゆる著作権法導入期の翻訳本である。この時期は著作権法定着期に至る過度期である。また、以前の植民地期日本語世代が退場し、戦後の日本語教育による翻訳専門家が生まれる狭間の時期にもあたる。この時期には日本語の専門ではない者による単発の翻訳が頻繁に現れている。著作権法が整備されていく過程で、零細出版社が乱立し、以前に翻訳されたものを「外来語表記法」に合わせて字句の一部を修正し、翻訳者の名前と表紙だけを変えて刊行するケースが多く見られる。場合によっては、日本語の原文を確認せず、既存の韓国語翻訳本をテキストとしていくつかの字句を

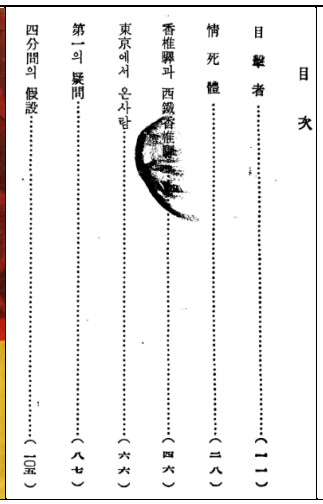
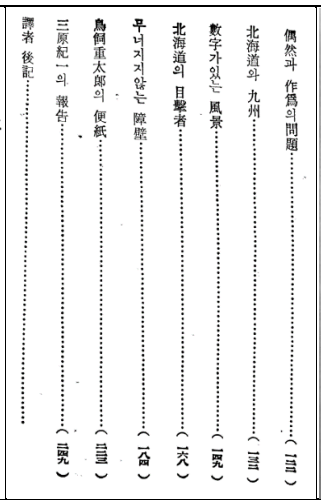
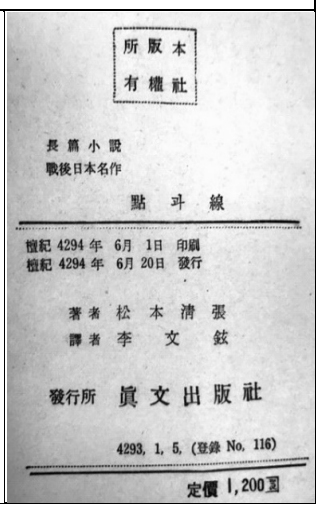
修正して刊行する現象さえあった。たとえば、徐炳珦の翻訳本は以前の李元壽の翻訳本が土台になっている。徐炳珦は李元壽の翻訳本と差別化を図るために単語と一部文章の修正を行っているが、この過程でさらなる誤訳が発生する。またキム・ジョンスの翻訳本は辛相澈の翻訳本を土台にしたもので、翻訳過程で原文にない文章を追加されてもいる。

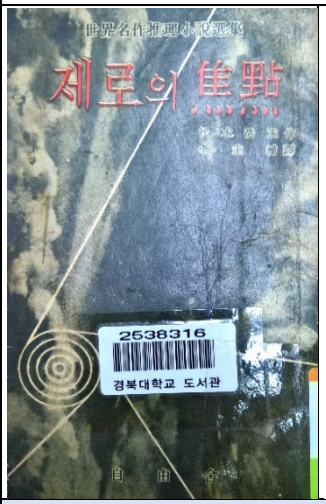
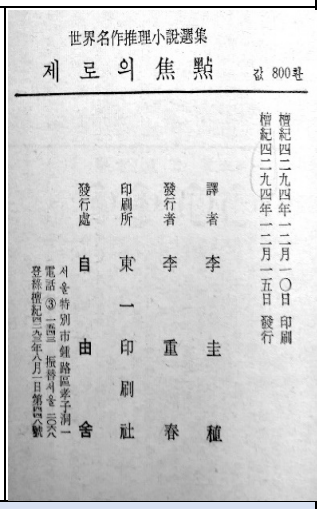
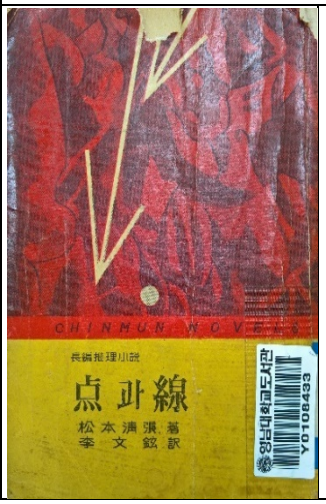
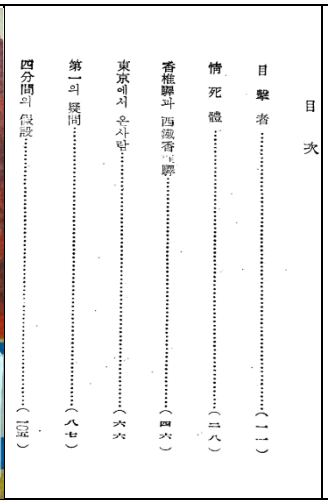
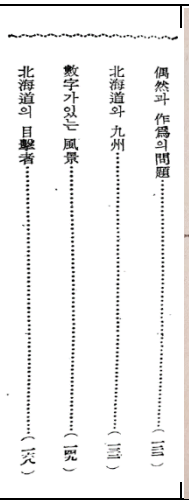
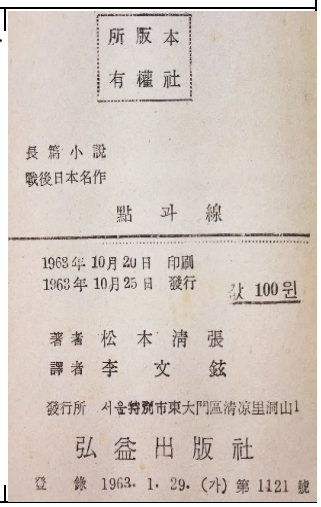
最後に、著作権法定着期を代表するものとして、イ・ギュウォン訳の「或る「小倉日記」伝」(2009)と金京南訳の『点と線』が挙げられる。両作はいずれも以前の著作権法が全面改訂された1995年以降に刊行されたものである。この時期になると、日本語を専門とする者や日本留学経験者による翻訳が主流をなす。翻訳者としての職業意識と倫理意識と自己のプライドを持った翻訳者たちの出現である。これと相俟って出版社も著作権を獲得して翻訳刊行している。そのため、以前の翻訳と違い、原典に非常にこだわる傾向が見られ、それによって誤訳や非文も少なくなる。イ・ギュウォンと金京南は日本語原文の意訳を基本にしているが、地名や人名、外来語などは「外来語表記法」にしたがって韓国語の音借で表記している。概して日本語原文を直訳するよりは若い世代の韓国語読者を意識して自然で流麗な韓国語として表現している。韓国語の表現自体が翻訳者自身の個性であり、文学行為という自己意識が芽生えている。これに付随して翻訳者の個性による相違が見られる。たとえば、イ・ギュウォンは可能な限り原文の文章構造を維持する形での意訳であるが、金京南は韓国語として違和感があるものや不要と思われる部分は果敢に削除している。一度日本語を解体し、韓国語として組み直しているのである。それぞれには長短があるが、少なくとも翻訳行為を通して自己を表現しようとしていることは共通している。

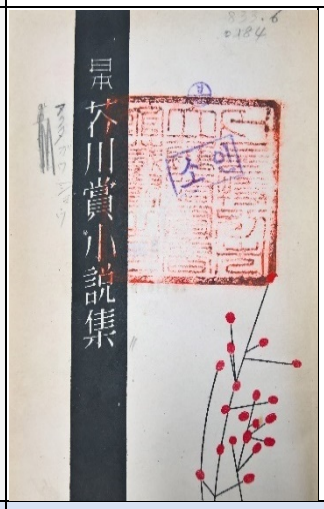
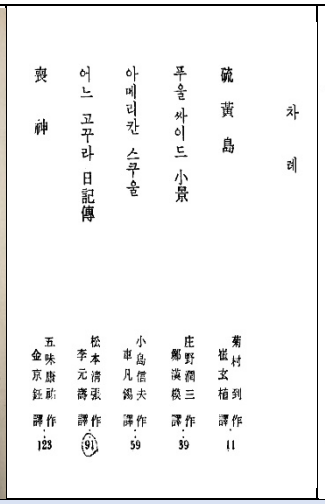
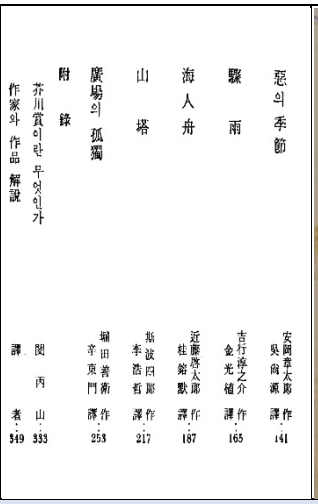
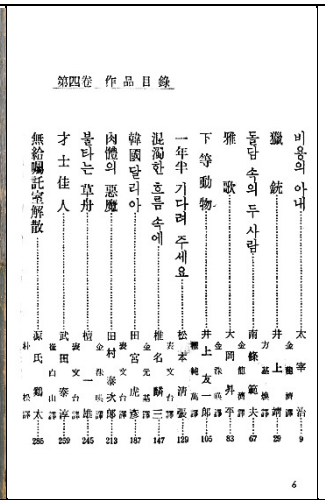
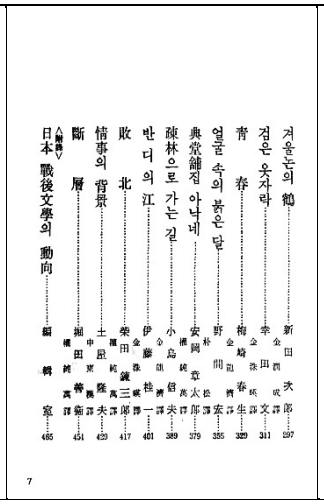
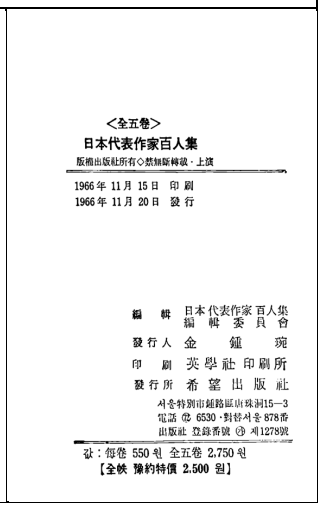
最後にひとつ指摘しておきたいことは、翻訳行為の意義と翻訳者の地位向上と相俟って原作・原典が聖典化していく傾向があることである。文芸作品の研究対象として翻訳が注釈化していくのでる。こうした昨今の現象は多様なアダプテーションの排除でもあるが、それについて今後さらなる議論が必要であろう。しかし少なくとも確実に言えることは、原典は作者の死ともに終焉するが、翻訳によるアダプテーションは作者の死の後にも絶え間なく生成されていく。翻訳がある限り、作品の成長と生成は止まないのである。そうした意味で清張文学は翻訳によってこれからも成長していくだろうと思われる。課題はまだ多く残しているが、これで終わりとする。

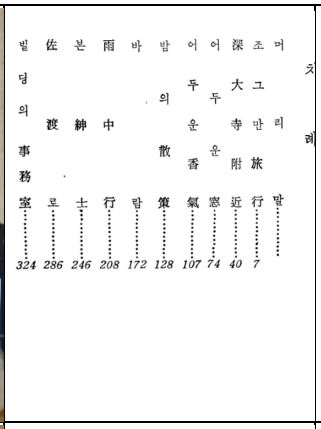
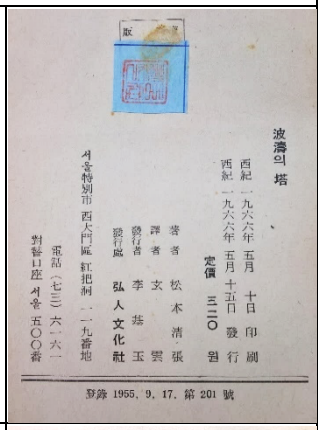
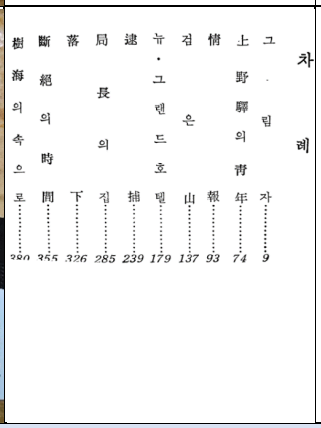
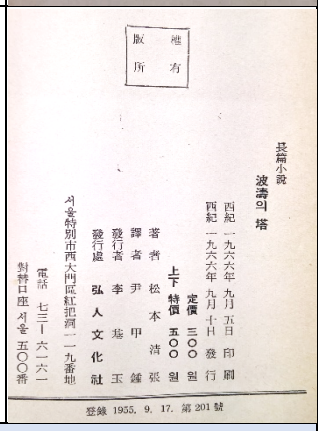
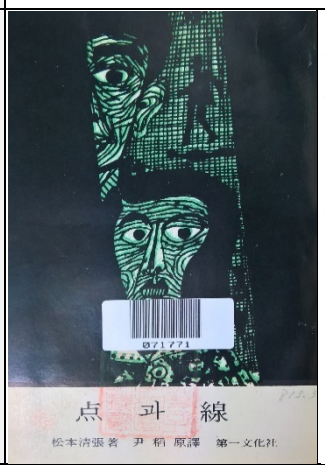
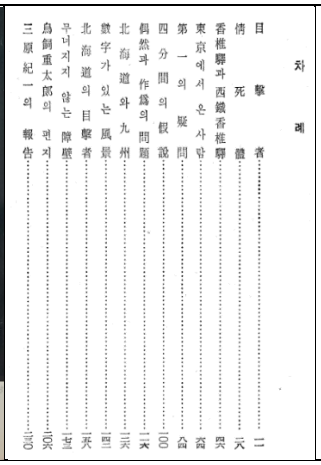
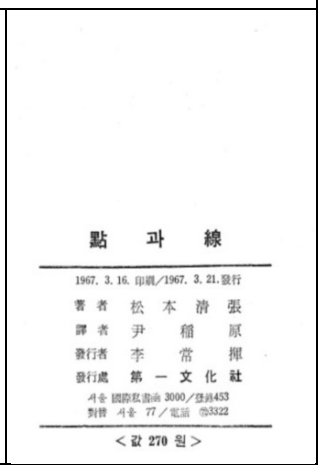
第6章 付録　松本清張作品の翻訳目録

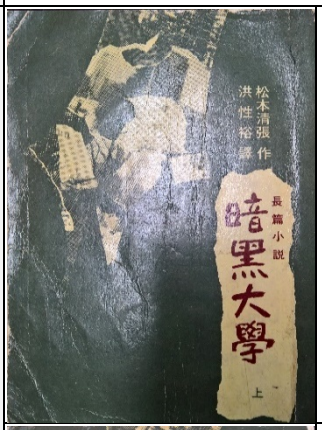
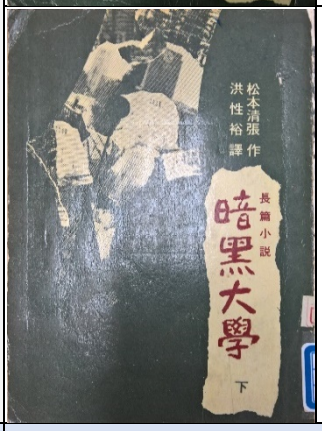
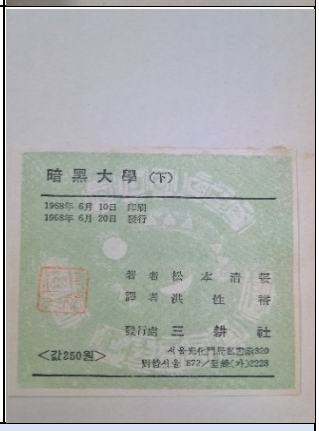
NO		1	
作品名	原題名	어느 고꾸라 日記傳	或る「小倉日記」伝
訳者		李元壽	
書名 (全集/文庫)		『日本芥川賞小説集』(世界受賞小説選集1)	
出版社	年度	新丘文化社	1960
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		   	

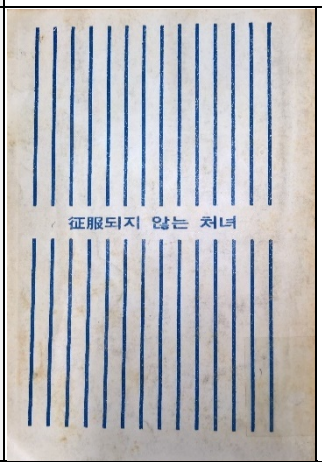
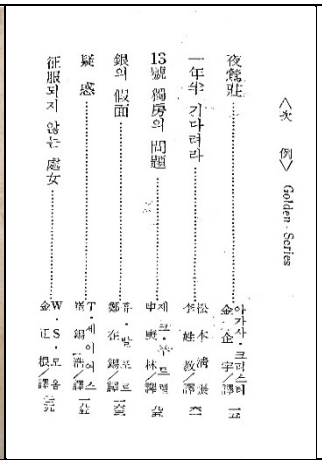
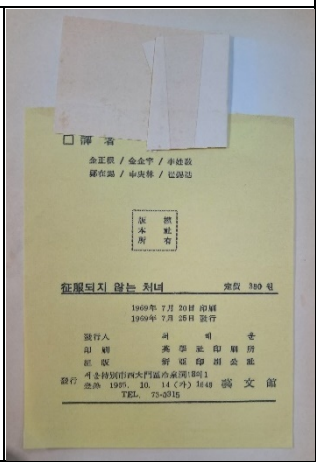
NO		2	
作品名	原題名	点과 線	点と線
訳者		李文賢	
書名 (全集/文庫)		『点と線』	
出版社	年度	眞文出版社	1961
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  	

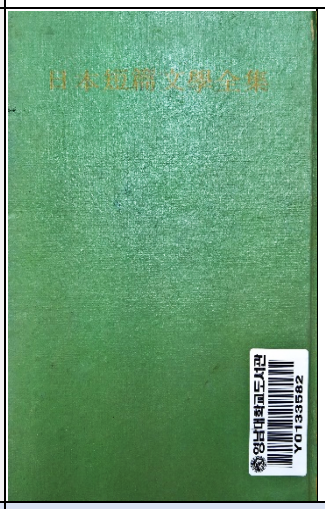
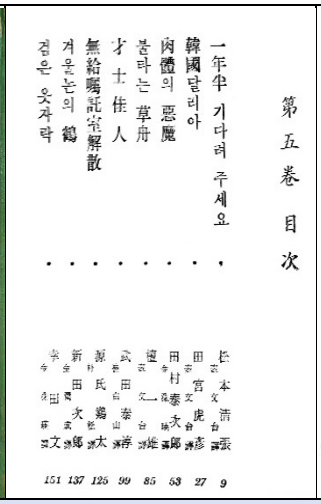
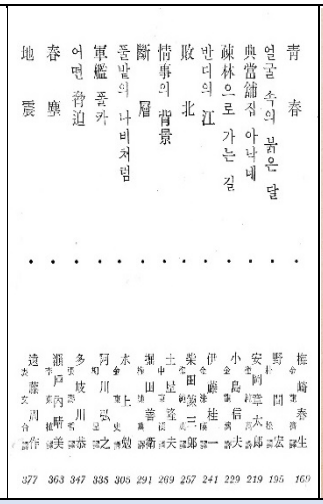
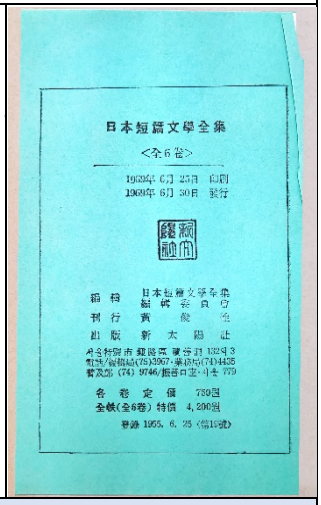
NO		3	
作品名	原題名	제로의 焦點	ゼロの焦点
訳者		李圭稙	
書名 (全集/文庫)		『ゼロの焦点』(世界名作推理小説選集)	
出版社	年度	自由舍	1961
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		 目次 어떤 남편 …… 一 실종(失踪) …… 一四 복국의 의혹(疑惑) …… 三四 지방의 명사 …… 五四 바닷가의 무덤 …… 六三 소오다로오의 행동 …… 七九 전력(前歷) …… 九〇 독사자(毒死者) …… 一〇三 호구리구 천도(北陸鐵道) …… 一一〇 도망(逃亡) …… 一三三 남편의 의미 …… 一四二 눈나라에 깃들인 불안 …… 一五九 제로의 좆점 …… 一九〇	–	
NO		4	
作品名	原題名	点과 線	点と線
訳者		李文賢	
書名 (全集/文庫)		『点と線』	
出版社	年度	弘益出版社	1963
備考		『点と線』(眞文出版社, 1961)の再版(11～13章なし)	
表紙/ 目次/ 版権紙		  目次 目擊者 …… (一一) 情死體 …… (二八) 香椎驛과 西鐵香椎驛 …… (四六) 東京에서 온사람 …… (六六) 第一의 疑問 …… (八七) 四分間의 假設 …… (一〇五)	 偶然과 作爲의 問題 …… (一三) 北海道와 九州 …… (一三) 數字가 있는 風景 …… (一四九) 北海道의 目擊者 …… (一六八)	

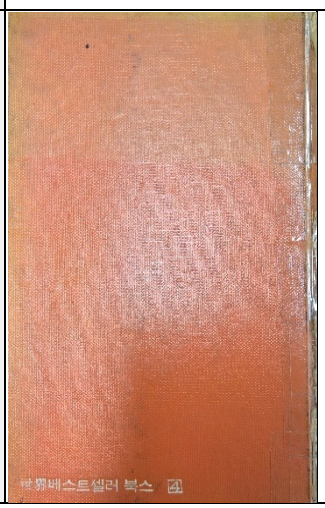
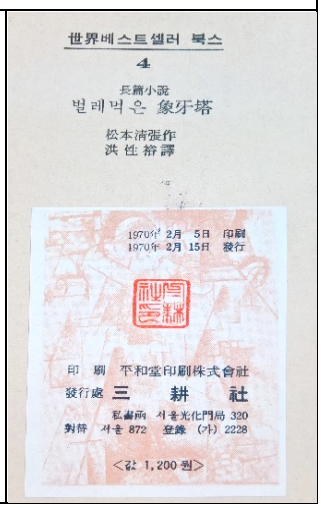
NO		5	
作品名	原題名	어느 고꾸라 日記傳	或る「小倉日記」伝
訳者		李元壽	
書名 (全集/文庫)		『日本芥川賞小説集』	
出版社	年度	新丘文化社	1963
備考		『芥川賞小説集』(1960)の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙		  
NO		6	
作品名	原題名	一年半 기다려 주세요	一年半待て
訳者		表文台	
書名 (全集/文庫)		『日本代表作家百人集』4	
出版社	年度	希望出版社	1966
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  

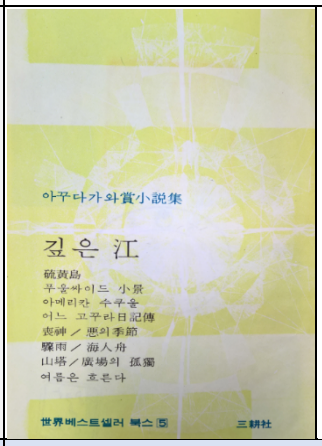
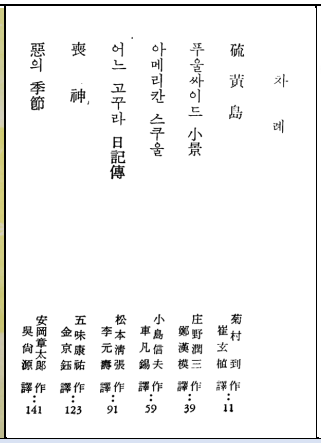
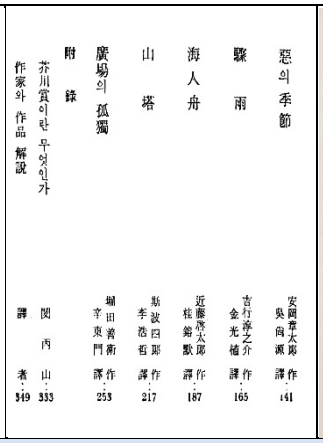
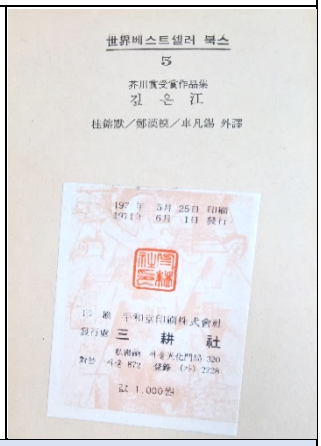
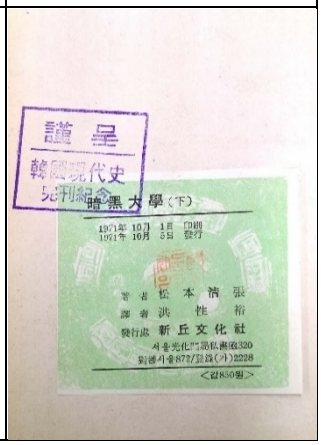
NO		7	
作品名	原題名	波濤의 塔	波の塔
訳者		玄雲（尹甲鍾）	
書名 （全集/文庫）		『波の塔』上・下	
出版社	年度	弘人文化社	1966
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		 	–	
		  	–	
NO		8	
作品名	原題名	点과 線	点と線
訳者		尹稻原	
書名 （全集/文庫）		『点と線』	
出版社	年度	第一文化社	1967
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		 	–	

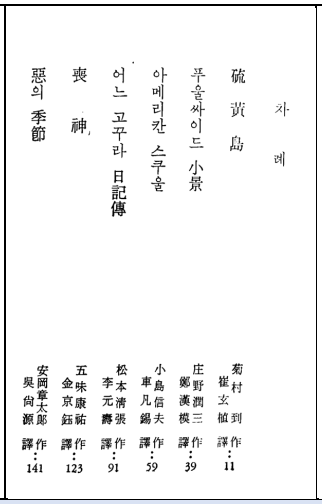
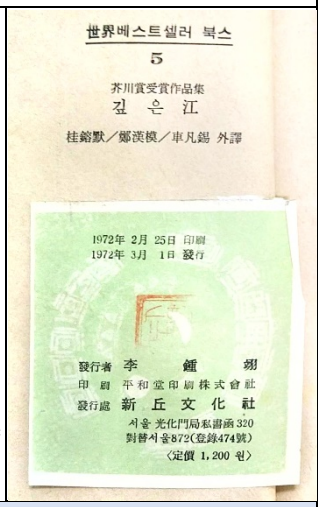
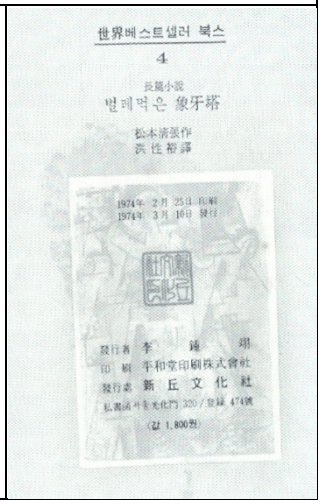
NO		9		
作品名	原題名	暗黑大學	地の骨	
訳者		洪性裕		
書名 (全集/文庫)		『暗黒大学』上・下		
出版社	年度	三耕社	1968	
備考				
表紙/ 目次/ 版権紙		なし	-	
		なし	-	

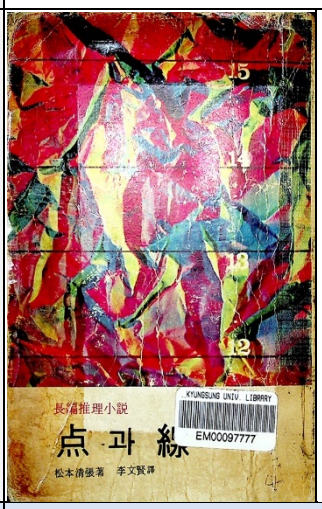
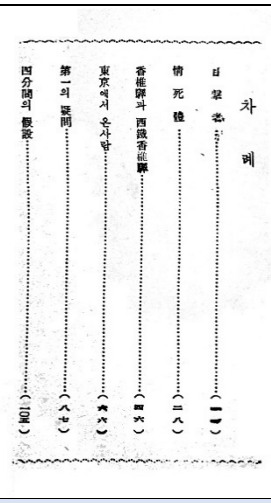
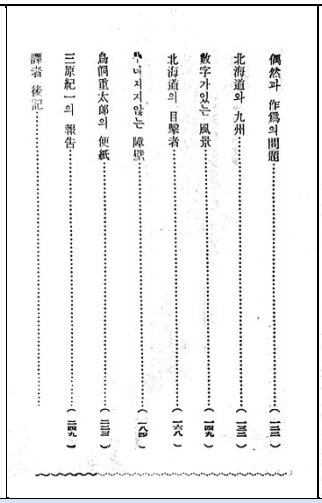
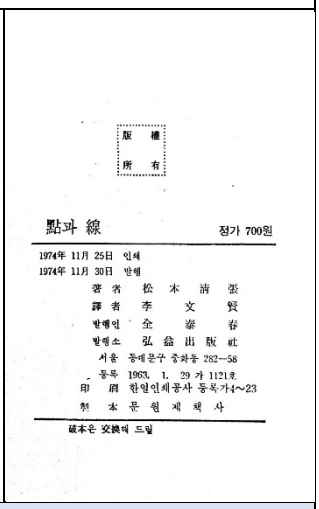
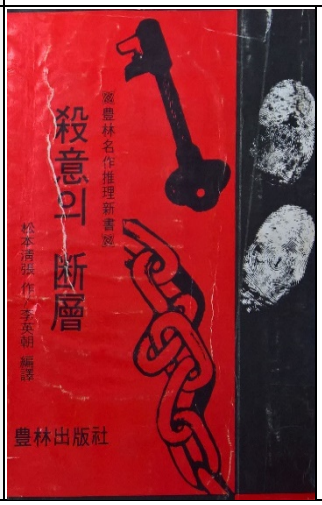
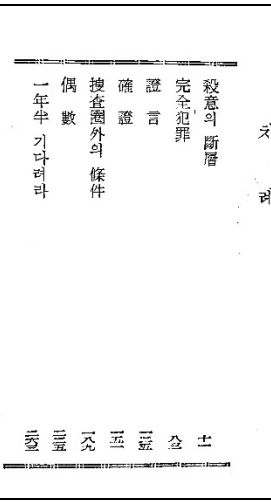
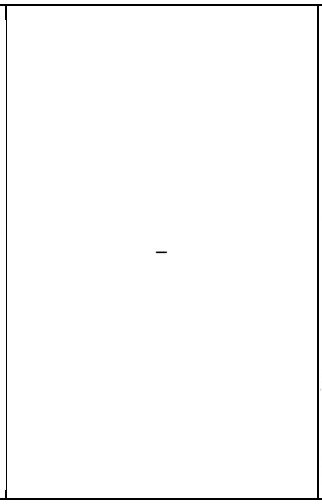
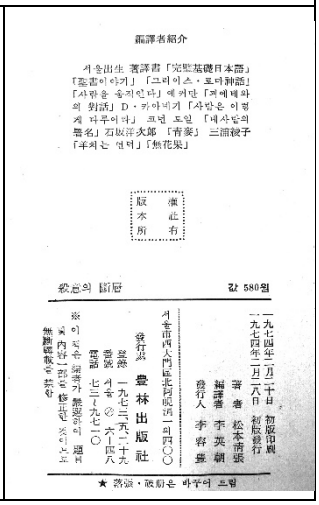
NO		10		
作品名	原題名	一年半 기다려라	一年半待て	
訳者		李姓教		
書名 (全集/文庫)		『征服されない処女(外)』		
出版社	年度	藝文館	1969	
備考		サマセット・モーム、アガサ・クリスティー他3人の短編小説と併録		
表紙/ 目次/ 版権紙			-	

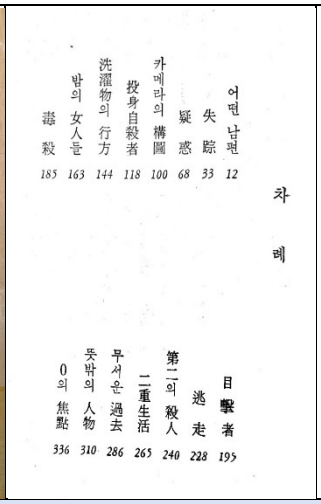
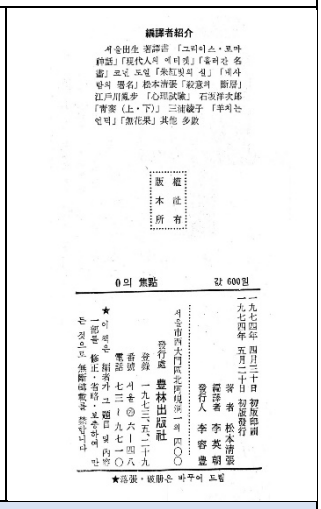
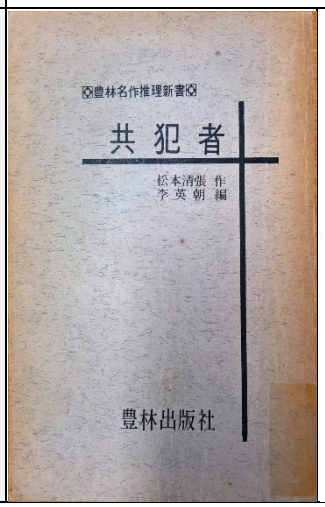
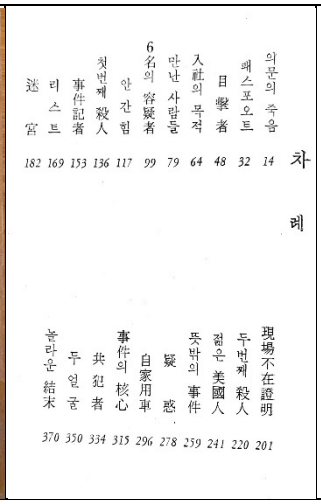
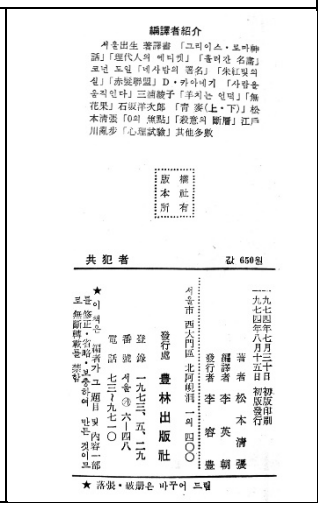
NO		11	
作品名	原題名	一年半 기다려주세요	一年半待て
訳者		表文台	
書名 (全集/文庫)		『日本短編文学全集』5	
出版社	年度	新太陽社	1969
備考		『日本代表作家百人集』4(1966)収録「一年半待て」と同一内容	
表紙/ 目次/ 版権紙		   

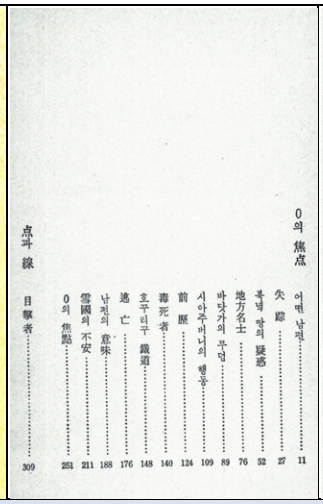
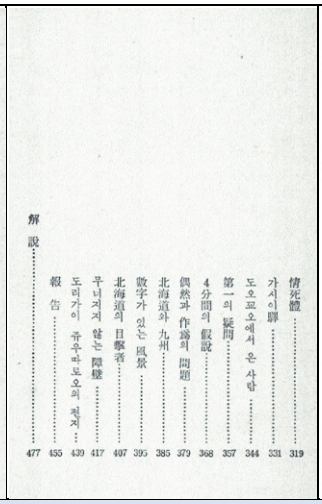
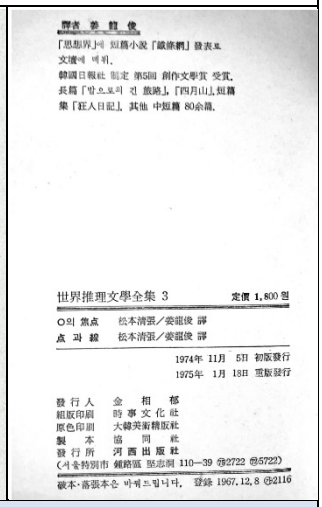
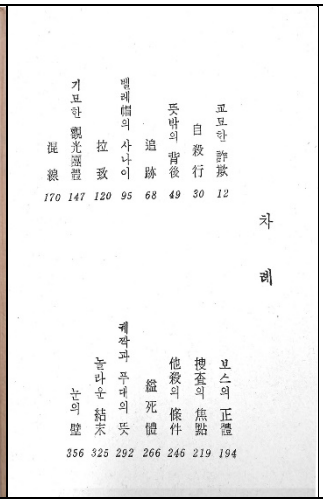
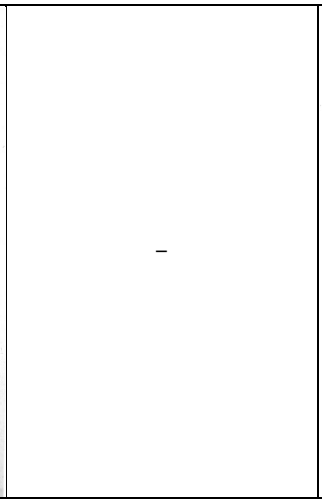
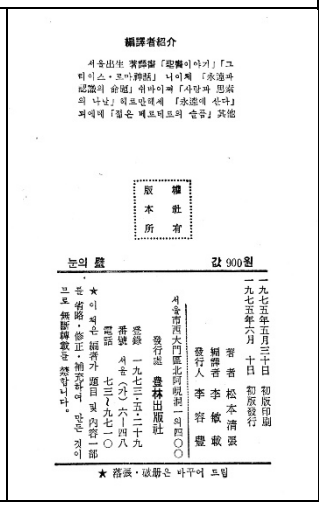
NO		12	
作品名	原題名	벌레먹은 象牙塔	地の骨
訳者		洪性裕	
書名 (全集/文庫)		『蝕んだ象牙の塔』(世界ベストセラーブックス全集4)	
出版社	年度	三耕社	1970
備考		『暗黒大学』(1968)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 なし	- 

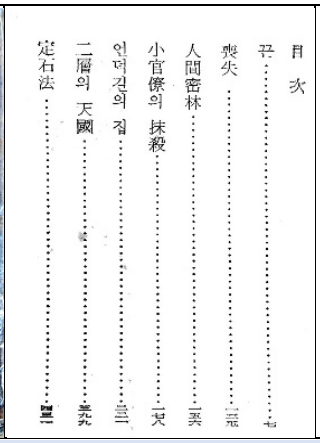
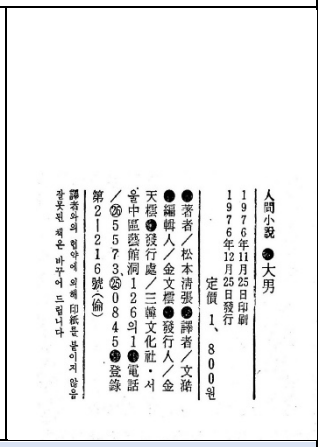
NO		13	
作品名	原題名	어느 고꾸라 日記傳	或る「小倉日記」伝
訳者		李元壽	
書名 (全集/文庫)		『芥川賞小説集』(世界ベストセラーブックス全集5)	
出版社	年度	三耕社	1970
備考		『日本芥川賞小説集』(新丘文化社, 1960)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		   
NO		14	
作品名	原題名	暗黑大學	地の骨
訳者		洪性裕	
書名 (全集/文庫)		『暗黒大学』上・下	
出版社	年度	新丘文化社	1971
備考		『暗黒大学』(1968)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			なし	–	(落丁)
			なし	–	

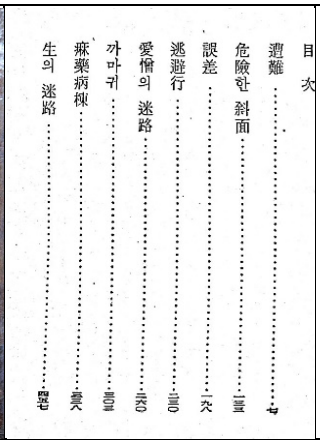
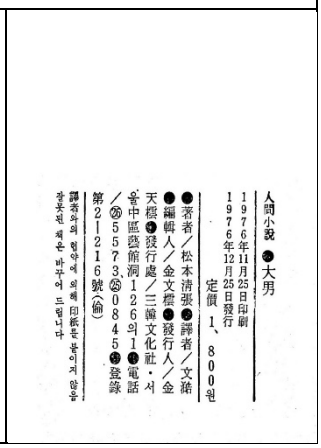
NO		15		
作品名	原題名	어느 고꾸라 日記傳	或る「小倉日記」伝	
訳者		李元壽		
書名 (全集/文庫)		『芥川賞小説集』(世界ベストセラーブックス全集5)		
出版社	年度	新丘文化社	1972	
備考		『芥川賞小説集』(三耕社, 1970)の再版		
表紙/ 目次/ 版権紙		(落丁)		
NO		16		
作品名	原題名	벌레먹은 象牙塔	地の骨	
訳者		洪性裕		
書名 (全集/文庫)		『蝕んだ象牙の塔』(世界ベストセラーブックス全集4)		
出版社	年度	新丘文化社	1974	
備考		『蝕んだ象牙の塔』(三耕社, 1970)の再版		
表紙/ 目次/ 版権紙		(落丁)	なし	-
				

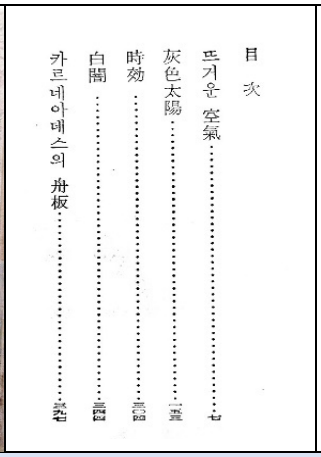
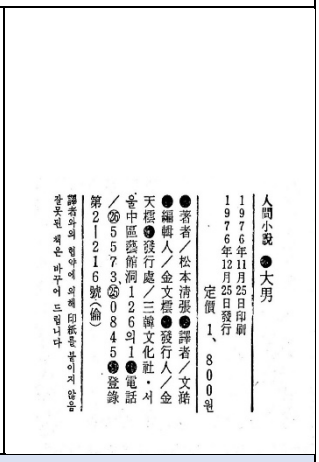
NO		17	
作品名	原題名	点과 線	点と線
訳者		李文賢	
書名 (全集/文庫)		『点と線』	
出版社	年度	弘益出版社	1974
備考		『点と線』(眞文出版社, 1961)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		   
NO		18	
作品名	原題名	殺意의 斷層	危険な斜面
		完全犯罪	薄化粧の男
		證言	証言
		確證	確証
		搜査圈 外의 조건	搜査圈外の条件
		偶數	偶数
		一年半 기다려라	一年半待て
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『殺意の断層』(豊林名作推理新書)	
出版社	年度	豊林出版社	1974
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		   

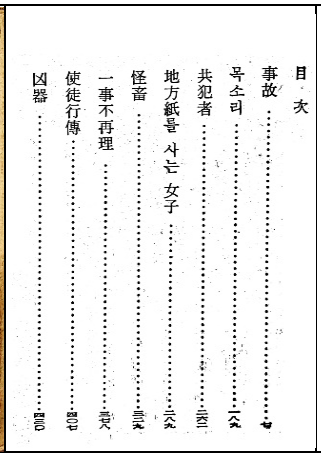
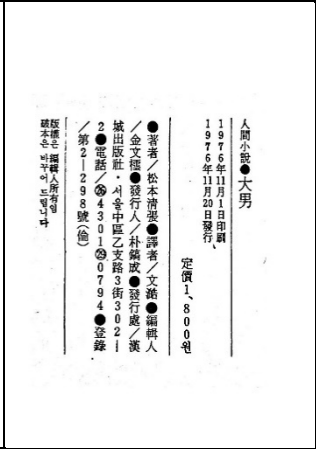
NO		19	
作品名	原題名	0의 焦点	ゼロの焦点
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『ゼロの焦点』(豊林名作推理新書)	
出版社	年度	豊林出版社	1974
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
		-	
NO		20	
作品名	原題名	共犯者	黒い樹海
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『共犯者』(豊林名作推理新書)	
出版社	年度	豊林出版社	1974
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
		-	

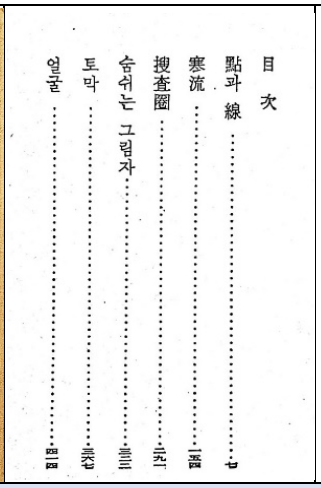
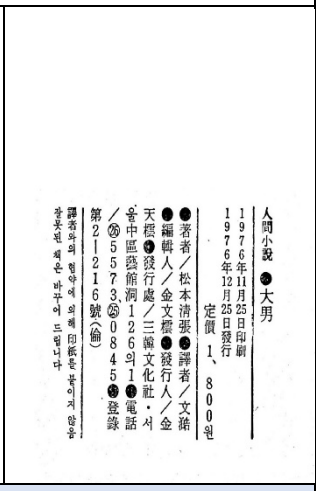
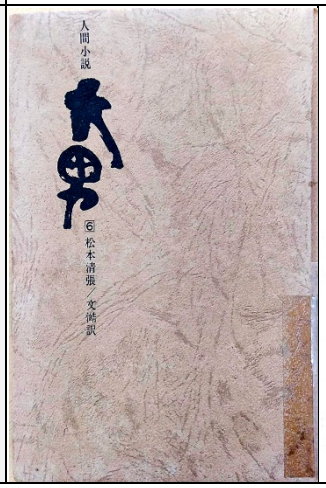
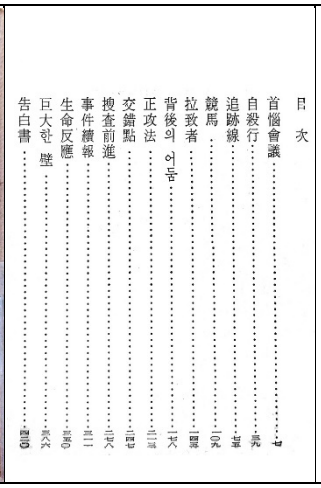
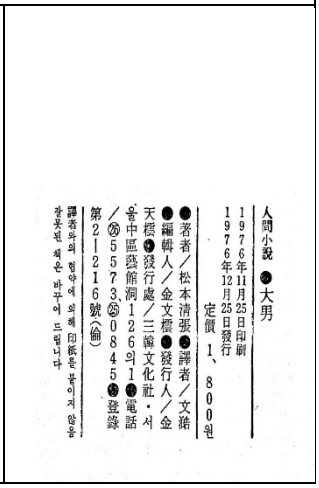
NO		21	
作品名	原題名	0의 焦点 点과 線	ゼロの焦点 点と線
訳者		姜龍俊	
書名 (全集/文庫)		『0の焦点／点と線』(世界推理文学全集 3)	
出版社	年度	河西出版社	1974
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  
NO		22	
作品名	原題名	눈의 壁	眼の壁
訳者		李敏載	
書名 (全集/文庫)		『目の壁』(豊林名作推理小説 シリーズ12)	
出版社	年度	豊林出版社	1975
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  

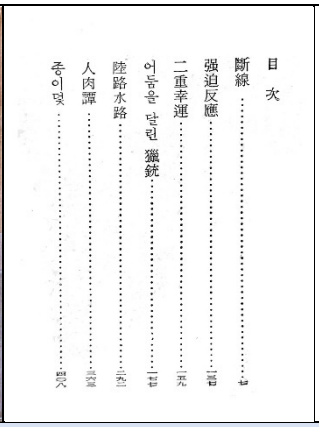
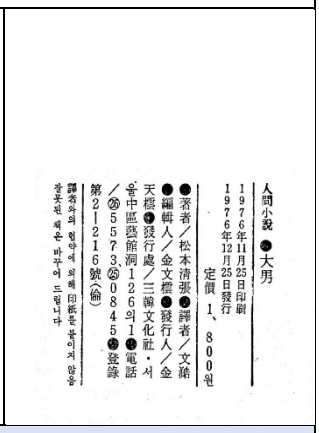
NO		23	
作品名	原題名	끈	紐
		喪失	喪失
		人間密林	箱根心中
		小官僚의 抹殺	ある小官僚の抹殺
		언덕길의 집	坂道の家
		二層의 天國	二階
		定石法	形
訳者		文潞	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』1	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/目次/版権紙			
		-	

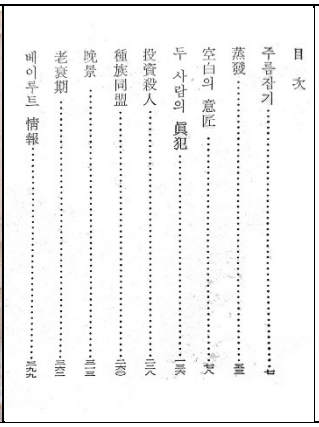
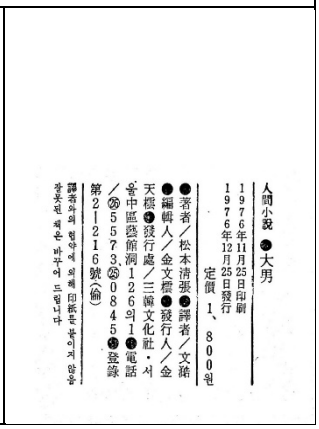
NO		24	
作品名	原題名	遭難	遭難
		危険한 斜面	危険な斜面
		誤差	誤差
		逃避行	拐帯行
		愛憎의 迷路	たづたづし
		까마귀	鴉
		麻薬病棟	草
		生의 迷路	背広服の変死者
訳者		文潞	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』2	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/目次/版権紙			
		-	

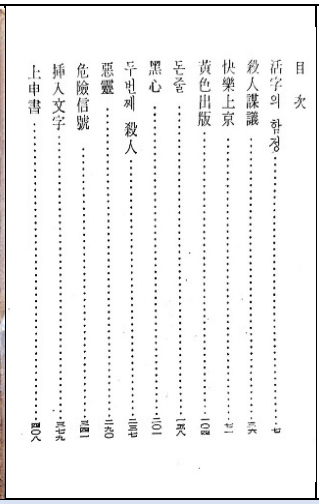
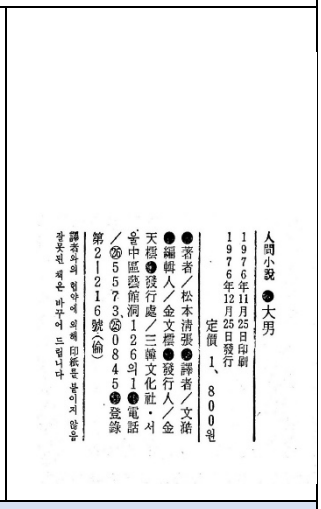
NO		25	
作品名	原題名	뜨거운 空気	熱い空気
		灰色太陽	濁った陽
		時効	天城越え
		白闇	白い闇
		카르네아데스의 舟板	カルネアデスの舟板
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』3	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	

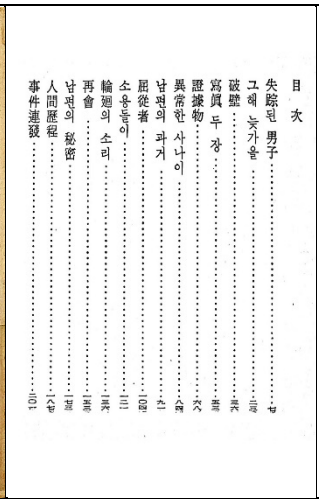
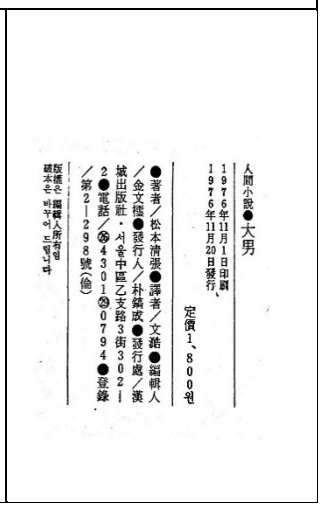
NO		26	
作品名	原題名	事故	事故
		목소리	声
		共犯者	共犯者
		地方紙를 사는 女子	地方紙を買う女
		怪畜	鬼畜
		一事不再理	一年半待て
		使徒行伝	途上
		凶器	凶器
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』4	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	

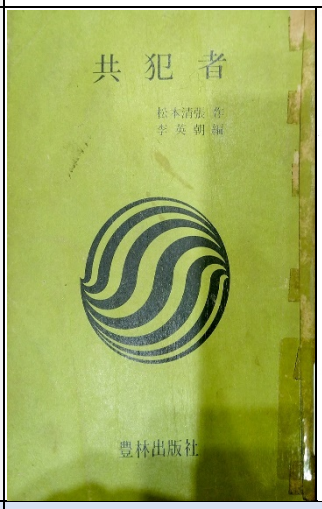
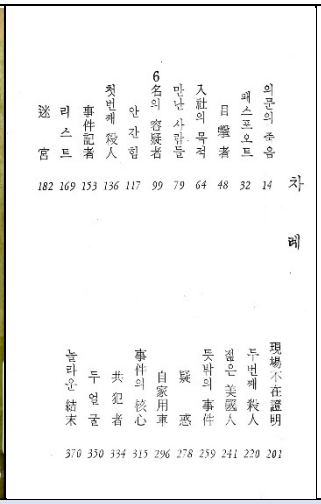
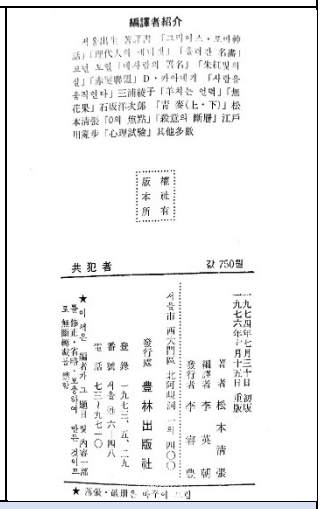
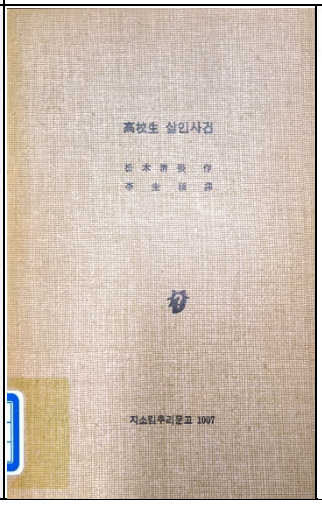
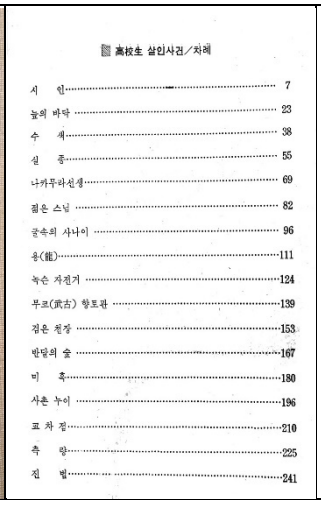
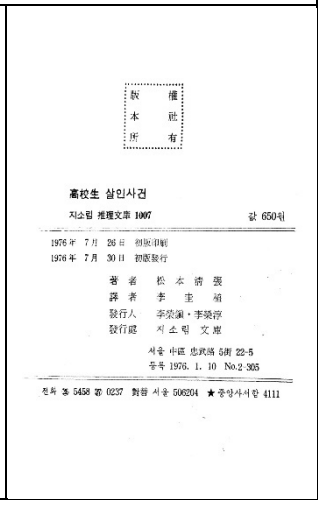
NO		27	
作品名	原題名	點과 線	点と線
		寒流	寒流
		捜査圈	捜査圏外の条件
		숨쉬는 그림자	影
		토막	額と歯
		얼굴	顔
訳者		文潚	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』5	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			– 
NO		28	
作品名	原題名	(なし)	眼の壁
訳者		文潚	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』6	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		 	– 

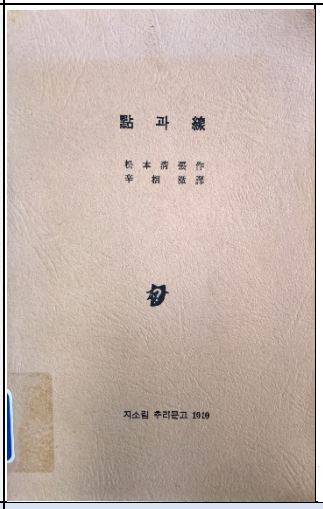
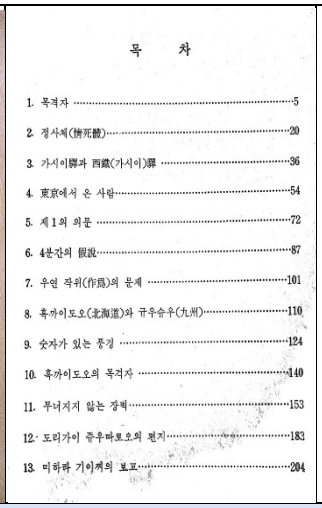
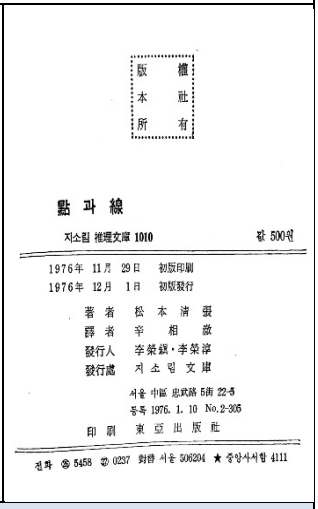
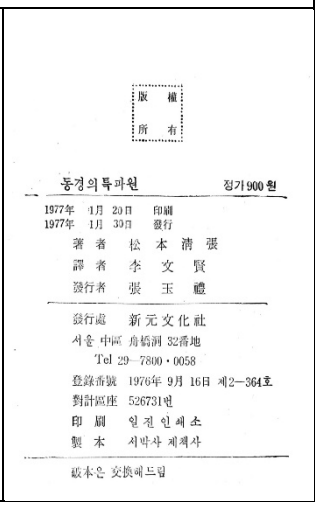
NO		29	
作品名	原題名	断線	断線
		強迫反応	発作
		二重幸運	支払い過ぎた縁談
		어둠을 달린 猟銃	闇に駆ける猟銃
		陸路水路	陸行水行
		人肉譚	肉鍋を食う女
		종이덫	紙の牙
訳者		文潤	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』7	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/目次/版権紙			
		–	

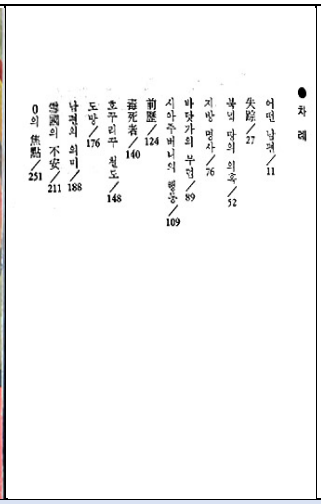
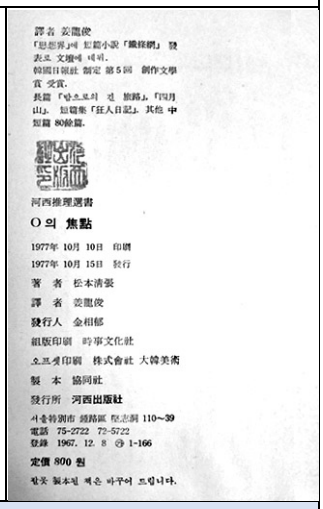
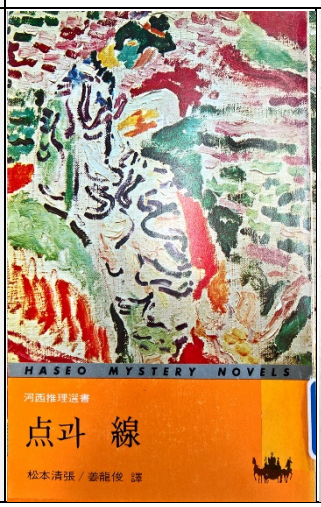
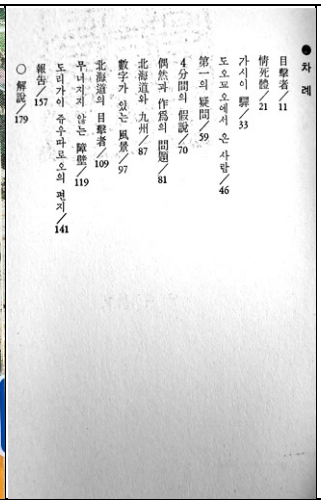
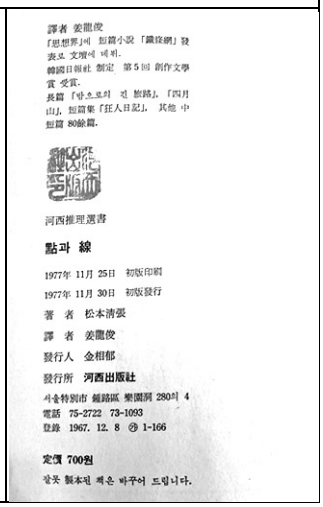
NO		30	
作品名	原題名	주름잡기	寝敷き
		蒸發	駅路
		空白의 意匠	空白の意匠
		두 사람의 真犯	二人の真犯人
		投資殺人	小さな旅館
		種族同盟	種族同盟
		晩景	晩景
		老衰期	老春
		베이루트 情報	ベイルート情報
訳者		文潤	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』8	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/目次/版権紙			
		–	

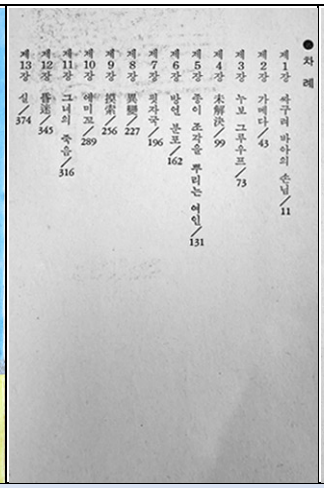
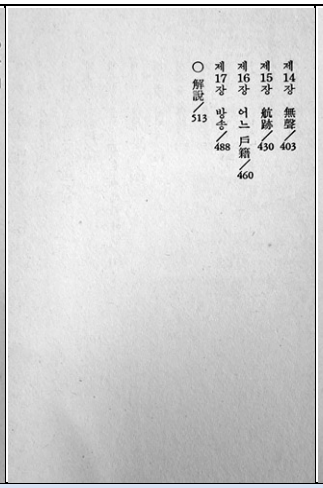
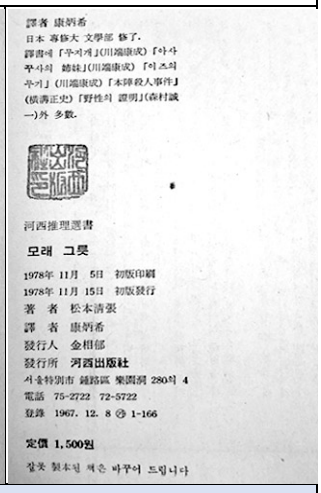
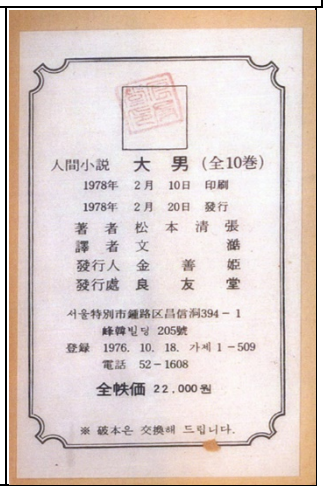
NO		31	
作品名	原題名	(なし)	連環
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』9	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
			

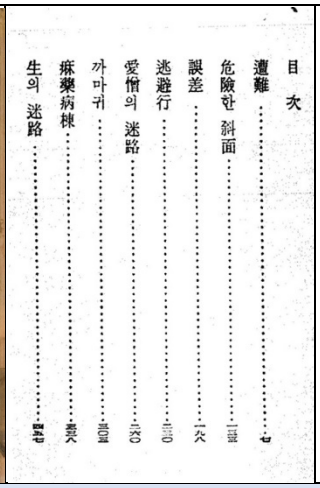
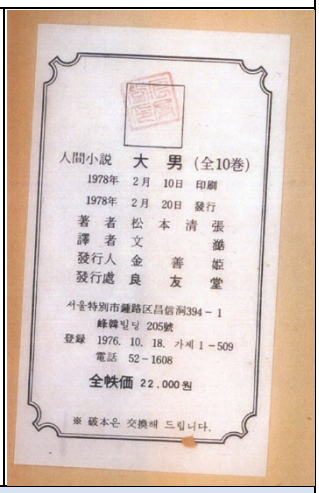
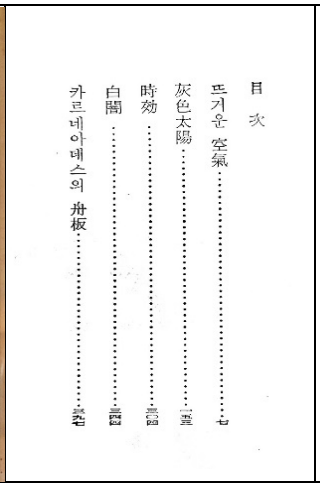
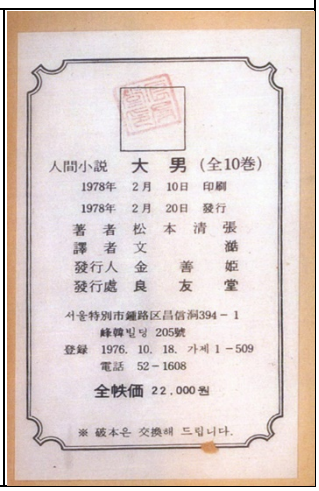
NO		32	
作品名	原題名	(なし)	ゼロの焦点
		바보 寓話	?
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』10	
出版社	年度	三韓文化社	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			
			

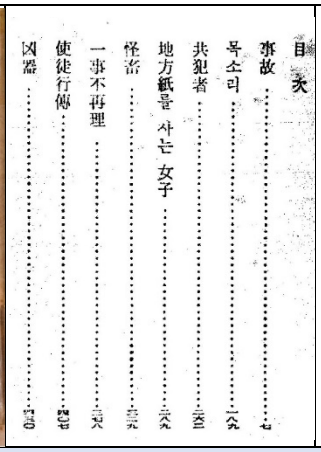
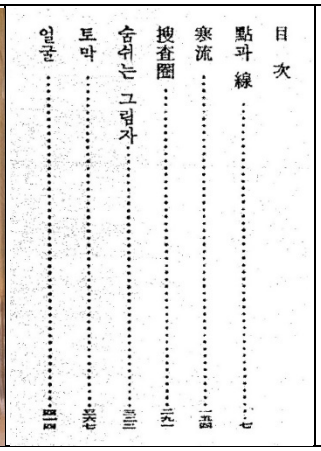
NO		33	
作品名	原題名	공범자	黒い樹海
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『共犯者』(豊林名作推理新書)	
出版社	年度	豊林出版社	1976
備考		『共犯者』(1974)の重版	
表紙/ 目次/ 版権紙		  – 
NO		34	
作品名	原題名	高校生 살인사건	高校殺人事件
訳者		李圭稙	
書名 (全集/文庫)		『高校生殺人事件』(智炤林推理文庫1007)	
出版社	年度	智炤林文庫	1976
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  – 

NO		35		
作品名	原題名	點과 線	点と線	
訳者		辛相澈		
書名 (全集/文庫)		『点と線』(智炤林推理文庫1010)		
出版社	年度	智炤林文庫	1976	
備考				
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		36		
作品名	原題名	동경의 특파원	点と線	
訳者		李文賢		
書名 (全集/文庫)		『東京の特派員』		
出版社	年度	新丘文化社	1977	
備考		『点と線』(眞文出版社, 1961)の再版		
表紙/ 目次/ 版権紙			なし	–	

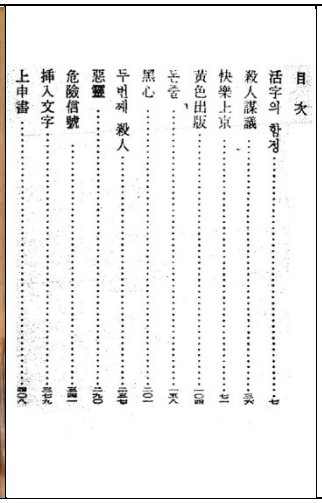
NO		37	
作品名	原題名	0의 焦点	ゼロの焦点
訳者		姜龍俊	
書名 （全集/文庫）		『0の焦点』(河西推理選書)	
出版社	年度	河西出版社	1977
備考		『0の焦点／点と線』(1974)収録「0の焦点」の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 – 
NO		38	
作品名	原題名	点과 線	点と線
訳者		姜龍俊	
書名 （全集/文庫）		『点と線』(河西推理選書)	
出版社	年度	河西出版社	1977
備考		『0の焦点／点と線』(1974)収録「点と線」の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		  – 

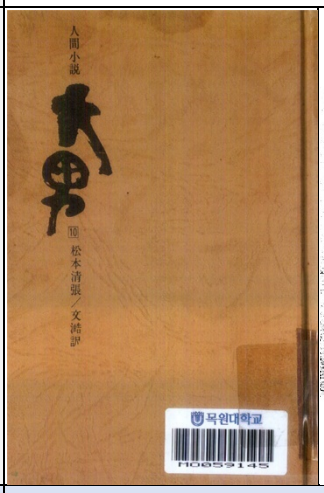
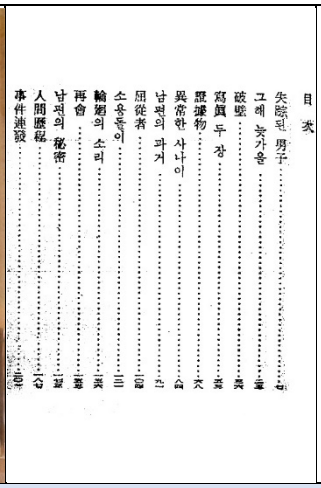
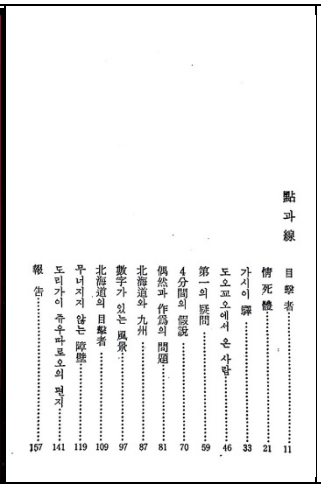
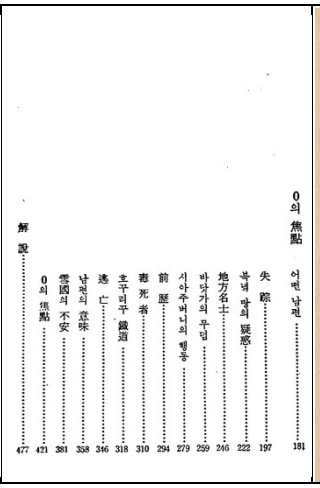
NO		39	
作品名	原題名	모래그릇	砂の器
訳者		康炳希	
書名(全集/文庫)		『砂の器』(河西推理選書)	
出版社	年度	河西出版社	1978
備考			
表紙/目次/版権紙		  
NO		40	
作品名	原題名	끈	紐
		喪失	喪失
		人間密林	箱根心中
		小官僚의 抹殺	ある小官僚の抹殺
		언덕길의 집	坂道の家
		二層의 天國	二階
		定石法	形
訳者		文潞	
書名(全集/文庫)		人間小説『大男』1	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/目次/版権紙		– 

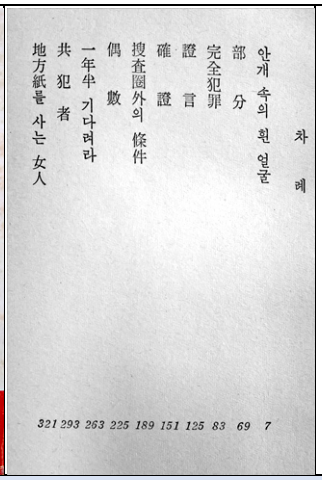
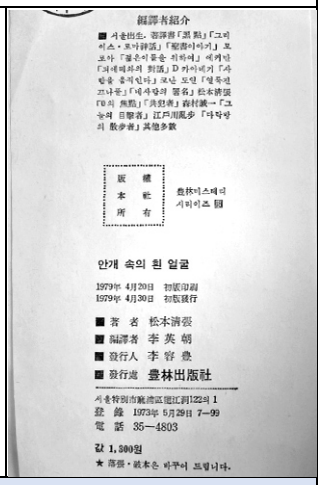
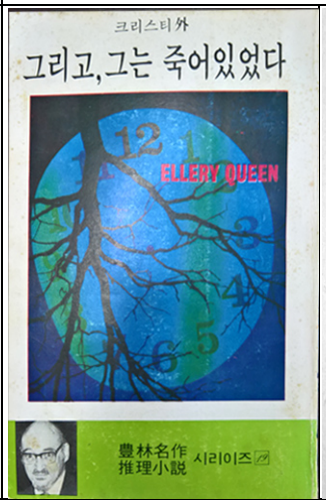
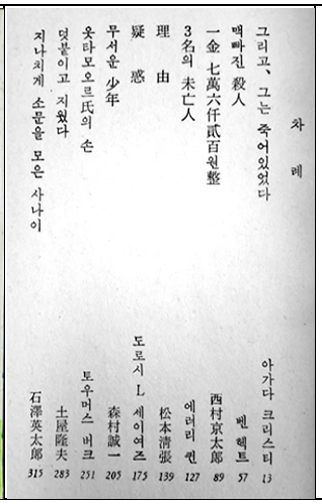
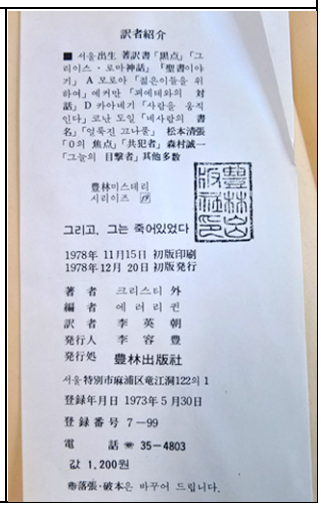
NO		41	
作品名	原題名	遭難	遭難
		危険한 斜面	危険な斜面
		誤差	誤差
		逃避行	拐帯行
		愛憎의 迷路	たづたづし
		까마귀	鴉
		麻薬病棟	草
		生의 迷路	背広服の変死者
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』2	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		42	
作品名	原題名	뜨거운 空気	熱い空気
		灰色太陽	濁った陽
		時効	天城越え
		白闇	白い闇
		카르네아데스의 舟板	カルネアデスの舟板
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』3	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

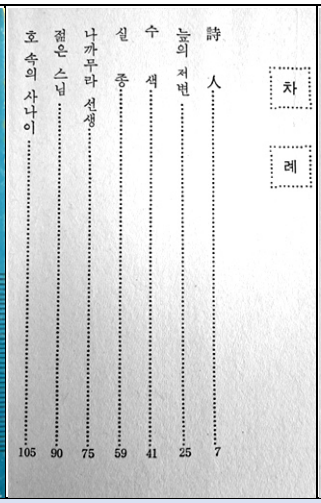
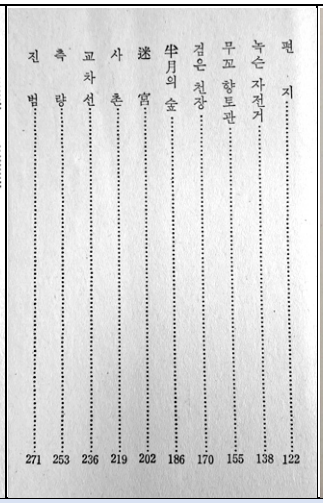
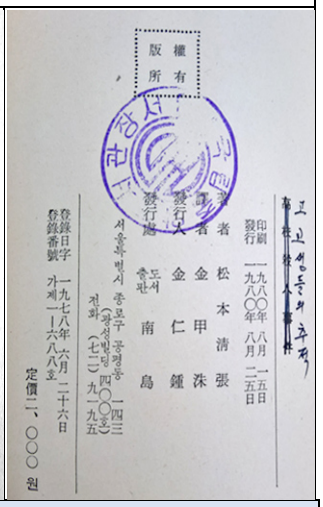
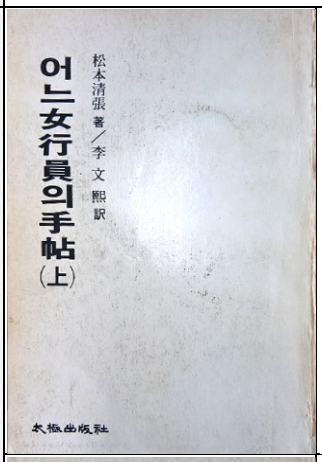
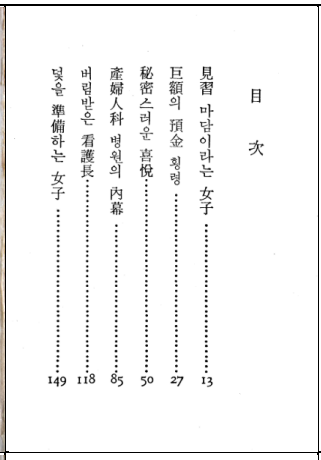
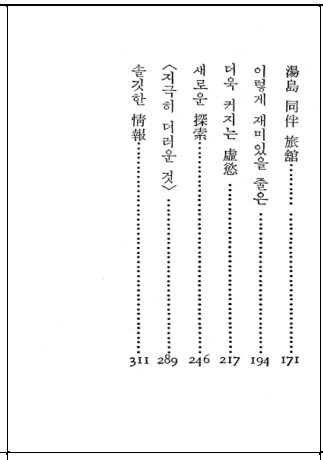
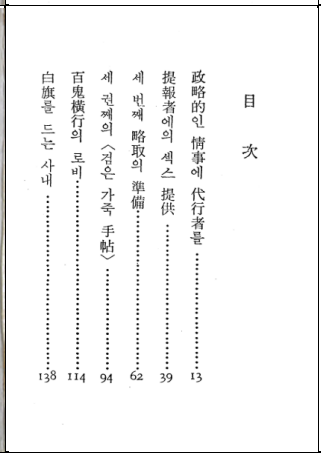
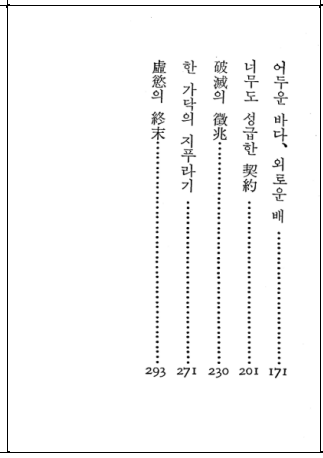
NO		43	
作品名	原題名	事故	事故
		목소리	声
		共犯者	共犯者
		地方紙를 사는 女子	地方紙を買う女
		怪畜	鬼畜
		一事不再理	一年半待て
		使徒行伝	途上
		凶器	凶器
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』4	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		44	
作品名	原題名	點과 線	点と線
		寒流	寒流
		捜査圏	捜査圏外の条件
		숨쉬는 그림자	影
		토막	額と歯
		얼굴	顔
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』5	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

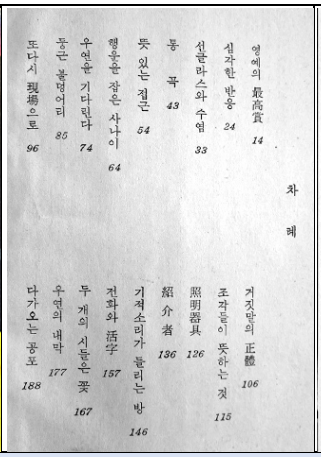
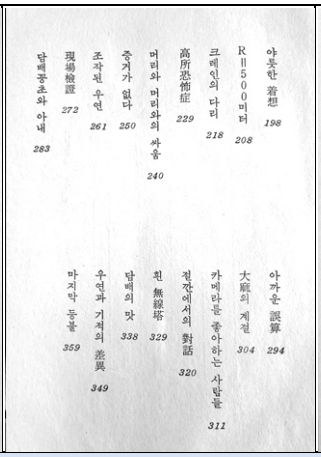
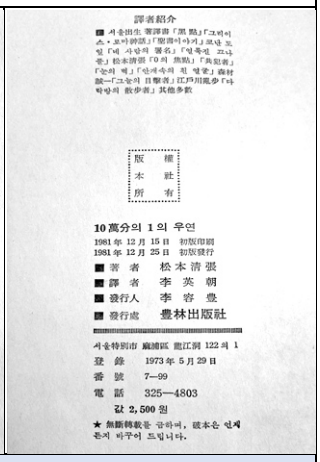
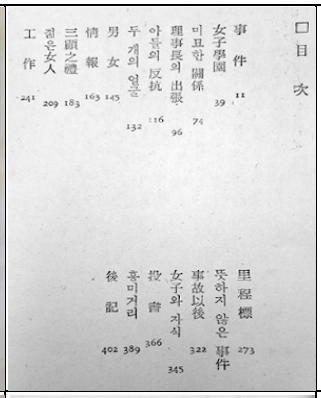
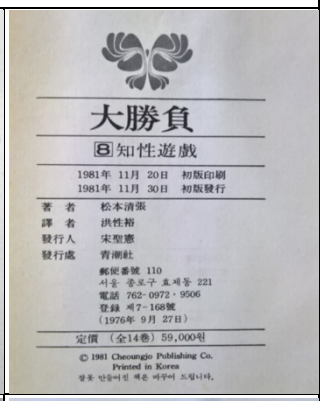
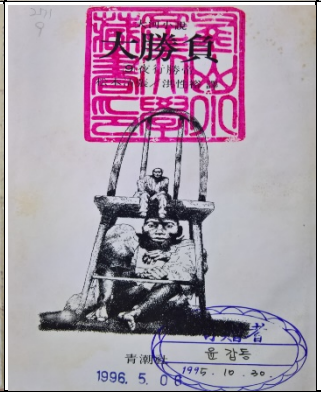
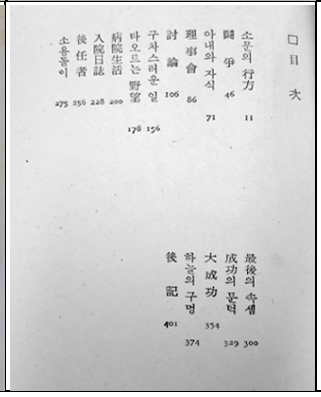
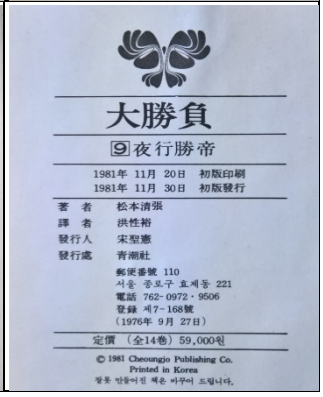
NO		45	
作品名	原題名	(なし)	眼の壁
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』6	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		46	
作品名	原題名	断線	断線
		強迫反応	発作
		二重幸運	支払い過ぎた縁談
		어둠을 달린 猟銃	闇に駆ける猟銃
		陸路水路	陸行水行
		人肉譚	肉鍋を食う女
		종이덫	紙の牙
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』7	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	

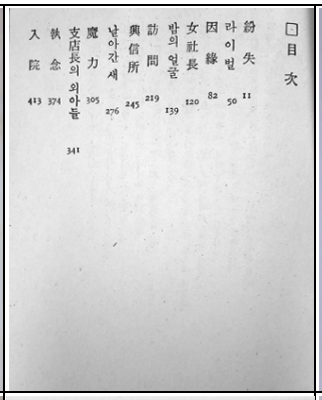
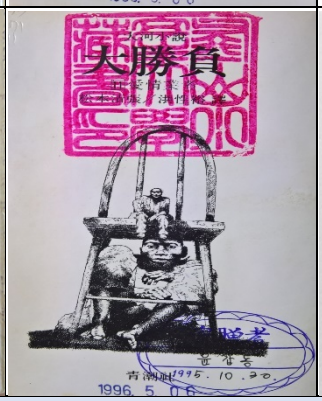
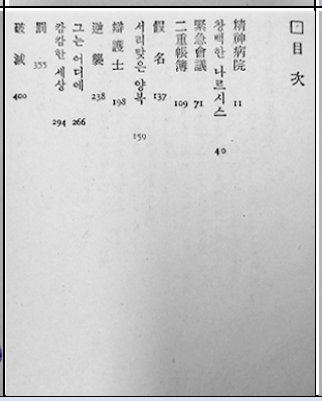
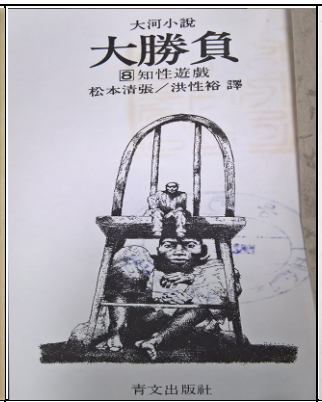
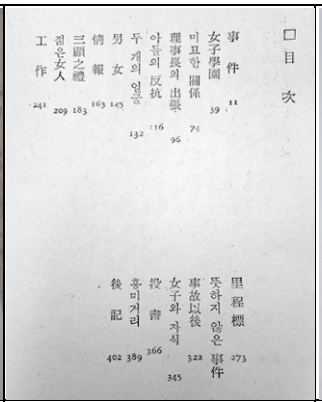
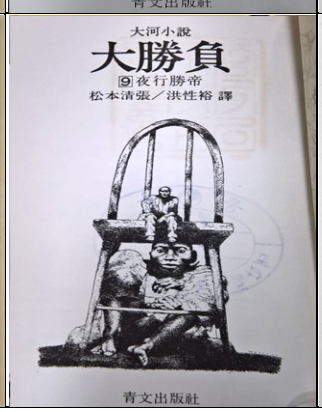
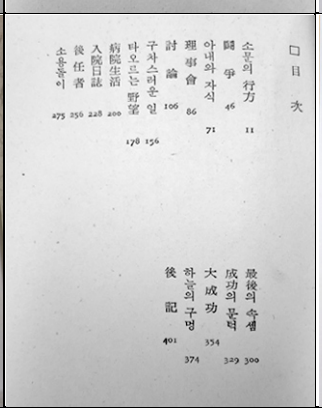
NO		47	
作品名	原題名	주름잡기	寝敷き
		蒸發	駅路
		空白의 意匠	空白の意匠
		두 사람의 真犯	二人の真犯人
		投資殺人	小さな旅館
		種族同盟	種族同盟
		晩景	晩景
		老衰期	老春
		베이루트 情報	ベイルート情報
訳者		文澔	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』8	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/目次/版権紙			
		-	
NO		48	
作品名	原題名	(なし)	連環
訳者		文澔	
書名（全集/文庫）		人間小説『大男』9	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/目次/版権紙			
		-	

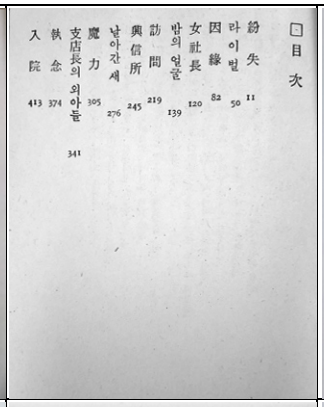
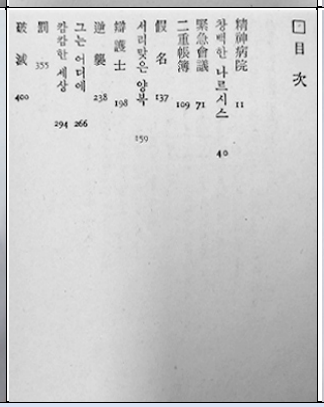
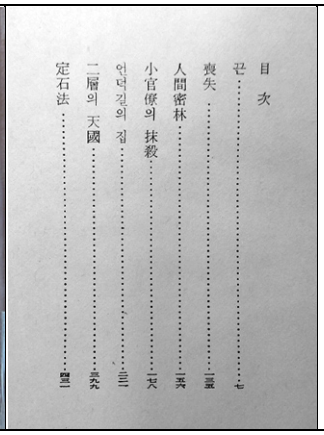
NO		49	
作品名	原題名	(なし)	ゼロの焦点
		바보 寓話	?
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男』10	
出版社	年度	良友堂	1978
備考		『大男』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		  -
NO		50	
作品名	原題名	点과 線	点と線
		0의 焦点	ゼロの焦点
訳者		姜龍俊	
書名 (全集/文庫)		『点と線／0の焦点』(世界推理文学全集 6)	
出版社	年度	河西出版社	1978
備考		『0の焦点／点と線』(1974)の重版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 

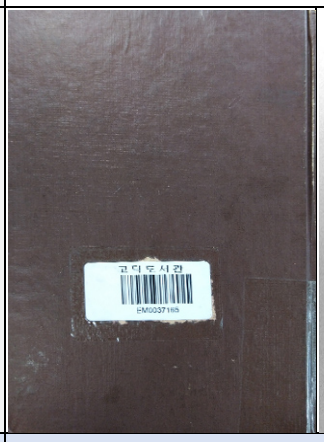
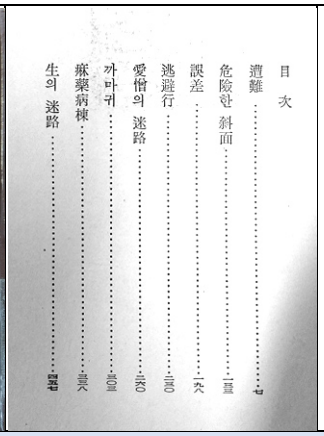
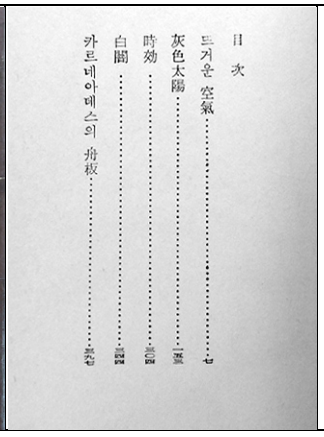
NO		51	
作品名	原題名	안개 속의 흰 얼굴	白い闇
		部分	部分
		完全犯罪	薄化粧の男
		證言	証言
		確證	確証
		捜査圏外의 条件	捜査圏外の条件
		偶数	偶数
		一年半 기다려라	一年半待て
		共犯者	共犯者
		地方紙를 사는 女人	地方紙を買う女
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『霧の中の白い顔』(豊林名作推理小説シリーズ18)	
出版社	年度	豊林出版社	1979
備考		「完全犯罪」から「一年半　기다려라」までは『殺意の断層』(1974)と同一内容	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		52	
作品名	原題名	理由	理由
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『そして彼は死んだ(外)』(豊林名作推理小説シリーズ19)	
出版社	年度	豊林出版社	1979
備考		アガサ・クリスティー、西村京太郎、エラリー・クイーン他6人の短編小説と併録	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	–	

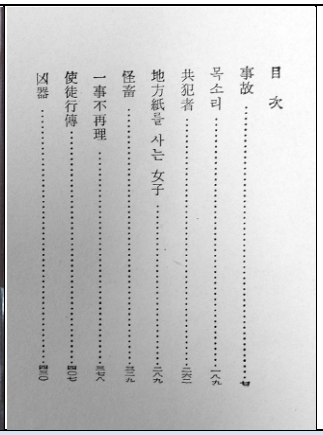
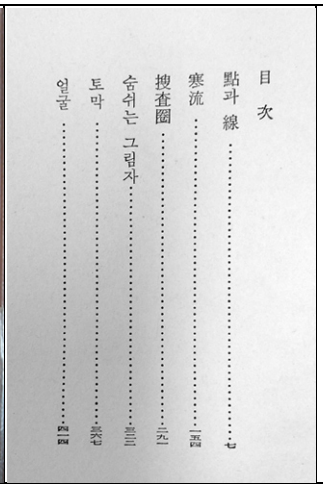
NO		53	
作品名	原題名	고교생들의 추적	高校殺人事件
訳者		金甲洙	
書名 (全集/文庫)		『高校生らの追跡』	
出版社	年度	南島	1980
備考		扉と奥付の作品名は「高校殺人事件」	
表紙/ 目次/ 版権紙		  
NO		54	
作品名	原題名	어느 女行員의 手帖	黒革の手帖
訳者		李文熙	
書名 (全集/文庫)		『ある女子行員の手帖』上・下	
出版社	年度	太極出版社	1981
備考		–	
表紙/ 目次/ 版権紙		    

NO		55	
作品名	原題名	10萬分의 1의 우연	十万分の一の偶然
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『10万分の1の偶然』	
出版社	年度	豊林出版社	1981
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙		  
NO		56	
作品名	原題名	知性遊戯	混声の森(上)
		夜行勝祭	混声の森(下)
		虚構大学	地の骨(上)
		愛情失業	地の骨(下)
訳者		洪性裕	
書名 (全集/文庫)		大河小説『大勝負』8～11	
出版社	年度	青潮社	1981
備考		「虚構大学」と「愛情失業」は『暗黒大学』(1968)の再版 松本清張・黒岩重吾・城山三郎共著『大勝負』(全14巻)	
表紙/ 目次/ 版権紙		    

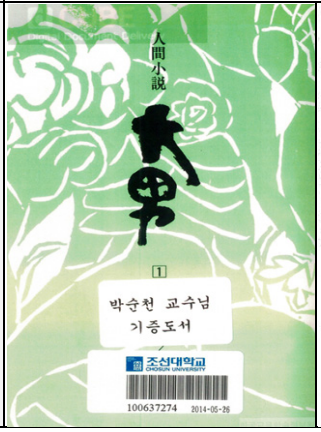
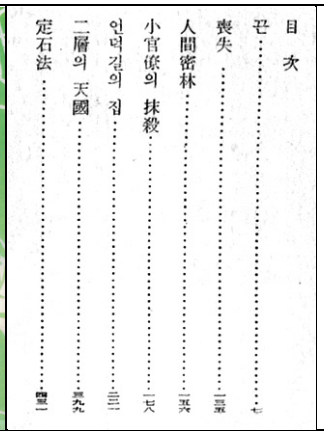
表紙/目次/版権紙			
			
NO	57		
作品名 原題名	知性遊戯	混声の森(上)	
	夜行勝祭	混声の森(下)	
	虚構大学	地の骨(上)	
	愛情失業	地の骨(下)	
訳者	洪性裕		
書名（全集/文庫）	『大勝負』8～11		
出版社 年度	青文出版社	1982	
備考	『大勝負』(青潮社, 1981)の再版		
表紙/目次/版権紙			
			

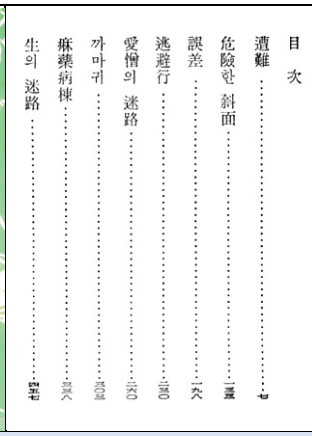
<table>
<tr><td colspan="2"></td><td> </td><td>
</td><td> 
</td><td>
</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td> </td><td>
</td><td> 
</td><td>
</td></tr>
<tr><td colspan="2">NO</td><td colspan="3">58</td></tr>
<tr><td rowspan="7">作品名</td><td rowspan="7">原題名</td><td>끈</td><td colspan="2">紐</td></tr>
<tr><td>喪失</td><td colspan="2">喪失</td></tr>
<tr><td>人間密林</td><td colspan="2">箱根心中</td></tr>
<tr><td>小官僚의 抹殺</td><td colspan="2">ある小官僚の抹殺</td></tr>
<tr><td>언덕길의 집</td><td colspan="2">坂道の家</td></tr>
<tr><td>二層의 天國</td><td colspan="2">二階</td></tr>
<tr><td>定石法</td><td colspan="2">形</td></tr>
<tr><td colspan="2">訳者</td><td colspan="3">文澔</td></tr>
<tr><td colspan="2">書名
(全集/文庫)</td><td colspan="3">人間小説『大男1:野獣』</td></tr>
<tr><td>出版社</td><td>年度</td><td>良友堂</td><td colspan="2">1982</td></tr>
<tr><td colspan="2">備考</td><td colspan="3">『大男』(1976)1～6の再版</td></tr>
<tr><td colspan="2">表紙/
目次/
版権紙</td><td>
</td><td> 
</td><td>-</td><td>
</td></tr>
</table>

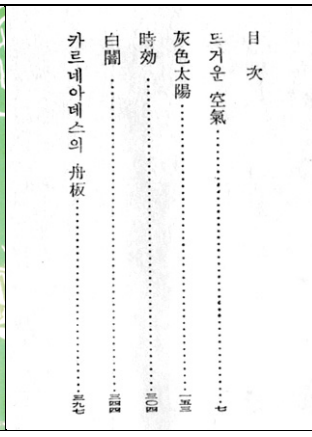
NO		59		
作品名	原題名	遭難	遭難	
		危険한 斜面	危険な斜面	
		誤差	誤差	
		逃避行	拐帯行	
		愛憎의 迷路	たづたづし	
		까마귀	鴉	
		麻薬病棟	草	
		生의 迷路	背広服の変死者	
訳者		文澔		
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男2:青炎』		
出版社	年度	良友堂	1982	
備考		『大男』(1976)1～6の再版		
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		60		
作品名	原題名	뜨거운 空気	熱い空気	
		灰色太陽	濁った陽	
		時効	天城越え	
		白闇	白い闇	
		카르네아데스의 舟板	カルネアデスの舟板	
訳者		文澔		
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男3:女魔』		
出版社	年度	良友堂	1982	
備考		『大男』(1976)1～6の再版		
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

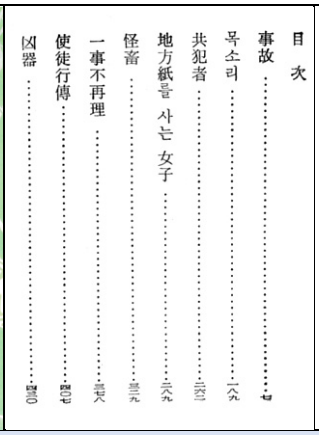
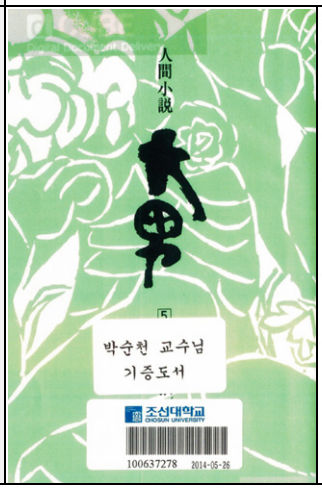
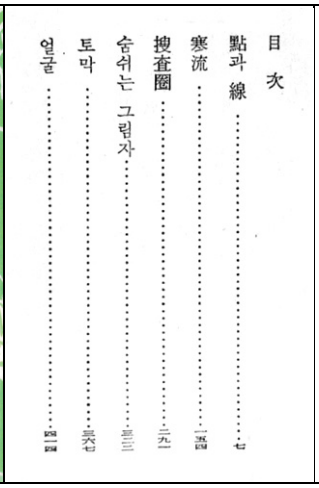
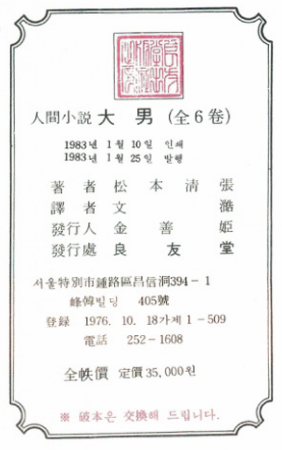
NO		61	
作品名	原題名	事故	事故
		목소리	声
		共犯者	共犯者
		地方紙를 사는 女子	地方紙を買う女
		怪畜	鬼畜
		一事不再理	一年半待て
		使徒行伝	途上
		凶器	凶器
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男4:猪突』	
出版社	年度	良友堂	1982
備考		『大男』(1976)1～6の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 目次 事故 …… 七 목소리 …… 一八九 共犯者 …… 二六二 地方紙를 사는 女子 …… 二八九 怪畜 …… 三二九 一事不再理 …… 三七八 使徒行傳 …… 四〇七 凶器 …… 四三〇	–	 人間小説 大 男 (全6卷) 1982年 7月 1日 印刷 1982年 7月 15日 發行 著 者 松 本 清 張 譯 者 文 澔 發行人 金 善 姫 發行處 良 友 堂 서울特別市鍾路區昌信洞394－1 峰韓빌딩 405號 登録 1976. 10. 18가제 1－509 電話 252－1608 全帙價 定價35,000원 ※ 破本은 交換해 드립니다.
NO		62	
作品名	原題名	點과 線	点と線
		寒流	寒流
		捜査圏	捜査圏外の条件
		숨쉬는 그림자	影
		토막	額と歯
		얼굴	顔
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男5:劣悪』	
出版社	年度	良友堂	1982
備考		『大男』(1976)1～6の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 目次 點과 線 …… 七 寒流 …… 一五四 捜査圏 …… 二九一 숨쉬는 그림자 …… 三二三 토막 …… 三六七 얼굴 …… 四一四	–	 人間小説 大 男 (全6卷) 1982年 7月 1日 印刷 1982年 7月 15日 發行 著 者 松 本 清 張 譯 者 文 澔 發行人 金 善 姫 發行處 良 友 堂 서울特別市鍾路區昌信洞394－1 峰韓빌딩 405號 登録 1976. 10. 18가제 1－509 電話 252－1608 全帙價 定價35,000원 ※ 破本은 交換해 드립니다.

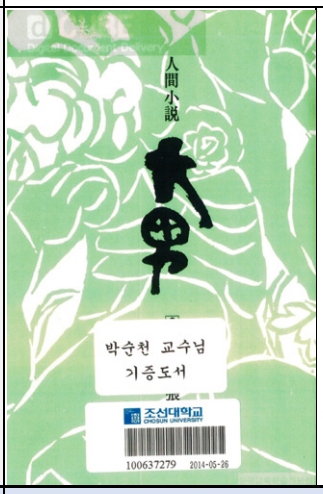
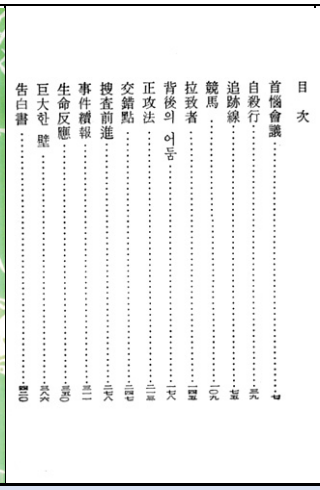
NO		63	
作品名	原題名	(なし)	眼の壁
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男6:女虫』	
出版社	年度	良友堂	1982
備考		『大男』(1976)1～6の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		目次 首惱會議……七 自殺行……三五 追跡線……五五 競馬……七九 拉致者……一〇五 背後의 어둠……一二七 正攻法……一三五 交錯點……一四九 捜査前進……一六八 事件續報……一八二 生命反應……一九五 巨大한 壁……二〇五 告白書……二一五	–	人間小說 大 男 (全6卷) 1982年 7月 1日 印刷 1982年 7月 15日 發行 著者 松本清張 譯者 文潞 發行人 金善姬 發行處 良友堂 서울特別市鍾路區昌信洞394－1 峰婦빌딩 405號 登録 1976. 10. 18가제 1－509 電話 252－1608 全帙價 定價35,000원 ※ 破本은 交換해 드립니다.

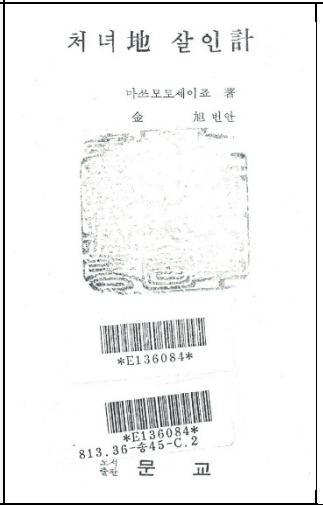
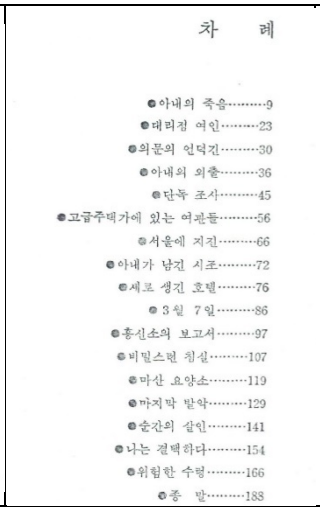
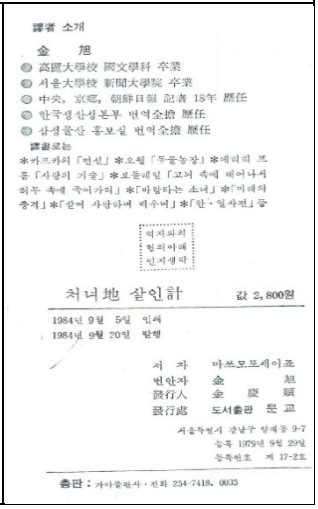
NO		64	
作品名	原題名	끈	紐
		喪失	喪失
		人間密林	箱根心中
		小官僚의 抹殺	ある小官僚の抹殺
		언덕길의 집	坂道の家
		二層의 天國	二階
		定石法	形
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男1』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙		  目次 끈……七 喪失……一三五 人間密林……一五六 小官僚의 抹殺……一七八 언덕길의 집……二二一 二層의 天國……二五九 定石法……二八一	–	人間小說 大 男 (全6卷) 1983년 1월 10일 인쇄 1983년 1월 25일 발행 著者 松本清張 譯者 文潞 發行人 金善姬 發行處 良友堂 서울特別市鍾路區昌信洞394－1 峰婦빌딩 405號 登録 1976. 10. 18가제 1－509 電話 252－1608 全帙價 定價35,000원 ※ 破本은 交換해 드립니다.

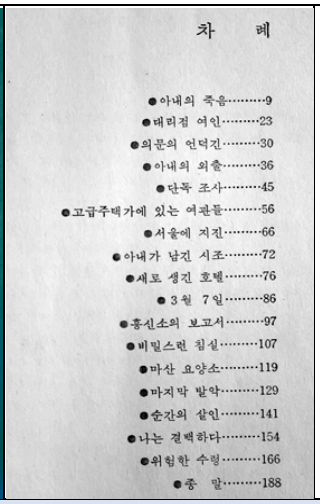
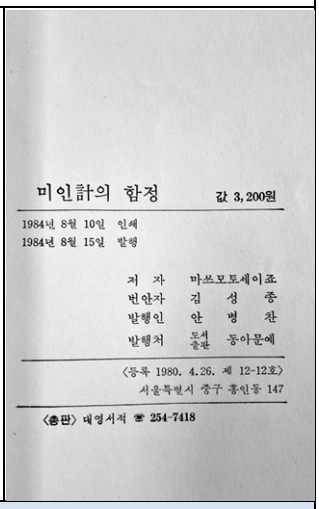
NO		65	
作品名	原題名	遭難	遭難
		危険한 斜面	危険な斜面
		誤差	誤差
		逃避行	拐帯行
		愛憎의 迷路	たづたづし
		까마귀	鴉
		麻薬病棟	草
		生의 迷路	背広服の変死者
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男2』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙				

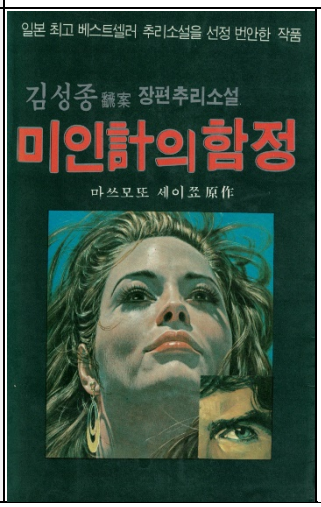
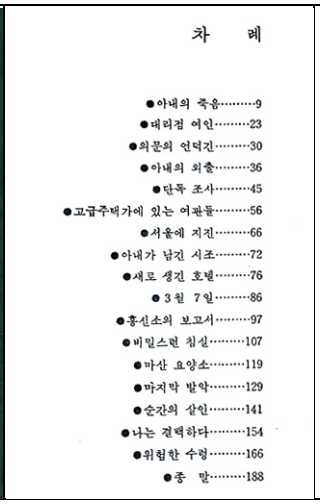
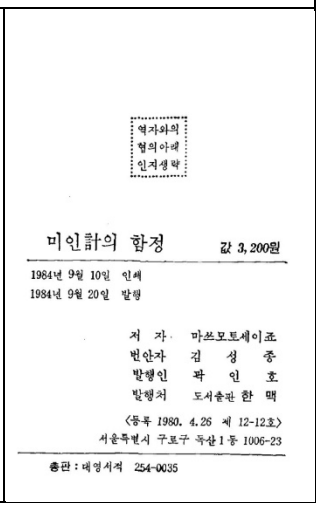
NO		66	
作品名	原題名	뜨거운 空気	熱い空気
		灰色太陽	濁った陽
		時効	天城越え
		白闇	白い闇
		카르네아데스의 舟板	カルネアデスの舟板
訳者		文潞	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男3』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙				

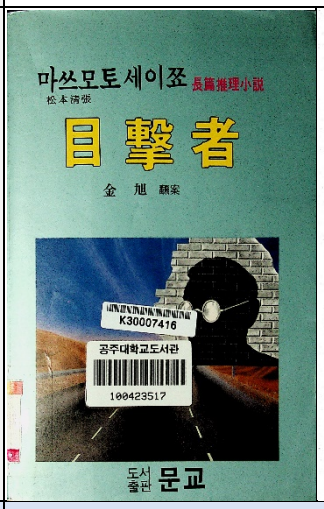
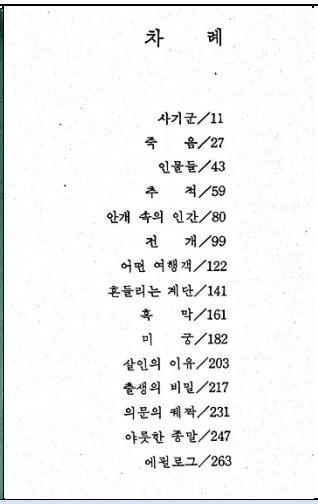
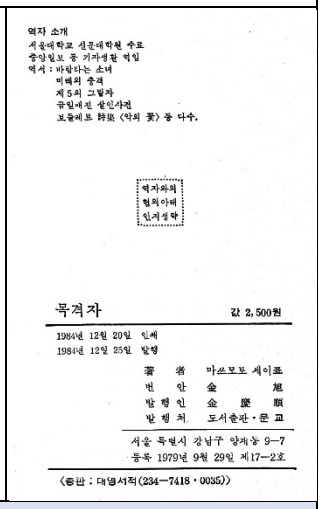
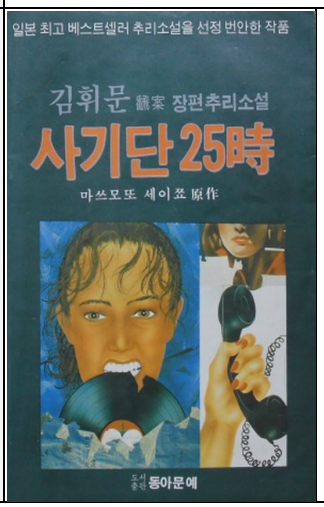
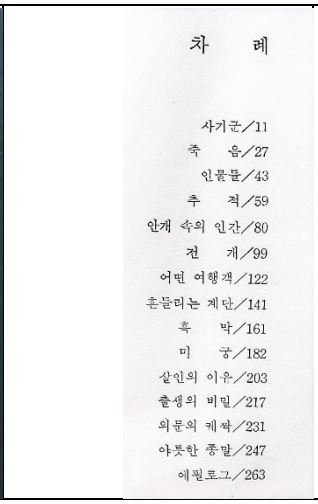
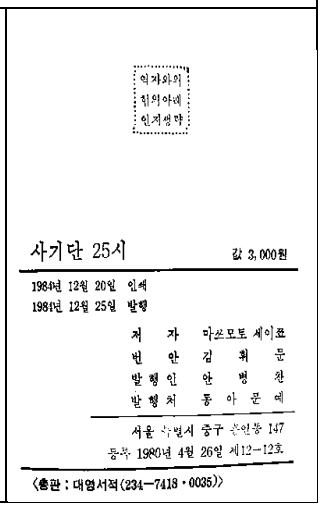
NO		67	
作品名	原題名	事故	事故
		목소리	声
		共犯者	共犯者
		地方紙를 사는 女子	地方紙を買う女
		怪畜	鬼畜
		一事不再理	一年半待て
		使徒行伝	途上
		凶器	凶器
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男4』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		68	
作品名	原題名	點과 線	点と線
		寒流	寒流
		捜査圏	捜査圏外の条件
		숨쉬는 그림자	影
		토막	額と歯
		얼굴	顔
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男5』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	–	

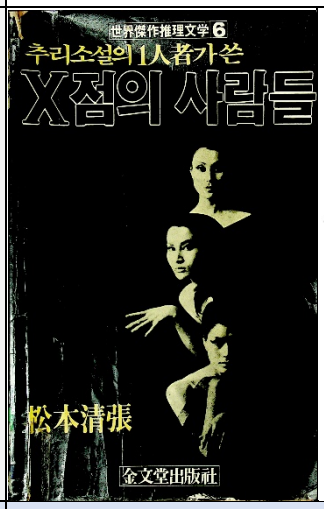
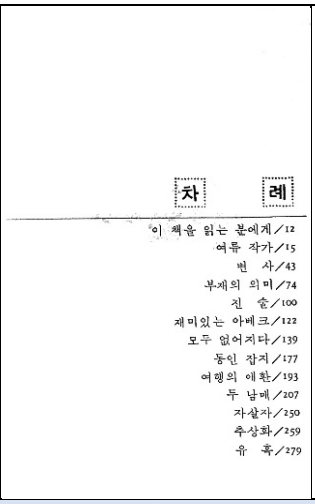
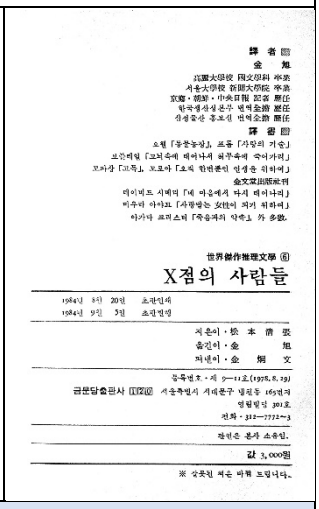
NO		69	
作品名	原題名	(なし)	眼の壁
訳者		文澔	
書名 (全集/文庫)		人間小説『大男6』	
出版社	年度	良友堂	1983
備考		『大男』(1982) の再版、下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

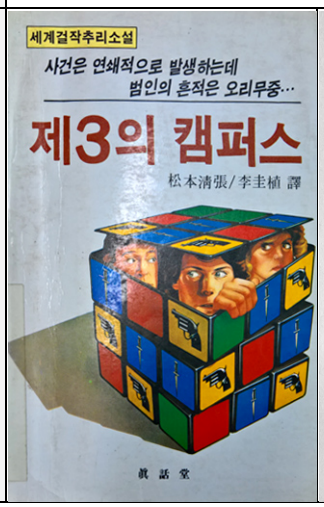
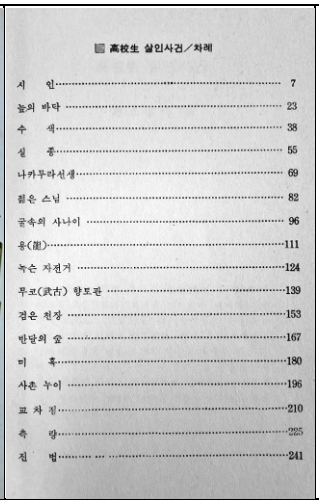
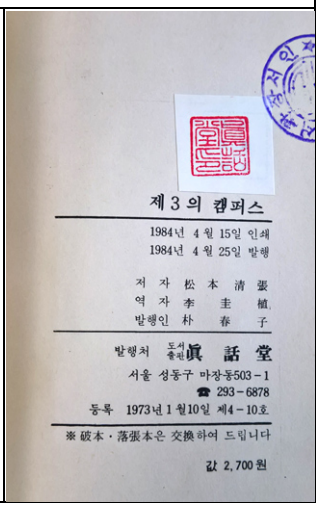
NO		70	
作品名	原題名	처녀地 살인計	聞かなかった場所
訳者		金旭 (翻案)	
書名 (全集/文庫)		『処女地殺人計』	
出版社	年度	文教	1984
備考		原作との相違点(人物設定、結末など)が多い 下は扉の写真	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

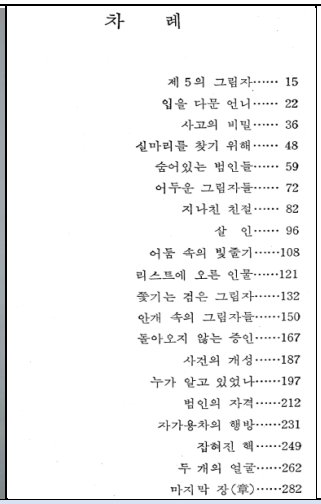
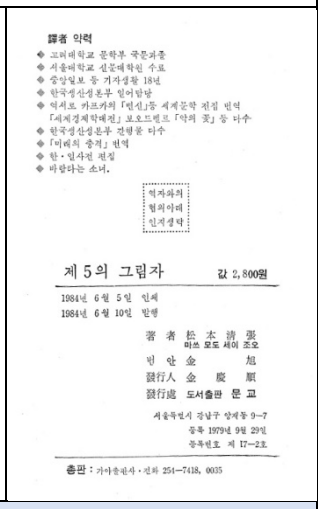
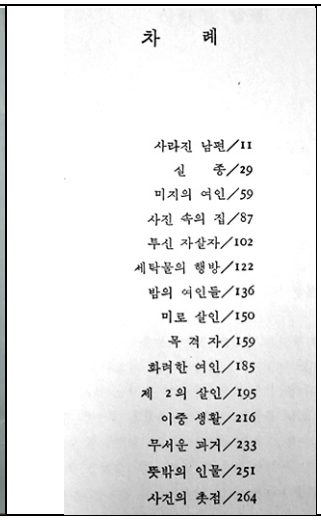
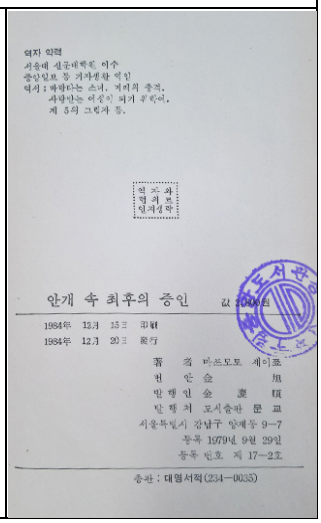
NO		71	
作品名	原題名	미인計의 함정	聞かなかった場所
訳者		金輝文(金聖鍾)(翻案)	
書名 (全集/文庫)		『美人計の陥穽』	
出版社	年度	東亞文藝	1984
備考		『処女地殺人計』(金旭 翻案、1984)と同一内容 奥付の翻案者は「金聖鍾」	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

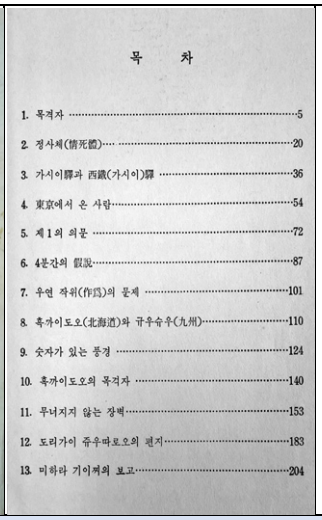
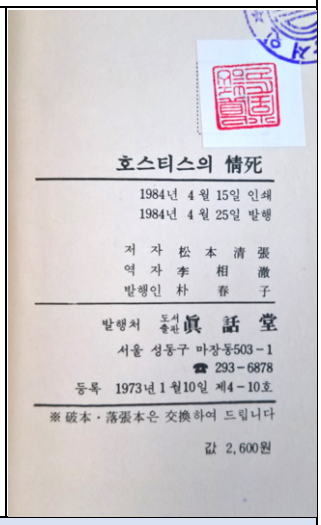
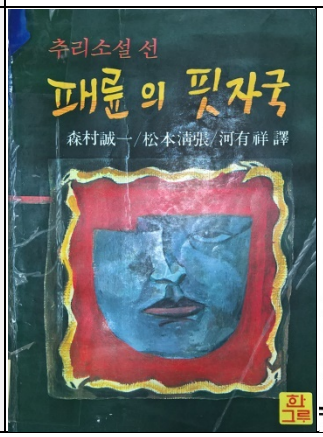
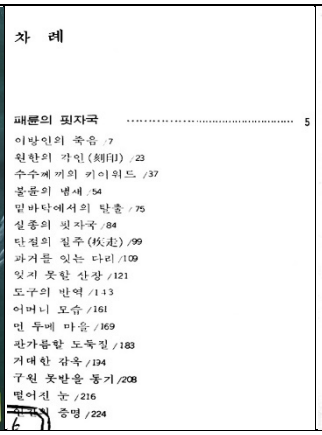
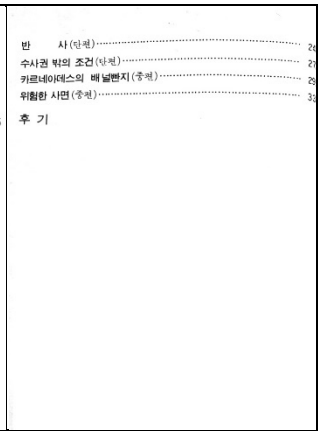
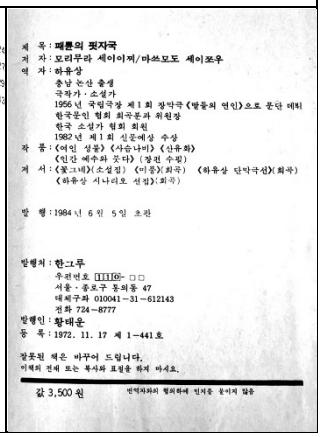
NO		72	
作品名	原題名	미인計의 함정	聞かなかった場所
訳者		金聖鍾 (翻案)	
書名 (全集/文庫)		『美人計の陥穽』	
出版社	年度	図書出版 韓脈	1984
備考		『処女地殺人計』(金旭翻案、1984)と同一内容。	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

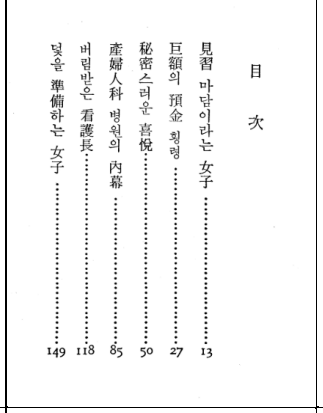
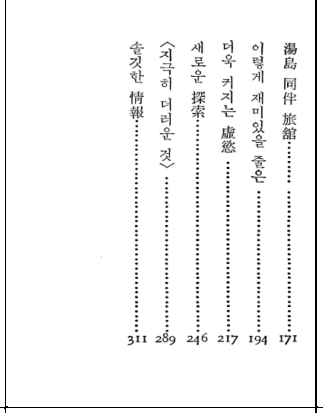
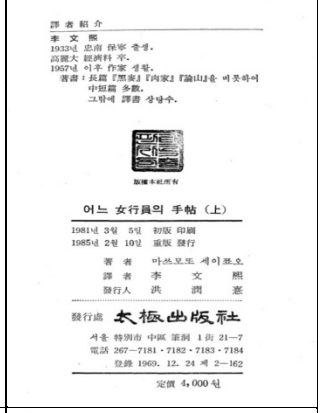
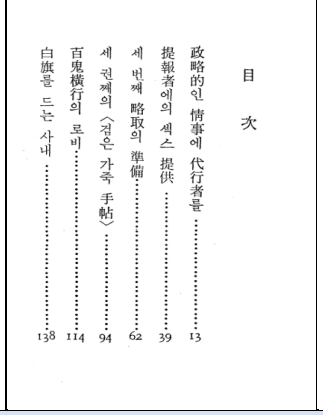
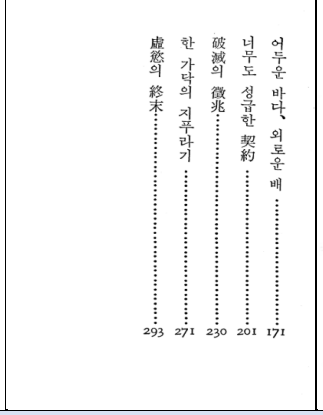
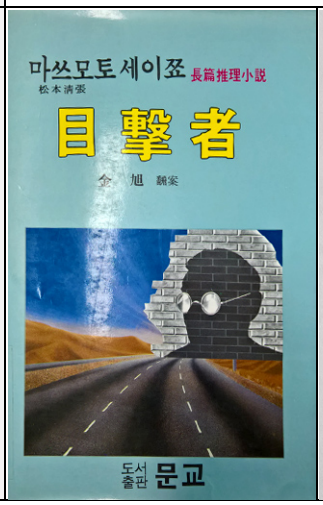
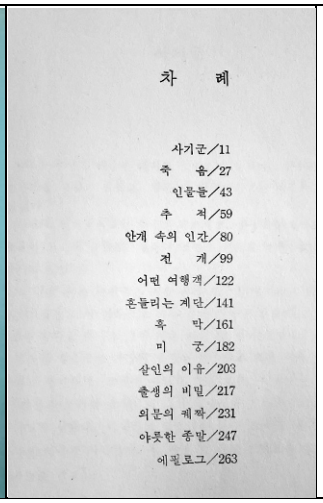
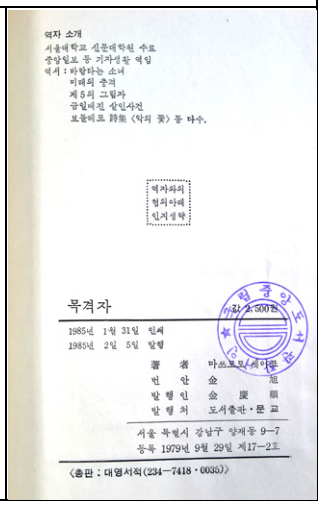
NO		73	
作品名	原題名	目撃者	眼の壁
訳者		金旭（翻案）	
書名 （全集/文庫）		『目撃者』	
出版社	年度	文教	1984
備考		翻案者による人物名・地名のローカルライジングと一部削除がある	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		74	
作品名	原題名	사기단 25시	眼の壁
訳者		金輝文（翻案）	
書名 （全集/文庫）		『詐欺団25時』	
出版社	年度	東亞文藝	1984
備考		『目撃者』(金旭翻案、1984)と同一内容	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

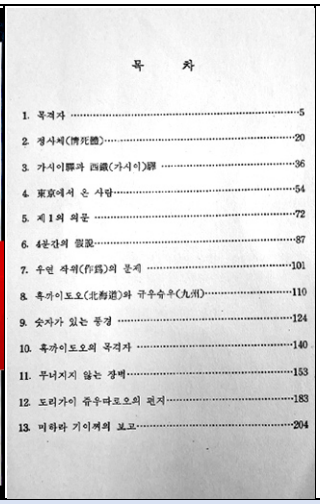
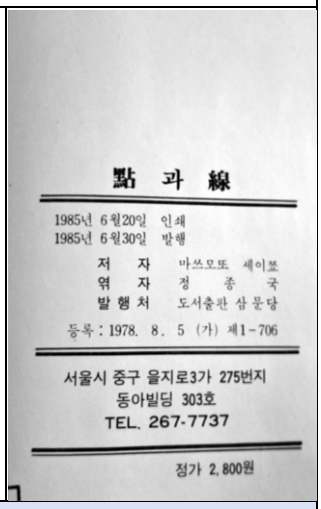
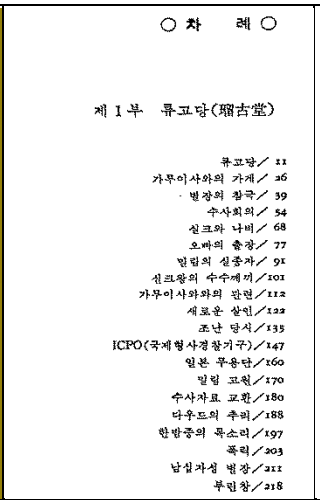
NO		75	
作品名	原題名	X점의 사람들	蒼い描点
訳者		金旭	
書名 (全集/文庫)		『X点の人々』(世界傑作推理文学 6)	
出版社	年度	金文堂出版社	1984
備考		-	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		-	

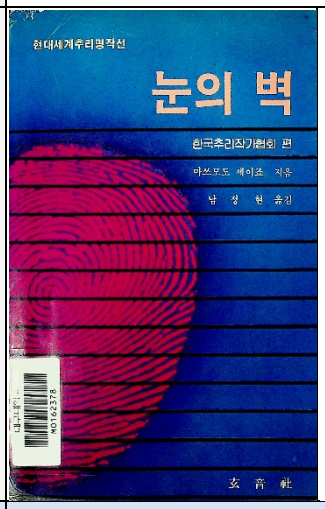
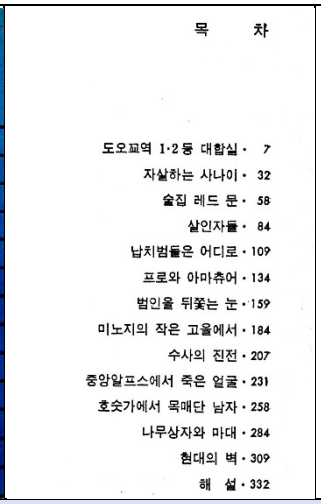
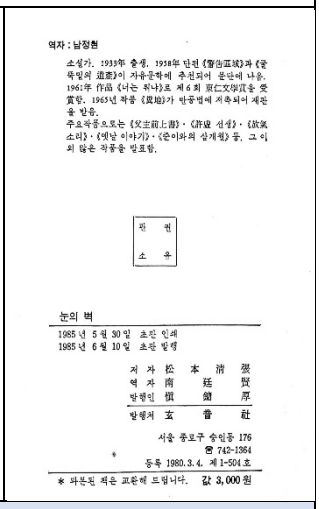
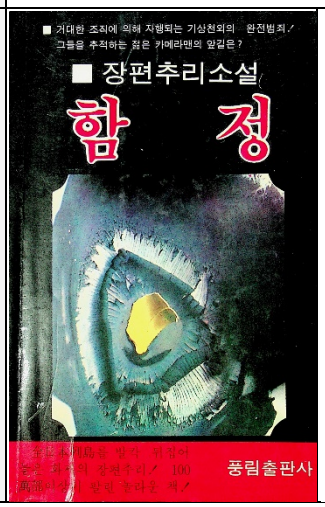
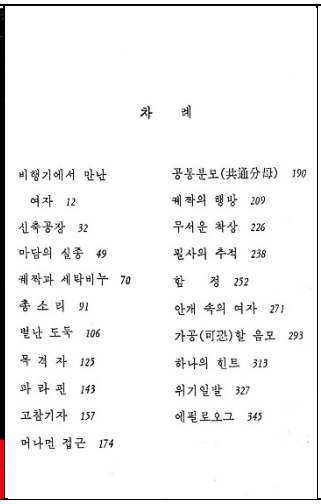
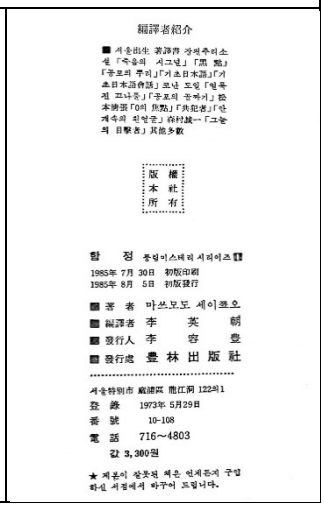
NO		76	
作品名	原題名	제3의 캠퍼스	高校殺人事件
訳者		李圭植	
書名 (全集/文庫)		『第3のキャンパス』	
出版社	年度	眞話堂	1984
備考		『高校生殺人事件』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		-	

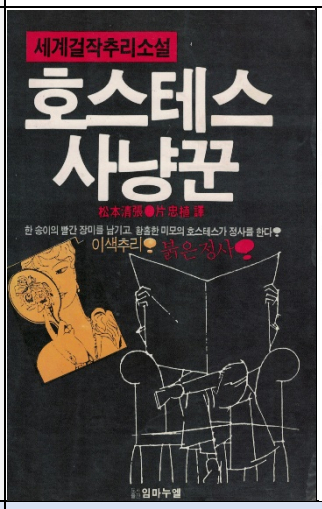
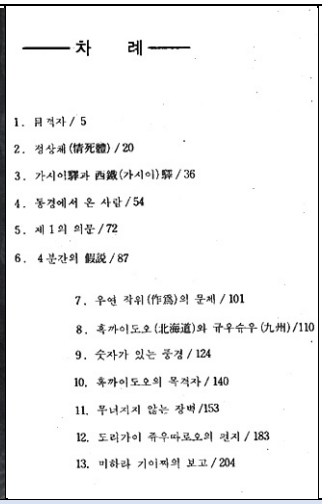
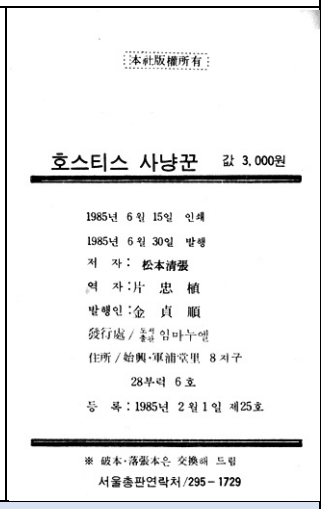
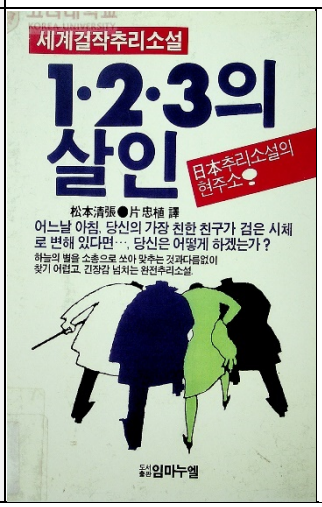
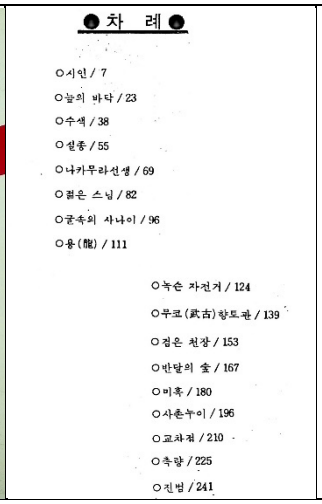
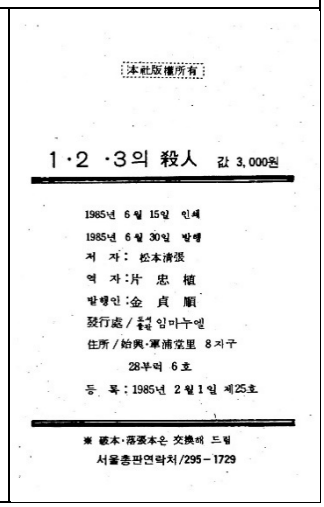
NO		77	
作品名	原題名	第五의 그림자	黒い樹海
訳者		金旭（翻案）	
書名 （全集/文庫）		『第五の影』	
出版社	年度	文教	1984
備考		翻案者による人物名・地名のローカルライジングと一部削除がある	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		78	
作品名	原題名	안개 속 최후 證人	ゼロの焦点
訳者		金旭（翻案）	
書名 （全集/文庫）		『霧の中の最後の証人』	
出版社	年度	文教	1984
備考		翻案者による人物名・地名のローカルライジングと一部削除がある	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

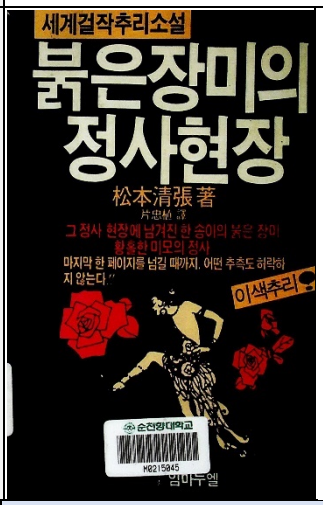
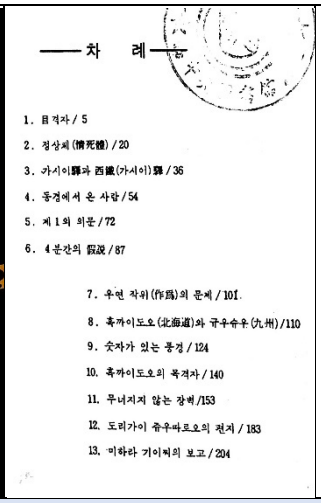
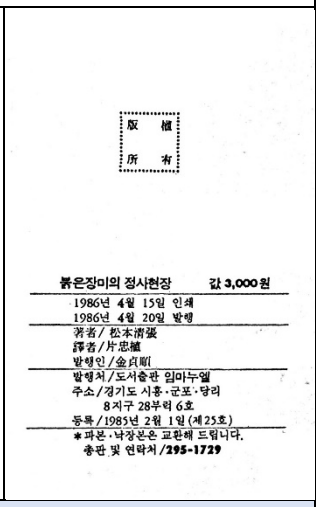
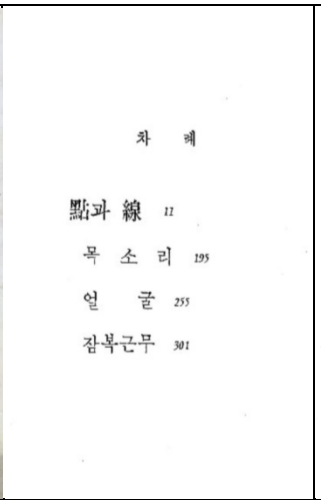
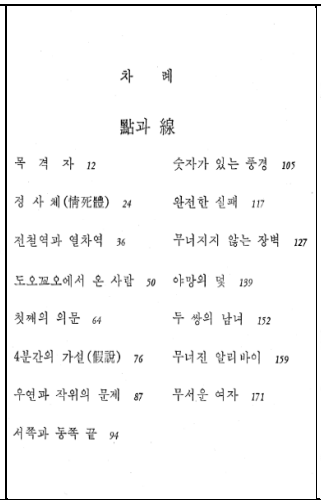
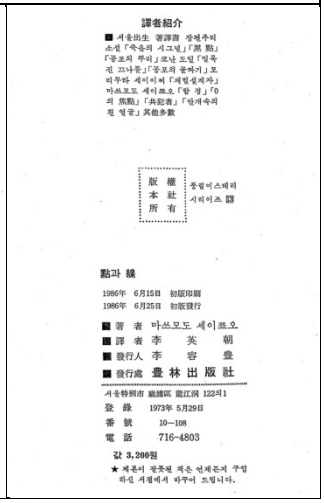
NO		79	
作品名	原題名	호스티스의 정사(情死)	点と線
訳者		辛相澈	
書名 (全集/文庫)		『ホステスの情死』	
出版社	年度	眞話堂	1984
備考		辛相澈訳の『点と線』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		80	
作品名	原題名	카르네아데스의 배널빤지	カルネアデスの舟板
		수사권 밖의 조건	捜査圏外の条件
		위험한 사면	危険な斜面
		반사	反射
訳者		河有祥	
書名 (全集/文庫)		『背徳の血潮(外)』	
出版社	年度	ハングール	1984
備考		森村誠一『人間の証明』と併録	
表紙/ 目次/ 版権紙					

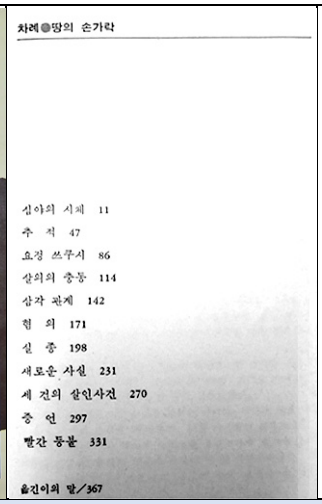
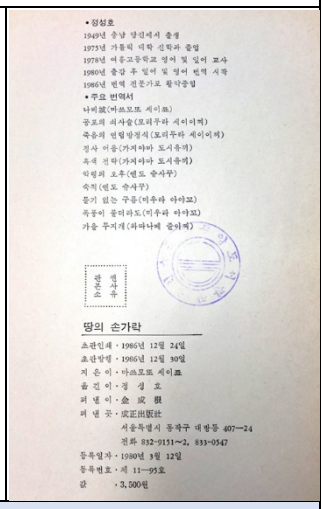
NO		81	
作品名	原題名	검은 手帖	黒革の手帖
訳者		李文熙	
書名 (全集/文庫)		『黒い手帖』上·下	
出版社	年度	太極出版社	1985
備考		『ある女子行員の手帖』(1981)の重版	
表紙/ 目次/ 版権紙					
					
NO		82	
作品名	原題名	目撃者	眼の壁
訳者		金旭（翻案）	
書名 (全集/文庫)		『目撃者』	
出版社	年度	文教	1985
備考		『目撃者』(金旭翻案、1984)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

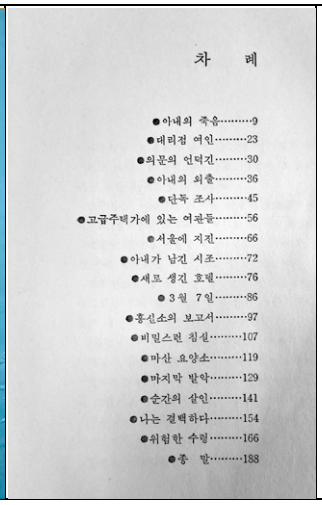
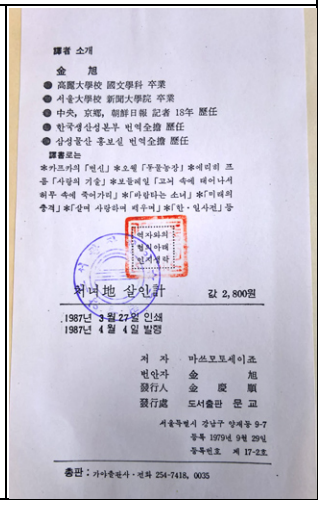
NO		83	
作品名	原題名	點과 線	点と線
訳者		鄭鍾國	
書名 (全集/文庫)		『點と線』(推理文庫シリーズ)	
出版社	年度	三文堂	1985
備考		辛相澈訳『点と線』(1976)と同一内容	
表紙/ 目次/ 版権紙		 목 차 1. 목격자 ……5 2. 정사체(情死體) ……20 3. 가시이驛과 西鐵(가시이)驛 ……36 4. 東京에서 온 사람 ……54 5. 제1의 의문 ……72 6. 4분간의 假說 ……87 7. 우연 작위(作爲)의 문제 ……101 8. 홋까이도오(北海道)와 규우슈우(九州) ……110 9. 숫자가 있는 풍경 ……124 10. 홋까이도오의 목격자 ……140 11. 무너지지 않는 장벽 ……153 12. 도리가이 쥬우따로오의 편지 ……183 13. 미하라 기이찌의 보고 ……204	–	 點 과 線 1985년 6월20일 인쇄 1985년 6월30일 발행 저 자 마쓰모또 세이쪼 엮 자 정 종 국 발 행 처 도서출판 삼문당 등록 : 1978. 8. 5 (가) 제1-706 서울시 중구 을지로3가 275번지 동아빌딩 303호 TEL. 267-7737 정가 2,800원
NO		84	
作品名	原題名	나비성	熱い絹
訳者		鄭性鎬	
書名 (全集/文庫)		『蝶の城』	
出版社	年度	成正出版社	1985
備考		–	
表紙/ 目次/ 版権紙		 ○ 차 례 ○ 제 1 부 류고당(瑠古堂) 류고당/ 11 가무이사와의 가게/ 26 변장의 참극/ 39 수사회의/ 54 신크와 나비/ 68 오빠의 출장/ 77 밀림의 실종자/ 91 신크왕의 수수께끼/101 가무이사와와의 관련/112 새로운 살인/122 조난 당시/135 ICPO(국제형사경찰기구)/147 일본 무용단/160 밀림 고원/170 수사자료 교환/180 다우드의 추리/188 한밤중의 목소리/197 폭력/203 남십자성 변장/211 부린창/218	홍차 마을/226 사카이 족/233 새로운 보고/244 투시술사/255 제 2 부 사카이족의 현자 제시의 행방/267 제목의 참극/281 투시술사의 정체/294 음골 수용단의 깃발/309 무용수인 조수/321 절대미문의 예약/335 몇 가지 의문점/344 살해당하다/360 계약뱉이 울리기 전/368 파력한 무대/376 드라마가 끝나고/381 책의 비밀/391 수수께끼의 복원/407 누가 죽였는가/417 만난 사람/430 기우는 빛 속에서/438	(落丁)

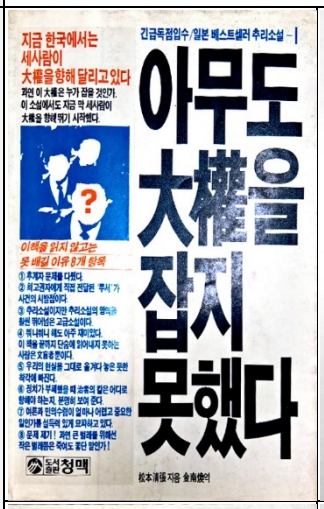
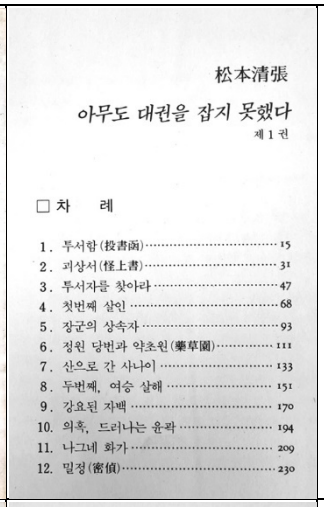
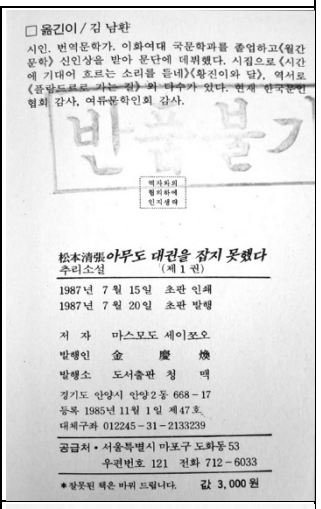
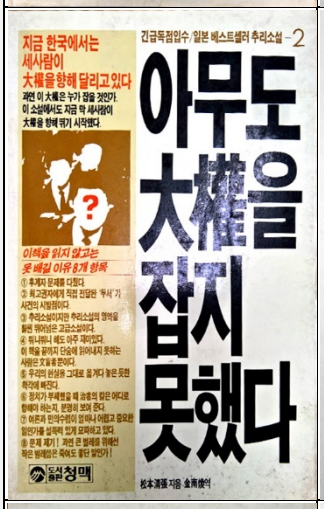
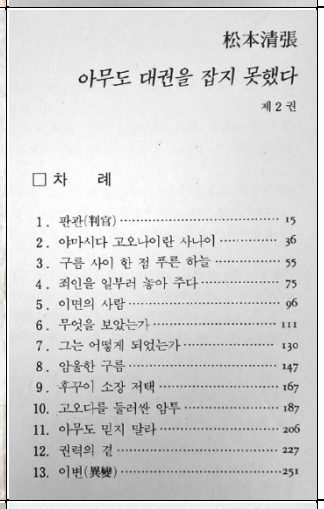
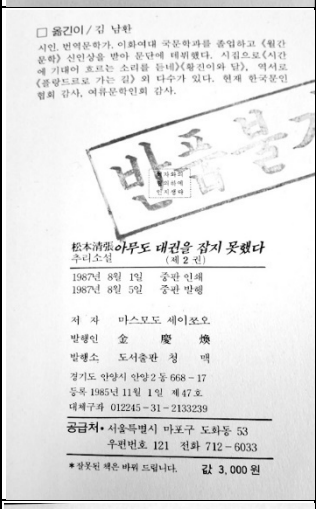
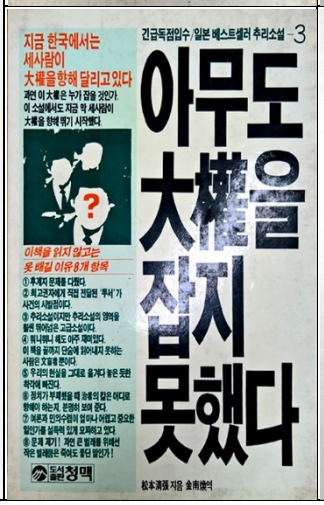
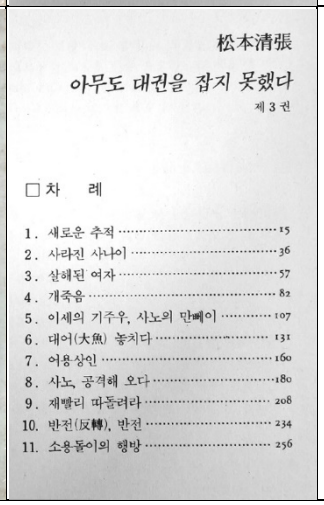
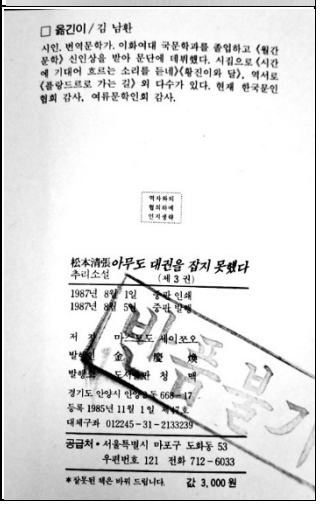
NO		85	
作品名	原題名	눈의 벽	眼の壁
訳者		南廷賢	
書名 (全集/文庫)		『目の壁』(現代世界推理名作選)	
出版社	年度	賢音社	1985
備考		韓国推理作家協会編	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		86	
作品名	原題名	함정	影の地帯
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『陥穽』	
出版社	年度	豊林出版社	1985
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

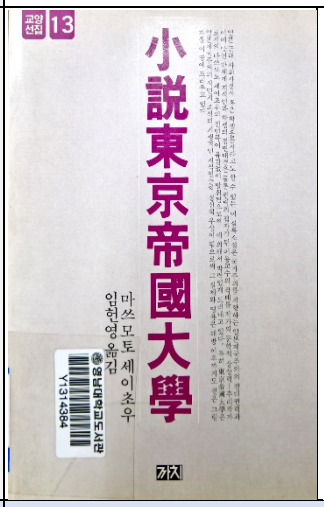
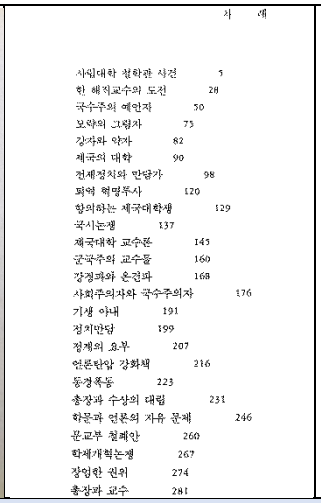
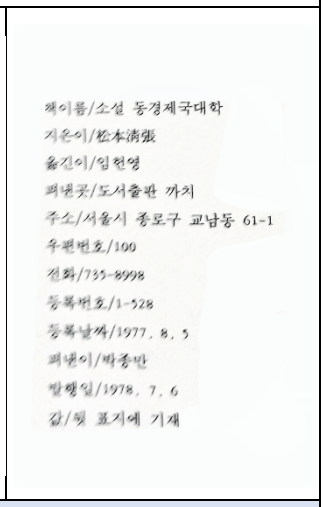
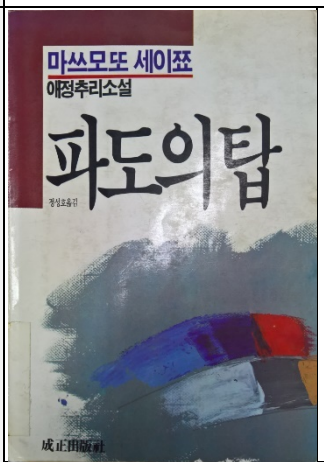
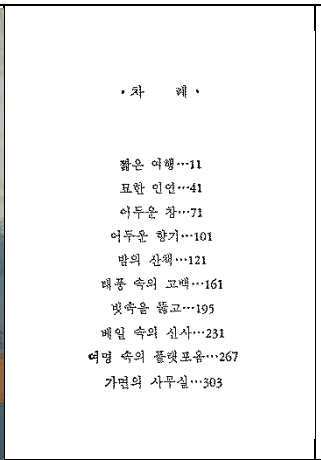
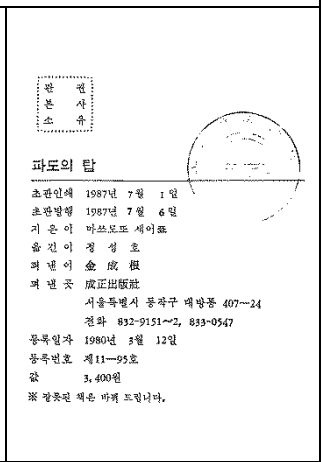
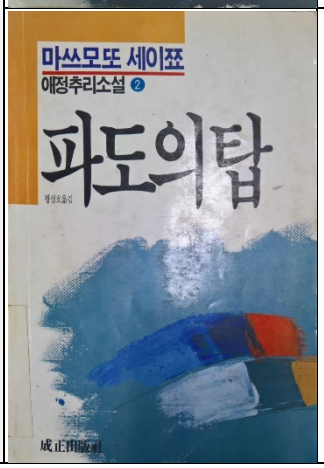
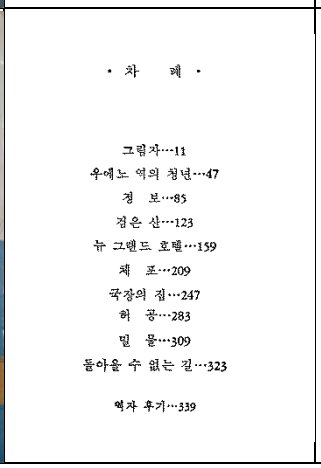
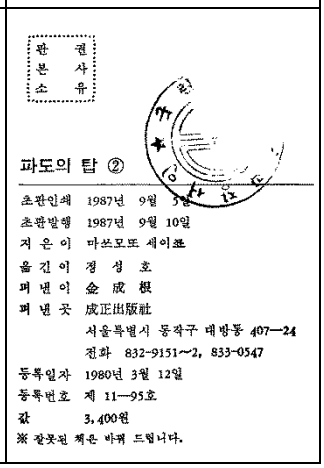
NO		87	
作品名	原題名	호스테스 사냥꾼	点と線
訳者		片忠植	
書名 (全集/文庫)		『ホステスの狩人』(世界傑作推理小説)	
出版社	年度	インマヌエル	1985
備考		辛相澈訳『点と線』(1976)と同一内容	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		88	
作品名	原題名	1·2·3의 살인	高校殺人事件
訳者		片忠植	
書名 (全集/文庫)		『1·2·3の殺人』(世界傑作推理小説)	
出版社	年度	インマヌエル	1985
備考		『高校生殺人事件』(1976)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

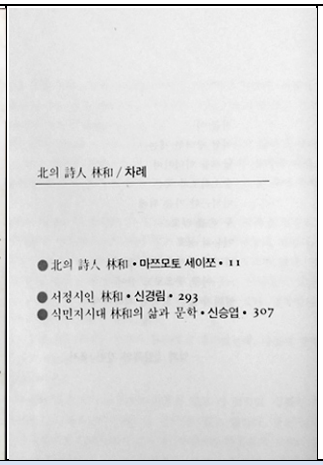
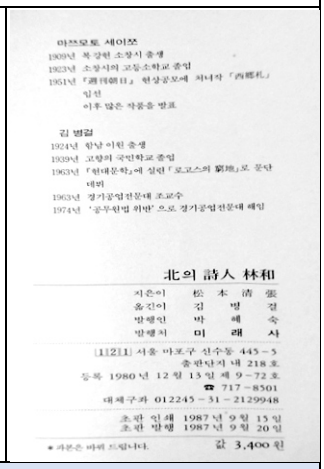
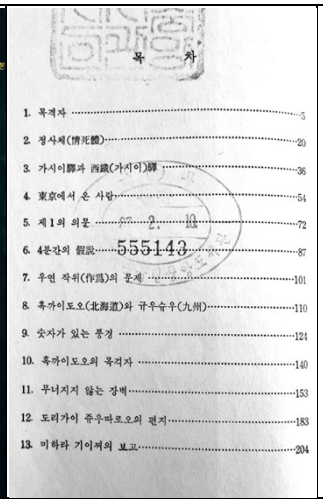
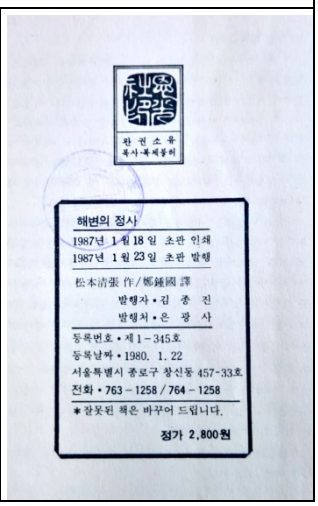
NO		89	
作品名	原題名	붉은 장미의 정사현장	点と線
訳者		片忠植	
書名 (全集/文庫)		『赤い薔薇の情死現場』(世界傑作推理小説)	
出版社	年度	インマヌエル	1986
備考		辛相澈訳の『点と線』(1976)と同一内容、『ホステスの狩人』(1985)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		  – 
NO		90	
作品名	原題名	點과 線	点と線
		목소리	声
		얼굴	顔
		잠복근무	張込み
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『点と線』(豊林名作推理小説シリーズ13)	
出版社	年度	豊林出版社	1986
備考		–	
表紙/ 目次/ 版權紙		  

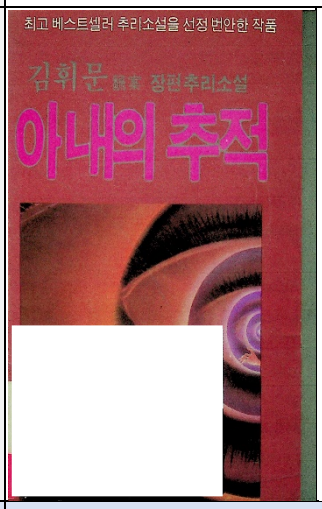
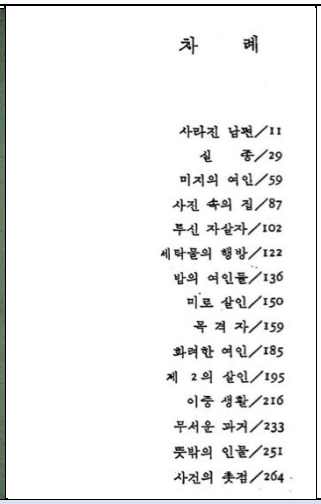
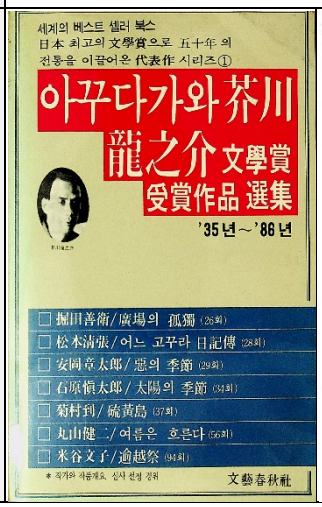
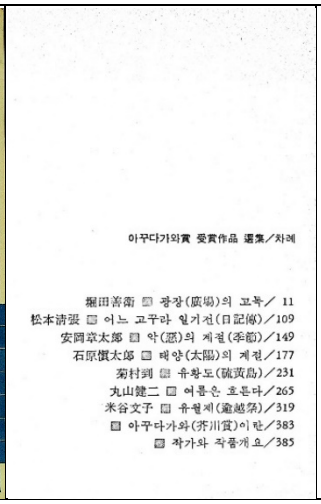
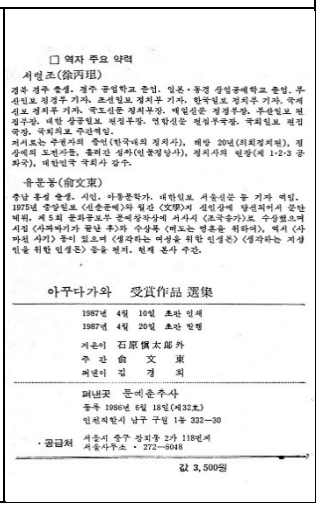
NO		91	
作品名	原題名	땅의 손가락	地の指
訳者		鄭性鎬	
書名 (全集/文庫)		『地の指』	
出版社	年度	成正出版社	1986
備考		-	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	 	-	

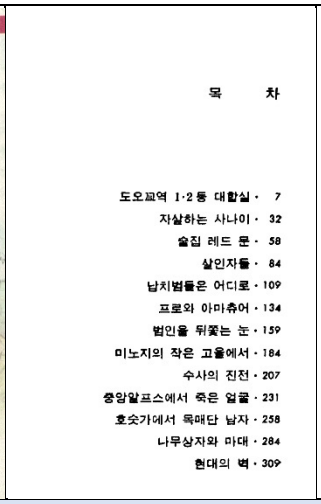
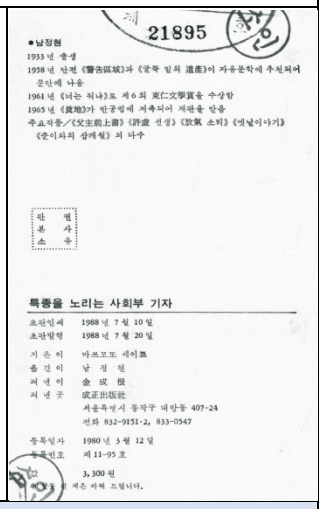
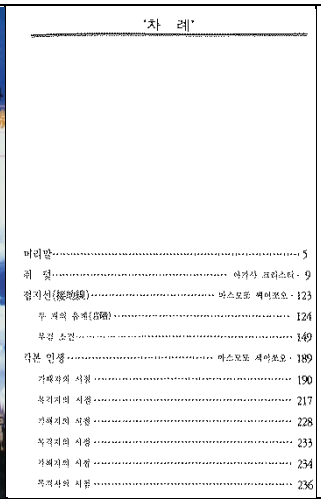
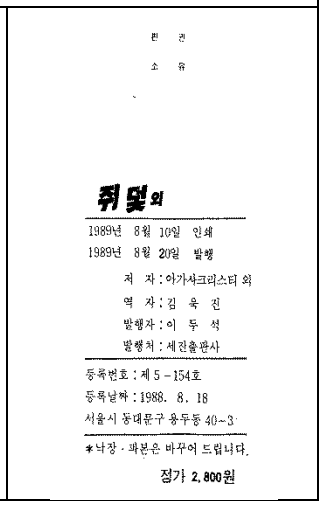
NO		92	
作品名	原題名	처녀地 살인計	聞かなかった場所
訳者		金旭（翻案）	
書名 (全集/文庫)		『処女地殺人計』	
出版社	年度	文教	1987
備考		『美人計の陥穽』(金輝文翻案、1984)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	 	-	

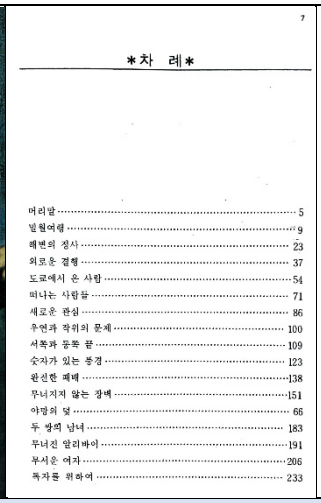
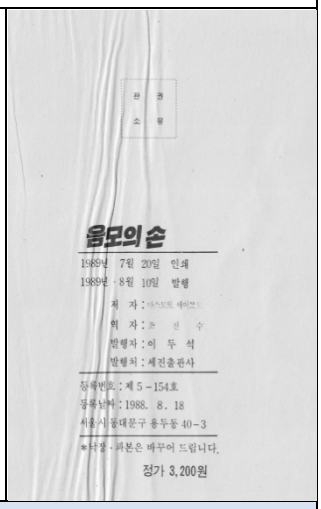
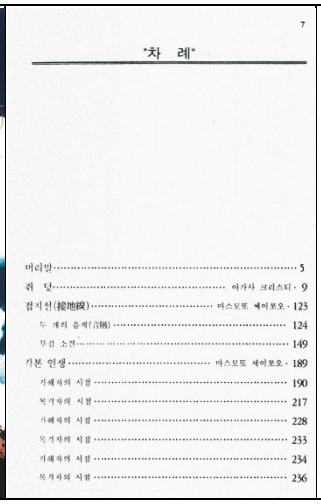
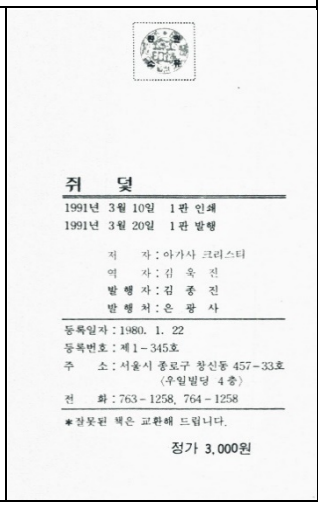
NO		93	
作品名	原題名	아무도 大權을 잡지 못했다	天保図録
訳者		金南煥	
書名 (全集/文庫)		『誰も大権が握れなかった』上・中・下	
出版社	年度	青脈	1987
備考		表紙には「日本ベストセラー推理小説」という紹介があり、その内容が同時期(1987年)の韓国大統領選挙の状況に似ていると説明されている	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
				–	
				–	

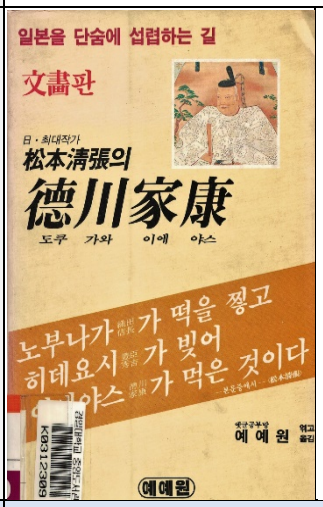
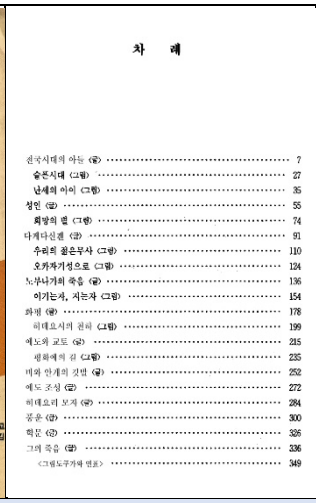
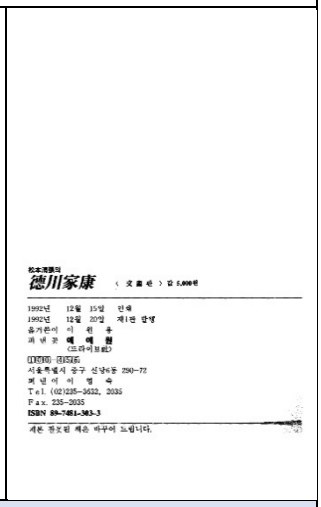
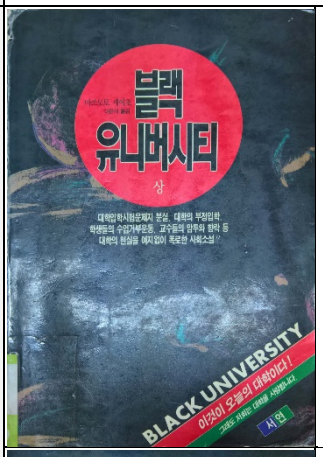
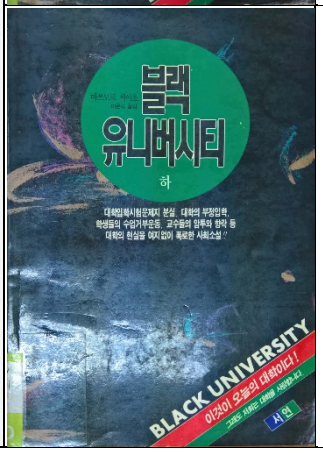
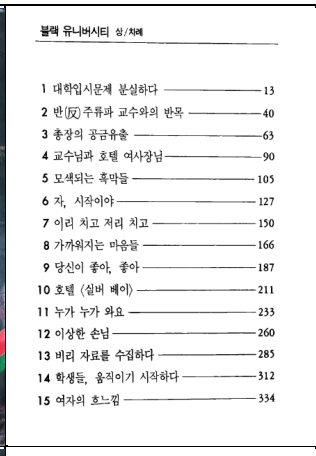
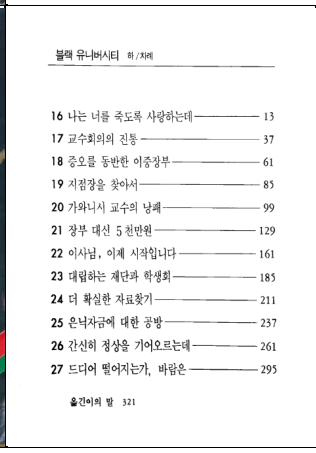
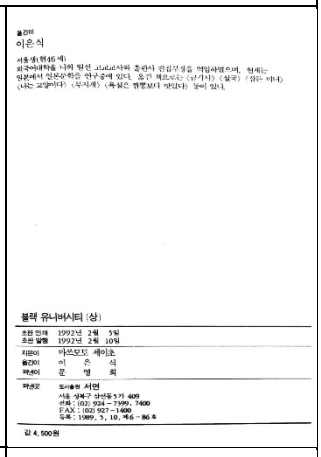
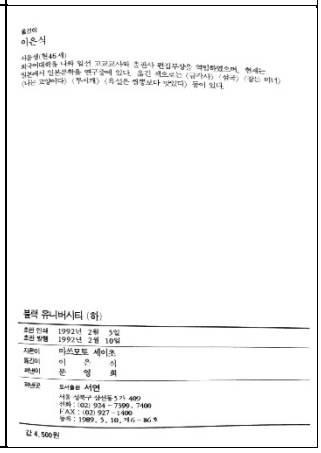
NO	94		
作品名	原題名	小説東京帝國大學	小説東京帝国大学
訳者		任軒永	
書名 (全集/文庫)		『小説東京帝国大学』(教養選集13)	
出版社	年度	カ-チ	1987
備考		版権紙に「1978」という出版年度の誤字が見られる	
表紙/ 目次/ 版権紙				
NO	95		
作品名	原題名	파도의 탑	波の塔
訳者		鄭性鎬	
書名 (全集/文庫)		『波の塔』上・下	
出版社	年度	成正出版社	1987
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
				–	

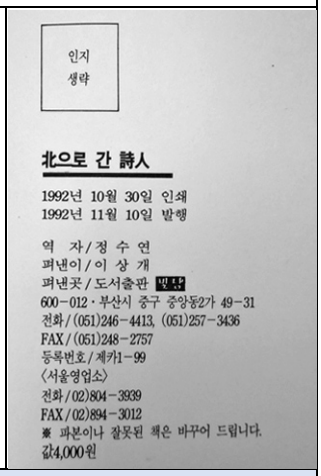
NO		96	
作品名	原題名	北의 詩人 林和	北の詩人
訳者		金炳傑	
書名 (全集/文庫)		北の詩人、林和	
出版社	年度	未來社	1987
備考			
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		97	
作品名	原題名	해변의 정사(情死)	点と線
訳者		鄭鍾國	
書名 (全集/文庫)		『海辺の情死』	
出版社	年度	恩光社	1987
備考		辛相澈訳『点と線』(1976)と同一内容、『點と線』(1985)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	

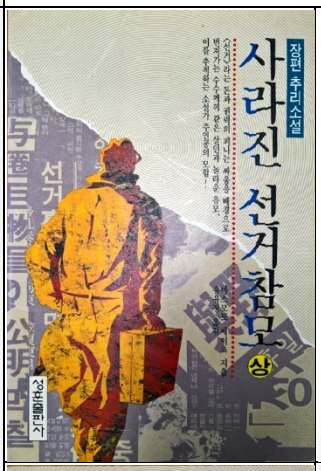
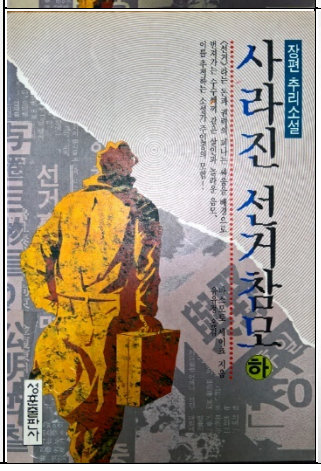
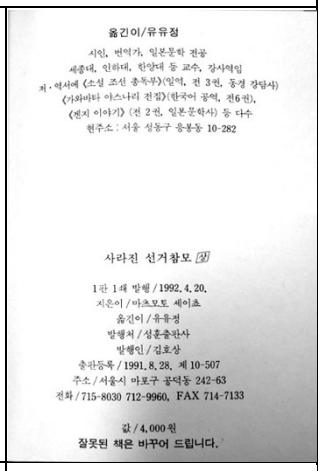
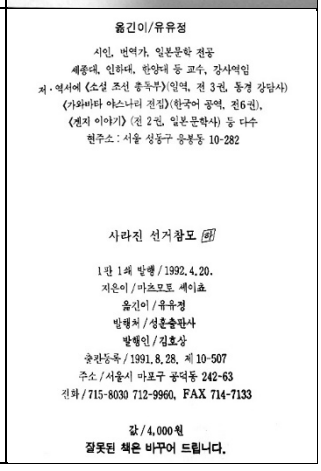
NO		98			
作品名	原題名	아내의 추적	ゼロの焦点		
訳者		金輝文（翻案）			
書名 （全集/文庫）		『妻の追跡』			
出版社	年度	東亞文藝	1987		
備考		『霧の中の最後の証人』(1984)と同一内容			
表紙/ 目次/ 版権紙			－	（落丁）
NO		99			
作品名	原題名	어느 고꾸라 일기전(日記傳)	或る「小倉日記」伝		
訳者		徐炳珦·兪文東 共訳			
書名 （全集/文庫）		『アクタガワ(芥川龍之介)文学賞 受賞作品 選集(1935～1986)』			
出版社	年度	文藝春秋社	1987		
備考		『日本芥川賞小説集』(李元壽訳、1960)の「或る「小倉日記」伝」と同一内容。			
表紙/ 目次/ 版権紙			－	

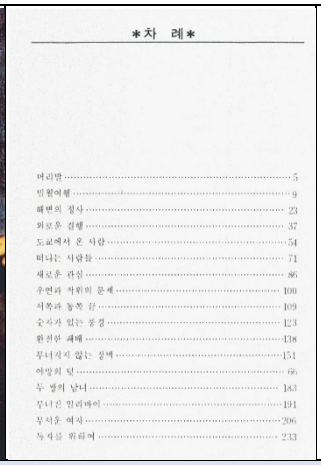
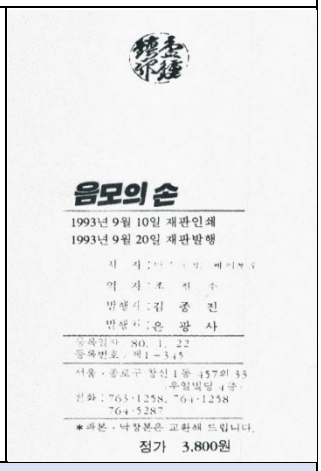
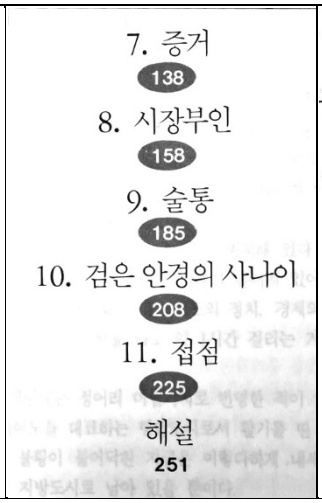
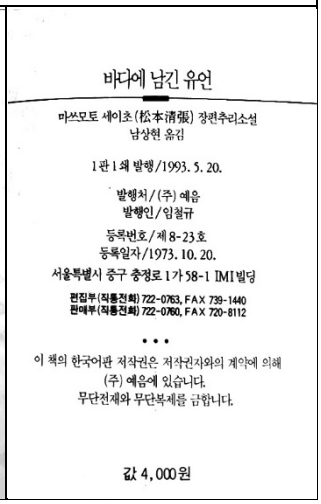
NO		100	
作品名	原題名	특종을 노리는 사회부 기자	眼の壁
訳者		南廷賢	
書名 (全集/文庫)		『特ダネを狙う社会部記者』	
出版社	年度	成正出版社	1988
備考		『目の壁』(賢音社, 1985)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		101	
作品名	原題名	접지선(接地線)	声
		각본 인생	顔
訳者		キム・ウクジン	
書名 (全集/文庫)		『ネズミ捕り(外)』	
出版社	年度	世進出版社	1989
備考		アガサ・クリスティー「ネズミ捕り」と併録	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

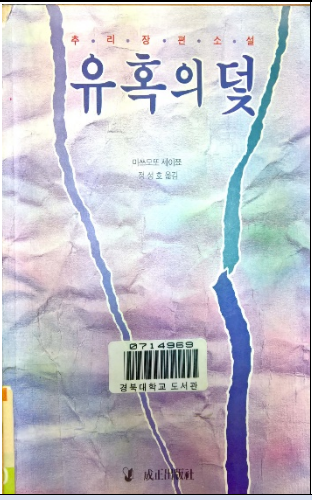
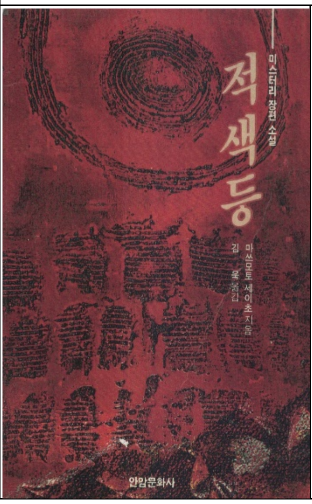
NO		102	
作品名	原題名	음모의 손	点と線
訳者		ゾ・ジョンス	
書名 (全集/文庫)		『陰謀の手』	
出版社	年度	世進出版社	1989
備考		李英朝訳『点と線』(1986)に類似	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		103	
作品名	原題名	접지선(接地線)	声
		각본 인생	顔
訳者		キム・ウクジン	
書名 (全集/文庫)		『ネズミ捕り(外)』	
出版社	年度	恩光社	1991
備考		『ネズミ捕り(外)』(世進出版社, 1989)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	

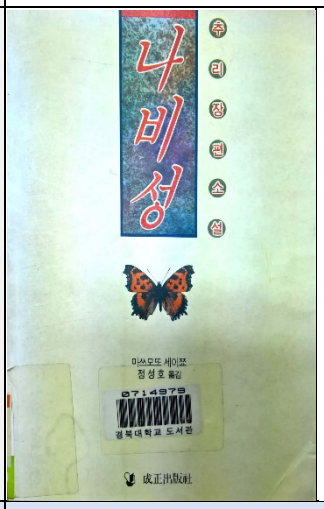
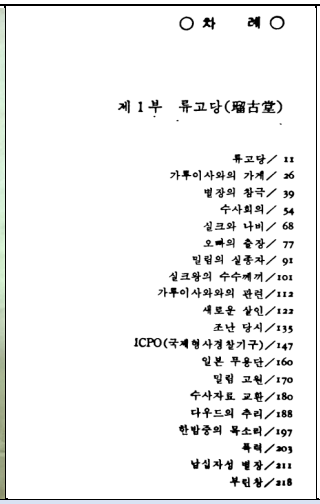
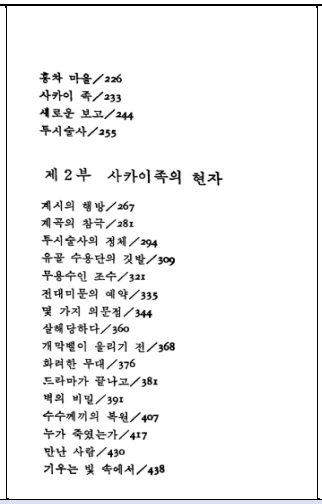
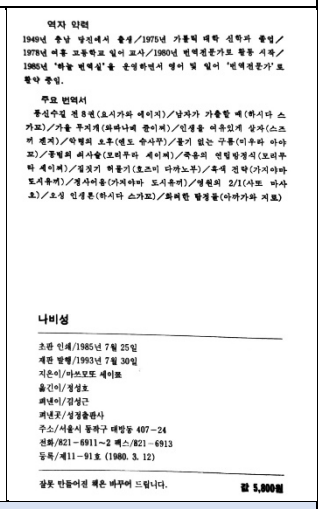
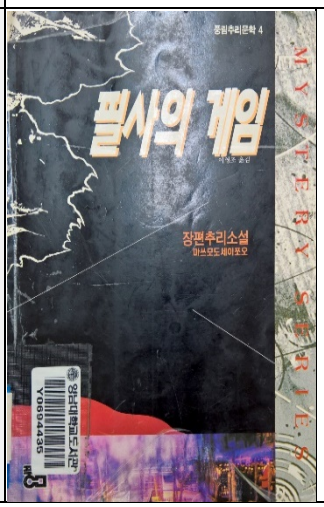
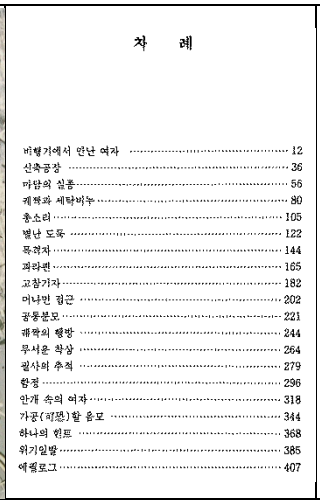
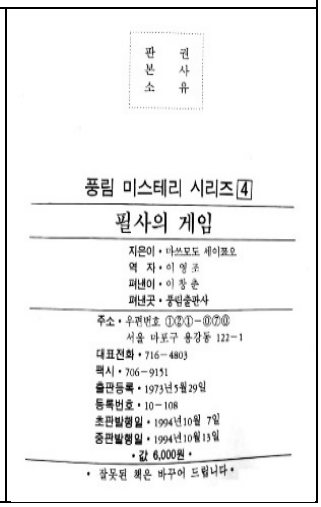
NO		104		
作品名	原題名	松本清張의 德川家康	德川家康	
訳者		イ・ウォンヨン		
書名 (全集/文庫)		『(文画版)松本清張の 徳川家康』		
出版社	年度	イェイェウォン	1992	
備考		後藤長男『徳川家康』(一部)と併録		
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		105		
作品名	原題名	블랙 유니버시티	地の骨	
訳者		イ・ウンシク		
書名 (全集/文庫)		『ブラック・ユニバーシティ』上・下		
出版社	年度	ソヨン	1992	
備考		–		
表紙/ 目次/ 版権紙		 	 	–	 

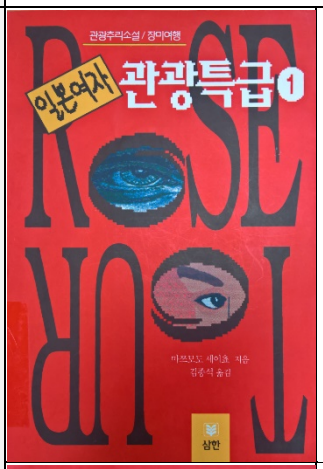
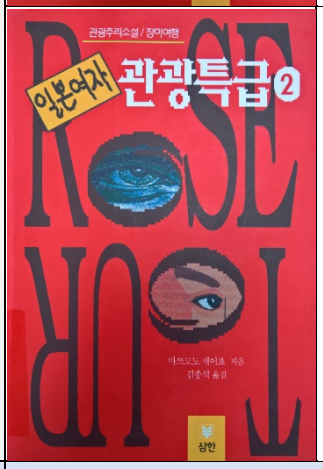
NO	106			
作品名 原題名	北으로 간 詩人		北の詩人	
訳者	ゾン・スヨン			
書名 (全集/文庫)	『北へ行った詩人』			
出版社 年度	ビッナム		1992	
備考				
表紙/ 目次/ 版権紙		なし	–	

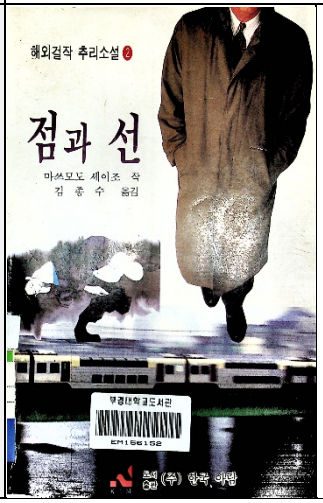
NO	107			
作品名 原題名	사라진 선거참모		網	
訳者	柳柳呈			
書名 (全集/文庫)	『消えた選挙参謀』上・下			
出版社 年度	聖訓出版社		1992	
備考	『日本経済新聞』連載版の翻訳			
表紙/ 目次/ 版権紙	 	차 례 상 제 1 장—갑작스런 청탁서 9 제 2 장—재회 43 제 3 장—지방 유력자 115 제 4 장—총선거 137 제 5 장—수수께끼의 영수자 209 제 6 장—동행 2인 243 하 제 7 장—여자의 정체 9 제 8 장—시체 발견 81 제 9 장—아버지와 아들의 비극 135 제 10 장—잔설 199 제 11 장—신의에의 배반 259 역자의 말 275 차 례 하 제 7 장—여자의 정체 9 제 8 장—시체 발견 81 제 9 장—아버지와 아들의 비극 135 제 10 장—잔설 199 제 11 장—신의에의 배반 259 역자의 말 275 상 제 1 장—갑작스런 청탁서 9 제 2 장—재회 43 제 3 장—지방 유력자 115 제 4 장—총선거 137 제 5 장—수수께끼의 영수자 209 제 6 장—동행 2인 243	–	 

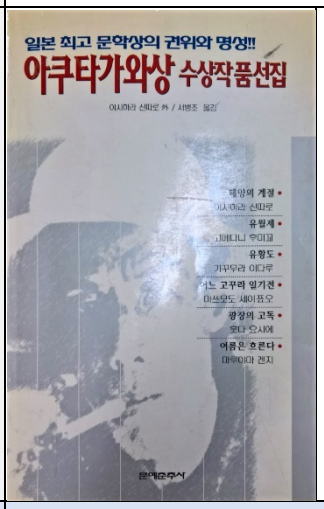
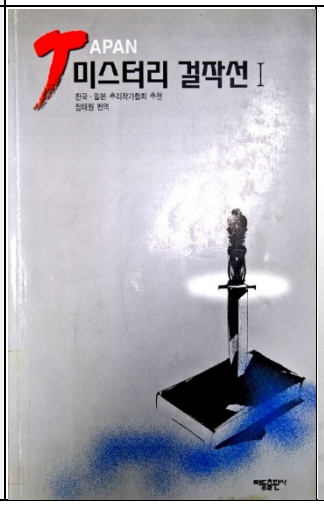
NO		108	
作品名	原題名	음모의 손	点と線
訳者		ゾ・ジンス	
書名 (全集/文庫)		『陰謀の手』	
出版社	年度	恩光社	1993
備考		李英朝訳『点と線』(1986)に類似、『陰謀の手』(世進出版社, 1989)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			– 
NO		109	
作品名	原題名	바다에 남긴 유언	犯罪の回送
訳者		南尙賢	
書名 (全集/文庫)		『海に残した遺言』	
出版社	年度	禮音	1993
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			 

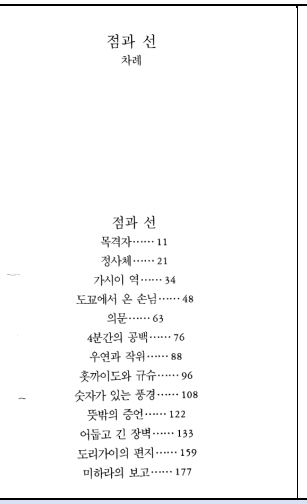
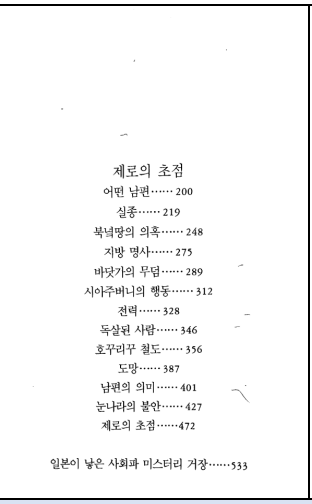
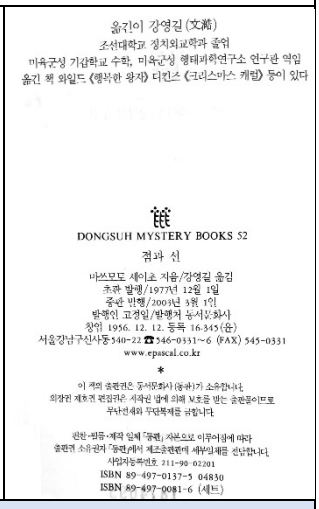
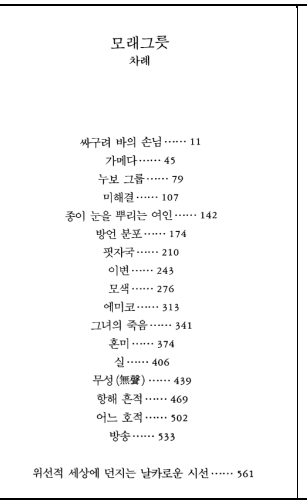
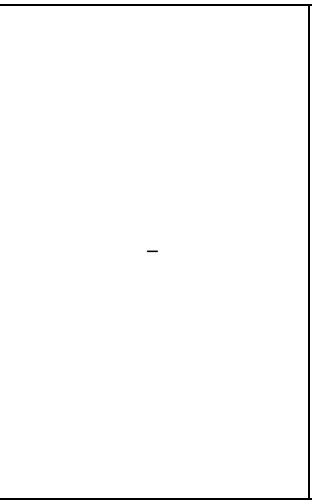
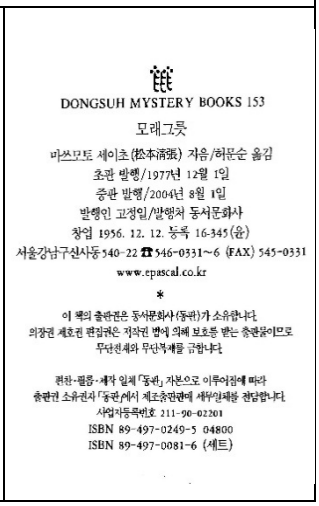
<table>
<tr><td colspan="2">NO</td><td colspan="4">110</td></tr>
<tr><td>作品名</td><td>原題名</td><td colspan="2">유혹의 덫</td><td colspan="2">地の指</td></tr>
<tr><td colspan="2">訳者</td><td colspan="4">鄭性鎬</td></tr>
<tr><td colspan="2">書名
(全集/文庫)</td><td colspan="4">『誘惑の罠』</td></tr>
<tr><td>出版社</td><td>年度</td><td colspan="2">成正出版社</td><td colspan="2">1993</td></tr>
<tr><td colspan="2">備考</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td colspan="2">表紙/
目次/
版権紙</td><td> 
</td><td>유혹의 덫
목 차
죽음의 메시지/17
어떤 추적/58
요정 쓰쿠시/104
살의의 충동/137
삼각관계/169
혐의/203
실종된 여자/235
새로운 사실/276
세건의 살인사건/322
뜻밖의 증언/353
빨간 등불/393
옮긴이의 말/434</td><td>–</td><td>■정성호
1949년 충남 당진에서 출생
1975년 가톨릭 대학 신학과 졸업
1978년 여흥고등학교 영어 및 일어교사
1980년 번역전문가로 활동시작
■주요 번역서
나비성(마쓰모또 세이쬬)
공포의 쇠사슬(모리무라 세이찌)
죽음의 연립방정식(모리무라 세이찌)
정사 여음(가지야마 도시유끼)
흑색전략(가지야마 도시유끼)
악령의 오후(엔도 슈사꾸)
숙적(엔도 슈사꾸) 등 다수
판권 본사 소유
유혹의 덫
초판 인쇄/1993년 7월 25일
초판 발행/1993년 7월 30일
지은이/마쓰모또 세이쬬
옮긴이/정성호
펴낸이/김성근
펴낸곳/성정출판사
주소/서울시 동작구 대방동 407−24
전화/821−6911~2 팩스/821−6913
등록/제11−91호 (1980. 3. 12)
잘못 만들어진 책은 바꾸어 드립니다
© 1993. Sung Jung Publishing Co.
값 5,800원</td></tr>
<tr><td colspan="2">NO</td><td colspan="4">111</td></tr>
<tr><td>作品名</td><td>原題名</td><td colspan="2">적색등</td><td colspan="2">地の指</td></tr>
<tr><td colspan="2">訳者</td><td colspan="4">金旭</td></tr>
<tr><td colspan="2">書名
(全集/文庫)</td><td colspan="4">『赤色の灯』</td></tr>
<tr><td>出版社</td><td>年度</td><td colspan="2">安岩文化社</td><td colspan="2">1993</td></tr>
<tr><td colspan="2">備考</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td colspan="2">表紙/
目次/
版権紙</td><td> 
</td><td>적색등 차 례
제1장 심야의 시체 11
제2장 추적 39
제3장 요정 'S' 91
제4장 살의의 충동 123
제5장 소용돌이 153
제6장 혐의 185
제7장 실종 213
제8장 새로운 사실 253
제9장 세 가지 살인 297
제10장 증언 325
제11장 붉은 등불 ...... 361</td><td>–</td><td>저자/마쓰모토 세이초
•고교 졸업 후 인쇄공이 된다. 한 때 빗자루를 만들어 전국을 누비며 팔러 다닌다. 일본 최고의 '아쿠타가와상' 수상으로 작품활동 시작. 그뒤 오늘에 이르기까지 작가부문 소득에 일인자의 위치를 고수했다.
•주요 작품으로 『현대관료론』, 『소화사(昭和史)발굴』, 『동경제국대학』 등 일련의 논픽션 외에 『지방신문을 파는 여인』, 『귀축』, 『1년 반만 기다려라』, 『소설 제국은행 사건』, 『검은 복음』, 『마음의 시선』 등 300여 권이 있다.
•일본 매일신문사의 전국 독서여론 조사에서 마쓰모토 세이초가 '내가 좋아하는 저자' 1위로 매년 뽑혀왔으며, 올해 일본문학진흥회에서는 제1회 '마쓰모토 세이초상'을 제정했다.
역자/김 욱
•서울 출생이며 서울대 신문대학원에서 수학했다. 《경향신문》, 《조선일보》, 《중앙일보》 기자를 거쳐 삼성물산(주) 홍보팀, 한국생산성본부에서 편집위원으로 일했으며 현재는 칼럼니스트로 집필과 번역사업에 전념하고 있다.
•역서로는 『지식인』, 『러시아의 사랑과 고뇌』, 『사랑의 기술』, 『동물 농장』, 『이방인』, 『페스트』, 『예언자』, 『죽음보다 강한 것』, 『이런 사부가 회사를 망친다』 등 다수가 있다.
적색등
초판 박은 날 / 1993년 8월 15일
초판 펴낸 날 / 1993년 8월 20일
지 자 마쓰모토 세이초
역 자 김 욱
발행인 이 창 식
발행처/도서출판 안암문화사
㉾100−452 서울 중구 신당동 379−3호
전화/238−0491 팩스/252−4334
출판등록 1978. 5. 24 제2−565호
책임편집/김영희 · 교정/김은희, 하영미
ISBN 89−7235−020−6
ⓒ안암문화사 1993
값 5,500원
*판권은 본사가 소유하고 있습니다.
*파본은 교환해 드립니다.</td></tr>
</table>

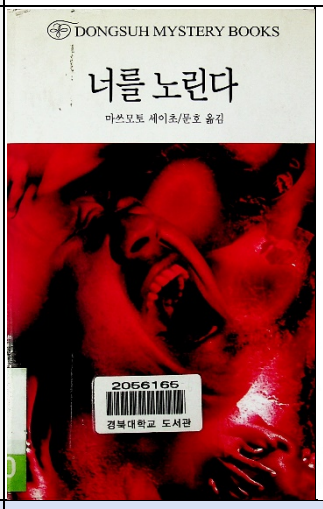
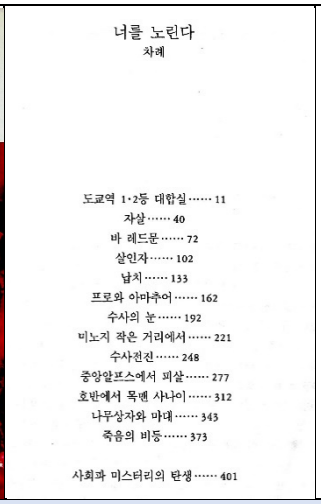
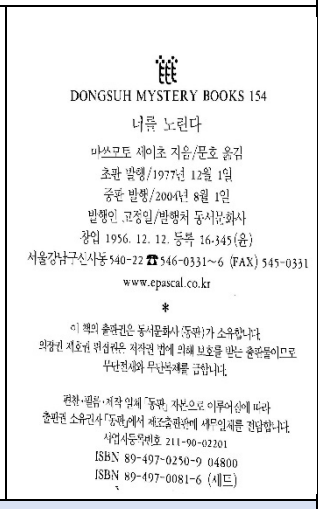
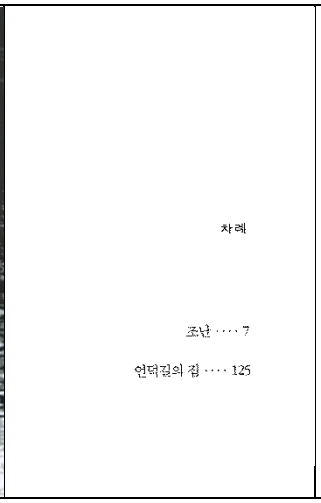
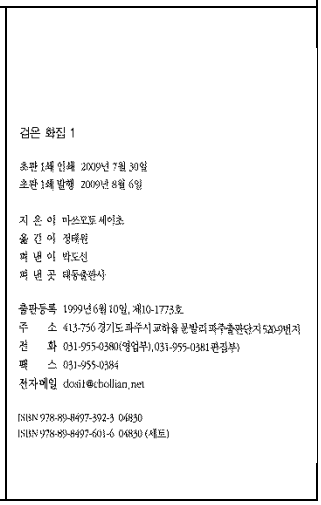
NO		112	
作品名	原題名	나비성	熱い絹
訳者		鄭性鎬	
書名 (全集/文庫)		『蝶の城』	
出版社	年度	成正出版社	1993
備考		『蝶の城』(1985)の重版	
表紙/ 目次/ 版権紙					
NO		113	
作品名	原題名	필사의 게임	影の地帯
訳者		李英朝	
書名 (全集/文庫)		『必死のゲーム』(豊林推理文学4)	
出版社	年度	豊林出版社	1994
備考		『陥穽』(1985)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

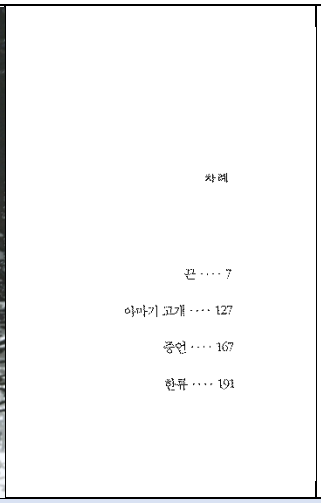
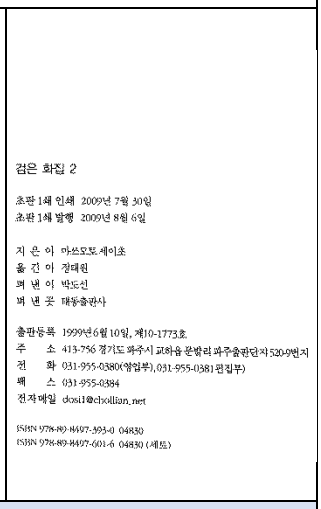
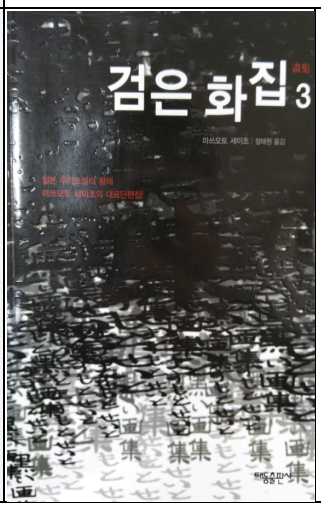
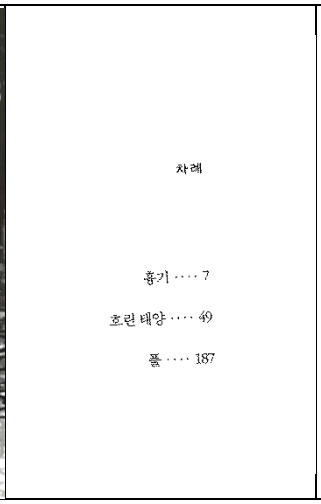
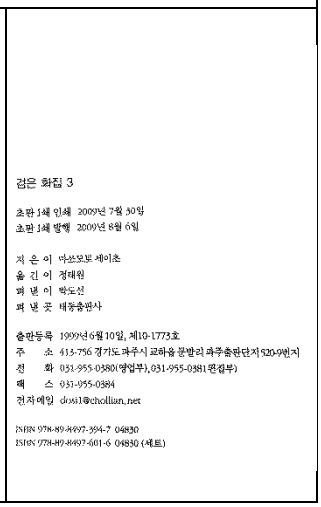
NO	114			
作品名 原題名	일본여자 관광특급		黒の回廊	
訳者	キム・ゾンソク			
書名 (全集/文庫)	『(観光推理小説・バラのツアー) 日本女性観光特急』上・下			
出版社 年度	三韓出版社		1995	
備考				
表紙/ 目次/ 版権紙		차 례 1권 앤카리지의 쇼핑 …… 7 로렌하겐의 고성(古城) …… 95 런던의 공원 …… 161 스코틀랜드의 호수 …… 239 2권 스코틀랜드의 호수 …… 7 스위스의 고원 …… 83 아이거의 벽 …… 155	–	일본여자 관광특급 ① 발 행 일 · 1995년 7월 15일 발 행 처 · 삼한출판사 발 행 인 · 김충호 등록번호 · 제13 - 47호 등록일자 · 1975년 10월 18일 서울시 동대문구 신설동 103 - 6호 아세아 빌딩 201호 TEL. 231 - 4460(대표) FAX. 231 - 4461 *파본 및 잘못된 책은 바꾸어 드립니다. 값 5,800원 ISBN 89-7460-034-X
		차 례 2권 스코틀랜드의 호수 …… 7 스위스의 고원 …… 83 아이거의 벽 …… 155 1권 앤카리지의 쇼핑 …… 7 로렌하겐의 고성(古城) …… 95 런던의 공원 …… 161 스코틀랜드의 호수 …… 239	–	일본여자 관광특급 ② 발 행 일 · 1995년 7월 15일 발 행 처 · 삼한출판사 발 행 인 · 김충호 등록번호 · 제13 - 47호 등록일자 · 1975년 10월 18일 서울시 동대문구 신설동 103 - 6호 아세아 빌딩 201호 TEL. 231 - 4460(대표) FAX. 231 - 4461 *파본 및 잘못된 책은 바꾸어 드립니다. 값 5,800원 ISBN 89-7460-034-X

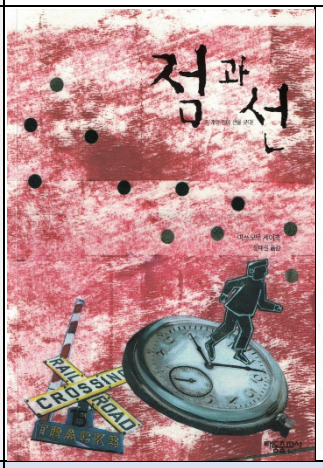
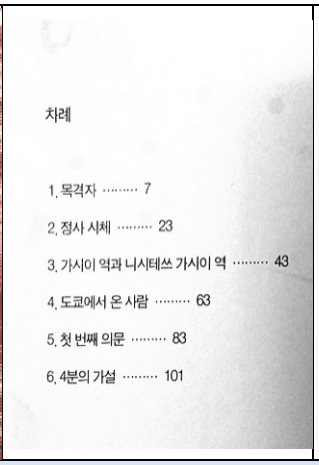
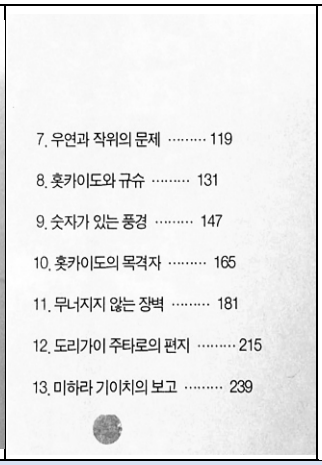
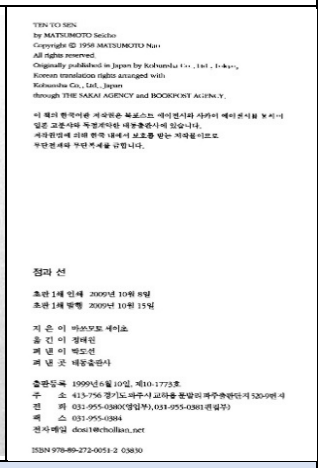
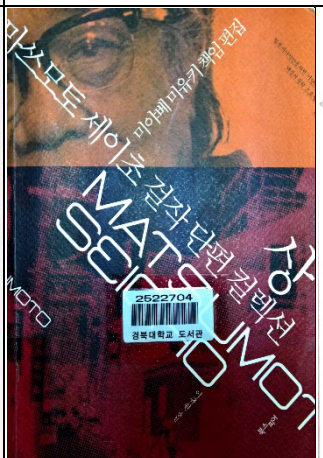
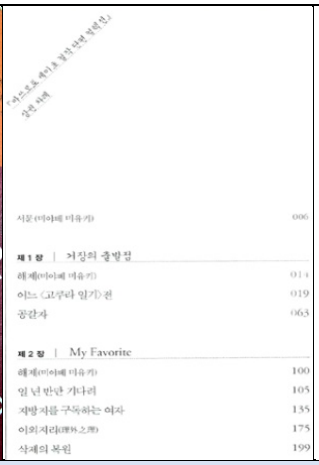
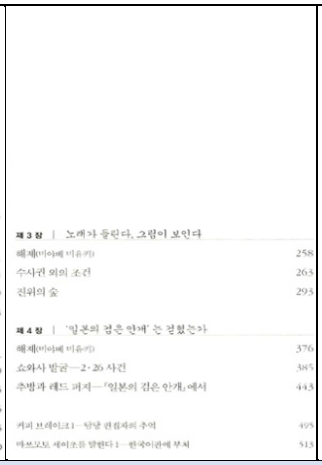
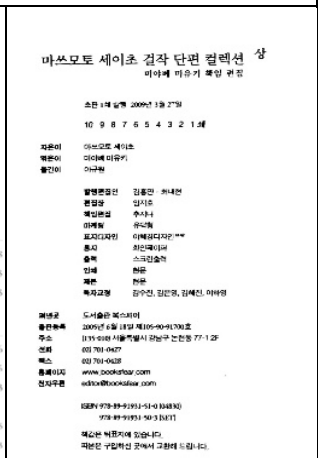
NO	115			
作品名 原題名	점과 선		点と線	
訳者	キム・ゾンス			
書名 (全集/文庫)	『点と線』			
出版社 年度	韓国アラム		1995	
備考	辛相澈訳『点と線』(1976)と同一内容、西村京太郎「カードの城」と併録			
表紙/ 目次/ 版権紙		차 례 제1장 : 목격자 …… 7 제2장 : 정사한 시체들 …… 21 제3장 : 가시이 역과 사가시이 역 …… 36 제4장 : 도쿄에서 온 사람 …… 52 제5장 : 첫번째 의문 …… 69 제6장 : 4분동안에 대한 가설 …… 83 제7장 : 우연과 작위의 문제 …… 96 제8장 : 홋카이도와 규슈 …… 105 제9장 : 숫자들이 있는 풍경 …… 118 제10장 : 홋카이도의 목격자 …… 133 제11장 : 무너지지 않는 장벽 …… 145 제12장 : 도리가이 쥬우타로오의 편지 …… 171 제13장 : 미하라 기이치의 보고서 …… 190 부 록 : 카드의 성	–	 점과 선 1995년 5월 20일 초판 1쇄 1995년 5월 30일 초판 발행 저 자 : 마쓰모도 세이조 번 역 : 김 종 수 펴낸이 : 김 학 락 펴낸곳 : (주)한국아람 출판등록 : 1994. 5. 3. 제16-886호 서울시 동대문구 신설동 97-31 성산빌딩 402호 전 화 : 273-8700, 929-7772 F A X : 557-9500 정가 : 5,000 원 ISBN 89-86273-15-2 03810

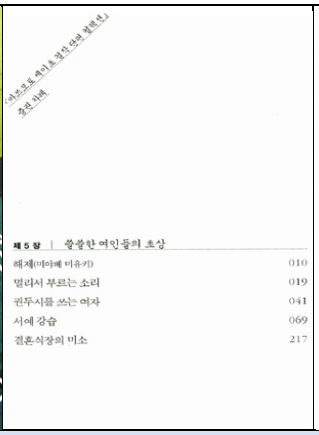
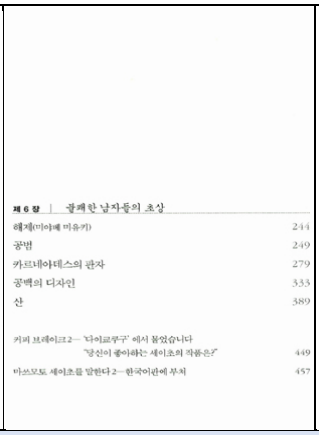
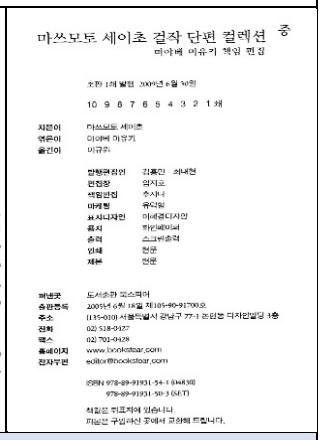
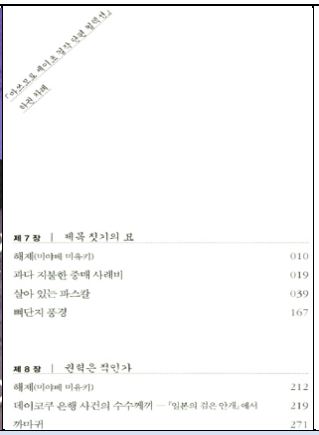
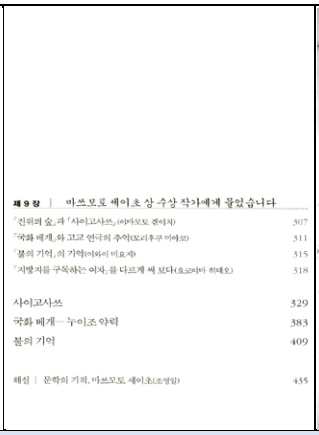
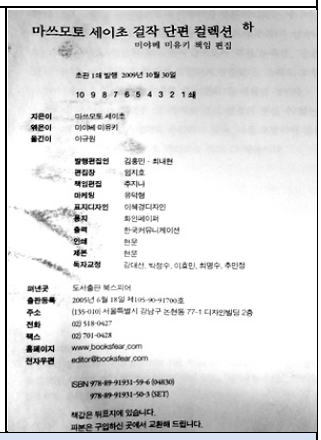
NO		116	
作品名	原題名	어느 고꾸라(小倉) 일기전(日記伝)	或る「小倉日記」伝
訳者		徐炳珦	
書名 (全集/文庫)		『アクタガワ賞受賞作品選集』	
出版社	年度	文藝春秋社	1999
備考		『日本芥川賞小説集』(李元壽訳、1960)の「或る「小倉日記」伝」と同一内容 『アクタガワ(芥川龍之介)文学賞受賞作品選集(1935～1986)』(1987)の再版	
表紙/ 目次/ 版権紙			차 례 · 태양(太陽)의 계절(季節) …… 7 이시하라 신따로 · 유월제(遠藤祭) …… 67 고마다니 루미꼬 · 유황도(硫黄島) …… 139 가꾸무라 어다루 · 어느 고꾸라(小倉) 일기전(日記傳) …… 177 마쓰모도 세이쪼오 · 광장(廣場)의 고독(孤獨) …… 221 뭇다 요시에 · 여름은 흐른다 …… 329 아루야마 겐지
		–	아쿠타가와상 수상작품선집 지은이 / 이시하라 신따로 外 옮긴이 / 서병조 초판1쇄 발행 / 1987년 4월 20일 초판3쇄 발행 / 1990년 7월 16일 재판1쇄 인쇄 / 1999년 5월 15일 재판1쇄 발행 / 1999년 5월 20일 펴낸이 / 박명희 펴낸곳 / 문예춘추사 주 소 / 서울시 종로구 숭인동 1401 잡학사 B/D 406호 등 록 / 1994년 1월 24일 · 제5-a0409호 전 화 / 2236-0427 팩 스 / 2236-0428 값 8,000원 잘못된 책은 구입처에서 교환해 드립니다. ISBN 89-7604-001-5(03830)
NO		117	
作品名	原題名	얼굴	顔
訳者		鄭泰原	
書名 (全集/文庫)		『Jミステリー傑作選』1	
出版社	年度	泰東出版社	1999
備考		韓国日本推理作家協会編	
表紙/ 目次/ 版権紙			아파트의 귀부인 / 아카가와 지로 7 나체의 방 / 호이 싱이치 15 나폴레옹광 / 아토다 다카시 37 고양이의 목 / 고마츠 사쿄 62 광기의 계보 / 후지이 레이코 88 3억 엔의 악몽 / 니시무라 교타로 101 얼굴 / 마츠모토 세이초 117 정사의 배경 / 츠즈야 다카오 152 조건반사 / 오타니 요타로 182 벽 / 고다카 노부미츠 191 살의 / 다카키 아키미츠 193 소라 / 야마무라 마사오 211	무서운 선물 / 유키 소지 222 연습게임 / 후지무라 쇼타 237 우물이 있는 집 / 미나카와 히로코 262 복안 / 소노 다다오 283 사랑 / 미야자키 준 311 산키치의 식욕 / 와타니베 게이스케 321 쇼윈도의 연인 / 요코미조 세이시 332 범인은 누구인가 / 구사카미 진 341 계단을 오르는 남자 / 마유무라 다쿠 359 해설 · 일본추리작가협회와 추리작가들 / 정태원 387	J미스터리 걸작선 I 초판인쇄 · 1999년 7월 7일 초판발행 · 1999년 7월 17일 엮은이 · 한국 · 일본 추리작가협회 옮긴이 · 정태원 펴낸이 · 김은정 펴낸곳 · 태동출판사 출판등록 · 1999년 6월 10일, 제10-1773호 주소 · 121-220 서울시 마포구 합정동 386-8호 1F 전화 · 334-6590(영업부), 334-6591(편집부) 팩스 · 334-6580 ISBN 89-88820-01-0 03830 *잘못된 책은 바뀌드립니다

NO		118	
作品名	原題名	점과 선	点と線
		제로의 초점	ゼロの焦点
訳者		姜英吉	
書名 (全集/文庫)		『点と線』(東西ミステリーブックス52)	
出版社	年度	東西文化社	2003
備考		1977年に刊行されたものの重版とされているが、初版本は存在しない	
表紙/ 目次/ 版権紙					
NO		119	
作品名	原題名	모래그릇	砂の器
訳者		許文純	
書名 (全集/文庫)		『砂の器』(東西ミステリーブックス153)	
出版社	年度	東西文化社	2004
備考		1977年に刊行されたものの重版とされているが、初版本は存在しない 電子書籍刊行(2006年)	
表紙/ 目次/ 版権紙					

NO		120	
作品名	原題名	너를 노린다	眼の壁
訳者		文潞(姜英吉)	
書名 (全集/文庫)		『お前を狙う』(東西ミステリーブックス154)	
出版社	年度	東西文化社	2004
備考		1977年に刊行されたものの重版とされているが、初版本は存在しない 電子書籍刊行(2006年)	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	
NO		121	
作品名	原題名	조난	遭難
		언덕길의 집	坂道の家
訳者		鄭泰原	
書名 (全集/文庫)		『黒い画集』上	
出版社	年度	泰東出版社	2009
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	

NO		122	
作品名	原題名	끈	紐
		아마기고개	天城越え
		증언	証言
		한류	寒流
訳者		鄭泰原	
書名 （全集/文庫）		『黒い画集』中	
出版社	年度	泰東出版社	2009
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	
NO		123	
作品名	原題名	흉기	凶器
		흐린 태양	濁った陽
		풀	草
訳者		鄭泰原	
書名 （全集/文庫）		『黒い画集』下	
出版社	年度	泰東出版社	2009
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			
		–	

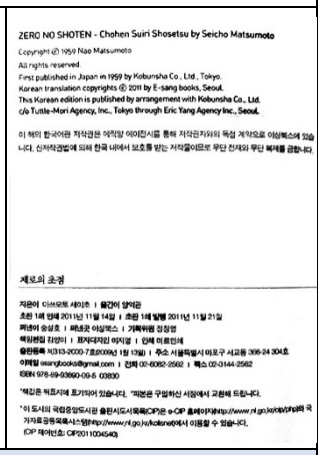
NO		124	
作品名	原題名	점과 선: 두 개의 점에 선을 긋다	点と線
訳者		鄭泰原	
書名 (全集/文庫)		『点と線：二つの点を線で結ぶ』	
出版社	年度	泰東出版社	2009
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書、現在(2018年)は絶版	
表紙/ 目次/ 版権紙		   
NO		125	
作品名	原題名	어느 <고쿠라 일기>전	或る「小倉日記」伝
		공갈자	恐喝者
		일 년 반만 기다려	一年半待て
		지방지를 구독하는 여자	地方紙を買う女
		이외지리(理外之理)	理外の理
		삭제의 복원	削除の復元
		수사권 외의 조건	捜査圏外の条件
		진위의 숲	真贋の森
		쇼와사 발굴—2.26 사건	二・二六事件(『昭和史発掘』)
		추방과 레드퍼지—『일본의 검은 안개』에서	追放とレッド・パージ (『日本の黒い霧』)
訳者		イ・ギュウォン	
書名 (全集/文庫)		『松本清張傑作短篇 コレクション』 上	
出版社	年度	ブック・スピアー	2009
備考		宮部みゆき編の『松本清張傑作短篇コレクション』(2004)の翻訳本 日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		   
NO		126	

作品名	原題名		
		멀리서 부르는 소리	遠くからの声
		권두시를 쓰는 여자	巻頭句の女
		서예 강습	書道教授
		결혼식장의 미소	式場の微笑
		공범	共犯者
		카르네아데스의 판자	カルネアデスの舟板
		공백의 디자인	空白の意匠
		산	山
訳者		イ・ギュウォン	
書名 （全集/文庫）		『松本清張傑作短篇コレクション』中	
出版社	年度	ブック・スピアー	2009
備考		宮部みゆき編『松本清張傑作短篇コレクション』(2004)の翻訳本 日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		  	
NO		127	
作品名	原題名		
		과다 지불한 중매 사례비	支払い過ぎた縁談
		살아있는 파스칼	生けるパスカル
		뼈단지 풍경	骨壷の風景
		데이코쿠 은행 사건의 수수께끼—『일본의 검은 안개』에서	帝銀事件の謎(『日本の黒い霧』)
		까마귀	鴉
		사이고사쓰	西郷札
		국화배개—누이조 약력	菊枕
		불의 기억	火の記憶
訳者		イ・ギュウォン	
書名 （全集/文庫）		『松本清張傑作短篇コレクション』下	
出版社	年度	ブック・スピアー	2009
備考		宮部みゆき編『松本清張傑作短篇コレクション』(2004)の翻訳本 日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		  	
NO		128	

作品名	原題名	제로의 초점	ゼロの焦点
訳者		梁億寛	
書名 （全集/文庫）		『ゼロの焦点』	
出版社	年度	イサン・ブックス	2011
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書。	

表紙/目次/版権紙

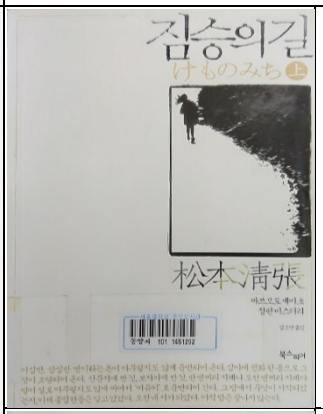
–

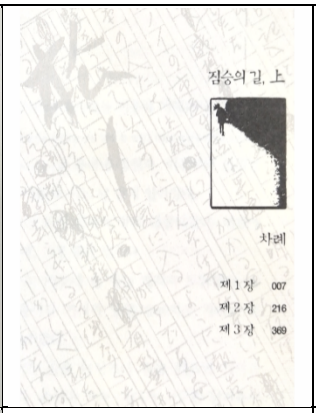


NO	129

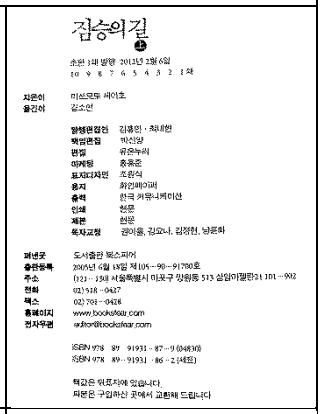
作品名	原題名	짐승의 길	けものみち
訳者		キム・ソヨン	
書名 （全集/文庫）		『獣の路』上・下（清張ワールド）	
出版社	年度	ブック・スピアー	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	

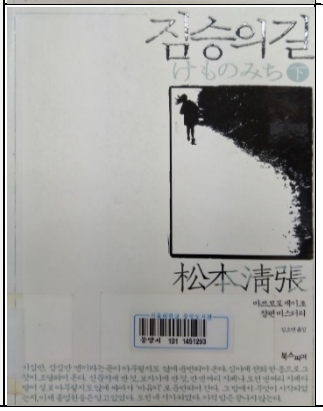
表紙/目次/版権紙

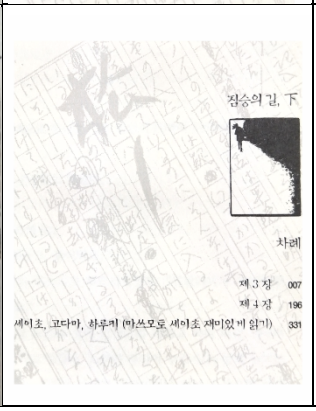




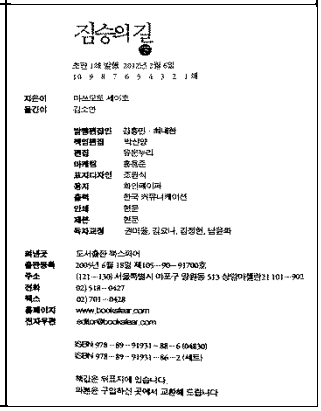
–

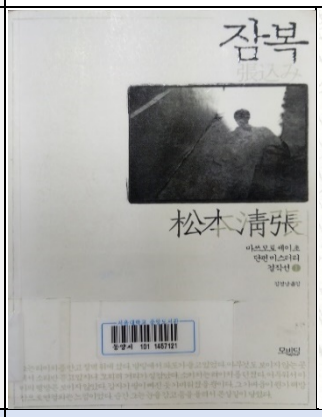
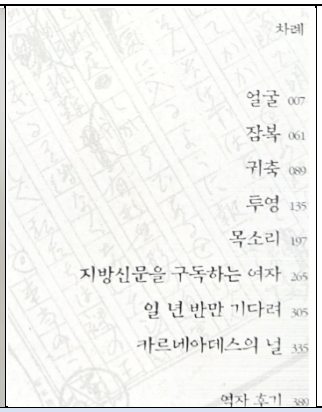
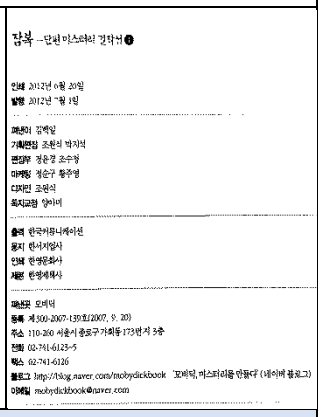
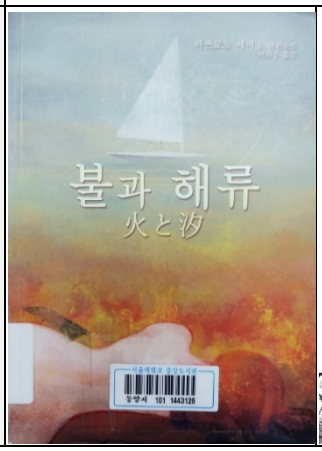
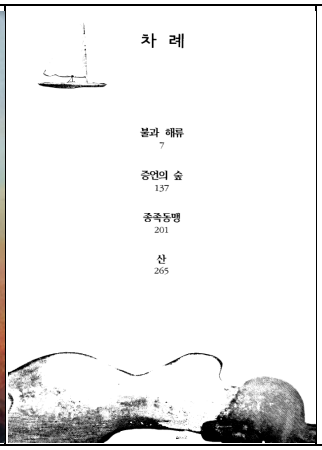
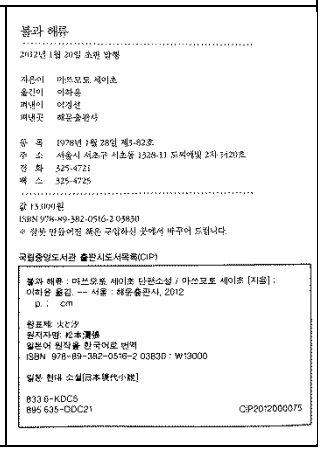


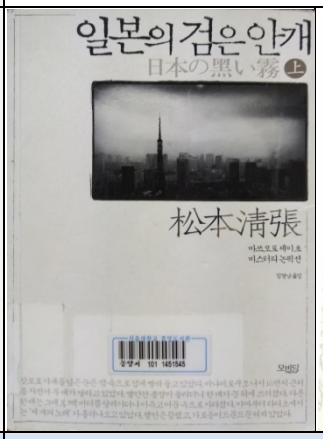
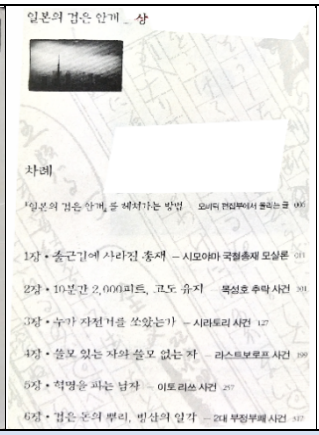
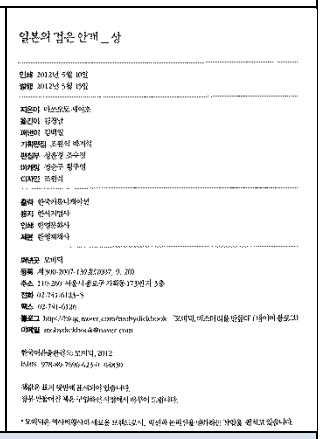


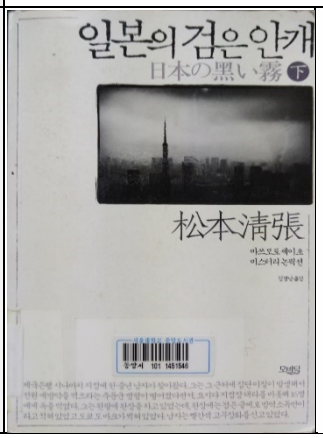
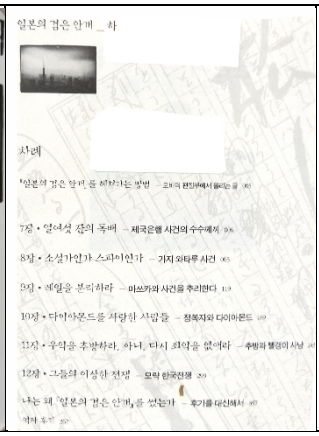
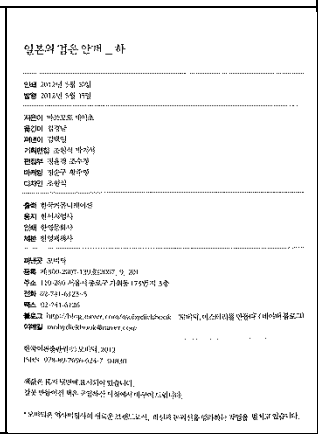


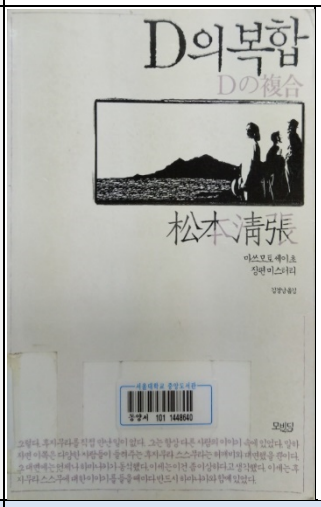
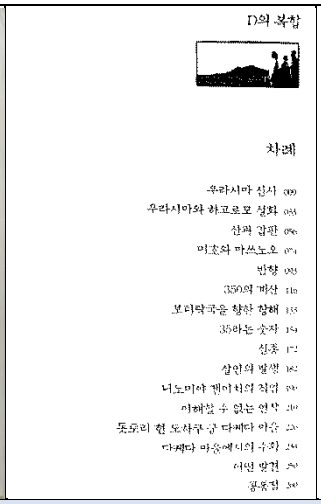
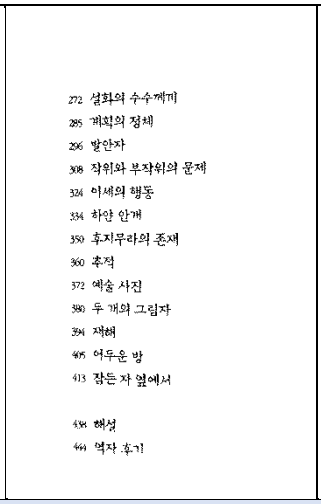
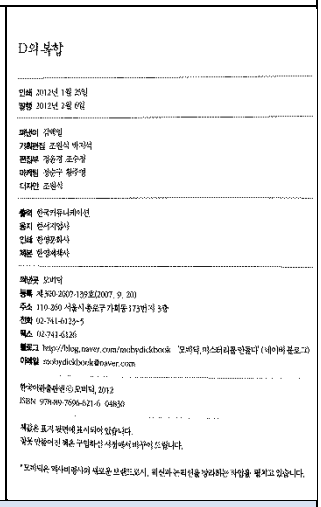
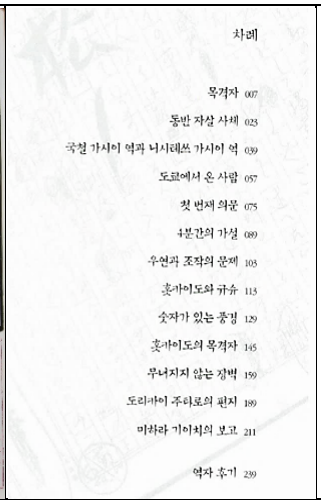
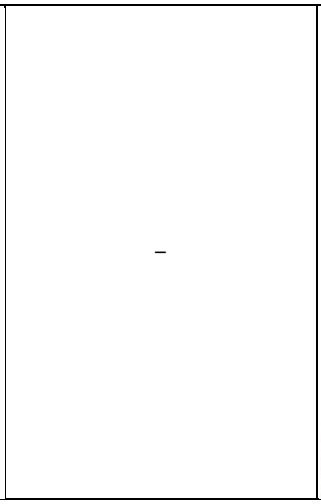
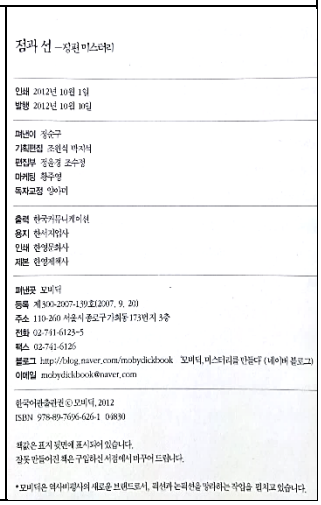
–

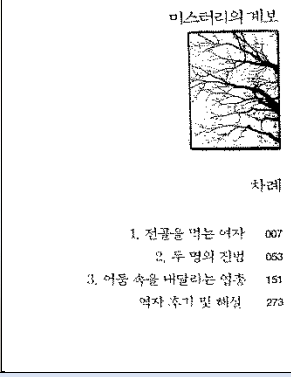
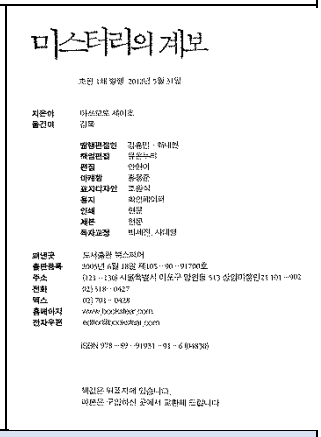


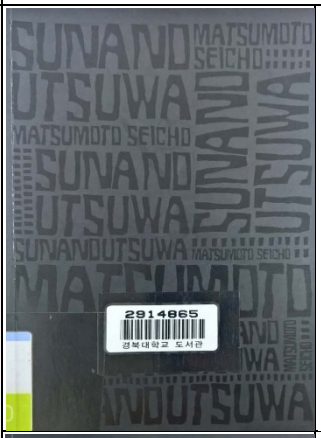
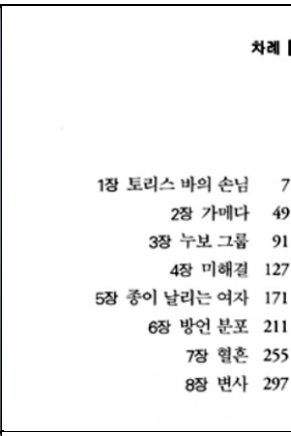
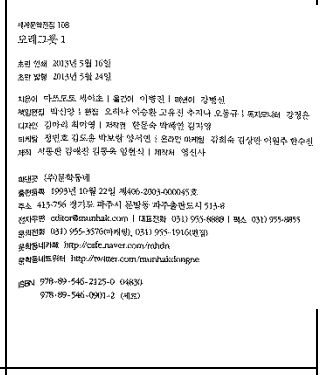
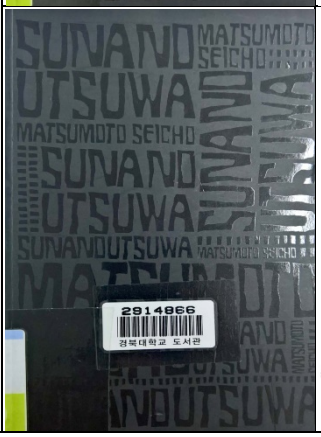
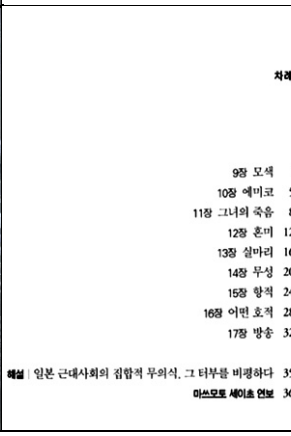
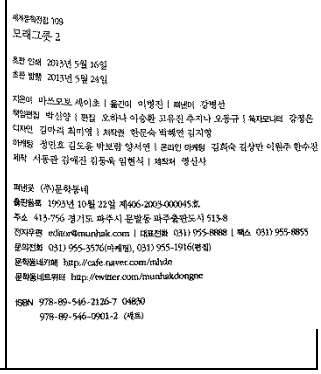
NO		130	
作品名	原題名	얼굴	顔
		잠복	張込み
		귀축	鬼畜
		투영	投影
		목소리	声
		지방신문을 구독하는 여자	地方紙を買う女
		일 년 반만 기다려	一年半待て
		카르네아데스의 널	カルネアデスの舟板
訳者		金京南	
書名 (全集/文庫)		『潜伏』(清張ワールド／短編ミステリー傑作選①)	
出版社	年度	モビーディック	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
NO		131	
作品名	原題名	불과 해류	火と汐
		증언의 숲	証言の森
		종족동맹	種族同盟
		산	山
訳者		イ・ハユン	
書名 (全集/文庫)		『火と海流』	
出版社	年度	海文出版社	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

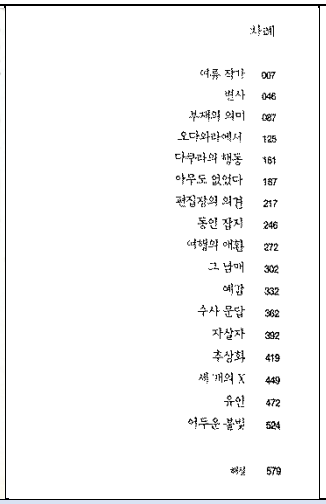
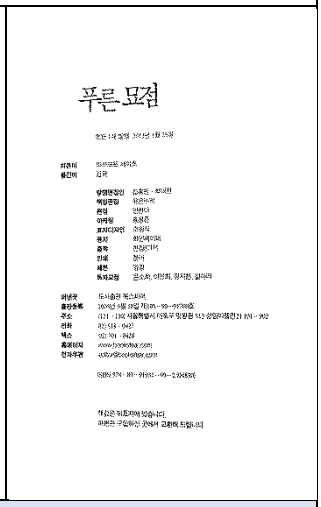
NO		132	
作品名	原題名	출근길에 사라진 총재—시모야마 국철총재 모살론	下山国鉄総裁謀殺論
		10분간 2000피트, 고도 유지—목성호 추락 사건	「もく星」号遭難事件
		누가 자전거를 쏘았는가—시라토리 사건	白鳥事件
		쓸모 있는 자와 쓸모 없는 자—라스트보로프 사건	ラストヴォロフ事件
		혁명을 파는 남자—이토 리쓰 사건	革命を売る男・伊藤律
		검은 돈의 뿌리, 빙산의 일각—2대 부정부패 사건	二大疑獄事件
訳者		金京南	
書名 (全集/文庫)		『日本の黒い霧』上（清張ワールド）	
出版社	年度	モビーディック	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	– 

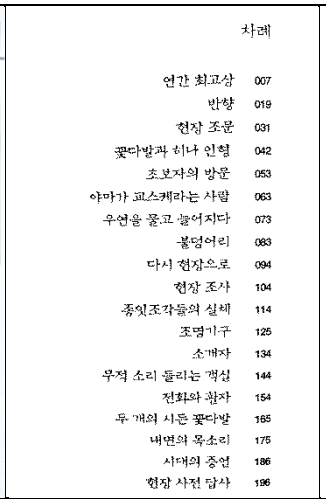
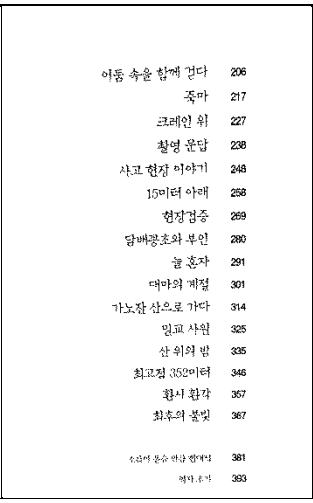
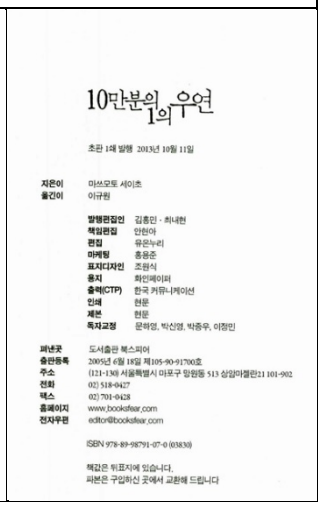
NO		133	
作品名	原題名	열여섯 잔의 독배—제국은행 사건의 수수께끼	帝銀事件の謎
		소설가인가 스파이인가—가지 와타루 사건	鹿地亘事件
		레일을 분리하라—마쓰카와 사건을 추리한다	推理・松川事件
		다이아몬드를 사랑한 사람들—정복자와 다이아몬드	征服者とダイヤモンド
		우익을 추방하라. 아니, 다시 좌익을 없애라 —추방과 빨갱이 사냥	追放とレッド・パージ
		그들의 이상한 전쟁—모략 한국전쟁	謀略朝鮮戦争
訳者		金京南	
書名 (全集/文庫)		『日本の黒い霧』下（清張ワールド）	
出版社	年度	モビーディック	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	– 

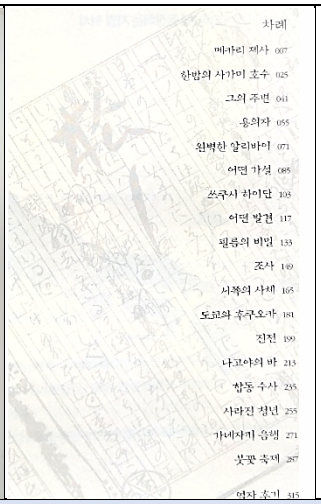
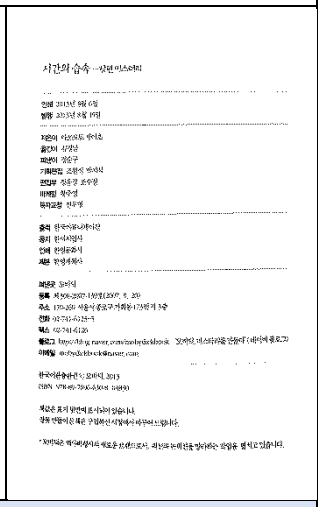
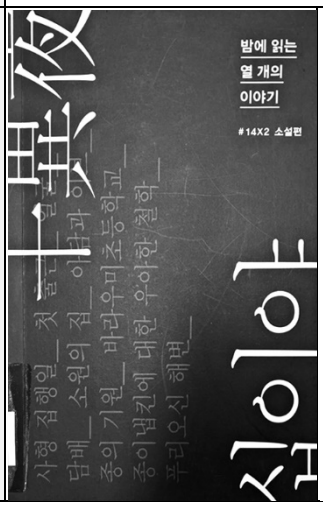
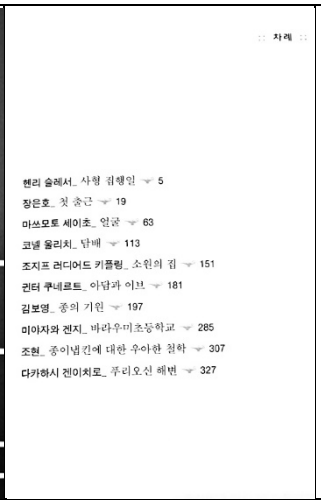
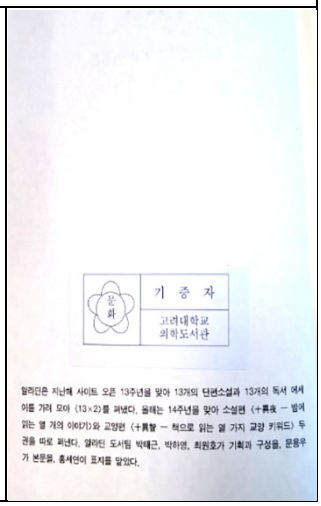
NO		134	
作品名	原題名	D의 복합	Dの複合
訳者		金京南	
書名 （全集/文庫）		『Dの複合』（清張ワールド）	
出版社	年度	モビーディック	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		   
NO		135	
作品名	原題名	점과 선	点と線
訳者		金京南	
書名 （全集/文庫）		『点と線』（清張ワールド）	
出版社	年度	モビーディック	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙		  

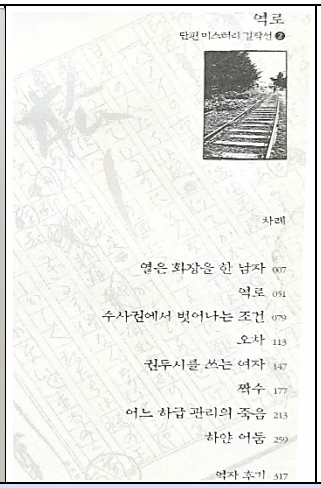
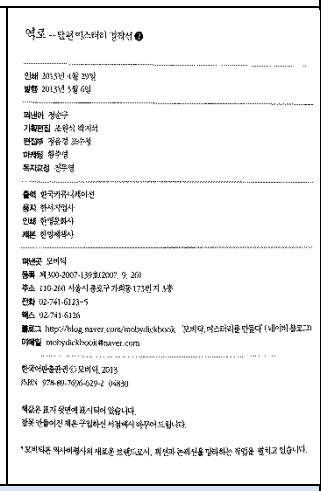
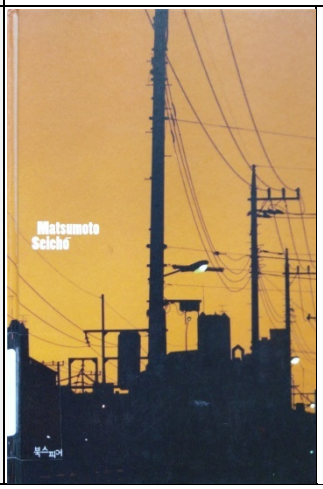
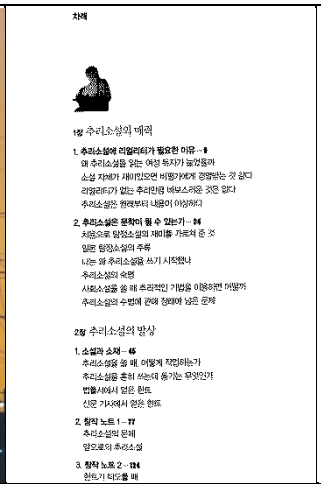
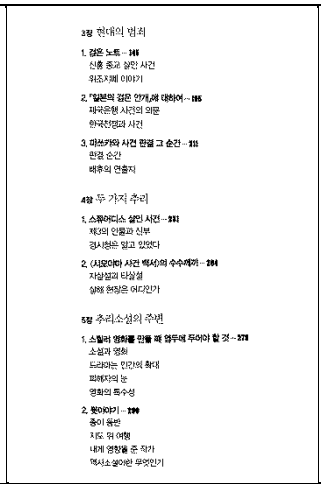
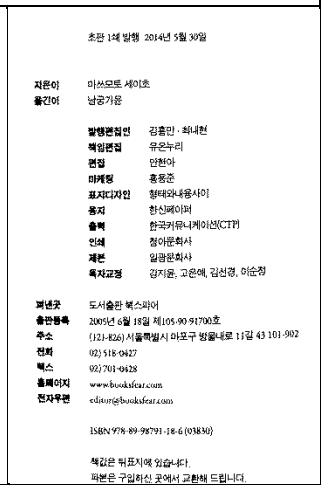
NO		136	
作品名	原題名	전골을 먹는 여자	肉鍋を食う女
		두 사람의 진범	二人の真犯人
		어둠 속을 내달리는 엽총	闇に駆ける猟銃
訳者		金旭	
書名 (全集/文庫)		『ミステリーの系譜』(清張ワールド)	
出版社	年度	ブック・スピアー	2012
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

NO		137	
作品名	原題名	모래그릇	砂の器
訳者		李秉鎭	
書名 (全集/文庫)		『砂の器』上・下 (世界文学全集 108～109)	
出版社	年度	文学ドンネ	2013
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書、電子書籍刊行(2017年)	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
				–	

NO		138	
作品名	原題名	푸른 묘점	青い描点
訳者		金旭	
書名 （全集/文庫）		『青い描点』（清張ワールド）	
出版社	年度	ブック・スピアー	2013
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

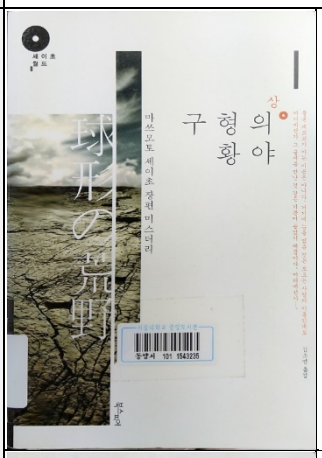
NO		139	
作品名	原題名	10만 분의 1의 우연	十万分の一の偶然
訳者		イ・ギュウォン	
書名 （全集/文庫）		『10万分の1の偶然』（清張ワールド）	
出版社	年度	モビーディック	2013
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙					

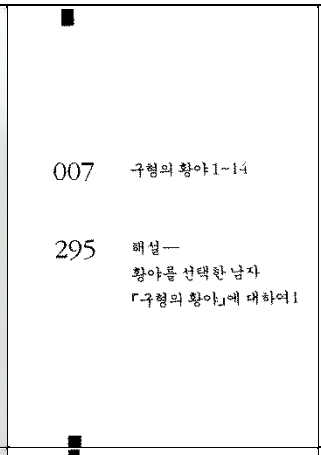
NO		140	
作品名	原題名	시간의 습속	時間の習俗
訳者		金京南	
書名 （全集/文庫）		『時間の習俗』（清張ワールド／長編ミステリー）	
出版社	年度	モビーディック	2013
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO		141	
作品名	原題名	얼굴	顔
訳者		金京南	
書名 （全集/文庫）		『十異夜：夜に読む10の物語』	
出版社	年度	アラジン	2013
備考		オンライン書店「アラジン」の14周年記念贈呈用図書（非売品） 『潜伏』(モビーディック、2012)の「顔」を収録 ヘンリー・スレッサー他8人の短編小説と併録	
表紙/ 目次/ 版権紙		 	–	

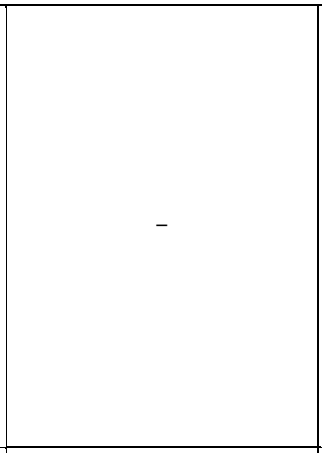
NO	142	
原題名	옅은 화장을 한 남자	薄化粧の男
	역로	駅路
	수사권에 벗어나는 조건	捜査圏外の条件
	오차	誤差
	권두시를 쓰는 여자	巻頭句の女
	짝수	偶数
	어느 하급 관리의 죽음	ある小官僚の抹殺
	하얀 어둠	白い闇
訳者	田惠善	
書名 (全集/文庫)	『駅路』(清張ワールド／短編ミステリー傑作選②)	
年度	モビーディック	2013
備考	日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	
NO	143	
作品名 原題名	검은 수첩	黒い手帖
訳者	ナムグン・ガユン	
書名 (全集/文庫)	『黒い手帖』(博覧綱紀プロジェクト4)	
出版社 年度	ブック・スピアー	2014
備考	日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙				

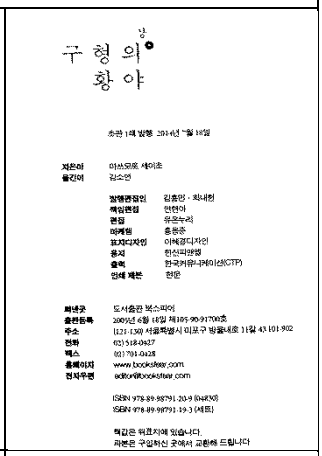
NO		144	
作品名	原題名	구형의 황야	球形の荒野
訳者		キム・ソヨン	
書名 (全集/文庫)		『球形の荒野』上・下（清張ワールド／長編ミステリー）	
出版社	年度	ブック・スピアー	2014
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	

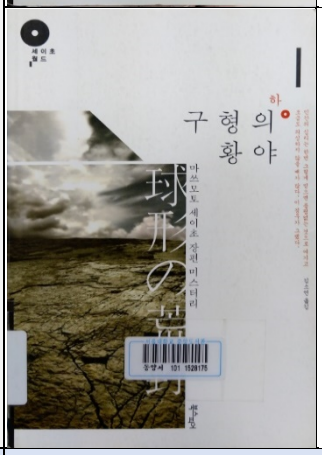
表紙/目次/版権紙

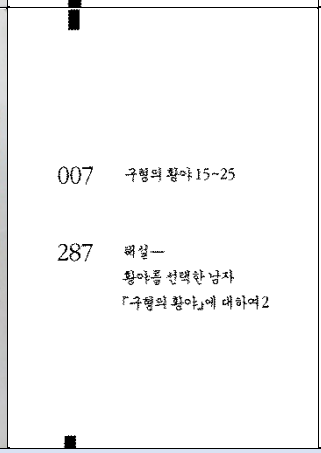


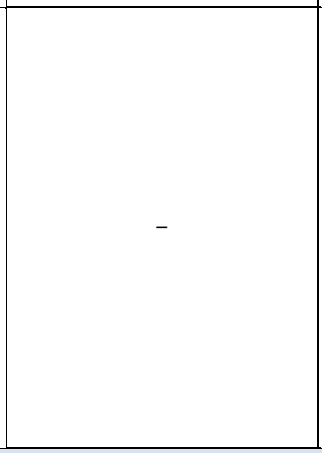


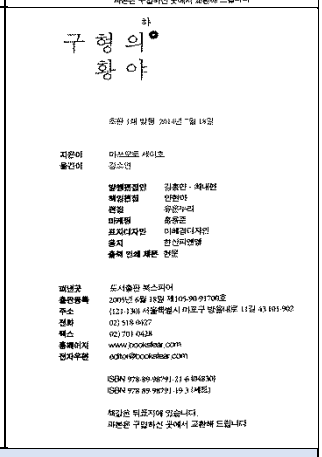






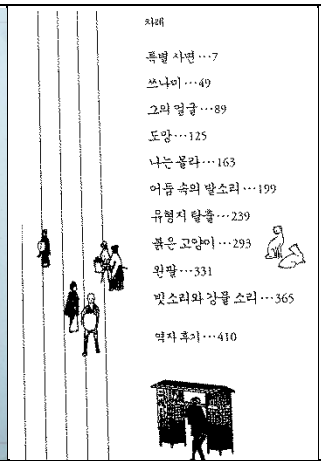


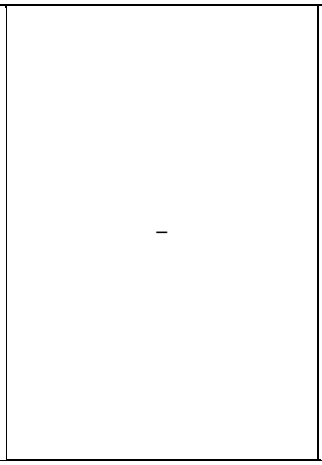


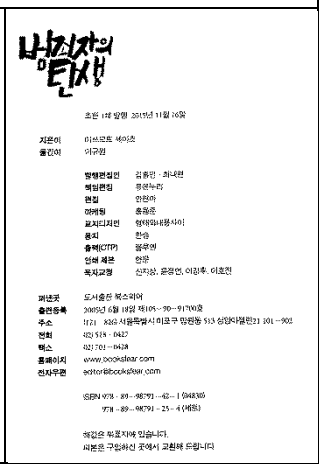


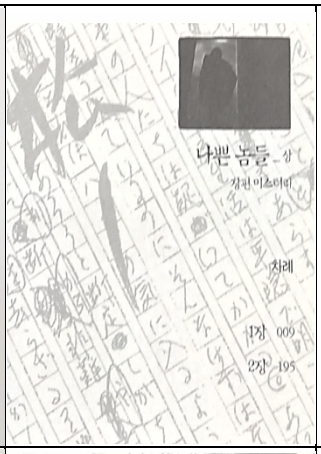
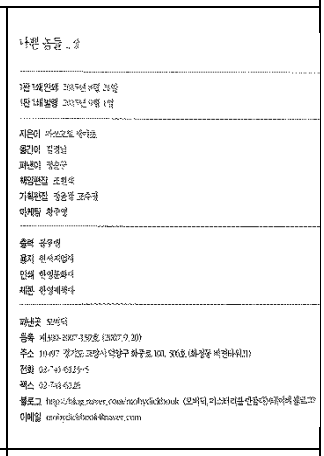
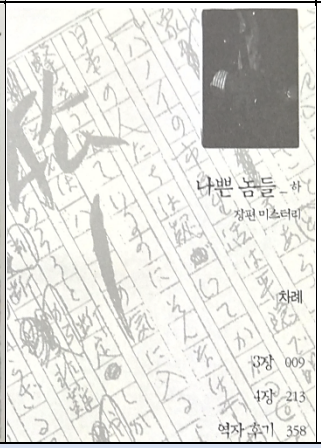
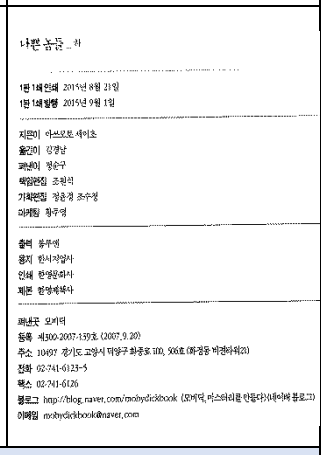
NO		145	
作品名	原題名	범죄자의 탄생	無宿人別帳
訳者		ナムグン・ガユン	
書名 (全集/文庫)		『犯罪者の誕生』(浪漫フィクション3)	
出版社	年度	ブック・スピアー	2015
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書、電子書籍刊行(2015年)	

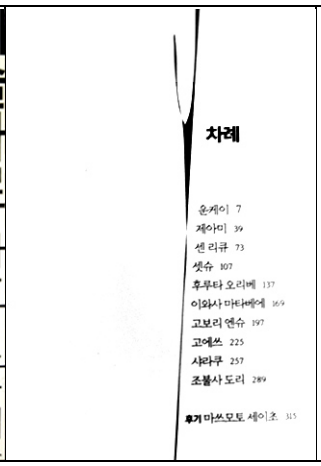
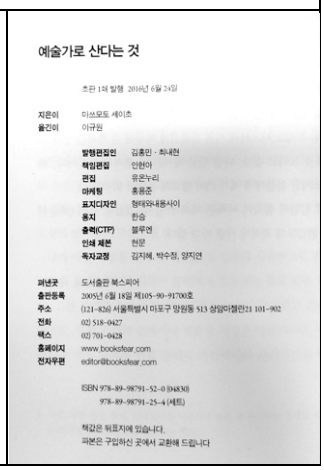
表紙/目次/版権紙

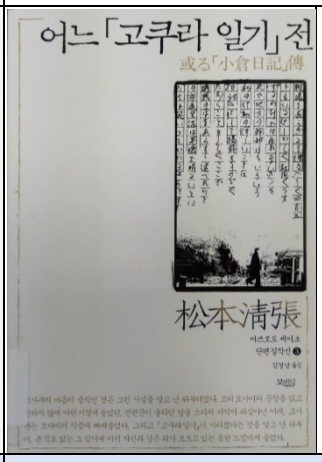
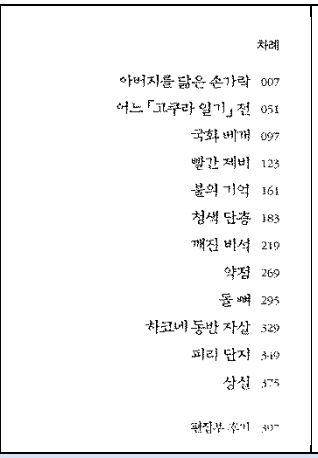
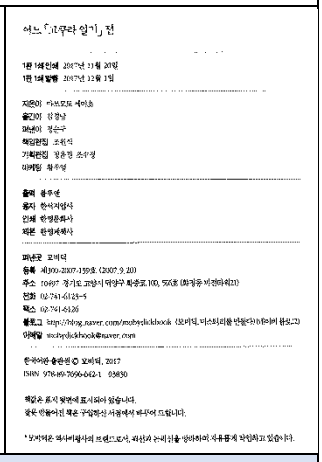


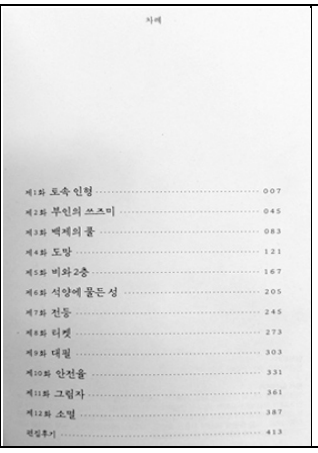
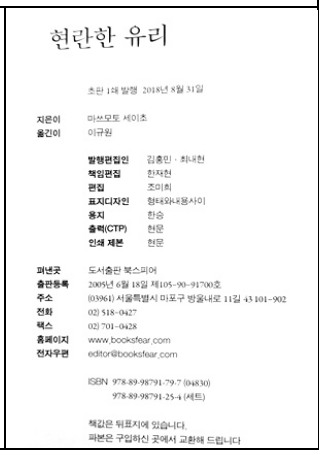




NO		146			
作品名	原題名	나쁜 놈들	わるいやつら		
訳者		金京南			
書名 （全集/文庫）		『悪いやつら』上・下（清張ワールド／長編ミステリー）			
出版社	年度	ブック・スピアー	2015		
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書			
表紙/ 目次/ 版権紙				–	
				–	

NO		147			
作品名	原題名	예술가로 산다는 것	小説日本藝譚		
訳者		イ・ギュウォン			
書名 （全集/文庫）		『芸術家として生きること』(浪漫フィクション4)			
出版社	年度	ブック・スピアー	2016		
備考		日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書			
表紙/ 目次/ 版権紙				–	

NO	148	
原題名	아버지를 닮은 손가락	父系の指
	어느「고쿠라 일기」전	或る「小倉日記」伝
	국화 배개	菊枕
	빨간 제비	赤いくじ
	불의 기억	火の記憶
	청색단층	青のある断層
	깨진 비석	断碑
	약점	弱味
	돌 뼈	石の骨
	하코네 동반 자살	箱根心中
	피리 단지	笛壺
	상실	喪失
訳者	金京南	
書名 (全集/文庫)	『ある「小倉日記」伝』(清張ワールド／短編ミステリー傑作選③)	
年度	モビーディック	2017
備考	日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	

NO	149	
作品名 原題名	현란한 유리	絢爛たる流離
訳者	イ・ギュウォン	
書名 (全集/文庫)	『絢爛たる流離』(浪漫フィクション8)	
出版社 年度	ブック・スピアー	2018
備考	日本の出版社と独占販売契約を結んだ翻訳書	
表紙/ 目次/ 版権紙			–	

第 20 回　松本清張研究奨励事業研究報告書
発行日　令和 2 年(2020)3 月 31 日発行

［編集・発行］
北九州市松本清張記念館
北九州市小倉北区城内 2 － 3
電話 (093)582-2761

［印刷・製作］
有限会社シーズ

本報告書記載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。
松本清張記念館ホームページ　https://www.seicho-mm.jp/
登録番号　北九州市印刷物登録番号　第 1909153 F